新しい風俗文化雑誌

風俗草紙

9

風俗草紙

9

定価百円

被虐の悦楽

風俗草紙

第二巻　第七号
毎月一回一日発行
定価　百円

昭和二十九年八月二十五日　印刷
昭和二十九年九月　一日　発行

編集兼発行人　村田　清
印刷所　内海印刷株式会社
東京都文京区戸崎町十三番地

発行所　株式会社　日本特集出版社
東京都千代田区神田猿楽町一ノ三
電話東京（29）五九八二
振替東京一〇一、五一七番

◇後記◇

今月は皆様御期待の「異常の世界」を特集してみました。思いきって相当のページを振りあてましたが、今後とも何か大きな問題を捉らえて、特別編集を試みたいと思っています。皆さんの御感想御批判をお待ちいたしております。

来る十月号は、戦争のもたらした「非常の世界」を特集する予定であります。引き続き御愛読のほどをお願いいたします。

戦利品

戦争は有りとあらゆる罪悪を生む。中でも婦女子に対する暴行は、最も惨虐である。戦勝者は、敗戦国の婦女子を捕えてサンザン暴行を加えたうえに、無惨にも、なぶりものにし、悦虐に酔いしれるのである。

彦造三題

(嫉)

(妬)

関西の或る商家で駈落ち事件が生じた。その家の主人は信じきつていた妻の突然の裏切に、憤怒おさえ難く、悶々の情は嫉妬と燃え盛り、やみ難き執念は復讐となつて凝固したのである。その激情に、遂に伊藤彦造画伯も動かされ、たゞひと筋に妻を呪詛するその主人の為に、特に彩管を揮つたのである。

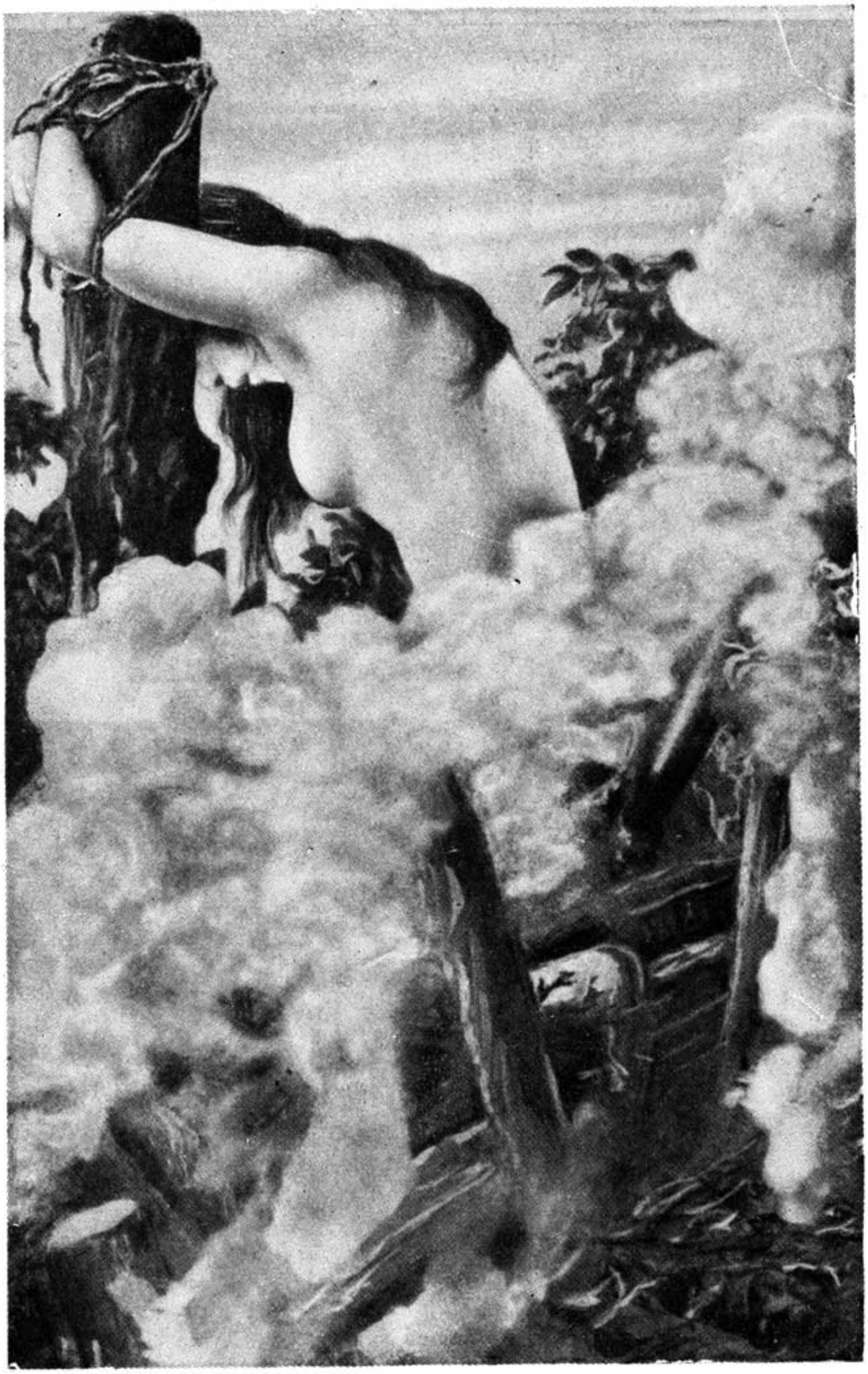
（苛酷）

——大阪朝日新聞所載（昭和四年五月十四日）——

（野晒）

——小説文庫所載（昭和二十四年十一月）——

「苛酷」はその当時の権力者を諷したものであり、「野晒」は農作物を盗んだ者に対する私刑の画で、彦造画伯の戦前戦後の二代表作であります。



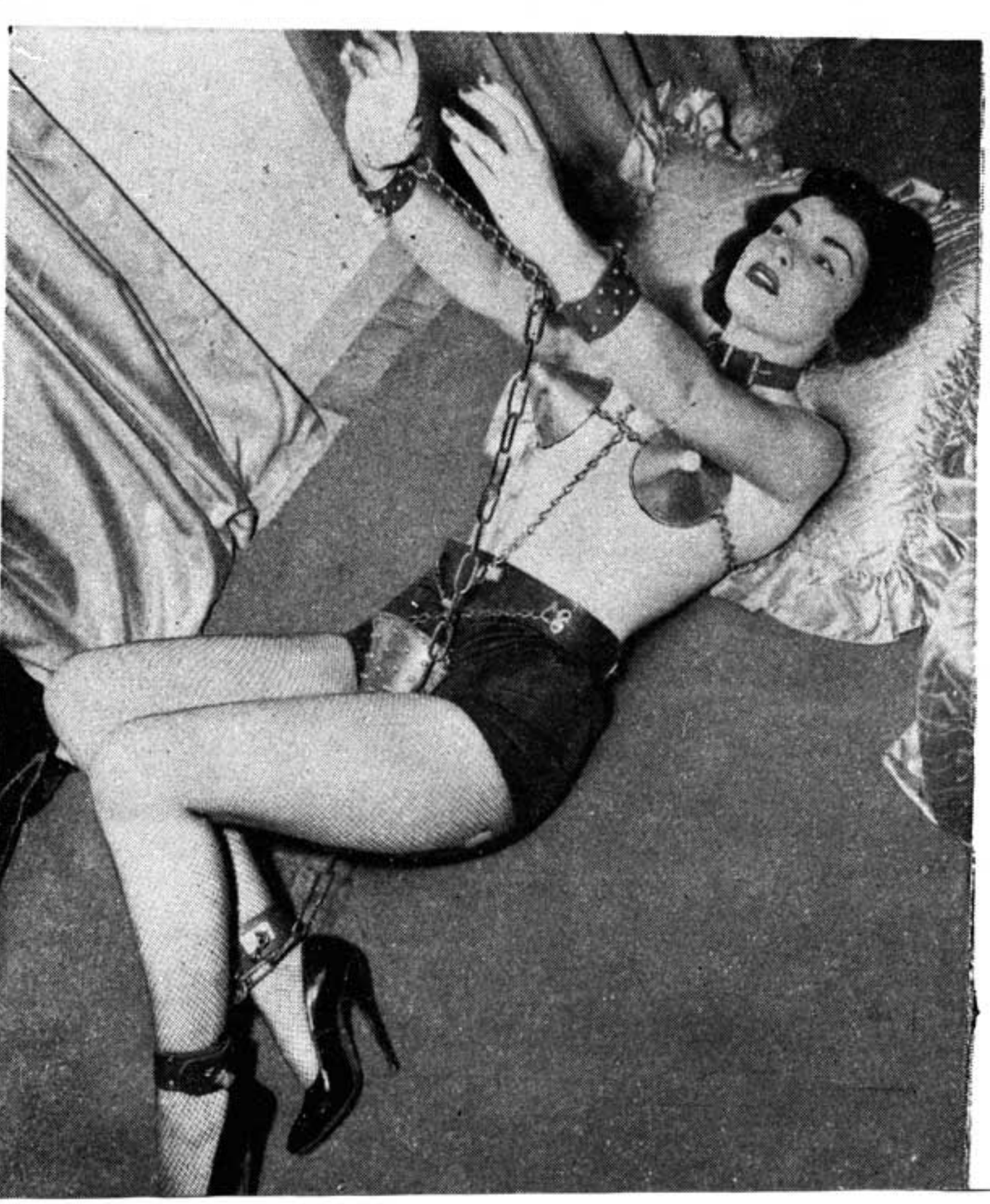
鈴木御水画

「廃都の白女王」より

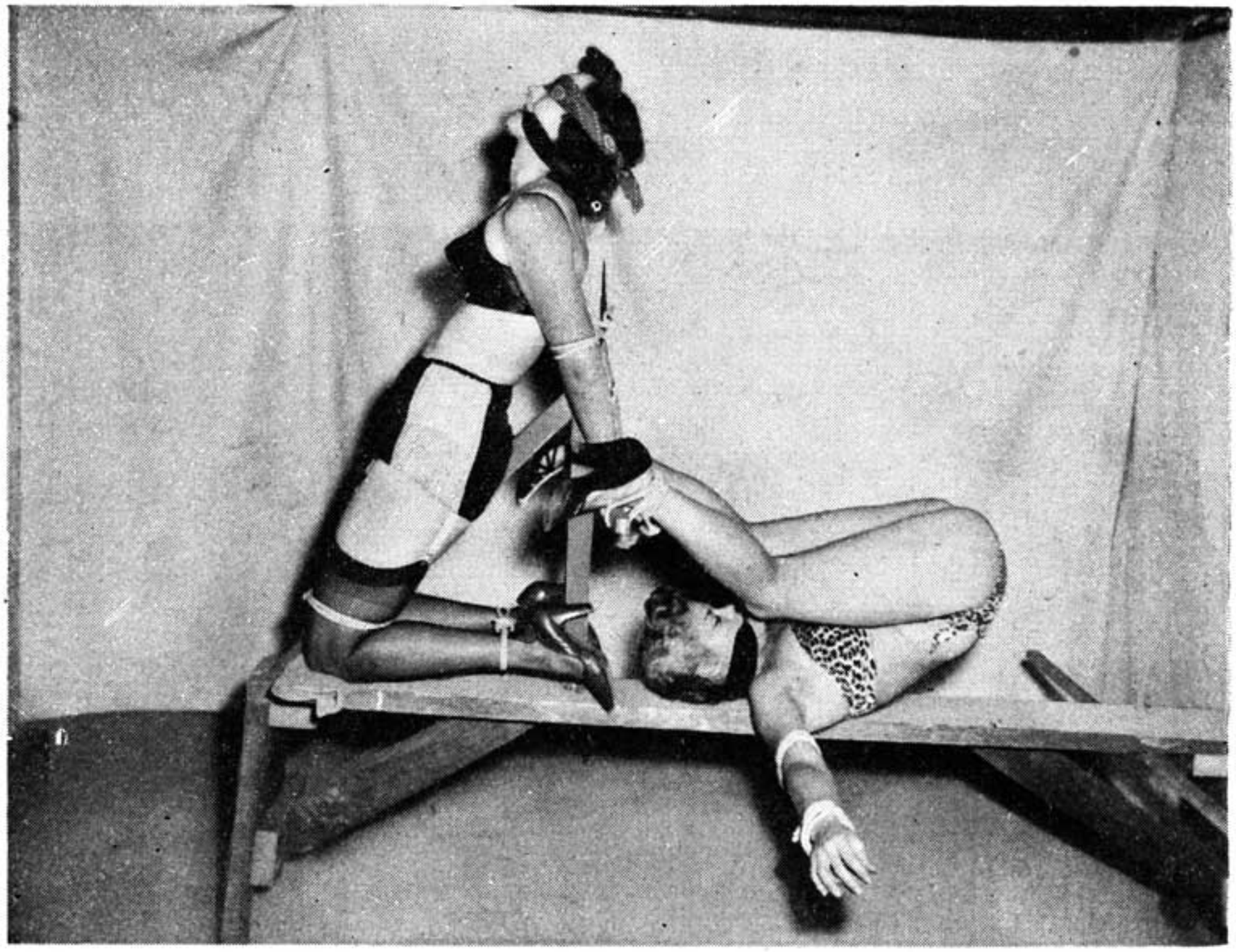
★ ★
★

アメリカンフォト

★ ★
★ ★



★ 鎖責め →
★ 板責め ←

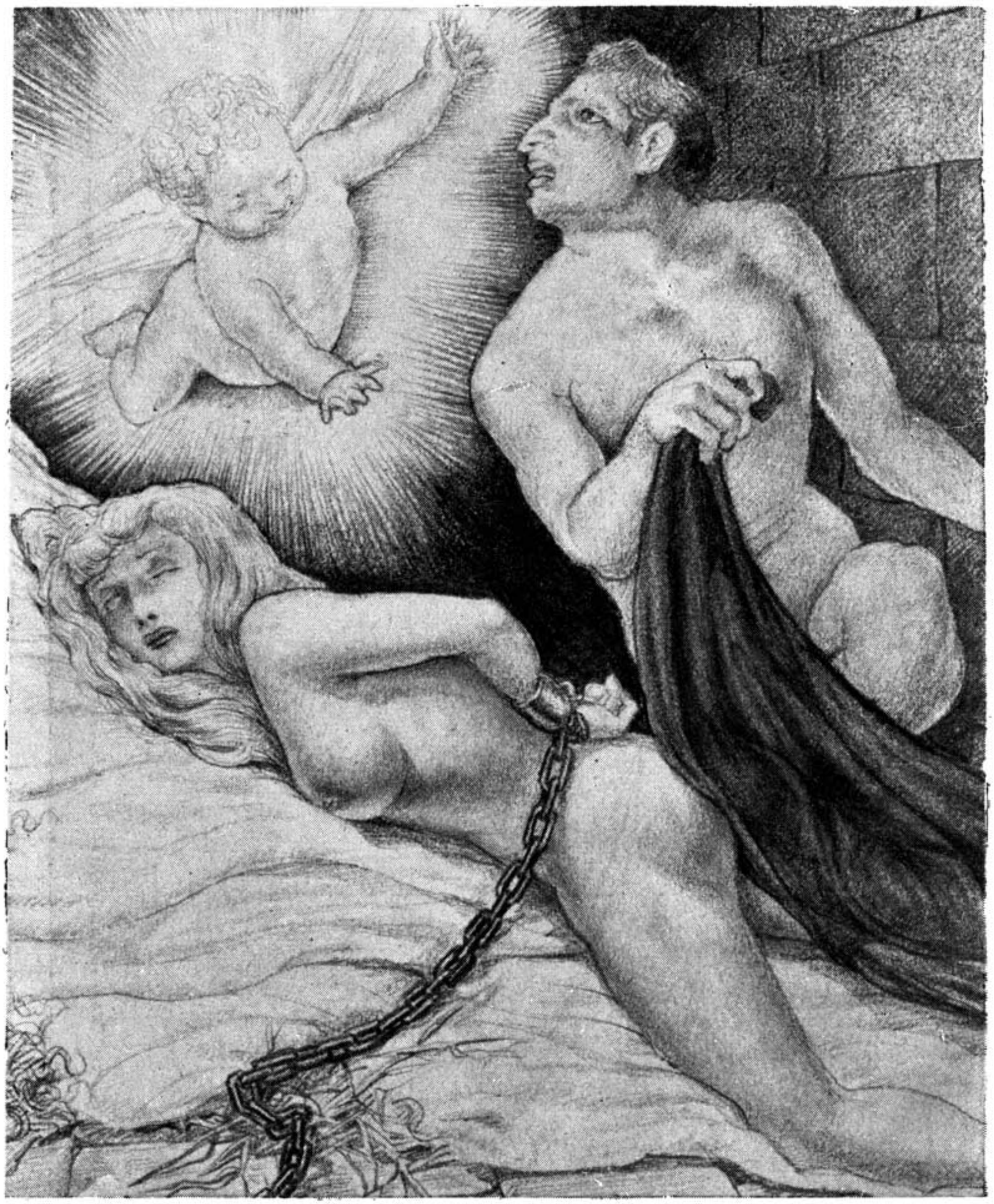


聖女フンコルディアの殉教

中川彩子画

この聖女については、広場で裸にされ、鞭で打ち殺されたということより外にはわからない。相当どきつい構図であるが、猥雑な感じはなく、殉教者の聖なる苦痛が余すところなく表現されている。

聖女アグネスの奇蹟



中川彩子画

聖女アグネスは、ヂオクレシアン帝治下のローマの長官センプロニウスの求婚を拒んだため、暴行のうえ処刑という宣告が下された。しかし彼女の信仰のお蔭で奇蹟的に純潔は護られ、翌日火刑柱にくゝりつけられたが、薪がどうしても燃えつかず、剣によつて殺された。この由来から処女の守神とされている。

花と花

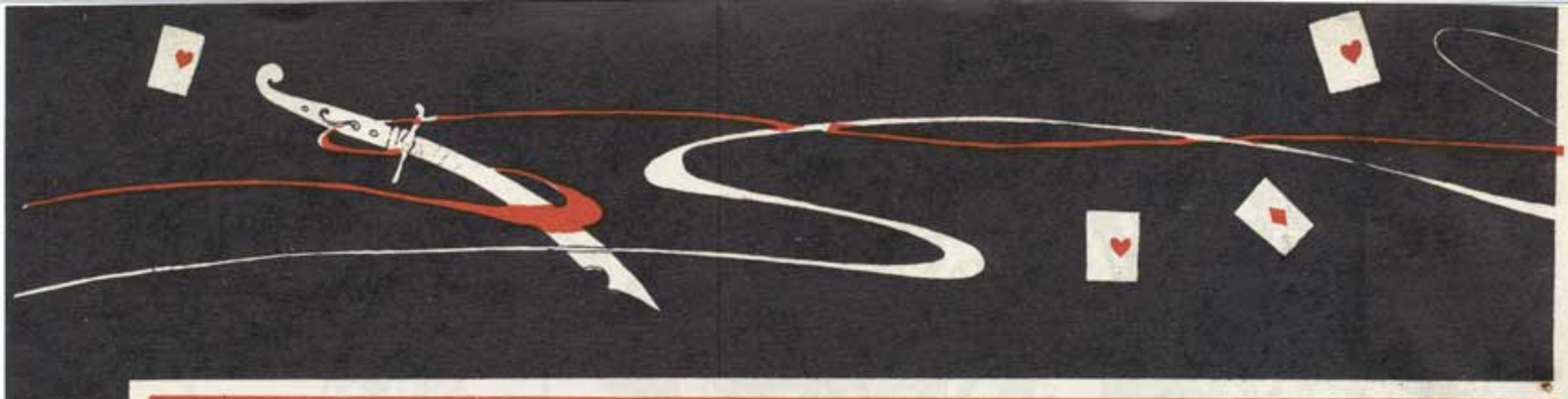
歴史の中から●●●●●

野人に捕えられたサニトレス（半人半馬神）

手・足・首には枷、腹には六本の鎖のついた鉄帯、坐ることも出来ない狭い檻の中で、女丈夫ジャンヌ・ダークもその非道な責めに泣いたといわれる。

責めを継続すべきか、止むべきか。医者の判断をまちながら行う中世の拷問。

中川彩子画



風俗草紙　九月号　目次

絵口
- 参造三題（緻妬・苛酷・野晒）……伊藤彦造画
- 廃都の白女王……鈴木御水画
- アメリカン・フォート……本誌特選
- 聖女の殉教……中川彩子画
- 花と花……レスボス・フォート
- 近世受難史……中川彩子画

吉原おいらんあぶ・えれじい　明烏妖しの色里……村松呂久哀（20）
じれったい不感症に身悶えする小夜次の悲劇！

好評連載　淫雨熄まず……松井籟子（32）
サジとマゾの世界に息づく男女の業でしなき愛慾の葛藤！

耽奇読物　乳房刺青の妖女……香山風太郎（126）
女体の隅々まで計測する私立探偵の手帖の秘密

実話　十年間に私はこうも変った……中正夫（61）
異常性慾者の精神鑑定……医博　太田典禮
若い婦人科医の手紙……南田次郎　168）（53）

異常に関する章　12

1仮面の露出　7むせび泣く女体
2攻撃の勝利　8男と男の世界
3くちづけ　9暴力による姦淫
4自己奉仕の姿　10ツバメ型というもの
5被虐の歓喜　11性的愛玩の心
6見るサディズム　12戦後の異色
（86）

夏の女・二題

釘に寝る女……青柳敬三（155）
ツマミ食いをする変態お妻さんの夏の夜話

未亡人の夏……高野三郎（162）
女体秘密診断所……さて未亡人の女医さんは何を仕出かす？

特選秘話　血みどろの鞭に喘ぐ女党員……三谷祥介（54）
ヒューッ！と唸る前、それは鉄火のように赤く血に染まっている！

愛鞭小説　泣き叫ぶ青春……高月大三（136）

海外小説　猛獣使いの女……モオリス・マアグル　松山厚訳（76）

風俗ルポ　競輪場の女たち……緒方逸馬（147）

銀座女族の露出症……三田陽子（154）

時代秘話　男色・織田信長……川上矢太郎（114）
サジとソドミーに色彩られた悲劇の武将信長の人間裏面史

そとみあ通信……藤井晃（172）

こんとあぶていく　歪んだ情事……武野藤介（70）

奴隷女中……高松朝子（176）
犬のごとく女主人に奉仕させられた一女中のレスボス手記

連載官能小説　蟲妖の虹……龍膽寺雄（186）

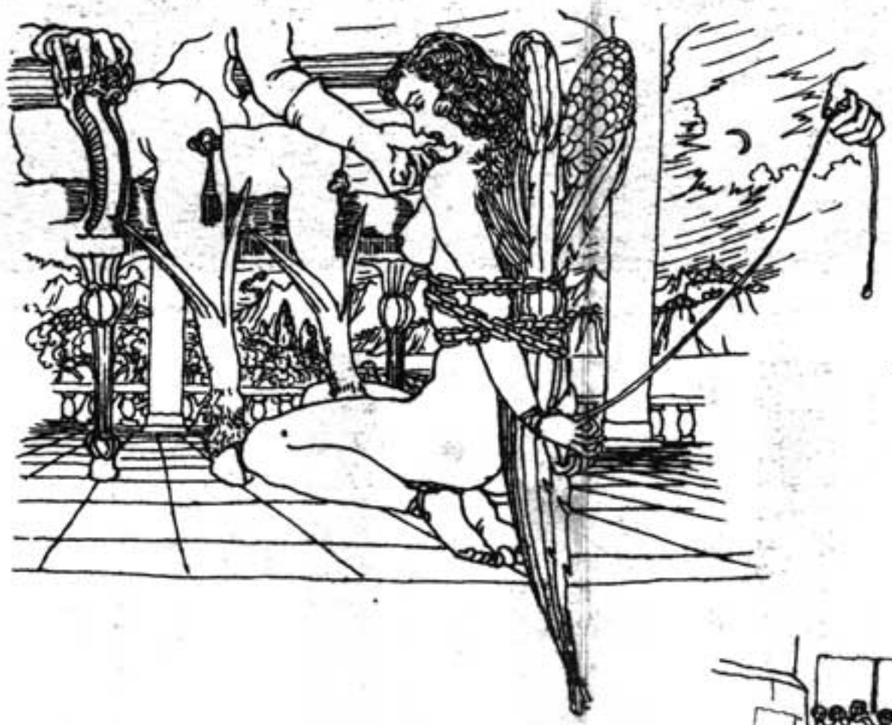
アストーリー　夏に蠢く……鳥羽瑛子（44）
ムンとむせるような甘ずっぱい体臭に歓喜する楽屋番の被虐物語！

表紙・秋吉巒　目次カット・浜田稔

近世受難史

中川彩子画

悪魔に魅入られて翼を折られた天使。



ローマ時代、キリスト教徒に行った火焙り刑。

ルネサンス期イタリアの斬首刑には斧が用いられた。

性に関する罪を犯した女は、鈴のついた帽子をかぶせられ、上半身裸で引廻わされる。

風俗草紙

★現代人の新しい趣味の雑誌★

特集　異常に関する12章

九　月　号

★おいらん・あぶ・えれじい★

明烏妖しの色里

村松呂久良

古庄英正画

∴わちきの気も知らないで！

「ああ、あちきはどうしたんだろ？」

と、小夜衣は身もだえするのである。

続してくる。

「同じ女にうまれながら、夜毎に変る男のどれにも、まんぞくしたことがない。…

…九ノ重さんときたら……あんな男のどこがようて?……と、思うほどのヒョウタン面に下り眼で、獅子ッ鼻の男でも、おひけになつたかと思うトタンに、あれだね。あれは相手でのうて、自分のほうの、からだの作りがちがうのに違いない」

と、思うのだが、小夜衣には、どこがどう違つているのか無論わからない。

ときには壁越しにドタン、バタン……というさわぎ。

「ああ、わちきは片輪の生れつきかも知れない……」

人一ばいに勝気で、チョンチョン格子へ覗きこむ男の袖を、長キセルの先でチョイと引つかけたら、かならず生捕

客はおなじ床の上で、酒の酔のせいもあつて、もうグウグウと、高いびきだつた。蚊張を風がゆるく、なぶつている。隣の部屋では壁越しに、うめくような九ノ重の声が断

〝ちきしよう！〟小夜衣は歯をくいしばつて、じれつたい不感症に身悶えする…吉原おいらんの悲劇!!

りにする小夜衣だつた。

それだのに、イザ床のあしらいとなると、

「おい、おめえはなんて頼りねえんだ。見かけ倒しの女だな」

と、相手は気抜けしたように、小夜衣の物足らなさに、ガッカリした顔をする。もう二度と小夜衣の客にはならない。

ジリジリとしてくる気持で、隣の部屋のますます、さかんになつてくる物音に、小夜衣は眠れなくなつてしまつた。

新吉原、江戸町二丁目、紀の字屋の遊女になつて丸一年——はじめは勤めの辛さに泣くが、だんだんと馴れて来て、一年目ぐらいが勤めの花。辛さというのは男に好き嫌いをし、故郷を思い出したり、ヤリテ婆アに責められるからだ。一年たつた頃には、ヤリテ婆アを丸めこむことも覚えてくるし、夜毎の男のかわるのも苦にならなくなる。故郷のことも忘れてくる。

かえつて、世の中の男のいろんな変りように興味もうかべば、その手くだに、こちらから進んで新しい何かを探ぐり出したくなつてくる。うぶな男にも、すれツからしの男にも、それぞれの味が見出されて、勤めの苦労よりも、楽しみの方がましてくる。

いや、それよりも、自分自身の中から、女としての生理の変化や喜びを夜毎に発見するという、新鮮な時機になるのが例だ——と、いう意味のことを、古いおいらんから小夜衣はきいた。それだのに小夜衣には、喜びどころか、砂をかむような味気なさと、さいなまれる苦痛が、夜毎にまつしてくるのだつた。

ついでだが、三年めともなれば、借金が増して来たり、勤めにのぼせて夜毎にからだを張つて病気になつたり、いろんな客への義理ができたりで、またもいやさが増して来る。首をくゝッたり、心中さわぎを起したりは、大抵この一年以内か三年前後におこす出来ごとだ。

さて——小夜衣は、こんな苦しみに、もう十日もあえいでいた。不眠と、隣の部屋の九ノ重に対する嫉妬もまじつて、イライラしてくる。

「ええ、このからだをどうしてくれよう！」

われとわが身を、うツぷせになつて、身もだえしているうちに、ふつと、一緒に寝ている男さえもが、憎くてたまらぬような気持になつて来た。

「これさ、わちきの気も知らないで！」

いきなり、狂つたように、なげ出している男の腿をつねつた。

「あつ……な、な、なによするんだ！」

びつくりして眠をさました男は、まだ酔の充分にさめな

い血筋のういた眼をみはる。脂切つた男の顔に、痛さと一緒に、ニヤリとするようなものが浮かんだ。——さツきは自分だけ満足すると、つまらないようにゴロリと横になつて高イビキをかきはじめた男だつた。

「眼をさましなんし。寝にくるだけだつたら、お家のおかみさんの横へでも……」

と、云つたかと思うと、小夜衣は思いきり男のはだかツた胸のあたりを平手でピシヤリツ。

「うつ……ふふふ。おめえ、どうしたんだよ」

一ペンに眼がさめたように、男はこちらを向いた。どうせこの里へ足をふみ入れる男だ。起こされたからには、一度でも、楽しみを多くしたほうがよい……とでも云うように、やおら身を起こそうとする。

それをみた小夜衣は、男の楽しみが、自分を楽しませることを思うと、もう一度カツとして来た。

「いやざます！　そんなこと」

と、いうやいなや、男の出つぱつた額をゴツンと突いた。あつ……と、不意を喰つて畳の上へ、後なりにひツくり返つた男の上へ、飛付いた。

両手でピチヤ、ピチヤ……と、男の胸といわず腹といわず、顔だけは外して、からだを投げ出す。

昂奮し果てた男たちは、グツタリとして、ニヤニヤ笑つて、

それで飽きたらなくなると小夜衣は、顔だけは外して、胸から下腹にかけて、汗でグツショリになツているのを、爪を立てて引ツ掻くのだ。

「えへへへ……よせよ、もう……よせツたら！　これ、

れが身内を引ツ掻きまわすような昂奮になつて行くのを感じていた……。

∴女身への復讐

「ああ、いやだ、いやだ」

客をあげると一度だけは、床をつけなければすまない。これが勤めだ。だが、終るとすぐに、いつも突きあげるような腹立たしさが襲つてくる。

昼夜通しで二分、夜だけで一分の揚代だ。はした金で、女の大事なところを自由にさせなければならない、この世の地獄だと思う。

「世の中の男をみんな、殺してしまつてやりたい！」

と、時には思うことさえある。

「ちきしよツ、ちきしよツ……ちきしよツ！」

と床付けが終るやいなや、遊男郎に馬乗りになつて、両手でピチヤピチヤと引ツぱたく。

昂奮し果てた男たちは、グツタリとして、ニヤニヤ笑つて、からだを投げ出す。

それで飽きたらなくなると小夜衣は、顔だけは外して、胸から下腹にかけて、汗でグツショリになツているのを、爪を立てて引ツ掻くのだ。

「えへへへ……よせよ、もう……よせツたら！　これ、

そんなに、いじめるなよ」

口ではそう云っても、なんとなくいゝ気持らしく、三枚重ねの布団の上で男たちは、ゴロゴロと転がる。一そう烈しく、たかぶッてくる気持に、長じゆばんも何も脱ぎすてて、小夜衣は男に挑んでゆく。

泣きたいような、復讐のよろこびが、小夜衣には沸上つてくるのだ。——

「小夜衣という女がおるそうじやな？」

ある夕刻のこと、深編笠に渋扇を半開きにして、紀の字屋の表へ立つた侍があつた。

「はいはい、おりますでございます」

「あがつてつかわす」

「もし、お殿さま」

と牛太郎は、侍をわきへ引ッぱつて行つた。

「あのう、おあがり下さることはお有難とう存じますが、実は、あのおいらんには少しばかりクセがございますので……ほかにまだお職をいたしておりますおいらんも……」

小夜衣が、客に対して乱暴をはたらくということを、もう知つていた。それを喜んでくる客もあるが、プンプン怒つて帰つて行く客もあつた。もしも侍に、そんなことをして怒られたら大変だと、牛太郎は思つたのだ。

「大事ない。そのクセを、わしはみたいのだ」

ヘンな客もあればあるものと、牛太郎は案内して行く。

「よく来てくんなまんした」

ニッコリ笑つて引きつけへ現れて来た小夜衣だ。すこしばかり蒼白く、小さな唇が紅く艶々して、切長の眼にキラッと光るものがある。

台の物が運ばれて、一献二献とかたむけて行くうちに、その侍——二十七八の浅黒い面には、女遊びに馴れた笑いがうかんで、

「小夜衣、わ

しはこの世の女に飽きが来た」

「そうざますか。わちきも、この世の男に飽きんしました」

ふと笑つた小夜衣の、青く光る眼の色を、侍はニンマリ笑つてうける。

「さ、部屋へおつれしましょうよ」

いずれは旗本の二男坊か何かだろう。先に立つて小夜衣は部屋へ行く。

この夜まわしの部屋にも客があつた。小夜衣が、はじめて客をぶつたり、つねつたりした最初の客だつたが、不思議に、あれ以来、三日にあげずやつてくる。侍のおさまつたのは本部屋。つまり小夜衣の居間だつた。

白い蚊帳のすそに、すすきの模様がゆれて、二人は床へ。

「早う、床をつけさせなんし」

侍というのが小夜衣はとくに嫌いだつた。いかめしく構えて、おいらんなど虫ケラ同様に思つている。それでいて、しつツこく、当節の旗本と来たら諸価暴騰で金にはけちだつた。

引つかゝれても、ニヤニヤして頭を抱えている職人の方がましだつた。

「こいつ、無礼な云いかたをするな！」

いきなり侍は、腕をのばした。ギユツとつかまれた胸のあたりの隆起

だつた。

小夜衣はドキツとしたが、侍から身をひこうとする。

「こやつ……」

片手で肩のあたりの肉へ喰いこむほどにつかんだ。

「痛いツ……」

と、云つた小夜衣は、怒りがカツと燃えたつた。

「お侍だと思つて、おとなしくしておれば……わちきも、生身でありんす」

侍の手へ顔あげて噛みついた。

「あッ……」と、云つたが、噛みつかせたまゝで、侍は身を起こした。両手で小夜衣の胸のあたりを、ギューギューとしめつけはじめた。

「あッ……ちきしょッ！」

と叫んでいた。

馬乗りになつてくる侍の、はだかツた胸へ両手の爪をかけた。

「痛いぞ！……」

と、云つたが、侍は爪を喰いこませられながら、なおもギューギューと……。

男の力には、かなわなかつた。まもなく小夜衣は、両手を背中でしばられていた。解かれたしごきの緋鹿ノ子が、背中へだらりと垂れ、長じゆばんは、しどけなく脱げさがつている。

「ふゝゝ、こいつめ……しぶといやつ！」

白いからだをエビのように曲げて、ころがつている小夜衣。それを、こころよさそうに上から眺めながら、侍の眼がギラギラと光つている。

「よいか！打つてつかわす。そちの背骨が折れるかも知れぬぞ！」

枕元の刀をとつて、長味をぬいて傍へおく。サヤを振上げて、ピシリーツ……。

「あゝツ……」

小夜衣は叫んだ。しかし、廓のおきてとして、客の仕打ちに大きな声は立てられない。

「これでもかーツ」

ピシリーツ……と、またも。

歯をくいしばつて、どうにもならぬ自分に、眼をふさいで身もだえする。

「ここを、こうしてつかわしたら……」

つめたい金具のはまつたコジリでグリグリと小夜衣の…

「ああ……ううツ……そんなこと……」

唸めきながら、ゴロゴロと寝床をころがつて、小夜衣は息のきれそうな思いになつていた。——不思議だつた。それが、身を焼くような、昂奮に変つて来ていたのだつた。

あおのいたままで、眼を小さくあけてみた。侍の眼が血走つて、あやしく燃えている。サヤをつかんだ手が、ブルブルとふるえ、曲げた唇のはしには、惨虐に対する快感がミミズのようにクネクネと、うごめいている。

「殺してくんなまんし……こんな、ひどいめに会わされるならば、いつそ死んだほうが……」

と、口走りながら、小夜衣は、その言葉と反対に、陶酔するようなものが、全身を支配しているのだつた。

「ふふふッ……苦しいか？　わしはな、今の世の中で、女しか苛なむものはないのだ。金で買つた女の身を、こうして苦しめておれば、わしの心は満足できるのだ！」

「苦しめてッ、勝手にしてくんなまんし……どうせ、苦しませられるために生れて来た、わちきでありんす……もッと、さアー！」

小夜衣は、息たえだえに云う。

「云うにや及ばぬ。さッ、こうして！……これでもか、これでもッ……」

侍は、サヤをなげすてた。両手を小夜衣の髪にかけた。立兵庫の髷が、バラバラにとけて、櫛も、こうがいも飛んだ。まッ蒼になつた小夜衣の顔が、青い筋のヒクヒクと動く侍の手の上げ下げによつて、紅く血潮があふれたり、蒼く引きつッたりしてくる。——

半刻（一時間）もつづいた。

男も女も、グッタリと力尽きて倒れた。ものをいうのもものうかつた。侍もそうだつたらしい。汗をふくのも、いやだつた。

朝になつて、侍は、

「小夜衣、ゆるせ。……旗本と云つてもな、苦しいのは、女郎のお前もおなじだぞ」

と、云いおいて帰つて行つた。

小夜衣は、その座光寺五郎という侍が、なにかしれず可哀そうに思えて来た。——旗本とは云つても、女郎と同じように苦しい……そうだ、公方さまの豪奢な生活にくらべて、そして町人たちの栄華な日常にくらべたら、わずかな扶持で、出世の見込みもなく、その日を送つておらねばならぬ旗本たちは、この世に望みはない。刀をさして歩いていても、町人たちまでも、内心バカにしているに違いない。女だけが、金で買つておる間だけ、自分の思うようになるのだろう……。

∴ 三ツ巴

……それでは、遊女はどうすればいゝのだ？……どこへ尻をもつて行つて、自分をなぐさめればいゝのだろう？……九ノ重のように、わが身の喜びを刹那々々に酔つて行けるからだをもつていればいゝけれど、小夜衣には苦しみと、味気なさだけしかない。

籠に入れられて、夜毎を苦しめられる小夜衣にとつてはせめて町人客をでも、ウンとイジメて、イジメ抜いて、それに喜びを感じるほかないのだつた。

「宵にチラリと見たばかり、とはひでえぜ。小夜衣おいらん」

脂切つた丸い顔の、厚い唇をニヤリとさせて、昨夜のまわし部屋へ、ほッたらかしておいた長兵ヱがやつてきた。

「すんません。かんにんしてくんなまんし。今夜は、ゆッくりと可愛がつてあげますよ」

猪首に這つた爪跡も生々しく、ときおり手でさすりながら、この四十男の長兵ヱは、けッして怒らない。女房はある様子だが、多分おとなしく文句一ッ云えない女らしい。いつも、小判や小ツブで五両や十両の金をザクザクと財布の中に入れているところは、ちよいとした商人だろうか。くる早々に、

「床だ床だ……」

と、もうどこかで飲んで来ていて、床急ぎする。そして小夜衣がきらいな床付けを強いるのだ。

「いやだというのに待つてくんなまんし」

「いやもクソもあるもんかい」

と、無理無態に——それで小夜衣が、カッと怒つて躍りかゝるのを待つているらしい。

「ちきしよッ……ちきしよッ。いやだというのに、お前は……」

ハネ起きて、ガムシヤラに武者ぶりつく。それを待ちうけていて、両手で頭をかゝえ、小夜衣の下へもぐりこむようにして、

「こらッ、まてよ、まてよ」

しかし、待つてほしいのではなく、うつむいた下で、ダラシなく口をあけて、狂つたような小夜衣の手や足の虐待に、たまらない昂奮をおぼえてくるのだ。

長兵ヱにしても、小夜衣から、はじめて知つたこの嗜虐の喜びだつた。

蚊帳がはずれ、箱枕が二ッにこわれて飛びちつた。小さな人形のような赤い小枕が、障子を破つて廊下へとび出したときだつた。

「こらッ……」

と、怒声がきこえて、障子があいた。

「あッ……」

「まア……」

蚊帳をかぶつたまゝ半裸の小夜衣に踏んづけられている長兵ヱと、立兵庫を横なりにつかんだこうがいを逆手にして、長兵ヱのノドのあたりへつけている小夜衣だつた。

「貴様たちは、よくもッ……」

先にあがつていた座光寺五郎が、ゆかたの肩をまくつて

いる。手には大刀をつかんでブルツと震えた。

「殿さまも、おいでしたか……」

と、少しばかり無気味に長兵ヱがいう。

「ふん、殿さまだつて、わちきのお客さまです。まわしの間は、お行儀よく待つていてくんなまんし」

眉をつりあげ、息をはずませて、小夜衣は小さく叫ぶ。他人の部屋にはいつて来た座光寺に対する怒りだつた。

「よし！　貴様ども。みどもがイジメてつかわそう！」

大刀のサヤごと、中腰になつている小夜衣の肩をピシリーツ……。

「あツ……」

「こいつもかツ！」

返す刀で、長兵ヱの横腹をピシツ……。

「うう－ツ……」

長兵ヱは唸つて、そのまゝ小夜衣のからだへ、ガツと抱きつく。

小夜衣は、長兵ヱの上へ、かばうように身を伏せる。――その、紅いもの、青いもの、白いものの乱れたさまを見て、座光寺

の眼が、クラクラとくらんだ。
組んずほぐれつしている長兵ヱと小夜衣の背といわず、肩といわず、腿といわず、ピシッ……ピシッ……ピシッ……ピシッと狂ったように打ちおろす下で、
「ヒーッ……」
「ううン……」
二人の唸めき声。
「ふふふッ……へへへッ……ははははッ」
座光寺の燃えあがる眼の色が、ほの暗いあんどんの光をうけて、メラメラと青い焔のようにゆれる。
額にういた筋が脈打ち、呼吸の音は夜気をふるわせる。
——寝しずまつた廓の夜更けだ。どの部屋も、もう勤めが終つて寝しずまつている。
遠くで夜番の拍子木が、間遠にきこえているだけだつた。……

∴ 深夜のうめき

「庭へ出ろ！」
低く、うめくように座光寺が云つた。
「庭なぞ、出られませぬ。わちきの部屋は、きまつておりんす」
「なに？　出られねば、わしが引きずり出してやる。いやと云えば、この場でバッサリ……」
座光寺は、片手で小夜衣の衿首をとつた。逃げ出そうとする長兵ヱの腕の下へ、太刀をグイと引つかけた。背がらみにして、ズルズルズル……と、廊下へ引き出して行く。
三人とも無言だが、小夜衣は長兵ヱの腕へ、ガッシリと抱きついている。
裏の非常梯子を、音のせぬようにすべり下りて行く。
まつ暗だ。星が二つ三つ狭い庭の空に光つているだけだつた。
「小夜衣。そちは、こやつを縛れ……その方は、わしが縛つてやる！」
手さぐりで、植木屋でも置き忘れたらしい太い綱を、さがし出して来た。
うむを云われなかつた。いつか座光寺の手の大刀は、サヤが抜きすてられて、キラッ……キラッ……と、夜目にも光つている。
小夜衣は、背をまるめて二本の手を出す長兵ヱを、ギューッと縛りつける。
「いてて……」と、かすかに声がもれる。
「こんどは、そちだ！」
座光寺は、小夜衣の手をねじあげる。綱が手から背へまわされて、

「あぁッ……」

と、一声——小夜衣と長兵ヱは、二尺ほどの間をおいて、つながれる。

綱のはしを座光寺は、太い松の幹へ投げかけた。片端をグイグイと引く。

「ヒーッ……」

と、一声、小夜衣の白いからだが宙にういたかと思うと、それにつながつて、首と脚をダラリと垂れた長兵ヱが浮いて行く。長兵ヱの背中へ、馬乗りになつたように小夜衣のからだがあつた。

松の木がゆれる。パラパラと、枯葉と露が落ちてくる。暗い中に、うッすらと白い小夜衣の顔が、乱れ散つた髪をかぶつて——その下には、長兵ヱの太つたからだが、うごめいて、ブラ下つている。

「よしッ……これかッ」

座光寺の長刀がギラリと光る。ビタッ……峰打ちだ。

「ヒヒヒーッ……」しのんで叫ぶ小夜衣の声。

「こんどは、こいつ！……」

ビタビタッ……と、長兵ヱの尻のあたりへ、皮膚が裂けるような音。

「ううううッ……」

綱が、松の枝が折れるほどにキシンで、暗い中で、うめきと叫びがつゞいて起つた。

小夜衣は苦しさとも喜しさともつかぬ、狂つたような声を、けッして張上げなかつた。忍びに忍んで——長兵ヱも同様だつた……。

座光寺とても、歯を喰いしばつて、苦痛か快感かしれぬものに取り憑かれたような唸めき声で——それがやがて、たまらなくなつたように、大声に、

「こいつ……わッはッ……」

と、笑い出しかけた途端、小夜衣の足がパット座光寺を蹴つた。ふりあげていた大刀の柄のあたりを蹴つたらしかつた。

「うゥンッ……」

座光寺は、前へのめッにひようしに、今までとは違つた叫びをあげて、ドーッと大地へ仆れてしまつた……。

翌朝だつた。紀ノ字屋は大騒ぎだつた。

大地に倒れていた座光寺は、胸を大刀の切先でえぐつて死んでいた。松ノ木に下つていた小夜衣と長兵ヱは、虫の息だつたが、抱き下して介抱すると、ようやく生命はとりとめた。甚助を起した座光寺が、二人を殺そうとして誤つて死んだということになつた。

夜毎に、こころよさそうな叫びが、小夜衣の部屋から漏れつゞく。——

（終り）

連載アブノーマル官能小説　—最終回—

淫雨熄まず

松井籟子
喜多玲子画

あなたに愛してもらわないで、私だけがあなたを愛してやるのやわ、私の玩具にしてやるの……千佳子はマツチをすつた。譲次の胸毛がジリ〳〵と燃え上る……

《一》

雨は淋しいと唄にも唄われる。

しかし、人がやるせない孤独感を感じるのは、雨の夜よりはむしろ、晴れた夜なのではないだろうか。

雨は淋しいには違いないが、その淋しさに甘えられる。孤独を孤独としてたのしめる甘さがある。

けれど、月が匂うような晴れた晩、或るいは降るような星が、空に咲く花のように香る夜、ひとりでいるのは生理的に淋しいものだ。そんな晩は獣達も同じように相手を求めるのか、夜

の静かさを奇妙な声でゆすぶる。

先刻から轟木譲次は机にもたれて、そんなことを考えていた。

しばらく千佳子に会っていない。

大阪郊外の鉱泉宿で、長瀬小夜子と忍び逢っていた隣座敷に、千佳子がいたような気がする。

どうも千佳子の声をきいたように思うのだが錯覚だったかもしれない。

千佳子にかぎつて相手の男の見当がつかないのだ。

（やっぱり小夜子のいうように、千佳子に済まないと思いながら、小夜子とも切れずにいるので、疑心暗鬼で、千佳子がいたように思ったのかな）

そう思う。

しかし、あの日から、千佳子に会っていないのだ。たづねて行くと、きまって留守だという。手紙を出すと、簡単に、

―今、とても忙しくてフーフー言っている。そのうちお電話します―

という葉書の返事がくるばかりで要領を得ない。

（女はいくらでもあるさ）

そう、自分で自分に言ってみるのだが、千佳子のことを忘れるわけにはいかなかった。

（会いたいな）

と、思う。

その時、トントンと、ドアをノックする音がした。

（千佳子かな？）

すぐにそう思つた。しかし、

（お前もよつぽどどうかしているよ、こんなにおそく来るわけがないぢやないか）

と、思い返えした。

どうしてか千佳子も小夜子も、譲次のアパートで泊るのを厭がつた。昼間お客様のように来て、外へつれ出すことはあつたが決してその部屋で愛情を語ろうとはしなかつた。

というのは、譲次が千佳子や小夜子と知り会う前に、その部屋で一年あまり同棲していた女があるのを知つていたからだ。そして、その女は譲次の女出入を恨んで、その部屋で睡眠剤をあほつて死んだのだ。

譲次はその女の死が、自分の為だつたとは思いたくなかつた。よそへ引越ししたら、死んだ女に負けるようで厭だつたつた。

しかし、千佳子も小夜子も、それを妙に気にした。その部屋のどこかに死んだ女の体臭がこびりついているように思つた。だから、小夜子は大抵彼をつれて、逆さクラゲなるマークの家で愛情を語つたし、千佳子は、曾根の彼女の家へ公然とつれ帰えつていた。

千佳子は仕事に夢中になると、どんなに愛情が深くても、男の存在がわずらわしくなることもあつたから、譲次がアパートにいることは、二人の仕事の性質上、仕方がないと思つているらしい。しかし、決して譲次のアパートで泊ることはなかつたから、

（千佳子かな）

と、譲次はいつたんは思いながら、すぐに自分でそれを否定したのだ。

「トン、トン」

びノックの音がする。

立つて行つてドアーをあけると、

「しばらく」

と、洗つたばかりの顔のような感じで、千佳子が立つていた。譲次は何にも言わず、中へ招じ入れた。

こんな時、芝居や映画では、すぐに「よく来たね」というようなせりふを言わせるものだけれど、本当は、そうした言葉はそうすらすらと口に出ないものなのだ。

「どうしたの？」

譲次は言つた。一寸聞くと、この言葉は来たことが悪かつたようにひびくものだが、男の嬉しさは、こんな風に、却つてとがめるような口調の中にあるものなのだ。

「泊めてね」

千佳子はいう。

「そりやかまわないが……」

「もうおそいんでしよう？　お仕事？」

「いや、べつに急ぎの仕事でもないんだ」

「ぢやあ、一杯のまへん？私、酔いたいの」

千佳子はビニールの手提げの中から、サントリーとタンサンとレモンをとり出した。

「忙しかつたの？」

譲次が聞くと、

「ええ」

と短く答える。

「留守に行つたんだよ」

というと、

「そうやつてね」

という。いつもと同じように振舞つていながら、何となし、二人の間に一枚薄い幕が引かれている。そのくせ千佳子はつとめて何でもない顔をしている。その何でもない顔の裏側に何かありそうに思うのは、やはり彼の疑心暗鬼だろうか。

《二》

「もう寝ましよう。酔つたわ」

そう言いながら、千佳子は譲次の目の前へ、すんなりした足をのばして、靴下をとつた。赤くマニキュアした足の指が、貝殻のようだつた。

「ねえ」

譲次は引きよせて、接吻しようとした。

「厭！」

千佳子は逃げる。

「何故？」

譲次が追うと、

「この部屋で、あなたに愛されるのはいや！」

「ぢやあ、君は……」

どうして此処へ泊ろうというのかと聞こうとしたが、千佳子は高飛車な調子で言つた。

「私、あなたに愛されるのは厭よ。私が愛するだけ」

「どういうことなの？　それは……？」

「いいでしよう？　私があなたのことと愛しても？」

「そりやあいいにきまつているぢやないか」

「私ね、あなたが私のことと、愛してくれていると、ばかり思つていたのんよ」

「誤解？」

「愛しているよ」

「まあ、聞きなさい。でも、あなたの愛情つて、千佳子ひとりに注いでいるのではあらへん、他へも分けられる愛情やつたんやわ。そんな愛情つて随分ケチくさい、小さなものやわ。私、厭なの。そんなケチくさい愛情なんて厭なの」

「それは何かの誤解だよ、君の……」

★前号までのあらすじ★

演劇部の苦学生斎田ユキは、香月春夫（軽音楽部学生）の紹介で、新進女流画家真木千佳子のモデルになり、そこで、香月と千佳子によつて、思わぬ責めをうける。ところが千佳子も、一夜香月の甘言にのつて、ホテルで全裸のまゝ縛られた。たまたま隣室には、千佳子の恋人譲次が、元女優長瀬小夜子（ユキの演劇指導）と泊り合わせていた。

かねて小夜子は、譲次を自分のものにしようと思つていたが、パトロンの菊地が邪魔になり、一計をめぐらして、香月の友人、ユキの恋人小崎を英語教授の名目で家に連れてくる。

何も知らない小崎は、小夜子の家の風呂場で、豊満な彼女の肉体を見せつけられ、さんざん挑発されるが、その時、菊地が帰宅して二人を発見し、菊地は風呂場の中で二人を折檻する……。

一方モデルにこりたユキは、小夜子の経営するバーの女給になろうとして、小夜子の家を訪れ、図らずもそこで、恋人小崎と小夜子が、全裸で菊地に責められているのを目撃し、余りな出来事にびつくりして、打ちひしがれ、再びすごゝと引返す、途中偶然にも香月に呼びとめられ、二人は、とある家に連れ立つて入つてゆく。

千佳子の目が急にキラッと刃物のように光つた。しかし、すぐにその光は消えて、

「そうね、誤解にしておきましょう。私は今夜喧嘩しに来たのではないんやから…。とに角、寝ましょう」

千佳子はウイスキーやコップをかたづけると、

「おふとん、どこに入つているの？」

と、さつさと床を敷こうとする。

「僕がするよ、君はお客様だ」

譲次はいつもひとりで寝るように、敷布団を一枚敷こうとして、気がついて、あまつている掛布団をもう一枚敷布団の上に重ねてシーツを敷いた。千佳子は本当にお客様のようにだまつて見ている。

「枕が一つしかないが、座蒲団でいいかい？」

「ええ、いいわ」

やがて寝床が敷かれて、寝巻きに着かえようとする譲次が、裸になつた瞬間千佳子が手をとつた。

「こうして後で会わせるのよ」

「なに？」

千佳子が何をするつもりなのか、咄嗟には譲次にのみこめなかつた。

千佳子は彼の両手を一つにつかむと、手提げの中から細引を出して巻きつけた。

「どうするの？」

譲次は手を引つこめようとしたが、もうそのときは細引が彼の手首に蛇のようにまきつい て、そのさきが首にかけられ、後手にされた手首はぐつと背中の上へ押しあげられた。

「さあ、寝なさい」

千佳子は言う。

「何をするんだ？」

まさか彼は千佳子を蹴とばすわけにもいかない。ふとんの上へどうと倒れた。

千佳子は彼の足にも繩をかける。棒のようになつた彼の体を見おろして、

「さあ、いいわ」

と言つた。

「あなたに愛してもらわないでも、私だけがあなたを愛してやるのやわ。私の玩具にしてやるの。

と思つた。それでなかつたら、あの部屋で小夜子が彼を縛つてしまうと口に出して言つて、彼がぐるぐる巻きにされていじめられたのを知つている筈がない。今、千佳子が同じようなことをしようとしているのは、あの会話をきかされてしまつたからだとしか思えないのだ。

譲次は抵抗していいものか、それともじつとして、されるままになつていようか？　ためらつているうちに、千佳子の容赦のない細引は胸にも廻されて、上半身は動けなくなつてしまつた。

その前に、一寸痛いことしてあげようか。あなたの彼女つていつたい誰なの？　さあ、白状しなさい」

千佳子は譲次の体の上でマッチをすつた。

「熱い！」

彼は叫んだ。

「誰なの？　え？　誰なの？」

譲次の胸毛がヂリヂリと音をたてて燃えた。

「君こそ誰と浮気したんだ？」

「え？　私？　なぜ、何故そんなこと聞くの？」

千佳子はしやあ〳〵とした顔でいう。

「私ね、あなたに彼女があるつて、あの人から聞いたのやわ。自分が浮気しているもんだから、私までするように思うのね。さあ、相手の人誰なの？　仰云いよ」

千佳子は又マッチをすつた。

「熱い！　やめてくれ！　君の愛するというのはこういうことなのかい？」

「違うわ。これは責めているのよ。愛するというのは……」

千佳子はいきなり唇を近づけた。

「誰なの？　え？　誰なの？」

小夜子がぐつわはめておかんと、声が隣へ聞えるわね」

朝になつても、譲次はいましめをといてもらえなかつた。

抱かれることを望んだから、まさか一晩中縛つておくようなことはない。

しかし、千佳子はとうとう、譲次がどんなに頼んでも、縄をといてくれなかつた。そればかりか、千佳子のいう「愛すること」と、交互に彼の体は波打つた。

後手のまゝ寝かされていると、手首はごりておけば、あなたはただ愛されるだけよ。あなたに愛してもらわないつもりなら、あなたが誰と遊ぼうと気にならへんやろし、此処へ泊つてもいいわけやわ。だから、今晩は一晩中、愛してあげるよつて、静かにせなあかんよ。そうや、猿

《三》

ごりと背中をえぐるようになつて、もがけばもがく程苦痛が増すのだ。起き上ろうとすると、千佳子は邪慳に押し倒す。手足の自由を奪われていると、女の軽い一とつきで、倒れてしまうのだ。起き上つた拍子に千佳子の肌を噛んでやろうかと思つたが、猿ぐつわをはめられているので、それも出来なかつた。

「あなたは私が愛してもいいと言つたでしょう。こうすればあなたは無抵抗でただ人形のように愛されるだけなんやわ。でも此の人形、ピクピク体を動かすし、呻めき声を洩らすから面白いわ」

千佳子は言つた。

「愛されるのが厭やつたら、厭やいうことを表わすことは出来るわけよ。ね、こうしても知らん顔していらつしやい。ほら、どう？　どう？」

千佳子のやわらかい指の動きに、譲次は千佳子のいう「知らん顔」が出来ないのだ。

そして、彼の体の奥底に、そんな風に玩具にされることを望む虫が巣くつている。小夜子と浮気したのも、今までの千佳子で満足されないものがあつたからだ。

しかし、譲次は精神的な愛情からいえば千佳子を愛していた。千佳子も小夜子も同じように美しい。

しかし、昔、新劇の舞台に立ち、今でもラジオに活躍する他、酒場のマダムとして忙しい日を送つている小夜子の美しさは、だんだん表面的な派手さに変つて来ていた。千佳子の持つているような知性が消えていつているのだ。譲次は千佳子の知性を愛した。だから、夜の寝床では小夜子の白い淫獣ぶりの方が安心していられたのだ。

女というものは始末に悪いもので、女の体が本当に女の歓びに目覚め出すと、体全体が丸くなつて、知性の刃まで切れ味を失うらしい。男がびつくりするような切れ方をする感覚を持つている女は、女体として熟れきれていない場合が多いのだ。

千佳子は譲次のことで女らしく嫉妬もし、夜の寝床で狂うようになると、千佳子自身の体の中にも変化が起るのか、

「駄目やわ、駄目やわ。やつぱり譲次とは別れられない。愛しているわ。譲次好きよ、とても好きよ」

泣くように訴えて、彼の体をかき抱くのだつた。しかし、朝になると、彼をまだ縛つたまゝにしておいて、顔を洗い、身仕度をして、それからはじめて繩をといてくれる。

「私の方から愛することにきめたんやからあなたの方からうちへ来ては厭よ。私、あなたに愛してなんかもらはへんの。私が愛したくなつたら又くるわ」

と、変な啖呵をきつて帰つて行くのだ。

譲次はそれも千佳子らしいなと思う。彼に他の女があるのを知つて、ヒステリックにそれを責めるわけでもなく、あいそをつかすわけでもなく、面白い解決の仕方を自分自身あみ出したところに、千佳子らしさがあつた。

それから二、三日して、千佳子は夕方、譲次のつとめている放送局へあらわれた。

「仕事まだすまへんの？」

「まだまだ、これからだ」

「急病になつたら、これからだなんていわれへんでしよう？」

「何か用事？」

「ええ、でも仕事がかたづくまで待つわ」

「そんなら、あと一時間待つていてくれたまえ」

「なんなら一時間半でもいいわ。時間つぶしにパックでもしてもろうてくるから……」

そういう千佳子は、急に甘えたように声をひそめると、

「怒つてはる？」

と聞いた。

「ああ、怒つてるよ。今度は僕が愛してやる。千佳子なんかギューギューいわせてやるから覚悟してろ」

「いやよ、そんなの」

千佳子は言つたが、「怒つているよ」と言われて却つて安心したように、浮き浮きした足どりで、

「ぢやあ、あと一時間半たつたら、又来るわ」

と、出て行つたのだつた。

《四》

「ねえ、私、お願いがあるの」

つれ立つて外へ出ると、千佳子は言つた。

「何？」

「あのね、あなたの彼女に会わしてくれへん？」

「彼女なんかいないつていつたら……」

「なんや、男らしくない。彼女がいるということは、はつきりわかつているのやわ。かくしたつて駄目。それより、その人に会わしてえな」

千佳子は言つた。

「うちな、あなたの彼女の顔がいろんな風に頭の中へ浮かんできて、どんな人か顔みわ。頭いとうなる。いつそ、たいんやわ」

「見たつてしようがないよ。それに、僕はもう会わないつもりなんだ。そう手紙を置いて来たばかりなんだよ」

「会つたつてかまへん。私はさとりを開いたように、私だけで愛していればいいと……けどな、このさとり、心細いさとりでな、お願いや。そやから、お願えな」

譲次はそんな千佳子を可愛いと思つた。絵筆をとれば、男の絵のような太い線を持つている千佳子が、さつぱりした気性と女らしさの中間で迷つている姿なのだ。小夜子に会わしたら、どういうことになるか、一寸たためしてみたかつた。

「そんなら行こう」

譲次は千佳子をつれて、「メーゾン・ド・サヨ」のドアを押した。

「いらつしやいませ」

客を迎える女達の中の、どれが譲次の彼女なのだろうと、千佳子は胸が鳴るような気がした。

「マダムは？」

譲次が聞く。

「今日はまだおみえになりません」

ひとりの女が丁寧に答えた。

譲次は千佳子を促して、スタンドの高い椅子に腰をおろすと、

「ハイボール二つ」

とバーテンに言つた。

「さき程は」

と、バーテンが挨拶するところをみると、譲次はすでに今日一度来ているらしい。

千佳子は何となく胸のあたりに塊が出来かつた。それを押さえるように、出されたハイボールをぐつとのんだ。

「おつまみは？　いつものようにセロリにしましようか？」

とバーテンがいう。

譲次はセロリという言葉には千佳子を針のようにつきさすものがある。彼と彼女の事情に関聯がありそうに思えるのだ。

それにしても、彼女とはどんな人なのだろ

う？

名をいえばおそらく千佳子も長瀬小夜子を知っていただろう。しかし、「メーゾン・ド・サヨ」が長瀬小夜子の経営している酒場とは知らなかったから、小夜子の顔を見なければ、それと気づかなかった。

譲次にしても、「彼女は？」と聞かれ、「これこれ」と、口で説明するのはどうも具合が悪い、顔を合わせてしまった方がいいと思ったのだが、

「今日はマダムはお休みやそうで、さつきのお品は、おうちの方へ届けて貰いました」

と、バーテンは言った。

「うちへ届けたらまづいな」

と、譲次は思わず言った。

それは別れようという手紙だったが、小夜子にパトロンのあるのは知つていた。家の方へ届けて、そのパトロンの目にふれると、ことが面倒になる。

「お急ぎのように思つたので、頂度マダムをたずねて来た娘さんがいたもんですからことづけたのですが……」

「マダムのお客つてどちら？」

千佳子が急に口をはさんだ。

譲次の彼女というのが、この酒場のマダムらしいということがわかつてきたのだ。

「芦屋川の方ですわ」

バーテンが答えるのに、

「そう」

と、千佳子は軽くうなづくと、

「あなた、知つてはるのでしょう？」

と、譲次に聞いた。

「ああ」

仕方なさそうに譲次が答えると、

「ねえ、これから行つてみな

珍え

い？」

千佳子はもう腰をあげる。

言い出したら、その日にことをきめたい性急さなのだろうか。それとも仕事を持つている女の活動的な面なのかもしれない。

（まあ、なるようにしかならないだろう）

譲次はそう思つた。

千佳子と散歩するつもりで、彼は阪急電車に乗つたのだ。

〈五〉

駅をおりて少しくると、

「あらッ？」

と千佳子が言つた。

「あそこへ入つて行くの春ちやんと違う？もうひとりの女の人はいつかモデルに使うたことのある斎田とかいう娘やわ」

「そうらしいね、一寸変だね、あの娘泣いているみたいだけど……」

「まあ、若い人達のことやもん、あんじようやつているんやろ。かまわんとこ。それよりも、あなたの彼女に会わしてくれる方がさきや」

千佳子は譲次の手をとらんばかりに、ずんずんさきに立つて歩いて行つた。時々立ち止つては、

「まだ？」

と譲次に聞く。

「だけど、君、会つてどうするの？」

「どうもしやへん。ただ、顔見るだけ。この辺へ来たから、一寸ついでによりましたつていえばいいやないの。まさかあなたの彼女が、私をどうするつてこともないやろ？　此方が平気な顔していれば、向うかて平気な顔するもんやわ」

それもそうかと譲次はうなづく。

小夜子の家はパトロンの旅行中に来たことがあつて、勝手はわかつていた。

「わりと広い家にいるのね」

木戸を入ると、千佳子は感心したように見廻した。

内玄関へ廻ろうとする耳に、ジャージャーと激しい水の音がした。

それに混つて、何かを打つ異様な音がする。二人は思わず顔を見合わせると、無言でその方へ歩いて行つた。

音がひびいてくるのは風呂場だつた。のぞいた二人は、

「あつ！」

と、声をのんだ。

この風呂場の光景を再び此処に記さなくても、読者はすでに知つていることと思う。

猿ぐつわをはめられた顔を、髪が被うように乱れてさがつていたから、女の方を小夜子とすぐに知ることは出来なかつた。男の顔にも見覚えがない。

シャワーの水は高く吊り上げられた二人の手首にあたつて、裸の体全体に水しぶきをたてているのだ。鞭を手にして立つている菊地のシャツもズボンも濡れていた。

打つことに疲れたのか、菊地は棒のさきで二人の体をブスッブスッと突きさしていた。猿ぐつわをはめられていない小崎の口からは、

「ううッ！　うーん！」

という血を吐くような呻き声が洩れていた。玉になる水のしづくの下で、二人の皮膚の所々が、痣のようになつている。

菊地は棒のさきで小夜子の体はボロのようにじつたりする。

さつきからの責苦で小夜子の体はボロのようにじつたりする。

うに疲れはてていたが、気絶するということはなかなか出来ないらしい。尤も、打つにしても、突くにしても、気絶する程の激しい苦痛はあたえずに、じわじわと苛んでいたのだ

ろう。真冬なら、寒さだけでも気が遠くなつたかもしれないが、夜気が冷たいとはいえ、もう夏近い。

「譲次」

千佳子は息を殺すように、譲次の手を握つた。

譲次も千佳子をかばうようにして、急には、二人を助け出さなければならないと思いつかないのか、窓硝子を透して、中の光景に固唾をのむばかりだつた。

菊地は窓に背を向けているから、外の二人には気がつかない。

やがてシヤワーをとめると、

「どうだ、あやまらないか」

と、小崎に言つた。

小崎は唇をかんでだまつている。

「こんなことされるのがお好きとみえる」

菊地はからかうようにいうと、流しに転がつていた木のふみ台を彼の首へ首かせのようにはめこんだ。そして器をとると、

「お前はこれをかぶつていろ」

と、小夜子の顔をねじ上げるようにしてかぶせた。その瞬間、彼女の顔から髪の毛が横へパラツとのそけて、窓の外の譲次と彼女の目が合つた。

「あつ！　小夜子！」

譲次は思わず叫んだ。

菊地が窓の方を見た。二人はまがなかつた。菊地は美しい千佳子の姿を見ると、急に狼狽したように、

「あちらへ廻つて下さい」

と、手まねで玄関を指した。

嫉妬に狂つていた菊地に憑いていたものが、その瞬間急にとれたようにも、自分の狂気を恥じるように、小崎はいきまいた。譲次は別の意味で、香月の様子が見たかつた。泣いていたユキが何となく気になつていたからだ。

千佳子は複雑な感情で、縛られた女の裸体に一瞥して、玄関の方へ廻つたのだつた。

「大丈夫？　歩ける？」

二人はかわるがわるに心配して、いたわりながら、やつと駅近くまで来ることが出来た。

小夜子はとう姿を現わさなかつた。今頃、菊地が介抱していることだろう。

香月がユキを連れ込んだ家はすぐわかつた。しもたやのようだつたが、千佳子が慣れないということを見とめたのだ。

訴えるという小崎に哀願するように、その金包みを渡した。誤解から彼の体に加えた乱暴を許してくれと頼んだのだ。

小崎は悲しく笑つた。もともと恋するユキに金を作つてやりたいと思つて此の家へ来たのだ。侮辱された精神的苦痛と、肉体的苦痛とをその金にかえたことになる。

小崎義一は目をつぶつて、その金を受取つて来たのだ。彼の説明で、小崎にアルバイトを世話するといつてその家へつれて来たのが香月春夫と知ると、

「香月なら、今、そこで見かけた」

と、譲次は思わず言つたのだ。

「よし、僕は一言挨拶してくる」

小崎はいきまいた。譲次は別の意味で、香月の様子が見たかつた。泣いていたユキが何となく気になつていたからだ。

《六》

よろめくように歩く小崎義一をいたわりながら、二人が小夜子の家を辞して来たのは、それからたいして時間もかゝつていなかつた。

小崎のポケツトには分厚い金包みが入つていた。菊地は小崎義一が、小夜子とは関係がないということを見とめたのだ。

「一寸ひとに聞いたのやけど、お部屋ありますか？」

と、きくと、

「はい」

と、言つてすぐに通してくれた。

玄関で靴をぬぐアベックの後に、小崎義一がいるのに気がつくと、けげんそうな顔をしたが、三人ではいけないとも言えなくなつてしまつたのだろう。千佳子は女中にチップをはづむと、

「香月さんが来ているでしょう？」

と、聞いた。

女中はチップの手前、曖昧に、

「はあ」

と、答える。

「心配せんかていいのよ。二人で来てはるでしょう？　どこのお部屋？　一寸ひやかしてやるの」

千佳子が云うと、女中は困つたように、

「あてが教えたと言わんといておくれやす」

と、念を押して、離れを指さした。

千佳子も譲次も、まさか斎田ユキが小崎義一の恋人だとは思つていない。

「私が一寸偵察してくるわ」

千佳子が立つて行つた。香月の部屋の前まで来たが、中はシーンとしている。

千佳子は襖の外から、鼻をつまんで、

「ごめん下さい」

と、声音を変えて言つた。

「何や？」

香月の声がする。

「宿帳を書いてくれはらしまへんが？」

「いつもの通りでいいんだよ」

「そやかて、此の頃一寸うるさいよつてに」

「仕様がないな」

と言いながら、香月は襖の鍵をはづした。

「春ちやん」

襖をあけるなり、千佳子にいきなり言われ、香月は、

「あつ！」

と、驚いたらしかつたが、すぐに何でもないような顔で、

「なんや、先生、ようわんわ」

と、とぼけてみせた。

部屋の中には卓の上にビールがのつているだけで、ユキの姿がない。

千佳子は次の間らしい襖をさつとあけた。

「あつ、そこは……」

香月がとめようとしたが、

「譲次、早く来て！」

千佳子の呼ぶ方が早かつた時、千佳子と香月は組んずほぐれつ争つていた。

そして、二人の争いも、恋人の来たのも知らずに、ユキは真白な肌に繩をまとつて、隣の部屋のふとんの上に寝かされていたのだ。

「あつ！　ユキちやん！」

ふりしぼるような悲痛な声をあげて、小崎がユキの裸身に手をふれたのと、譲次の鋭いパンチが香月の顎へ入るのと一緒だつた。

ユキは犯されてはいなかつた。

千佳子にヒロポンと偽つて、睡眠剤の注射をしたように、ユキも元気になるとかなんとかだまされて眠らされてしまつたのだろう。

別の部屋へ連れてこられても、まだ小崎の腕の中で、眠りからさめ切らず目をとじているユキの顔は深い悩みの影が残されていた。

小崎は静かに、ユキの額にかかるおくれ毛を、指のさきでかきあげながら、ユキの寝顔をみつめているのだつた。

こうして香月二人の恋人達にからむ挿話はいつたんは幕がおりるのだが、それは次の幕のあがる前提に他ならない。愛慾の泉が涸れない限り、泉の水は水蒸気となつて、降つてはやみ、降つてはやみ、雨は永遠に本当に熄むことを知らない。

——情の雨のふりしきり

かわく間もなきたもとかな——

とうたつた詩人があつた。今はただ梅雨の晴れ間と、筆をおく次第である。　（完）

★アブ・ストーリー★

夏に蠢く

ピシッ！　細いバンドが背中に喰い込む。狂気のように打ち下ろすマユミの腰の下で、富士夫は獣のように呻く……「ぼ、ぼくは、う、うれしいんだ……」しびれた五体の底にうづく歓喜！

鳥羽瑛子
水野泰一画

§楽屋番志願§

「お前さんかい、楽屋番になりたいつてえのは？」

スリッパをつゝかけて、耳のうしろに鉛筆を挟んだ事務所の男は、そう云つて、眼の前の志願者をジロ〳〵と眺めた。

「なにしろこつちは人手不足でね、一日も早く欲しいんだが……。しかしお前さんはちよつと若過ぎるね、一体幾つだい？」

「二十四歳です」

「どうもそう若くつちやね。前にいたのは六十過ぎの爺さんでね。そいつが急に頓死しちまつたんだ。至急代りが欲しいんだが、何しろ狭い楽屋に泊り込んで貰わなくつちやならないし、楽屋の掃除から、面会人の受付や下足番なんぞで、いゝ加減クサ〳〵するような雑用がゴタ〳〵あるんだ。どうも、そう云つちやなんだが、お前さんには勤まりそうもないね」

「いえ、一生懸命やります。どうぞ、お願いします」

男は少しドモリながら、妙に思いつめたような表情で、頭を下げた。

「そうかい、しかしなんだぜ。いゝ若い者が、踊子たちに顎でコキ使われて、時にやあ衣裳をたゝまされたり、間食の菓子を買いにやられたりするんだぜ？」

「はあ、僕、いゝんです。やります。失業して困つているんですから、是非お願いします」

セキこんで喋りながら、どういうわけか、急にポーッと赤くなつた男の顔は、係員は珍しいものでも見るように、マジ〳〵と見つめた。

「そうかねえ、もうちつと、マシな仕事もありそうなもんだが…」

しかし、そう云つてから気が変つたらしく「まあいゝや、こつちは何しろ一日も早く手が欲しいんだ。お前さん、困つてはいても、素性の悪い人間でもなさそうだ。それじやあ支度して、明日からでも来てくれるかい？」

男がホツとしたように肯いた時、丁度舞台が終つたらしく、吹きこぼれるように踊子たちの一団が、狭い通路に溢れて来た。衣裳と云つても、ホンの腰の廻りに申訳ばかり。光つた太腿や肩をぶつけ合いながら、ガヤ〳〵と喋り立てゝ眼の前を流れてゆく。男二人の話声など、消し飛ばすような、踊子たちのけたゝましいざわめきだつた。

男は息をのみこんで、吸いよせられるように、その一団を見送つたが、やがてペコリと頭を下げてから、楽屋口を出た。

通りへ廻ると、例の浅草名物の毒々しい絵看板が、並べられるだけ並べ立てゝある。

「横になつた女体」「夜ひらく門」「女のドキドキ」そんな得体の知れぬ文句の中に、豊満な胸をそらせて、艶然とウインクするストリツパーの似顔があつた。「浅草のクイン・藤木マユミ」と云うゴジツク文字も見えた。

奇妙な楽屋番志願者は、そんな絵看板を、一枚〳〵、ゆつくり見上げているのだ。

§孤独な夜§

約一時間後、その男は田園調布の、ある豪壮な邸宅の門をくぐつた。

「お帰えり遊ばせ」

出迎えた老女中は、頭を上げると、あつ気にとられたように叫んだ。

「まあ、富士夫様、その恰好は、一体どうなさつたのでございます？」

富士夫と呼ばれた例の男は、自分でも可笑しそうに、ヨレ〳〵のワイシャツや、シミだらけのズボンを眺めた。

「うん、ちよつとワケがあつてね。苦学してる友達のと替えたんだ」

「まあ、そんなルンペンのような服をお召しになつて……。いくらお友達のでも、あんまり物好きすぎると申すものでございますよ」

「いゝんだよ、婆や……」

富士夫はそう云い捨てると、広い階段を、ホールから吹き抜けになつた二階の自室へ上つて行つた。

婆やが紅茶の盆を運んだ時、彼の部屋は一杯にとり散らかされていた。

「おや、御旅行でございますか？」

「うん、しばらく留守するよ」

珍しく浮々と明るい富士夫の顔色を見守つて、婆やは嬉しそうに肯いた。

「さよでございますか、夏休みに入りましたからねえ。軽井沢の御別荘の方でございますか？」

「いや……」

「おや、それではお友達と御一緒にでも？ほんとに、少しは外へお出ましになつた方がよろしうございますよ。お父様はお忙しいし、御兄妹はないし、こんな広いお邸にお一人つきりでございますからねえ……。あんまりお部屋にばかりこもつていらつしやると、又いつぞやのように、神経衰弱にでもおなりになると、大変でございますからねえ——」

小さな風呂敷包をこしらえていた富士夫の手が、フッと止つた。神経質な青白い表情に、ちよつと苦渡に似たカゲが走つたが、彼はさり気ない調子で云つた。

「パパはどうせ今夜も妾宅泊りだろう。婆やからよろしく云つといてくれよ。僕も時々連絡はするつもりだけどね」

老女中が下るると、富士夫は鍵がかゝつた机の抽出しから、一冊のスケッチブックを取出していた。

螢光灯スタンドの下で、彼はなつかしいものでも見るようにパラ〳〵と頁を繰つた。それは世にも奇怪なスクラップだつた。

がんじがらめに柱に縛られた男。貴婦人が振う鞭の下にひれ伏す黒人。鎖につながれて苦役する囚人たち。着飾つた芸妓を乗せて走る痩せた車夫。さま〴〵な写真やスケッチ類のすべてが、そんな男たちの被虐図だつた。

正坐した膝の上に幾枚もの石をのせられて苦悶する、江戸時代の仕置図さえあつた。

こゝでは、女性はすべて勝者だつた。豪華なベッドの上から、冷然と奴隷の体刑を眺めていたり、シュミーズ一枚でステッキを振り上げていたりした。

富士夫は頬を紅潮させて、それ等を飽かず

眺めた。瞳が別人のように熱つぽく輝いているのだ。

それから鉛筆をとり出すと、余白に熱心に何か描き始めていた。額に髪を垂らしながら、刻明に鉛筆を使つて、一切を忘れたように、そのことだけに没頭している。まるで気に入つた遊びに我を忘れている幼児のように、無心な姿だつた。

やがてスケッチは完成した。それは見事な双つの乳房だつた。豊麗と云う表現が実にピツタリする、大きな女の胸部だつた。その凄い乳房の重圧に押しつぶされて、藻掻いている痩せた男がいる。

乳房の女の顔は笑つていた。小気味よさそうなその顔は、どうやら、浅草のストリップ座の絵看板で見た、藤木マユミに似ていた。そう云えば、押しつぶされている若い男は、富士夫自身かも知れなかつた。

§白い靴§

翌日から、富士夫の姿がストリップ座の楽屋裏に見られた。

浅草のストリップ興行でも、二流館のこの座の舞台裏の淫雑さと云つたらなかつた。狭い通用口には靴やサンダルが溢れて、楽屋に通ずる暗い廊下は、掃いても掃いても、果物やピーナツの皮がこぼれ、ガムの食べカケがムツとこもるような温気だつた。鰹だらけのワイシャツに、ヨレ〳〵のズボンの裾をまくり上げ、ペタ〳〵と板割草履を鳴らして歩く彼は、何処から見ても、尾羽うち枯らした、

ストリッパーたちの口汚い罵声を浴びせかけられる。

「やだよう、化粧水がこぼれるじやないか、何処に眼をつけてんだよ！」

「ド間抜け！　衣裳を踏む奴があるかよ！」

足元に気をつけると、今度は天井から網の目のように下つた、スタンドのコードに頭をひつかけるのだ。

富士夫は額に汗をにじませながら、通用口と楽屋の間を馳け廻つた。風通しが悪くて、

腑抜けのような、恰好の楽屋番だつた。

田園調布の邸の豪奢な自室で、ソファにもたれた、パリ好みのガウン姿の彼とは、まつたく別人だつた。表情までが、ガラリと変つて見えるのだ。

「ねえ、今度来た若い楽屋番さ、ちよつと踏める顔してるじやないの……」

「よしなよ。顔ばかりノツペリしてゝも、若いクセにあんな仕事しか出来ないようじや、男のクズみたいなもんさ。いくらか脳味噌が足りないのかも知れないね」

「ちよいと、聞えるわよ！」

「かまやしないさ——よう、あんたつと珍来軒に行つて、ラーメン二つ、ハバヘバあつらえて来てくんない！」

「ついでにサ、このタオル、絞つて来て頂だいよ、頼むわ！」

いずれも、ハチキレそうな若い裸体だつた。真夏の楽屋はパンテイ一枚のあられもない彼女たちでさえも、すぐ全身が汗でベトつくる。身の置場もないように転がつた、肉付のいゝ尻や胸の隆起が、笑つたり怒鳴つたりする度に、逞しく揺れるのだ。

富士夫は此処で、生れて始めて生甲斐を感じていた。喋ることゝ、踊ることしか知らないような、行儀の悪いストリツパーたちにコキ使われることに、なんとも云われぬ快い充実感があつた。むせかえるような肌の匂い、若さのボリユーム。踊子たちは、肉体そのものだつた。ムツチリ誇らかな乳房や、傍若無人の裸の臀部や太腿——。それが彼を奴隷のように追い使つた。

しびれるようなクシヤミ——。富士夫は殆ど夢見心地に狭い楽屋裏を靄めき廻つた。それは雇人たちにかしづかれる邸や、大学の教室での生活にはない、くるめくような、彼の本能の歓喜だつた。

「ちよいと！　あたしの靴がないわよ！　さつき確かに此処に入れといたのに……」

甲高い声にギクリとしながら、富士夫は慌てゝ床拭きを放り出して飛んで行つた。五尺四寸もの上背のある、花形ストリツパーの朦木マユミがつゝ立つていた。

「靴箱に入れといたのに、失くなるなんて、ヘンじやないのさ。あんた、楽屋番のくせにいてくる。身の置場もないように転がつた、呆んやりしているから、又掻つぱらいにやられたんじやないの！」

「すみません……」

けわしく眉をひそめているマユミの顔をチラリと盗み見て、富士夫は慌てゝ靴箱の中に頭をつゝ込んだ。

「やだねえ、まつたくボヤ〳〵してんだから……」

どうした加減か、マユミの靴は隅の方に転がつていた。富士夫はもう汗をにじませながら、彼女の足元にうずくまつて、その真白のパンプスを揃えた。

「なにさ！　こんな汚れた靴、履けやしないじやないか！」

マユミが腹立たしそうに、ポンと蹴り上げたのと、富士夫が慌てゝ拭こうとしやがみこんだのが、同時だつた。踊りで鍛えたマユミの爪先が、まともに彼の鼻柱を打つた。

「あツ！」

あやふやな中腰だつたのが、よけいにいけなかつた。埃りだらけの狭いタタキの上に、彼はもろにひつくりかえつていた。

「なんてヒヨロ〳〵してるんだろうねえ、男のクセにザマないじやないか！」

マユミは軽蔑しきつたように赤い唇を歪めた。転がつた男を見下しながら靴をつゝかけると、まだ腹立たしそうに、彼の脇腹のあたりを再び蹴り上げた。

それからサツと彼の顔の上を跨ぐと、ツカ〳〵と楽屋口を出て行つた。無言だつた。

富士夫は呆然と口を開けたまゝ、タタキの上に転がつていた。起き上ることも忘れていた。今、顔の上をサツと横切つて行つた、ハリのある派手なドレスの裾と、二本の足の動きが、彼の全神経を完全に麻痺させてしまつていたのだ。

「あらツ！　鼻血よ、あんた、鼻血が出てるわよ！」

富士夫はヨワ〳〵と起き上つて、顔からワイシャツにかけて流れた鮮血を見た。失神するようなくるめきで、躰が小刻みに震えた。

「マユミさんもひどいわねえ……。悪い人じやあないんだけどサ、今あの人、彼氏とうまくいつてないんで、ちよいとヒスなのよ」

さすがに気の毒らしく、そんなことを云う踊子たちの声も、富士夫の耳には聞えなかつた。

§気まぐれ§

マユミは楽屋に腹這いになつて、煙草の煙を吹き上げていた。

だが、なにか舌がザラ〳〵するようで、その煙草さえうまくない。背中から腰のあたりも奇妙にダルかつたし、要するに何も彼も腹立たしく、気に入らないのだ。癪の種だつた。

ふとマユミは、気配を感じて眼をあけた。入口から若い楽屋番の男が覗いている。

「なによ、黙つて覗いたりして……」

「すみません。あの……、ケーリーさんはいないでしようか……　面会なんですけれど」

「見りや分るだろ、居ないよ。御飯でもたべに出たんだろうよ」

と、思う。

一流劇場でも、スターで通して来た藤木マユミだ。それが僅かの年月の間に、こんなセカンド館で踊るようになつたのも、元はと云えば、男のためだつた。

それほど、夢中になつていたのだ。

に、性悪の男はどうやら秋風で、何処かの小便臭い女の子の尻を追つかけているらしい。

「ふん、男なんて、結局はみんな、そんなものさ！」

ゴロリと寝返えりをうつて、マユミは眼を閉じた。今までに関係があつた、幾人かの男の顔が浮かんでくる。始めのうちこそ、何の彼のと殊勝らしく気嫌をとつてチヤホヤするくせに、男なんて結局は、みんな我儘で浮気なタイラントなのだ——。

ふとマユミは、気配を感じて眼をあけた。入口から若い楽屋番の男が覗いている。

「見りや分るだろ、居ないよ。御飯でもたべに出たんだろうよ」

幹部級三、四人だけの狭い部屋なのだ。黙つたまゝ引こもうとする男に、マユミは自分でも思いがけなく声をかけた。

「ちよいと！　お待ちよ、用があるんだから……」

「はあ、でも面会の方が待つてるんで……」

「かまやしないさ、そんな奴、うつちやつときやいゝさ」

窮屈そうにオド〳〵と膝を揃えてかしこまつた富士夫を、マユミは寝転んだまゝの姿勢で、ジツと見た。舞台化粧のまゝの瞳が青く大きい。

この男はなんだつていつも、こんなにオドく〳〵してるんだろう——

何時だつたか、靴で顔を蹴り上げてやつたこともあつたのに、一向怒んでいる様子もない、若いくせにまるで豆腐が腐つたような、意気地なしなんだ……。

「ちよいと、その衣裳をさ、邪魔になるからたゝんどいとくれよ」

唯々諾々と、無器用な手つきで衣裳の整理を始める富士夫を見ていると、マユミは何故か、一層困らせてやりたいような、意地悪な気持に襲われていた。

「あんた、今夜舞台がハネたら、そのスーツ・ケース、あたしのアパートに届けといてくんない？　あたしは銀座のキャバレーに廻るから、ちよつと遅くなるけどさ」

ハンドバッグから取り出したアパートの部屋の鍵を、うつむいている顔の前にポンと放り出すと、ハツとふり上げた富士夫の顔が、みる〳〵赤くなつた。

それは、マユミの方があつ気にとられるほんの気まぐれの、嫌がらせだつた。

だからマユミがその夜更けてアパートに帰つた時、劇場の楽屋番のことなぞ、すつかり忘れ果てゝいた。大体、銀座を出た時から、ひどく酔つていたのだ。

クサ〳〵続きで自棄気味のところへ、浴びるように飲んだから、ひどい荒れ模様になつた。

それでもタクシーから下りて、ヒヨイと自分の部屋を見上げると、珍しく電気が灯つている。一図に男が待つていると思いこんだのだ。以前のように——。

あの人が、屈つて来てくれた……。酔いで涙もろくなつた気持でそう思いながら、マユミは懸命に階段を駈け上つた。惚れた弱身で、まるで小娘のように浮々と嬉しかつた。

「あんた！」

ドアを明けるなり、転げるように部屋に駈

け込んだ。

男はいなかった。その替り、おびえたように、富士夫の青白い顔がふりかえった。

「なによあんたは！　なにしに来たのさ！」

不当な云いがかりだった。しかし彼女には、不当だと云うがすつかり変っている。寝乱れ放題のベッドはキチンと調えてあるし、脱ぎっ放しのガウンもドレスも、ハンガーにかゝって、朝食のコーヒーやトーストの残骸さえ、跡形なく始末ずみらしい。

若い女らしくもなく、不精の限りをつくしていた乱雑な部屋が、見違えるほど清々しく整理されてあるのだ。

「なにさ、頼みもしないのに……、それでもあんた、男なのかい？　こんな、厭ったらしい真似をして……」

顔を伏せて、一言も答えない富士夫を睨みつけていると、マユミはなんとも云えぬ残酷な衝動にかられた。

「虫ケラ！」

マユミの右手がサッと動くと、富士夫の頬が鮮かに鳴った。

「デクの棒！　口惜しくないのかいッ！」

四ツ五ツ、たてつゞけに打った。男はまるで夢でも見るように、恍惚とマユミを見上げる。その胸元をドンと突き飛ばした。靴のまゝ、踏みにじった。

富士夫は髪を乱して床に転がった。それでも眼はマユミから放れない。罠にかゝった獣のように、手足を縮めて、ウウ……と呻つた。ピシッ！と、細いバンドが、その背中にからめつく。

「片輪者！　生れ損い！」

マユミは気が狂ったように、バンドを振りつゞけた。喘ぎながら、そうせずには居られなかった。男の死んだような無抵抗が、一層彼女を煽り立てるのだ。

富士夫は鞭の下で、言葉にならぬ呻きをつゞ

けた。シャツが裂けて、口からはアブクのような涎が流れた。

「うゝ、うゝ……」

「ろくでなし！　死んじまえ！」

「ぼ、ぼくは、う、うれしいんだ……」

狂気のような惑乱だつた。マユミはバンドを投げ捨てるし、転がつた男の上に、ドツと倒れた。

その夜、富士夫は夢に描いた乳房——、熱い豊麗な、あの双の乳房に押しつぶされていた。

§二つの顔§

涼風が立つて、六区にも秋が来た。

ストリツプ劇場は相変らずの絵看板で、刺戟を求める蟻のような客を呼んだ。

藤木マユミは久し振りに銀座に出た。顔見知りの劇作家に誘われて、ホテルで食事をとつた。場所柄だけに、辺りの客たちはブルジョア階級ばかりらしく、マユミはなんとなく自分の黄のスーツに気おくれさえ感じるのだつた。

デザート・コースに入つてから、彼女はフツと、今入つてきたばかりの、隣りの客たちの中の一人に視線を止めた。

「あツ、あの人……。」

そつくりだつた。夏の間いた劇場の楽屋番に、生き写しといつてもいい……。

「なんだい？　知合いかい？」

劇作家に声をかけられて、マユミは慌てて首をふつた。

「ううん、違うわ。あんなお上品な人たちに知合いなんかないわ——」

「ふむ。あの老人は、有名な政治家の津村さんだよ。傍の青年は令息らしいね」

まつたく、そんな名家の御曹子と、あの楽屋番と間違えるなんて、どうかしてる……とマユミは思つた。

しかし、それにしても似てるのだ。マユミはコーヒーカツプをとり上げながら、グレイのダブルで、瀟洒な身仕まいをした、青年紳士の横顔をみつめた。

あの精神薄弱者のような楽屋番と過した、奇妙に倒錯した情痴の一夜が、生々しく思い出されてくる。フツと消えるように彼が劇場から姿を消してから、もう二、三ケ月にもなるだろうか……。

マユミはあの夜の不思議な情感をふり払うように勢いよく席を立つた。

（おわり）

愛読者通信

始めてお便り致します。私は本年二三才のマゾ女性で常々貴社発行の風俗草紙の大の愛読者でございます。

遥ましい男性から、思ひ切り苛められたいという熱望は、今から思いますと、私だまだ幼かつた頃からあつたように思われます。「風草」を知る迄は、外の多くの方達と同じように私も又、自分の此のマゾ心理（とは未だ知りませんでしたが）を極端に異常な私一人だけのものと思い悩んで来ましたが、御誌を知りましてから或る種の安心を覚え、それ以来、風草は私にとつて欠かせぬものとなりました。けれど異性から縛られた場面を想像して一人で興奮するだけで実際に現実に縛られた事は一度も御座居ません。

それで長い間、サジストの男性を求めて悩み続けましたが、周囲には見当りそうにもありません。それで真に勝手な事をお願ひ致しますが、サジストの男性を四人位、御紹介して頂けないでしようか。私の好きなタイプとしては野性的なスポーツマン的でがつちりした人が好きです。容貌はむづかしい事は申しませんが、少くとも好感を抱く事が出来るような顔であつたらよいと思います。

どうぞ悩んでいるマゾの変体女をお救い下さいませ。

（神奈川　K・S女）

異常性慾者の精神鑑定

医学博士 太田典禮

何を異常性慾というかはむずかしい問題である。広い意味では、性慾の強すぎるもの、弱すぎるもの、変態的なものをさすが、せまい意味では異常に強いもの、特に変態性慾をいう。もつとも、どれほどの強さを異常のうちに入れるか、また変態というてもその限界をどこからときめるかは非常に困難であるが、正常な人にとつて不快なこと、苦痛なことが、かえつて快感をもたらし、それなしには すまされない程度のものを変態とする、というように大まかな線をひくことはできる。

しかし、いわゆる異常性慾者は精神異常者ではない性行為に当つては異常性を発揮するが、他のことについては正常なのである。もちろん、異常性慾にも程度があつて、度を越すと日常生活にも正常さを失うに至り、性格異常、精神異常と見なし得るものがある。

精神病の特徴は、自分では異常であることを自覚していないことであるが、変態性慾者のうちには、これ位は正常のうちだと考え、自分が異常である事の自覚のない場合がある。誰しも変態性慾的な傾向をもつており、それを行為にあらわすかあらわさないかのちがいはあつても、ある程度のサド、マゾの慾求をもつているものである。また他のことでも異常性格者は案外に多く、異常性の自覚のうすい場合が多いが、このことは性的異常について同様で、電車の中でのわいせつ行為など、特に異常と考えないで平気でいるのが少くない。従つてこれは一種の精神異常ということができる。悪いと知りながら、おさえ切れないで行動に出るのは、自制心の足りない精神力薄弱ともいえよう。

フエチシズムで女のズロースや腰巻などのほしてあるのを見て、急にほしくなつて盗むのも正常な精神ではない。あとではずかしくなつたら悔いるものもあるが、後悔しないところか得意になるのもある。こうなると精神異常者として病院に収容するとなると、他のことではそれほど異常でない人間の自由を奪う事になる。こゝに異常性慾者の精神鑑定の難しさがある。

ただ性慾が異常に強いのなら、治療の方法もあるが、変態性慾の治療は絶望的だといわれているだけに問題がある。

しかし、こうした異常性慾者を精神異常者とすれば、それが犯罪を行つても罪にならないか、あるいは軽くてすむ、という矛盾が起るし、精神異常者として病院に収容するとなると、他のことではそれほど異常性慾者はそれが甚しく、ことにサドの場合には殺人をも犯す危険性をもつている。

異常性慾者の精神鑑定

医学博士 太田典禮

何を異常性慾というかはむずかしい問題である。広い意味では、性慾の強すぎるもの、弱すぎるもの、変態的なものをさすが、せまい意味では異常に強いもの、特に変態性慾をいう。もつとも、どれほどの強さを異常のうちに入れるか、また変態というてもその限界をどこからときめるかは非常に困難であるが、正常な人にとつて不快なこと、苦痛なことが、かえつて快感をもたらし、それなしには すまされない程度のものを変態とする、というように大まかな線をひくことはできる。

しかし、いわゆる異常性慾者は精神異常者ではない性行為に当つては異常性を発揮するが、他のことについては正常なのである。もちろん、異常性慾にも程度があつて、度を越すと日常生活にも正常さを失うに至り、性格異常、精神異常と見なし得るものがある。

精神病の特徴は、自分では異常であることを自覚していないことであるが、変態性慾者のうちには、これ位は正常のうちだと考え、自分が異常である事の自覚のない場合がある。誰しも変態性慾的な傾向をもつており、それを行為にあらわすかあらわさないかのちがいはあつても、ある程度のサド、マゾの慾求をもつているものである。また他のことでも異常性格者は案外に多く、異常性の自覚のうすい場合が多いが、このことは性的異常について同様で、電車の中でのわいせつ行為など、特に異常と考えないで平気でいるのが少くない。従つてこれは一種の精神異常ということができる。悪いと知りながら、おさえ切れないで行動に出るのは、自制心の足りない精神力薄弱ともいえよう。

フエチシズムで女のズロースや腰巻などのほしてあるのを見て、急にほしくなつて盗むのも正常な精神ではない。あとではずかしくなつたら悔いるものもあるが、後悔しないところか得意になるのもある。こうなると精神異常者として病院に収容するとなると、他のことではそれほど異常でない人間の自由を奪う事になる。こゝに異常性慾者の精神鑑定の難しさがある。

ただ性慾が異常に強いのなら、治療の方法もあるが、変態性慾の治療は絶望的だといわれているだけに問題がある。

しかし、こうした異常性慾者を精神異常者とすれば、それが犯罪を行つても罪にならないか、あるいは軽くてすむ、という矛盾が起るし、精神異常者として病院に収容するとなると、他のことではそれほど異常性慾者はそれが甚しく、ことにサドの場合には殺人をも犯す危険性をもつている。

ぐ女党員

三谷祥介

小田明男画

酷悪非道な犯人のために惨たらしく殺されて、疵づき血に染まつている現場を私はこの眼で見て詳細な記録をつくり、警視庁の年鑑にかきとめておく仕事を長くつとめてきたのであるが、現場へ乗りこんだとき、すでに死んでいる人間は、いくら無残に殺されていても、すこし時日が経過すると、ぼやけてきて、実感が薄らぐばかりか、記憶から遠ざかつて憶いかべることさえ出来なくなる。ところがまだ息の根がとまらず、生きている被害者のことは瞼に焼きついて、容易に消えないものである。これは私ら刑事がちよツと

特高秘話

血みどろの鞭に喘

見よ！火中から引き出した鉄線のように赤く染つた血みどろの鞭！だが、女は石のごとく默して語らない。取り巻く刑事の眼はギラギラと怒りに燃えあがる！

やすツとのことでは驚かなくなり——言いかえると神経が麻痺してしまつたせいである。犯人の場合でも同じことで、取調べても手応えのない犯人は、どんな大事件をひきおこしたヤツでも忘れてしまつて憶い出せなくなる。

今からもう二十数年まえの事件だが、私は小宮川英子という思想犯人は忘れることが出来ない。

因果はめぐる小車の……

英子は長野県南佐久郡畑八村の素封家の娘だつた。兄の新一は東大在学中に新人会に属していた。この新人会というのは、思想の研究をやる学徒の集りで、特高の刑事がつねに眼をつけていた。

そのころの東大生（帝大）は金持の息子でなければ豪農の息子であるとか、大会社の重役を父に持つているような学生ばかりで、貧乏人の悴は校門をくぐる資格がないと言つてもよかつた。この連中が思想の研究をして、地主や金持や資本家を憎み、共産党に共鳴するものが多かつた。

巡査や刑事はほとんど水呑百姓の家に生れた小悴で、小学校を出て夜学で法律をかじつたものとか、二年の徴兵をすましてわば資本家の立場にあるものの息子が、学問をして共産党になり、先祖代々搾取されて、骨の髄までしやぶられた水呑百姓の悴が、職業であるとは言いながら、資本家を擁護するために挺身して、彼等の息子を縛らなくてはならないとは？……因果はめぐる小車の——と言う文句がある。思想家を因縁話で片づけては非科学的だと笑われるかも知れないが、いずれにしてもまことに奇妙なまわりあわせである。この新人会から多くの思想犯人を出した。その中には共産党の闘士として後世に名をのこすであろうと思われる人物もいた。

田中清玄は弘前高校の出身で、東大（帝大）へ入学してきたが、彼は美学科で勉強しているうちに、新人会のメンバーになつた。もちろん特高のリストにのつたわけだ。ここで清玄は小宮川英子の兄の新一と親しくなり、兄の下宿へ遊びにやつてくる英子を知る

ようになつた。英子はそのころ女子大の寮に入つて政経科で勉強していた。清玄の実家は函館で母一人子一人だが、母親の愛子は五十町歩の女地主でなんの不自由もない暮しであつた。彼女は愛児の清玄が世間的な栄達の道をすくすくと歩んで、一人前になつてくれることが、唯一の希望だ。だから清玄には学資をじやんじやん送金してくる。『ためになる本はいくらでも買つて勉強して下さい』というわけだ。

だが、本人の清玄は、母からの仕送りを心よく思わない。彼は女地主が小作人から搾取した金で学問はしたくなかつた。そこで横浜の浅野造船所の臨時人夫となつて働きはじめた。今日の言葉で言えば学生のアルバイトであるが、このアルバイトはすでに入党して、日本共産党本部から神奈川地区の工場オルグを命ぜられていた。

危うく逃走

清玄はたくみに偽名を使つて、造船所の人夫に化けていたが、特高は見のがさなかつた。野村という特高の刑事は、田中清玄が学生服を着ている写真を手に入れて、浅野造船所を内偵した。清玄はついに馬脚を現わして、野村刑事の職務訊問をうけ、警察へ同行されることになつたが、特高へ連行されたら百年目だと彼は思つた。事実、それは百年目以上の憂目を見ることは明らかだ。特高の刑事は、学生の身分でありながら共産党に興味を持つようなヤツは、思うぞんぶんヤキを入れなくてはならんと考えていた。つまり共産党という得体の知れないものにタブラかされたのだ。それにカブれたやつは狐憑きと同様で、気の毒な人間と思いこんでいる。

だから、時特高刑事が『赤』の学生に加えた拷問はものすごい。転向を誓うまで……どうしても転向しなければ、拷問のためにその学生が死んでしまつても致し方なし、それまでの寿命と諦めていただく外はない。陛下の赤子としては万やむを得ないのであつた。

『お母さん、すみません』

清玄は、刑事の摑んだ腕を引く手も見せずまだ子供だ』と彼は思つた。

その瞬間、

『えいツ！』

清玄は、刑事の摑んだ腕を引く手も見せず空手のひと突きは見事にきまつて、野村の肋骨をへし曲げた。

特高の野村は即死ではなかつたが、これがもとで三週間後に二十八の若さで死んだ。

こう言つて清玄の手首を摑んだ。

も早やこれまで——清玄はもとより母の慈愛を一身にあつめていた。彼もまた母親を思う情は切なるものがあつた。それは孝行などと言う文字で現わせるものではない。がしかし共産党に国境なく、共存共栄を理想とするものにとつては、家庭や国家にこだわることはない。忠と孝の倫理は、その場所をおきかえて、まず万国の労働者は団結せよと言うのだ。彼の思想は母の慈愛に優先するものであつた。

『われわれは、かかる人間に対しては、徹底的徹尾、心ゆくまで制裁を加えて、もとのごとく陛下の赤子にしてやるべき義務がある』と言う信念であつた。

野村刑事は唖然とした。

『大学へ入つて理窟を振りまわしているが、

清玄は刑事に手首を摑まれて、その手に、はらはらと涙を流した。

『えいツ！』

清玄は、刑事の摑んだ腕を引く手も見せず空手のひと突きは見事にきまつて、野村の肋骨をへし曲げた。

特高の野村は即死ではなかつたが、これがもとで三週間後に二十八の若さで死んだ。

沓として潜行

清玄はこれいらい完全に地下へ潜行してしまつた。潜行はしたが、東京地方第三区委員長という重要なポストであつた。

普天の下、率土の浜――いずくんぞ日の御子の地にあらざるはなしという時代だつたので、日本全国の特高刑事は緊密な連絡と組織の力で、天皇の名において厳重な捜査網を繰りひろげた。その間には三・一五につぐ四・一六の大弾圧や熱海事件などがあつて、特高が検挙した共産党員は七千四百人という前代未聞の人数になり、ほとんど狩りつくしたが、田中清玄はたくみに捜査網をくぐりぬけて特高をなやました。

同僚の野村刑事が清玄のために空手で殺されているだけに、特高の熱の入れかたは、普通のことではなかつた。にもかかわらず捜査の網にかからないのは、すでに彼は日本を脱出して、ソ聯へ亡命したという説もあつた。ところが、これは意外――意外だというのは小宮川英子をハウス・キーパーに使つて、いずれかに潜行している事実がようやく判明したのであつた。

清玄は重要なポストにいるとは言え、まだ二十四歳の若さだつたので、幾人かの女性が、彼の闘争経歴に多彩な投影を与えているように噂された。清玄は福本和夫以来の『赤き恋の闘士』だという、もつぱらの評判だつた。

そこで彼にまつわる女性群を、特高の刑事は血みどろになつて調査を重ねたが、その線はどこからも出て来ない。出てこないのがむしろあたりまえだ。彼の共産主義は徹底した信仰であり、殉教的精神で凝り固まつていた。世の若者のように無軌道な放逸に身を持ち崩す筈がなかつた。けれども厳しい特高の眼を晦ますには、ハウス・キーパーを探り行をつづけることは不可能だ。にもかかわらず、特高の刑事は、ハウス・キーパーの面が通つたということは、検挙が間近になつたことの裏づけである。

暗号電文キヤツチ

案の定――特高の刑事は田中清玄のアジトを突き止めた。

暗号電報によると、清玄は中央の委員会に招かれて、すでに和歌ノ浦の二里ケ浜に潜行しているということだつた。この委員会は一月の十二日に開かれる。清玄一人の逮捕だつたら今すぐ出来るが、一月十二日を待つて一網打尽にやりたい――と、いうのだ。

私は特高刑事ではない。重大事件を記録する係だ。しかし、警視庁の年鑑を誌す上にも、また、警察官の立場から言つても、後学のために、この決死的な大検挙は、ぜひとも見ておきたいのであつた。そこで応援に駈けつける警視庁の特高部隊に参加を願い、昭和五年一月の十一日午後二時の準急で東京駅を出発した。

大阪駅着は、翌十二日の午前零時四十分になる筈だつた。私等は大阪駅から自動車に乗り二ケ浜へ素ツ飛ばす手順である。

現在では十字路に立つ交通巡査でもピストルを持つているが、そのころの警察官はピストルを持つことは出来なかつた。極悪非道の犯人と言えども陛下の赤子である。陛下の赤子を傷けることはゆるされない。正服の巡査はサーベルを認められてぶらさげていたが、これも厳重な抜刀規程があつて、その条項には、抜剣するにあらざれば、他に生命を護り得べからざる場合に限り……云々とある。しかし中味は飴細工のような鈍刀で、竹光に劣るとも優るものではなかつた。私服刑事が犯人に立向う場合は、麻の捕縄と昔ながらの十手がゆるされていた。

清玄等の中央委員会は、二里ケ浜の小高い丘にある貸別荘で開かれることになつていたが、この貸別荘は二階建の一軒家で、あたりにならぶ家はなく、松の立木が二三本あるきりだ。先方からはよく見透しが利いて、奇襲には困難な場所だ。

特高の決死隊は、十三日の日の出前——つまり払暁にかけて襲撃する計画であつたが、なにしろ五十人の刑事がアジトを取り囲んだので、奇襲の訓練はできているといつても、場所が場所だけに、相手に感附かれる虞がある。重大な思想犯人を取り逃がしては、責任はじまつて終るまで僅かに十五分たらずだ。の及ぶところが大きいので、ついに我慢が仕切れず、星一ツない真ツ暗闇に、奇襲をかけた。

暁の拳銃戦

確実な情報を入れて、あらかじめ承知していたとおり、二里ケ浜に招集された中央委員は十二名であつたことが出来たが、惜しいことるが、それは申上げるまでもなく、清玄のハウス・キーパーをつとめる、小宮川英子である。

加藤刑事は、もうすこしすれば東の空が白んで太陽を拝むことが出来たが、惜しいことには陽を見ないで息を引取つた。

これほどの犠牲者を払つたが、逮捕した思想犯人は、紅一点の小宮川英子を頭数に入れて十二人——一人たりない。その一人は田中清玄であつた。またしても彼はずらかつたのである。特高の刑事は悔しがつて地団太ふんだ。

『草の根をわけても田中清玄を探し出せ』

こう言つて部隊長は、決死隊の点呼をとりながら呶鳴り散らした。そこでまた、奇襲のとき肉弾となつた特高刑事は、ひと休みする暇もなく、八方に手分けして清玄の後を追つた。

やがて二里ケ浜の夜はほのぼの明けて海は見えたが、清玄の姿はどこを探しても見出せなかつた。特高の決死隊は徹夜の捕物に今は

私はかなり長い時間だと思つたが、襲撃がはじまつて終るまで僅かに十五分たらずだ。正確な時計によると、十四分十二秒かかつたそうである。この間に、七人の刑事がやられた。軽傷が四人で、トラック仕立の救急車へ担架で運びこまれた重傷者は三人だつた。

まつたく疲れはて、諦め切れない捕物を諦めてしまうと、各自は不機嫌な顔を眼白押しにトラックへならべて、和歌ノ浦なる二里ケ浜の現場を、針で肌刺すような寒風に吹かれて大阪へ引揚げるのであつた。

その車中での話だが、思想犯人が護身用として各自が所持するピストルは六連発のモーゼルであつたという。

『すこし離れておれば、ピストルの弾は命中らないものですね。十二人が僕等を射撃しましたが、犠牲者はたつたこれだけですんだ。その連中はみな女にやられたんですよ』と依光刑事は語つた。

女というのは小宮川英子のことである。男たちは二階の部屋で枕をならべていたが、彼女は階下の六畳で、清玄と同衾していたのである。

血みどろの鞭

本部へ引きあげてきた特高の刑事は、とりあえず小宮川英子の口を割つて、清玄の行方を吐かせようとした。しかし、女は石のごとく黙して語らなかつた。

『天皇陛下の名において拷問にかける。ぞんぶんにやれッ！』

この拷問は、私がこれまでに傍観してきたものの中で、峻烈の度においても惨忍な点から観察しても最高極致のものだつた。英子は裸にされて数人の特高刑事が打ちおろす捕縄

特高の奇襲を誰よりも早く気附いた。英子と清玄が裏木戸へ飛び出すと、すでに遅い。襲撃する部隊は、緊々と詰め寄せていた。

『逃げのびて下さい』と女は叫んだ。

清玄は日本共産党の再建を心に誓つてうなずき、護身用のピストルを英子に渡した。

『結んでッ！』

清玄は言われるままに英子の手首へ結びつけた。

女の両手から火を吐いて弾が飛散したのはその時で、奇襲部隊はハツト地に伏した。清玄は間隙に乗じて脱兎の如く逃走したのだ。

の鞭を身に浴びた。捕縄は水にひたしてあつたので、女のからだに巻きついた。

刑事は用捨もなく引き放して打ちつづけたが、たちまち麻の捕縄は赤く染つて、火中から引き出した鉄線を見るようだつた。女の皮膚がどんな具合に変化したか？　この説明は除けなければならぬ。私が喋つて見たところで、酸鼻をきわめたヌードが医学的に役立つワケでもなく、害あつて益なき記録になる虞がある。

英子は幾度も悶絶した。気付の薬をのまされて蘇生したときは捕縄の鞭が降りかかつていた。

打たれるものより、見る者の方が脹れあがるような痛みを感じた。

私は耐え難き目前の光景に耐えて、静かに観察した。特高の刑事たちは、天皇への忠義に凝り固まつた狂信的な邪教徒のように見えた。

英子は……？　共産主義に殉ずる決意であろうか——否、これは意外、行いすました尼僧が念仏を唱えるように、彼女は田中清玄の名を呼びつづけていたのである。捕縄の鞭は女闘士が火のように燃え盛る『赤き恋』を、ささやかな生活のために、天皇の御名を仮りて拷問していた。

私はふとオノレの心に立ち還つた。そして自分へ批判の眼を向けて見なければならなくなつた。

いつたい私という人間は、オノレの生存に対する信念もなければ、日々このようにしてつくられる人類の歴史に、針の先で突いたほどの愛情すら持ち合せない男であつたが、おしいものはない、真実の姿ほど、バカバカよそこの世の中に、と言うことだけは思い識つた。のである。

獄中結婚

二里ケ浜の奇襲をたくみに脱出した田中清玄も、ハウス・キーパーの小宮川英子を失つてからは、翼なき鳥も同様となり、も早や五尺五寸の男は、日本全土に身の置きどころがなくなつた。

彼は東京の郊外を走る小田急電車の沿線で、千歳船橋という小駅のある場所に身をひそめたが、特高の刑事に呆気なく逮捕されてしまつた。

これより数カ月さきの二月十日、函館に住んでいる女地主の母親の愛子は、自宅で服毒自殺をした。

彼女の枕許には、『たつた一人のお前を失つて、この世になんの望みがありましよう……』

と書きしたためてあつた。

裁判は幾度も繰りかえされたが、田中清玄は懲役十年の刑を申渡されて、豊多摩の刑務所に下獄した。

小宮川英子は、宮津の刑務所に収容されることになり、相思相愛の同志は、東西に相別れたけれど、獄中から結婚の手続きを申し出たのであつた。

高砂の謡に、山川万里を隔つとも恋うる心は変らじ……という名文句がある。これは共産党の闘士が獄中結婚をしたという、古めかしい講談のような人情譚だ。あまり長くなると退屈である。

*

（終）

*

☆☆☆

十年間に私はこうも変つた

——お灸マニアの手記——

ジリ〳〵とやける灼熱の苦痛に、無上の快感と興奮を味わう……十年間、モグサ地獄に生きた男の耽奇な半世記！　彼は何故お灸に憑かれたのだろうか？

中正夫
小田明男画

入選実話

入浴の時に私の大きなお灸の痕を見て驚いたでしょう。でもこれはいろいろわけがあるんです。私の家族の誰も、私の背中にこんなお灸の痕があるなんてこと知りません。もう十年近く、ひたかくしにかくしてるんです。でも何時かは、ばれちまうでしょう。殊に奥さんでも貰つちまえば絶対ですからね。

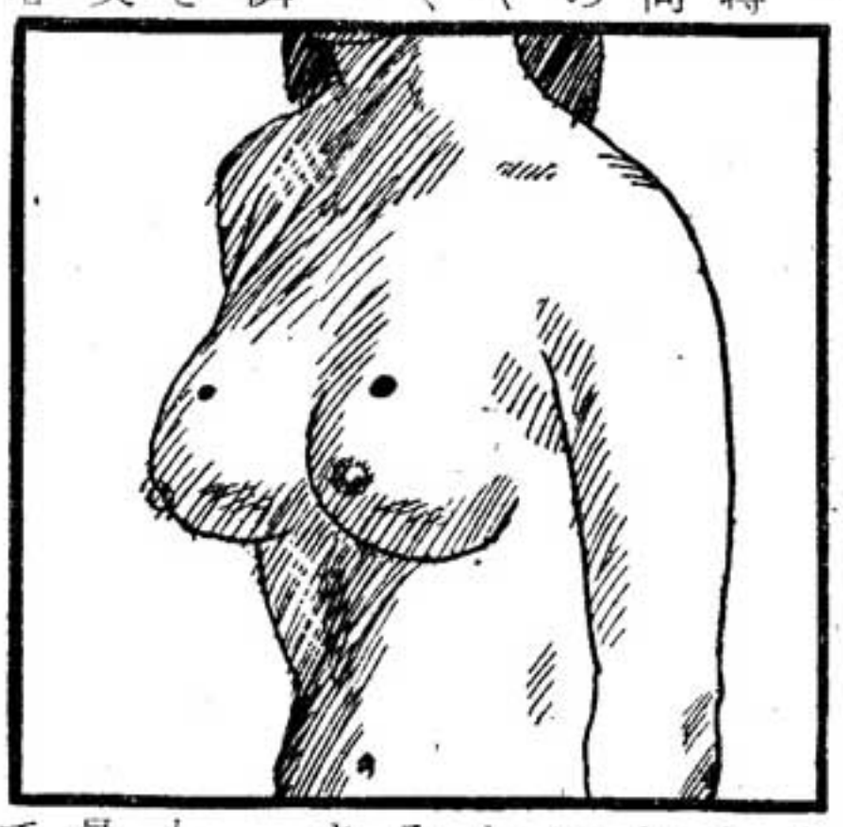
親しい友達でも、一緒に風呂へ入る時は、なるべく背中を見せないようにしてますし、海水浴に行く時も、必要に応じてパンツを高く上げて、うまく隠しちまいますから、大抵の友達は気がつかないだろうと思います。知らない人にはいくら見られたつて構わないんですが、何故か、知つてる人に見られるのは恥しいんです。

そう、小学校へ上る一寸前のことでした。近所の子と喧嘩してそいつを傷つけてしまつたというので、親爺にもの凄く怒られ、泣きわめいて許しを乞うのを無理矢理捻じ伏せられ、手足を縛られて挙句の果てにお尻にお灸を据えられたことがありました。勿論、小ちやな艾で、もうその時の灸の痕なんかとつくの昔に消えちやつてますが、先ず墨で印しをつけられてひんやりとした無気味な感触を味わい、やおら艾をその印しの上にのせられて、今か〳〵と待つうちにいよ〳〵線香の火が点ぜられ、じわり〳〵と燃えて来て、だん〳〵とぽつとした暖かさを感じ、それが次第々々に熱くなり、遂に切られるような我慢の出来ない痛さが襲つてくるあの気持は、お灸を据えられたことのある人でなければわからないだろうと思います。

それ以来、お灸と聞いただけで、恐怖と期待で体中が妙に興奮するようになりました。その興奮の気持があの瞬間の喜びと同じだということに気がついたのは、先輩の沢山いる中学の高学年になつてからです。

一、苦痛を快感へ

さて、中学校に通うようになつても、お灸に対する恐怖心は一向に薄れませんでした。その頃から、いわゆる春の目覚めというのでしようか、みんなは女性に対する関心を徐々に現わし始めたようですが、私は一向そんな気持は起らず、むしろ同年輩の美少年にもう痕は一生消えまですごく魅かれて、やるせない気持を抱くようになりました。



たま〳〵、私の隣のクラスに、一寸きりツとした感じの美少年がいました。春の身体検査でパンツ一枚になつた時、そいつの小麦色の肌の腰のところに、直径一糎程のお灸の痕が四つ、くつきりとついているのを発見しました。みんなは、「お前、背中に種痘したのか。」などといつてからかつていましたが、お仕置のお灸にしては大き過ぎるし、多分何かの病気を治療するために据えられたのでしよう。

でも私は、そいつが、そのお灸を据えられた時の様子を想像するとたまりませんでした。「親爺に据えられたのだろうか、それとも、何処かのお寺か何かで、いわゆる何々の名灸というのを据えられたのだろうか。あく〳〵させて、体操の時間といわず、街の銭湯といわず、男の裸になつているところでは、血眼になつてお灸の痕のある少年を探し求めるようになりました。その積りで探すと、体の何処かにお灸の痕のある少年つて、案外たくさんいるものですね。

或は小麦色の背中に、太つた背中に、或は薔薇色の背中に、痩せた背中に、一銭銅貨程もある大きなお灸やら、ほんの小つちやいのやら、お行儀よく背骨の両側の一つづつあるのやら、四つ五つ六つあるのやら、まだ据えたばかりと見えて黒く焦げているのやら、瘡蓋になつているのやら、紫色のやら、桃色のやら、痕が出つぱつているのやら、凹んでいるのやら、とにかく千差万別で、私にとつては全く一箇の芸術品と思われるのです。そして殊にそれが思いもかけない美少年だつたりすると、私の胸は異常に高まり、身も心もふくれあがつてしまうのです。

その頃、悪い先輩に誘われて、独り楽しむ遊戯を教わつてしまつたのですが、それからはもういけません。背中にお灸の痕のある少年にぶつかる度に、家に帰ると、そいつの背

中の画を描き、ちやんとお灸の痕もあるがままに描写して、いろいろ想像しては頭を使つてしまうのです。しまいにはその紙に描いた少年の背中のお灸の痕に本当の線香の火をつけて、薄紫の煙が上るのを眺めて快感を倍加したものです。そんな画が、秘密の箱に二十枚も三十枚もたまりました。

こうお話しすると、人がお灸を据えられ責められて悶え苦しむのを楽しむ、一種のサデイズムではないかと、お考えかもしれませんが、サデイズムだけではないのです。私もお灸を据えられて、あの苦痛を味つてみたいという欲望が、日増しに強くなつていくのでありました。

恥しい話ですが、その頃、中学の四年位になつても、まだ私には寝小便の悪癖がありました。色んな医学書を読んだり、通俗家庭雑誌を読んだりして、寝小便には決定的な医学療法はなく、お灸が一番よく效くということを知りました。そして、寝小便の治療には、通常腰のあたりの灸点にお灸を据えるということもわかり、今まで屢々腰に二つ、四つ、或は五つ六つ、お灸の痕のある少年に出つ喰わしたのは、そういうわけだつたのかということも合点が行きました。

でも、だからと云つて、親爺やお袋にお灸を据えて下さいとも云い出し難く、又簡単に据えるといつても灼熱地獄の責苦を味わなければならず、たとえ、それは我慢するとしても、火傷の痕は一生消えません。

二、年とともにモグサも

中学五年の時の早春、高等学校の入学試験を受けるために松本に行きました。第一次の学科試験はどうやら合格し、第二次の身体検査の時でした。私の前に列んでいた少年が、ぱつとシヤツを脱ぎ捨ててパンツ一枚になつたのを見ては、つとしました。いがくり坊主のまだ十六、七才のそいつの背中に、一銭銅貨程もあるお灸の痕が何と片側四つづつ合計八つもお行儀よく列んでいるんです。

私は、我知らずハットしてしまう程興奮しましたが、それでやつと決心がついたのであります。「これからは高等学校へ行つて寄宿舎生活をしなければならないのに、寝小便など垂れていてどうなる。お灸の痛さが何んだ。お灸の痕の二つや三つ、男にとつて何だというのだ。それに、現に立派なお灸のある相棒がいるではないか。」

第二次試験の身体検査と口答試問が終つて、松本から東京へ帰ると、早速ある灸点屋へ行きました。いざとなると矢張り躊躇せざるを得ませんでしたが、思い切つて玄関の戸

をあけました。

順番が来て治療室へ入ると、普通の医者の様に寝台が置いてあつて、妙麗の婦人がそこにうつ伏せとなり、背中から薄紫色の煙を上げて歯を喰いしばつて熱さを我慢している最中でした。いよいよ私の番です。いい年をして寝小便の病気を弁解するのは少々つらかつたが、艾への喜びには代えられないほどに気持は変つておりました。

先生は肩から背中へかけて、なでたり指でおしたりしていましたが、やおら墨を含ませた筆をとつて、ちよんちよんと六つ七つ印しをつけました。私は腰に二つ、多くても精々四つ位据えられることを予期していたのに、肩から背中まで据えられるとは一寸意外でしたが、もう後の祭りでした。

艾は思つたよりもずつと小さく、ほんの米粒位のものでした。墨の印しのところに一つづつ艾がのせられ、線香で一つ一つ火が点られました。だんだんぽうつと暖かくいい気持になつて来ましたが、それが次第々々ににじわりじわりと熱くなり、やがて切られるような激痛が襲つて来ました。一つの艾が燃え切つてやれやれと思つたら、今度はその隣りが……。ですが、次はその下が、またその隣りがと、とうとう七つ位、腰に七つ、背中にのせ、次も顔色も変えないで我慢しました。

先生はまた艾をひねつては背中にのせ、次に線香の火をつけて行きます。一体何ケ所据えられたのでしょう。とにかく、悲しいことには自分の背中は見えないのです。でもだんだん馴れて、熱さが薄らいで行くようでした。

「さあ、今度は腰とお尻に据えるからパンツを下げてこの寝台にうつ伏せに寝なさい。」

そして更に又、腰に七つ、お臀の下に一つで印しがつけられました。さつきは大分熱さにも馴れた積りなのに、今度は又始めてと同様にものすごい熱さです。でも「あち！」とも云わないで我慢しました。

「ほう、君はあまりお灸の熱さを感じないようだな。少し艾を大きくするかな。」

もうどうにでもなれと思つて、すつかり観念してしまいました。でも確か、墨でつけた印しは背中から肩にかけて七つ位、腰に七つ、そしてお尻に二つだけの筈なのに、次から次へと据えられたお灸の数は百近く、これでは背中ぢゆう蜂の巣のようにお灸だらけになつてしまうと思いましたが、やつと一つの灸点に五回づつ艾をのせて灼いていることがわかりました。

さて、やつと据え終つたと思つたらまだなんです。それから前向きになつて、両方の乳の外側の上の方に一つづつ、お臍の下に一つ、それから更に下、急所の上ほんのすれすれのところに一つ、次いで両腕に一つづつ、更に両足の膝の上下各一つづつとすねの内側に一つづつ、丹念に五火づつ艾をひねつてはのせ、線香の火をつけ、またまた艾をひねつてはのせ、前面や手足は、艾がのせられ、線香の火がつけられて、紫色の煙を上げてじわりじわりと燃えて行くのがよく見えるので、背中やお尻にも増して熱さがひどいような気がしました。

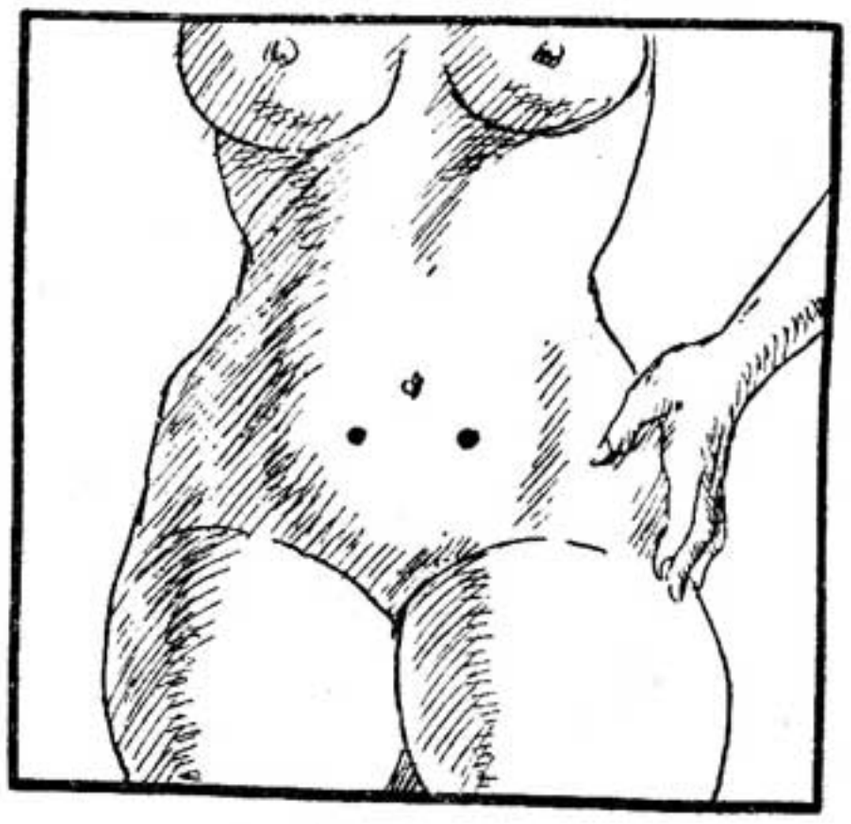
でも全部据え終つた時は、体中ぽつとして何とも云えないよい気持でした。

「ああ、遂に据えてしまつた。苦痛に耐えてお灸を据えられたのだ。」と英雄感、その反面私はこんなに沢山お灸を据えてしまつたという何か一種の安心感と英雄感、その反面「もうお灸の痕は一生消えまい。」と思うと、たまらない自責の念、いろんな感情がごちゃ

ごちやになつて襲つて来ました。背中にそつと手を当ててみると、お灸の痕がみんな小さな水ぶくれになつているようでした。シヤツを着ると灸の痕がシヤツに触れて、体中が時々ヒリヒリしました。

家に帰ると早速自分の部屋に入り、中から鍵を閉めて、鏡の前に立ち、シヤツもパンツも脱ぎ捨てて背中ぢゆうに赤黒く点在するお灸の痕をつくづく眺めました。丹念にお灸の痕を勘定してみたら、肩に二点、いわゆる身柱に一つ、身柱を囲んで背骨の両側に二つづつ四つ、腰の丁度お臍の裏側に一点、それを中心に腰骨の両側に三つづつ六点、お尻に二点、計十六もの灸の痕が背中についているのです。

他に胸、腹、手足の灸点を合わせると、何と体中に三十二ものお灸の痕が出来てしまつたのです。私はたまらなくなり激しい衝動にかられました。しかし、目的を達してしまうとぐつたりし、今度はお灸を据えてしまつたことを猛烈に後悔しましたが、もうどうにもなりませんでした。それから一週間程、毎日灸点師のところへ通つては、体中三十二ケ所の灸点に五火づつお灸を据えられ、家に帰つては一度ならず二度三度と……。そして済んでしまうときまつてたまらない自責の念にかられるのでした。



でもこんな出鱈目な不摂生をしていたら、折角のお灸も效きめのある筈はありません。寝小便は一向に癒りませんでした。更に悪いことには、高等学校の二次試験も、間もなく不合格の通知が来るのを待たなければならなかつたのです。

大東亜戦争は益々激烈の度を加えて来ました。浪人することも出来ず、四月になつてある郊外の専問学校に入学しました。もうその頃はお灸の痕も大分薄れて来ました。でも、お灸の痕のある同年輩の若者の背中を見て興奮し、更に私自身の後向きの裸体の加わつた絵や写真を眺めて、悪習にふけることは一向に変りませんでした。

その春に据えられたお灸は、ほんの小さなものでしたし、放つとけば、自然に痕も消えてしまつたことでしよう。でも、今度は今迄の友達と別れてたつた一人知らない人ばかりいる新しい学校へ行くんだから、お灸の痕があつても別に恥しいことはなく、それにもつと大きなお灸を据えなければ、お灸の效果はないのじやないかと思うようになりました。

現に、それまでに見た大抵の青年の背中のお灸の痕は小さくても小豆粒ぐらい、大きいのになると直径二糎以上の痕がついてるのもありました。

それに、専問学校へ入り一人前の青年になつても、まだ私の寝小便の悪癖は治つていませんでした。あんな小さなお灸を据えられても、あれだけ熱いのだから、もつと大きなお灸を据えられたら、どんなにか痛いだろう。しかし一生痕の残るような大きなお灸を据えなければ、この寝小便の癖も治らないだろうと思うようになつたのです。

そして遂に或る日、学校の帰りに思いきつて菜種屋で艾を買つて家に帰り、仏壇から線香を持ち出し、家族の寝静まつた深夜、艾を小豆粒ぐらいにひねつて、我と我が身を灼きました。

先ず第一にお臍の下の灸点に艾をのせて、線香の火をつけました。線香の燃える香と艾の燃える香が入り混つて、一種独特の香が大いに私の性神経を刺戟しました。

よく皮切りといいますが、そもそもお灸を据える時の一番最初の一発が、先ず皮膚を切るのでそういうのだそうです。とにかく、最初の一つの艾がだんだん燃えて来て、遂に皮膚に火の移つた時の熱さのもの凄かつたこと、思わず腹をよじらせてうなつてしまいました。やつと艾が燃え切つて、痛さが去るとほつとしました。艾の灰を払い落してみると、小豆粒ぐらいの艾の大きさそのままに、お臍の下が黒く焦げ、その廻りがぽうつと薄赤くなつていました。

「えい、くそ！」と思つて、又艾を丸めてはのせ、線香の火をつけました。二火、三火、四火、そして五火、しまいには、もう神経が痲痺してしまつたのでしょう、殆ど熱さなど感じないで、何ともいえないよい気持でした。

背中のお灸は自分で据えるわけには行きませんので、更に両方の乳の外側のやや上方各一点づつと、両足のすねの内側に一点づつ、また四たび皮切りの苦痛に歯をくいしばつてお灸を据えました。乳の上のお灸の痕は、まるでオツパイが二つあるみたいで、裸になるたびに恥しい思いをしました。

そう、直径が一糎程のお灸の痕が、お臍の下と、乳の上と、そしてすねの内側に計五ケ所も出来てしまつたのです。その頃、教練の時間といい、体操の時間といい、又勤労動員に、しよつちう上半身裸になることを強制されましたが、お臍と足のお灸の痕は、ズボンをはいている時にはわからないからまだよいとしても、乳の上のお灸の痕は、まるでオツパイが二つあるみたいで、裸になるたびに恥しい思いをしました。

三、相擁する同病愛

その頃、私は同じ級にいた伊藤という青年をひそかに愛するようになつていました。私より一つ年上でしたが、面長できりりとした濃い眉を持ち、肌はいつも小麦色につやつやと輝き、動作のきびきびした素晴しい青年でした。少くとも僕にとつては、神様以上の偶像的存在でした。

何とか伊藤と親しい友達になりたいと思つていましたが、私にとつて彼は近寄り難い偶像ですし、又私にはこちらから積極的に出る程の社交性もなく、とにかく始めのうちは、毎日学校で顔を合せることが出来ることだけで、満足していました。たまに彼の顔の見え

ない日があると、たまらない淋しさに襲われました。

伊藤はテニスが特に得意でした。いつも放課後、シャツも脱ぎ捨て、健康そのものの上半身の裸体にふりそそぐ太陽の光を浴びて、楽しそうにラケットを振つていました。勿論彼の体には、お灸の痕はいうまでもなく、しみ一つありませんでした。

そんな時には、私はお灸の痕のあるひけめをしみじみと感じて、劣等感に悩まされるのでした。その反面、伊藤の形のよい裸の背中をそれとなくスケッチし、その画の背中にお灸の痕を描き入れたりしては興奮し、それを快楽の材料にするのでした。

そのうちにたまらなくなり、伊藤の背中も私の背中も、同じような錯覚に襲われ、遂に自分自身で私の背中に大きなお灸を据えてしまつたのです。実はまだその頃になつても、寒い夜などは寝小便に悩まされていたので、今度こそ本格的なお灸を、最も効果的といわれている腰の灸点に据えて、いまわしい寝小便など灼き切つてしまおうという気持もあつたのです。

とにかく自分の背中に自分でお灸を据えるのは難しいことでした。先ず、シャツもパンツも脱ぎ捨てて素ッ裸になり、鏡に自分の背中を写し出し、その年の春先に据えられた、もうわかるかわからない程に薄くなつているお灸の痕を頼りに、腰から尻へかけて腰骨の両側へ三つづつ、六つの灸点を墨で黒々と下しました。

そして今度は大豆粒ぐらいに丸めた大きな艾を、鏡をみながらその灸点の一つにのせ、再び鏡を頼りに手を後ろへ廻して、その艾の先端に線香の火をつけ、急いでうつ伏せになりました。うつ伏せにならないと艾がころげ落ちてしまうからです。

艾の燃える臭いが、ぷんと鼻をつきました。だんだん腰のあたりが暖かくなり、それがじわりじわりと熱くなつて行きます。やがて焼火箸をつきさされた様な激痛が襲つて来ました。思わず手をかたく握りしめ、歯をくいしばり、額から脂汗を出してその激痛と斗いましたが、そのもの凄い熱さの中に何とも云えない一種の快感を覚えました。

こうして腰から尻へかけて六ケ所、じつくりと我と我が肌を艾に線香の火をつけて黒々と灼いてしまつたのです。

「神様は愛し合うものは必ず一緒にしてくれる。」ということを信じたのは、それから夏も過ぎ二学期が始つて、そろそろ秋の色が濃くなつた頃でした。それまで私は、伊藤に対する報われない愛情をひたすら抱き続けて来たのでしたが、中間試験か何かの時、私のノートを彼が借りに来たのがきつかけとなり、それから二人は急速度に親しくなつて行きました。

自分自身の時よりも、何倍も何十倍も素晴しいものでした。本当に天にも上るような気持でした。そして私も彼のために、大いに奉仕しました。

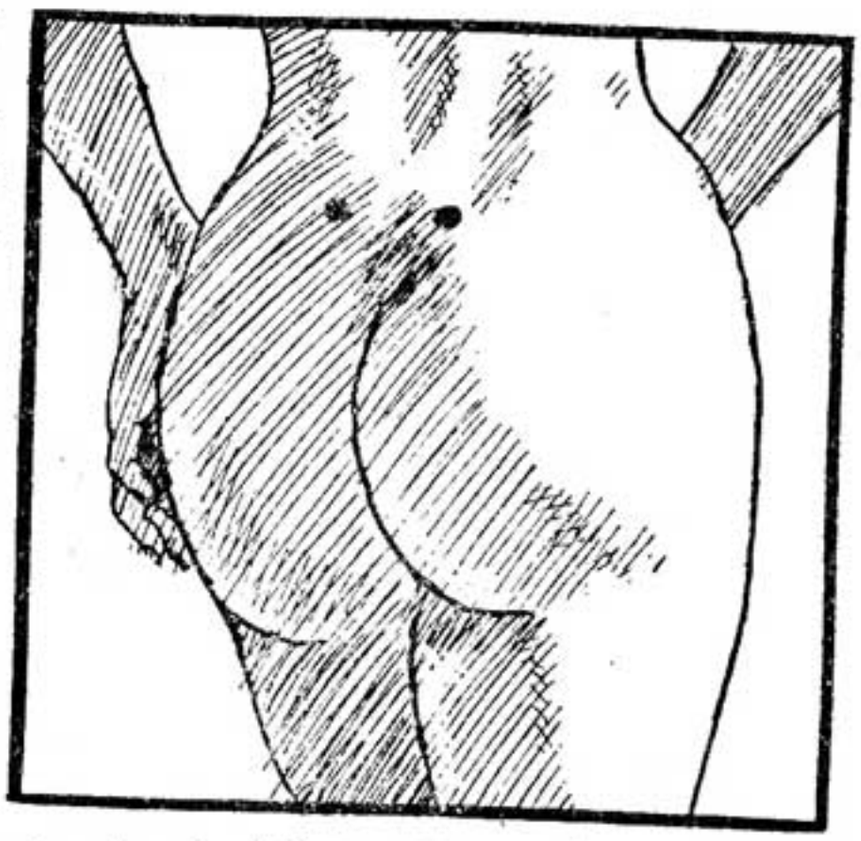
そのうちに私達はそれだけでは物足らなくなりました。私は裸になつて彼の前にうつ伏し、お灸を据えてくれと頼みました。伊藤も始めは躊躇していましたが、「もうどうせこんなに大きなお灸の痕があるのだから構わないから据えてくれ。」と懇願すると、遂に私の腰に残つている大きなお灸の痕に艾をのせて、線香の火をつけてくれました。愛している人から据えられるお灸の熱さは又格別でした。

「君と私とは一心同体なんだ。苦楽は全て共に分とうじやないか。私にもお灸を据えてくれよ。」

今度は、伊藤が云いだすようになりました。

彼のしみ一つない健康な肉体に、むざむざとお灸の痕をつけてしまうことを、始めは私も大いに躊躇せざるを得ませんでしたが、彼がどうしてもと頼みますし、それに彼の背中に灸を据える快感を想像すると、まるで異性を求めるようなたまらない気持になり、お臍の裏側の腰骨の左右両側二寸づつのところに二つ灸点を下し、大きな艾をのせて線香の火をつけました。

艾は簿紫色の煙を上げ、火はだんだんと伊藤の肌に近づいて行きます。



生れて始めてのお灸の責苦に、彼は体中をよじらせて据えましたが、私は「熱いだろう。もう少しの辛抱だ。」などと慰めながらも、何とも云えない気持でした。

それからというものは、私達は時折お互の肌にお灸を据え合つてその苦痛を楽しんで興奮し、そしてお互に愛撫し合い、煙とともに、天にも上るような夢心地に誘われるのでした。

でも、私達のそんな状態も長続きはしませんでした。何時の間にか戦争は最後の段階に入つていましたし、伊藤は海軍予備学生を志願して合格し、航空士官となつて南方へ飛び立つて行きました。しかし特攻隊員となつた彼は、遂に雲流るる果てに散つてしまつたのです。腰に二つ、僕の心をこめた大きなお灸の痕をつけたままで。

四、あれから十年

長い戦争の悪夢も終り、学校を卒業して、私は今の役所に勤めることになりました。烈しい空爆の響き、寸時も油断のならぬ戦争生活をくぐつた私には、何かしら少しづつ身も心も変つて来たようです。あれほど信じ合つた、友を失つたためでしょうか、それとも華かに粧つた役所のサラリー・ガールに囲まれたためでもありましょうか。でも、同性を求める気持は依然として消えていませんでした。私は空に消えた忘れじの面影を偲んでいるのでしょうか。

勿論、その頃には私の寝小便も殆ど治つていましたが、それでも数ケ月には一度は失敗してしまうことがありました。例によつて粗相してしまつた或日、最も大きいお灸とされ

ている弘法のお灸を据えて貰いたいという衝動にかられ、ついに浅草へ出かけて行つて、艾の大きさが一糎以上もあるそのお灸を腰に二つ据えて貰いました。

そこでは、熱さを我慢するために寄り掛る腕木があつて、みんなそれにしがみついて苦痛を我慢するのです。

入口で番号札を貰つて風呂屋の籠と同じ籠に衣服を脱ぎ捨てて裸になり、灸点師の前へ行つて墨で灸点を下して貰つてからその腕木の前に坐るのです。

すると火のついた線香を持つた女の子が廻つて来て、ずらりと並んでいる背中の灸点に、一つづつ艾をのせて、一つづつ線香の火をつけ、又隣の人の背中に艾をのせては線香の火をつけて行きます。

腕木にしつかりとしがみつき、歯を食いしばつて熱さに耐え、やつと艾が燃え切ると、又女の子がやつて来て、小さな刷毛で肌についた灸の灰を払い落し、黒く焦げたお灸の痕にペタペタと膏薬をはりつけて行くのです。

とにかくもの凄い熱さですが、年とつた人も若い人も、毎日大勢あんな大きなお灸を据えに行き、中には弘法のお灸を据えて貰うだけのために、わざわざ汽車に乗つて東京へ出て来る人もいるというのですから、それだけの価値はあるのでしよう。

私が行つた時も、男の人、女の人、老人、若い人が十人位裸になつて腕木にしがみつき、顔を苦痛にゆがめて、大きなお灸の痕がついて外まで臭う薄紫の煙をもうもうと上げておりました。

私ももうそろそろ奥さんはまだですかなんて云われる年頃ですし、それにそうでなくとも正常な性に対する感情を持ちたいと思いますし、いつそうのこと整形外科へでも行つて、こんなお灸の痕など手術して消してしまいたいと思うこともあるのです。私自身のお灸の痕にもこんなにいろいろの想い出がありますので、消してしまうのも残念なような気がするのです。

来ました。その時から十年になります。

また夏が来ましたが、海水浴場で背中にお灸の痕のある青年を追い求めたことが想い出されます。最初の月給で購入したカメラで、そういう青少年を発見するたびに、うつしとつて、ひとり喜びにふけつたものでした。夏といえば、夏の体操や教練の時間のことが頭に浮びます。どうしても夏は裸になるので、お灸の痕が見られはしないかと恥しがつた当時の私、その頃が私にとつて一番可愛いものではなかつたでしようか。今さら、そんな純な気持であつた頃がなつかしく思われます。

私の青春半生記はお灸に明け、お灸に暮れたようですが、これも又人生の出発点にあたつて受けとつた強烈な艾のなせる宿命なのでありましよう。

私ももうそろそろ奥さんはまだですかなんて云われる年頃ですし、それにそうでなくとも正常な性に対する感情を持ちたいと思いますし、いつそうのこと整形外科へでも行つて、こんなお灸の痕など手術して消してしまいたいと思うこともあるのです。私自身のお灸の痕にもこんなにいろいろの想い出がありますので、消してしまうのも残念なような気がするのです。

☆こんと・あぶてい く☆

歪(ゆが)んだ情事

「こんなのは変態か知ら？」……人生さまざま。これは身邊から拾つた風流エピソード！

武野藤介

★第6話★

僕のある小説。そのモデルの女からきた手紙。何年か前の話。

「……あの小説を拝見しながら、あなたはやつぱり作家でいらつしやるから、なかなか、鋭い御観察をなさると敬服いたしました。だけど、男にすぐ寝床を許した女の、あの心理は本意と違いますわ。これは女でなければわからないと思いました。遠い日の、夢のようなものもあり、ロマンチックなものもあり、女はその場の雰囲気に夢を見て、それに感傷が溺れていくものです。私のように、いつも夢を持つている女は、殊に、毒婦お伝か阿部定のようなきたないものは流れ去り、捨て去つて、清純な流れのように冷たく、歯にしみる感情で愛情がよみがえり、堪え難く懐かしくなりますの」云々。

僕に、やすやすと、すぐ肌身を、許した彼女の、その弁解とも受けとれて、僕を苦笑させたが、本当の話は、憚かる筋があつて、その小説には書かなかつたのだけれど、今でも僕は、彼女の云うがごとく、（思い違い）などしたのではないと思つている。

お互いに、文学青年と少女時代の幼な馴染が、偶然のようなことから再会したのである。が、彼女は二児をかかえた姥咲きの未亡人だつた。半ばは、（据膳）のようなものだつたけれど、その思いがけない寝床で、僕が、

「千人に一人、万人に一人というのぢやないかな。あなたに教養というものがなかつたらあなたはきつと、毒婦お伝か阿部定のような女だつたのでしようね」

と、その驚異的な、男の満足を、こんなような言葉で表現すると、

「無くなつた夫も私によくこんなことを云つてたわ」

「随分、道楽者だつたそうですね」

「そうよ……」

「それじや太鼓判だな」

しかし、それにも拘らず、彼女は貞淑な妻で、夫の生前、いちども間違いを起したこと

はなかつたが、未亡人になつて、いわば（妻の座）から解放されて、夫が口癖のように云つたその天下一品を、誰か、外の男にテストしてみたかつたと云うのだ。或は、あの道楽者の亡夫の、お世辞だつたかも知れず、それを確めてみたい気持もあつたという。若くて美貌の未亡人の、この「願いごと」は、彼女がその気にさえなれば、勿論どんな男どもと容易に叶えられて、彼女は一つの（確信）を得たことも肯けるのである。

彼女が僕に云うには、

「あなたは昔、私が好きだつたんでしょう。人に、物を与えるには、自分で惜しいと思うぐらいのものを与えてこそ、それがほんとうの友情というものよ。私のこの気持、わかつていただきたいわ。私、すこし変質者かも知れないけれど」

ある検事の書いた本で読んだ話。被疑者の老人。前科もいくつかあつた。証拠をつきつけてもなかなか自白しない。年齢からいえば孫とまではいえないまでも、息子のようなこの検事も、その図太さに、しまいには腹が立つてきた。憎しみを感じた。が、「飯を食うというような誰でもやることを見ていると、彼も人間であり、自分も人間だという素朴な共感が自然に湧いてくるものだ」と述懐しているのだ。これはなる程と思つた。

「セックスなどというものも、これと同じことで、あの口喧しやの、こわい上役のHさんも、女を抱いて寝たときは、俺と同じようなうわごとめいた台詞を、馬鹿のような顔をしているに違いないのだ」

と、S君は、この上役にこツぴどく叱られたときなど、そう思うことによつて、自分で自分を慰めたというのは面白い。「彼も人なり、我も人なり」という共感である。

身も蓋もないような話だが、これを手近な例に譬えていえば、ひどくとり澄ました美人を見て、その美貌に、とうてい、近づき難いと思いながらも、彼女と雖も、自分と同じように、便所に蹲んで糞を排泄し屁も垂れると思うことによつて、何んとなく、人生を安堵するのだろうである。

「僕、すこし変質者だろうか」

と、S君は僕にそんなことも云つた。

この上役のHさんの家庭にスキャンダルが

★ 第7話 ★

絵

こんと・あふていく ★

起つた。不惑の四十歳を過ぎて、若い恋人ができて、わが家を出奔しただけならまだしも、年子（としこ）などもあつて、小さな子供を五人もかかえている細君に離縁状を叩きつけたとあつては、狂気の沙汰。家庭悲劇。

一応、細君は五人の小さな子供を連れて、実家に身を寄せたが、この上役の家庭へ日頃これも社用で親しく出入りしていたS君のところへ、何かと、この細君がその後の身上相談を持つて来るのだ。

「あなたが一番、私、話しいいからよ。御免なさいね」と、細君が云つた。

S君はまだ独身でアパート住いである。

或日のこと、S君を、そのアパートへ訪ねて来た彼女。その日は日曜日だつた。

「今日は私、すこしゆつくりしてもいいのよ。遊び仲間があるので子供たちのことを頼んで出て来ましたから」

「映画でも見ましようか」

「いいわね。夕飯は私が御馳走するわ」

「ほう、そいつは、いい傾向だ。奥さんが、やきもちしたり、騒ぎ立てたりなさると、事件の解決をこじらせるばかりですからね。見かけだけにせよ、暢気そうに構えている、Hさんのこの狂気めいた嵐が頭の上を通過していくのを、じツと、待つているというのが、一番、賢明だと思いますね」

「そうよ……」と、彼女も頷いて、

「そして、私もすこしは自分の人生を愉しみたいわ」

その映画館の暗闇。画面は、仏蘭西映画の濃厚なペッド・シーンである。彼女は和服だつた。つと、その八ツ口から、S君の手が彼女の懐中に入つた。あれからも、彼女はS君と顔を合わせると、二時間ぐらいなら、子供たちも家のほうも大丈夫だからと云つて、S君を映画館へ誘つたり、アベック・ホテルで、例の「御休憩」をとるようになつたのはいうまでもない。

第8★話

今泉加代子夫人。世間では、この夫婦のことをおしどり夫婦のように云つた。

事実、子供の無い夫婦はどこへ出かけるのにも御同伴だつた。その上、恋愛結婚をした恋女房だつたから、この細君が、不貞をはたらくなどとは……思いもかけないことである。

「魔が射したんだろう？」

と、僕が、夫の今泉君を慰めるように云うと、

「三年も魔が射しているわけがありませんからね」

会社をよしたのかね？」

「いいえ。今でも僕の上役ですよ。でも、僕には、もう、Hさんがこわい人でも何んでもなくなりましたよ」

「彼女とできたのかい？」

「……」S君が、頬を染めたような肯きかたをした。あれからも、彼女はS君と顔を

「三年も？」

古川柳にも、「町内で知らぬは亭主ばかりなり」という有名な一句がある が、妻を寝盗られた夫にしてみれば、この歳月が何よりもいまいましくてならなかつた。

「今になつてみれば、女房の、怪しい節々がひとつひとつ思い出されてきて、それが僕にはいまいましくてならないンです」

「たとえばどんなことだね？」

「たとえば、夫婦の寝床などでも……」

と、今泉君の、きわどい打明け話によると細君がいろいろとねだりごとを云うのだ。そんなことが出来るか。アクロバット・ダンスみたいな真似が、さ。今泉君がそう云うと、出来ない訳はないと、彼女が、駄々ッ児のようなことを云つて困らせるのだそうである。もとより、これは男のアルバイトだつた。が こんなときにも、今泉君はその駄々ッ児を可愛なものに思つたと云うのだ。

僕がひと言、そんなときに。「僕、誰からそれを教わつたかと、女房に訊いてやつたらたとい、夢中になつているときのうわ言にせよ、はッとし 変えるぐらいの、反省に違いないが、その一言 細君がいろいろとねだりごとを云うのだ。その智恵が僕に思いつかなかつた馬鹿さ加減。これも僕にはいまいましくて ならないンです」

これからさき、夫婦仲が円満であり得るかどうか。今泉君は、その自信のなさそうなことを云つたが、その実、いまだに彼が、この細君に惚れていることが僕にはわかつた。

「夫婦の寝床で、その間夫とのことを、根掘り葉掘りと、チクチク、細君をいぢめながらというのも、なかなか、新鮮な味のするものだそうだよ」

と、僕は、そんなふうなことを云つてみたが、これは今泉君の実感にならないらしかつた。また、今泉君はそんな変質者でもなかつたのだ。

妻を寝盗られたこの夫が泌々と云うには、

「僕は、あの女房の外には何一つ、自慢するものを持つていない。たいした学問もなければ趣味というようなものもなく、ただ、コツコツと、勤先の仕事を、いわゆる、大過なく過すということにばかり気をつかつて……それが僕の人生なんですからね」

「……」僕は頷いてみせた。加代子夫人は評判の美人だつた。僕は初めてこの夫の不幸に同情する気になつた。僕は、あの『凱旋門』の原作者レマルクの、『その後に来るもの

★ こんと・あぶていく ★

の』という小説を思い出したが、或男が、その戦友に云うのだ。「貴様なんか楽だつたなあ、書籍もあるし、教育もあるし、その他いろんなものを持つている。だが俺ア、なさけないが、あの女房の外に何一ツ持つている物がねえ」と。この細君が、夫の出征不在中に姦通するのである。

第9話

旅の車中。三等車。東北方面へ、写生旅行に出かけた堤画伯が、そのローカル線へ乗つたときのこんな土産話を僕に聞かせてくれた。

彼の前に、途中の小駅から乗つてきて、腰をかけた一人の娘さんがあつた。きりようは十人並。小学校の先生らしい風態であつた。別に、眼立つ女性でも何ンでもなかつたが、何と、彼女の右眼の睫毛に、涙が一滴。それが落ちそうで落ちない。じツと、膝の上に眼を落している。その涙に気がついたので、

「これが小説家のような興味というのだろうか……」

と、彼は云うのだ。

その一滴の涙が彼の眼を惹いた。その顔から一体、何を悲しんでいるのだろうか？

二ツばかりまた小駅を過ぎた。彼女が、鞄から、一通の手紙を取り出した。封が切つてある手紙だつた。男の筆蹟らしかつた。その中味を取り出して黙読したが、見る見るうちに、両眼が濡れて、指先で、そつと瞼を押えているのだ。

「ああ、この手紙だな……」

と、その悲しみの一端に触れたものの、勿論、その手紙の内容はわからない。

また、一小駅に着いた。ホームに立つていた一人の青年が、忙しそうに、車窓に眼を走らせていると思つたら、彼女の横顔を見つけて、そとから、コツコツと、窓ガラスを叩いた。青年が乗つて来た。彼女はすばやく手紙を仕舞つた。そして、急いで涙を拭いた。都合よく、彼女の隣席があいていたので、二人は並んで腰をおろした。いつか、車窓に日が暮れていたのである。

堤画伯が云うには、

「また、二駅ばかり過ぎた頃から、二人のラブシーンが始まつたのだ。わざと、僕は眼をとぢた。眠つたふりをしてやつたの、さ。青年は自分の外套を脱いで、二人の膝の上にかけたが、それだけのことなら別に僕も、眼つ

第10話

★ ★

たふりをしなくともよかつたのだが、青年が彼女のお尻のところへ、うしろから手を廻わして、抱くような恰好さ。あの隠れ簑にした外套。その下で、次第にまくられていくスカート。そして、男の指。車輪の轟々たる動揺もリズミカルだつたからね。彼女が、しだいに、青年のほうへ凭れかかつてくる。その上気した顔色。僕には、その外套の下が見透しのようなもの、さ。いや、眠つたようなふりをして、僕は、ちよいちよい、細目をあけて観察していたからね」

「で、あの手紙は一体何ンだつたンだい？」

「これがその手紙、さ」

「どうして？これが、君の手に？」

「二人が慌てて降りたのさ。危く乗り過すところだつたよ。鞄の中へ入れた積りだつたのだろうが、スチームの所に落ちていたんだ」

と、堤画伯は笑うのである。僕の想像ではこの手紙は妻子のある校長の書いたラブ・レターで、その文面から、汽車に同乗したのが彼女の許婚者らしい。その日は土曜日。二人の週末旅行の温泉行。それを嫉妬した校長の手紙。この想像が当つているとしたら、これは別に珍しい小説のネタではなかつた。

広津和郎の『或女』という小説の中に、

「男の慾望がどんなものかあなたは知つていますか。」

「そちらからK君の名前を呼んだのが姉の声。

「ウム。ひとりだよ」

姉が男湯のほうへ這入つて来た。姉弟だから、これは別に、眼を瞠るほどのことではない。が、K君が、はツと片唾を呑んだのは、

「私、泳いでみせましようか……」

と、云うなり姉が、湯槽から首だけ出して

いるK君の鼻先で、背泳をやつてみせたからだ。

とつさに、K君は、ドキリとした。部屋の寝床へ戻つてきてからも、K君のこの感情はおさまらなかつた。

「馬鹿ねえ、あんた！」

と、そう云いながら、この未亡人の姉はK君のそれを予期もし、また、計算にもいれていたことがわかつた。

K君が僕に云うには、

「あの姉は確に変質者ですね。先生あんな女に惚れるなんて……僕には解りませんね」

と、K君が、タオルを提げて、男湯へ降り

温まつて来ようかな」

て行つた。他室には外に誰もいない……。

暫くすると、女湯のほうに気配がして、そ

飜訳アブ小説

猛獣使いの女

モオリス・マアグル

松山厚譯

中川彩子画

赤黒い大蟻喰の舌が、蛇の様に、軀にぬられた赤蟻を求めて、ジユリヤの
むつちりした肌をすべつた。「ああ！　いたい！」朱色の唇から
れ、灼かれるような痛みが宙吊りの上肢や、骨の髄まで走つた……。

それはジユリヤが、修道院生活に入つてから、二ケ月後のことである。

カルナヴアル（謝肉祭）のお祭りで、村は時ならぬ賑わいだつた。ニースの花祭りに負けるなと、村は村なりに、装いをこらした花車や王朝時代の扮装の仮装行列などをくり出した。ミモやジロフレエや月下香などあふれるばかりに盛つた大花籠が辻々にしつらえられまばゆいほどの花合戦がはじまつた。花馬車の列も絵のようで、トランペツトやドラムオーボエ、ヴアイオリン等さまざまの楽器が、華やかなリズムを流し、花束の霰はとめどもなく、うららかな五月の空を彩つた。

寂寞として薄暗い石造りの修道院にも、この気ちがいじみた外界のどよめきは容赦なくきこえてきた。沈黙と祈禱で明け暮れの、人間ばなれした尼僧達の耳は、いや応なしに、巷の春の花祭りをうけいれねばならなかつた。

ジユリヤの耳にも、時ならぬ物の音がきこえてきた。それは夜に

なつてから一そう烈しくなつてきた。楽隊のラツパ、コーラス、喊声、車のひびき、そうした物音にまじつて、一種異様な物音がきこえてきたのである。ウアーウ……キヤツキヤツ……ウオワバウワー——……ボーツオツ……とりとめない裂音であつた。

基督の血ぬられた彼虐の姿にすべてを捧げつくして祈つていたジユリヤは、あまりにも奇妙な物音に、ふと起ち上り、小さな木格子の窓からそつとのぞいてみた。

ジユリヤは、そこに、ふしぎなテント小屋を見た。すぐ眼の下の楡の林を背にした一角の空地に、ジプシーのサーカスが興行にきていたのである。カルナヴアルをあてこんでの高市であつた。奇異な物音というのは、サーカスの曲馬団からきこえてくる各種の動物のなき声だつたのである。

ジユリヤの眼はさらにもう一つの生きている対象に吸いとられた。サーカス小屋の入口で、紅白だんだらの道化服を纏つた男の、隆々とした体格に眼をうばわれたのだ。三角帽子をかぶり、まつ黒

な素顔に太い八字ひげを生やし
た年配の大男、濁つた太い声で何
やらしきりと呼びこみの口上をつ
かつている。

ジュリヤの眼は、無意識にこの男
のごつい手が弄んでいる長い笞にそそ
がれて、暫くの間はなれなかつた。現
実にははじめて見る責め道具である。

ジュリヤはその夜、まんじりとも寝つ
かれなかつた。夜になると一そうはつきり
と、あの男の口上がきこえてきた。花祭り
の騒音、叫声、笑声、じんたの浮かれ調子
……それらがせきたてるように、誘いかける
ように、まざまざと、きこえてきた。

ジュリヤはそつとベッドをぬけ出して、石畳の
アケードをくぐり、満天星くずまたたく戸外に
出た。リラの生垣をめぐらした小高い築山に
登つた。町の灯が、カンテラが、アセチレ
ンの臭いが、物を煮たきする屋台のにおい
が、むせるほど濃厚な空気となつてせま
つてきた。

「あッ！」ジュリヤは思わず頬のほ
とひとりごちた。ヒユーツ！　ヒユー
ツ！　と、宙に鳴る鞭の音だつた。ピシリツ！　とあた
りを覚えた。「あれだわ……」

る、柔かな、しかし弾力性に富んだ音がつづいた。

ジュリヤにとつて、もう、御主基督の受難はあまりにも鮮明な現実でしかなくなつた。

××
×

ジュリヤは、第三帝国の時に、ほとんど荘園を失つたルイ王系の貴族の出だつた。

ジュリヤの家庭事情は、べつに複雑ではなかつたが、当時のフランス貴族の習慣として娘の青春時代を、信用のある修院長のいるモナステールにあずけて、清潔と忍耐の徳をやしなわせることになつていた。

ジュリヤは、十七になると、サクレ・クールの女子修道院に送られ、黒衣、黒頭巾の質素な日常を強いられたのである。

十七とはみえない、美しく成熟したジュリヤの肉体は、こうして、日夜、キリスト像の前で、黙禱と懺悔とに明けくれていたのである。が、しだいと、かの女の胸に、残酷な、キリストの磔形の喰い入るような世界が焼きついてきた。

「私がこんな目にあつたら……」ふと、ジュリヤは考えてはならぬ事を考えた。被虐の極致を象徴する、この、世にも霊妙な信仰対象が、生理的にも美しくなつてきたのだ。

××
×

花祭りは七日の間ますます昂奮の度を高めながら賑やかにつづけられた。ジュリヤはもう、十字架の前で祈るのを忘れたように、一歩も廊下へ姿を見せなくなつた。そして、被虐のイメージを秘仏のように守りつづけ、終日、狭い格子窓からサーカス小屋を見つめていた。

奇怪な口上男は、道化服ばかりつけているのではなかつた。大てい の場合、調教師の姿で、皮のキュロットをぴつたりと股がくびれる程きつくはき、あいかわらず笞や革鞭を手にしていた。

ジュリヤは、花祭りの最後の日の午後、院長の私用で、町へ買い物に出た。

用をはたすと足は知らず知らず、サーカス小屋の方へ抵抗し難い力に引かれるように、吸われて行くのだつた。巷は花合戦で狂気のようだつたがジュリヤの眼には入らなかつた。が、今朝まで、あんなふうに景気よくやつていたサーカス小屋は、もう、あとかたもなく取りこわされていた。数十に及ぶ猛獣の檻とジプシーの移動箱車のボロが、出発前のおちつかぬ様相を見せていた。あの、笞を持つた男は……と、こわごわ、あたりをのぞいてみたが、先発したのか、どこにも見えない。

ジュリヤは、総身の張りがすつかり抜けたように、がつかりした。同時に、ほつとした安堵に似たものを感じた。

と、このとき、天幕ばりのアレナ（サーカスの馬場）から、

「お嬢さん……」

聞きなれた、だみ声が、聞えてきた。はつとして、ふりかえると、あの男、紅白のだんだらんになつたピエロー服をきたあの男だつた。

「よくきたなあ……待つていたんだよ」

例のむちを片手にふりながら、ジュリヤをめがけて、かけよつてきた。ジュリヤは、呪縛されたように、立ちすくんだ。

「さあ、せつかく、わざ〳〵きてくれたのだから、お茶でものんでいつてもらおう」

男は、まるで予定していたもののようにそう言うと、ジュリヤの腰に手をまわして、やさしく誘導するように、かたわらの移動箱馬車のドアをあけて、中に引入れた。そして、片手でドアをぴしやりと閉めた。

××
×

箱馬車の中は、まことに雑然たる色彩で埋まつていた。しかし、狭いようでも旅興行の箱馬車なので、椅子も二三脚、鏡台附のたんす、ランプののつているテーブル。そして、おそまつながら襖詰めのベツドなど、一通り私室のていさつをそなえていた。

「まつたくあなたに会えてよかつた。ぜひ出発前に一度会つて、ユツクリ話をしたいと思つていたんだ」

男はサツサと自分から腰をおろすと、ニヤニヤ笑いながらそんなことを言つた。

「どうして、私を御存じですの」

ジユリヤもおそるおそる木製の小さな椅子に腰を下すと、あまり馴々しい男の態度をなじるように、キツとした口調で問い返した。

男はそんな彼女の質問を無視して、無礼な高い笑声を響かせた。

「お嬢さんは毎日眼を光らして、俺のことを見つめていたじやないか。あの眼付はね、俺に惚れてるつてことなんだ。その俺にこうしてゆつくり会えたんだから、もつと嬉しい顔をするもんだよ」

そう言うと腰を上げてツカツカと彼女の前へ歩み寄りグイツと彼女の柔らかな手をにぎりしめた。

「いやツ、放して！」

ジユリヤは突然のことに恐怖の悲鳴をあげて逃れようとした。

が、男の力は万力のように強く、まるで綿屑をもてあそぶように、彼女の躰をズルズルと自分の胸に引寄せた。

「フヽヽヽ、恋しい男に会えたのにそんなに暴れるなよ」

獣のような臭い男の唇が容赦なくガツとかぶさつて来た。彼女の腰に廻された男の腕は、かよわいジユリヤの躰をポツキリ二つに折れる程、強くしめつける。突然のその暴力に対する恐怖と苦痛で、彼女は瞬間スーツと気が遠くなつた。

何時間たつたろう。

車はすでに走つていた床からはつとしてジユリヤは、倒れていた。

起き上つた。

「かえして下さい！　どこへ連れていくので す……かえして下さい……いやです……」

男は、ただ気味わるい笑いをうかべているだけだつた。

「かえして！」ジユリヤの白い手がドアにかかる。男は「だめだよ。じたばたしても……もう、あの町は、ずつと、うしろの方だ。馬車の音をきいてごらん、えらい勢で走つているんだ」まつ白に透きとおつた肌、ゴムまりのようにふつくらとした胸……。

「いや、放して……」

ジユリヤの悲鳴は、やがて、大きな手で封じられてしまつた。

××
×

その夜、ここでも都会なみに、小やかではあるが、謝肉祭がつづいているという湖畔のカイヨオという村に着く。と、サーカスの一行は天幕をはつた。

ゴンザロというのが、かの女をさらつてきた団長である。目的に着くと、ゴンザロは、窓から首を出し、

「おーい！　誰かいないか。誰でもいい」

と、呼んだ。

「親方！　何の御用で」濁み声が窓の下にきこえた。

「新入りが一人できたんだ。ここにしばらく寝起きさせておくから、面倒を見てやつてくれ。すばらしい娘だぞ。あとでゆつくりおがませてやる。食事の用意をしてこい」

「親方……お楽しみがふえましたね。アンリエット姐さんに知れたらお冠りですぜ」

「よけいなことをいうな。しばらく何にも知らない事にしておけよ」

団長ゴンザロは、再び窓を閉めると、羽目の柱に縛りつけられてがつくりと首をたれている乙女の方へ歩みより、

「さあ今日からお前はここの者なのだ。可愛がつてやるよ。おとなしく、ここで体を休めていろ……食事はすぐ運ばせるからな」

そういつて、やつと紐をほどいて、無造作にベッドへ抱いてゆき、膝の上に抱きあげ、又もや髪をつかんで可愛い顔をあおむかせ、貪るように音を立てて厚い口で力一ぱい接吻するのだつた。

「あとでゆつくり可愛がつてやるぞ」云いのこすと、ゴンザロは例の鞭をとり上げ、ヒューッと宙に鳴らし、「じたばたすると、これだぞ」と云いざま、ピシリッと、つづけざまに、打ちおろした。ジュリヤの白絹のような腕と肩に、みるみる紅色の筋が走つた。

「ああ……」声も出ない。ベッドにのけぞつたまま、ジュリヤは悶絶してしまつた。

××
×

「おとなしくしているじやねえか」

ドアを明けて入つてきたのは、皮ジャンパーに皮ズボンの小屋の若者だつた。銀盆に食事をのせてきたのだ。

ジュリヤはあわてて前を合わせ、ベッドのすみにちぢこまつた。

「さあ、もう遅いから、早く食事をして寝るんだぞ。いろんな事を仕込んでやるからな」

そう云いながら、ベッドに近より、いきなりジュリヤの左手をとつて、両手でにぎりしめた。

「おまえは、いまにこの一座の花形になるんだ。いい作らんだい。そうして、年はいくつさ」

「なにもそうびくびくすることはないよ。団長は話のわかる人だからな。それにしても、団長はまた、おそろしくすばらしい別嬪を手に入れたもんだな。名前をいえよ。なんていうんだ。ジュリヤは面白い、いやでも食わせるぞ」

ゴンザロは、片手をつかんだまま、一方のパンをとり、ジュリヤの口に入れようとした。ジュリヤは固く唇を噛んだ。

「こいつは面白い、きつく抱えこみ、上から荒々しく唇をおしつけておいて、パンの小片をねじこんだ。

ジュリヤは両手で口を塞ごうとした。するとゴンザロはいきなり、と男はその手をつかんで部屋のまん中にひきずり出し、うしろ手にねじ上げて、パンドを乳房の上と下へしつかりまわし、がんじがらめに縛つてしまつた。

そして彼女をベッドにころがすと、動けぬように、すんなりとした胴を足でふみつけた乙女はじつと眼を閉じてこらえていたが、

「やめて……」と、苦痛に躰をひいた。だがゴンザロは、鞭を手に、いきなり二つの半球めがけて、ピシリッと打ちおろした。

「ひとりでおとなしく待つていたな」

鞭を手にして入つて来たゴンザロの右頬には、はつきりと朱い唇のあとが乱れていた。

「ヒーツ！」

ジュリヤは身をよじつてころげた。またピシリツ！　つづけざまに、肩、胸、背と、めつた打ちがはじまつたのだ。

「これでもか！」

と、こんどは、やわらかな胸に足をのせ、ぐい〳〵とおしつけた。うしろにいわかれているので、ジュリヤは抵抗出来ない。小柄な白い肉体は、毛脛のひと蹴りで、ぐるぐるところげ出した。

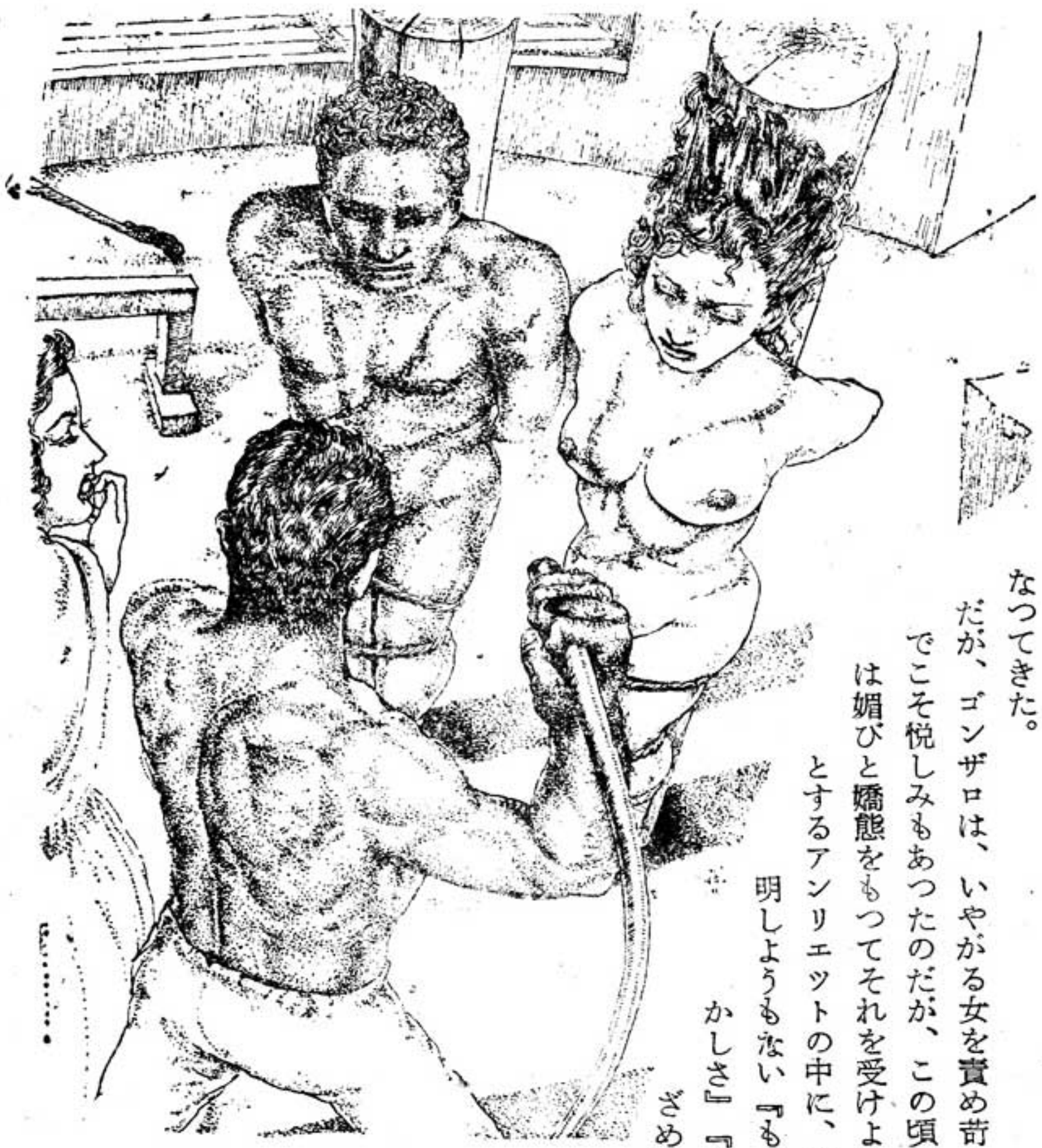
「かあいい尻だなア」

こうして、最初の夜は、しびれるほどの鞭打ちに明けた。

××
××

翌朝、団長ゴンザロは、至極上きげんで出て行つた。その足で、三つ目の箱馬車の扉を荒々しく蹴りあけて中に入つた。

ゴンザロは、そこに全く思いがけないものを見た。かれの情婦アンリエットと、乾分の一人、シヤルルという若者が、一つベッドで寝ていたのである。アンリエットは二十四歳の人妻であつた。新婚の当夜、折からその町に小屋がけしていたサーカー団長ゴンザロによつて襲われ、そのまま奪取されてジプシー車に閉じこめられ、爾来、団長の情婦となり、三年の月日を、過して来たのである。おも長の亜麻色の髪、小麦色の艶麗な肌、つややかな膝小僧、そして筋肉の女豹のようにしなやかな肢体、まことに申し分のない肉体美の女性である。



かどわかされて来た当座は、はげしい鞭打ちと、五体がばら〳〵になるほど鋭どい虐げをくりかえされて、悲鳴と悶絶をくりかえした。が、次第に、あきらめと、ふしぎな感覚の眼ざめによつて、ゴンザロの執拗な責めをむしろよろこんで迎えるようになつてきた。

だが、ゴンザロは、いやがる女を責め苛んでこそ悦しみもあつたのだが、この頃では媚びと嬌態をもつてそれを受けようとするアンリエットの中に、説明しようもない『もどかしさ』『興ざめ』

を感ぜずにいられなくなつてきた。

「つまらねえ女になりやがつた」……と、ゴンザロは舌打ちをした。そして、こんどは、サーカスの弗箱ともいうべき、猛獣を使つてみた。最初はよく調教されたジャムラックというチンパンジーがえらばれた。暖かい国の動物なので、摂氏十度から十五度の温度を保つた内檻に飼われていた。まずアンリエツトは、蜂蜜をぬつて檻を半裸にして手と足を縛り、の中に放りこんだ。チンパンジーは、アフリカの奔放な生活から久しく遮断されていたので、白い歯をむき出し、肩をゆすぶつて、ヒヤシンスのようにまばゆいほど魅惑的なアンリエツトに手をかけた。アンリエツトはヒーヒーと、たえ〳〵にさけびつづけた。

ゴンザロは檻の外から、燃えるように眼を充血させて、じつと見まもつていた。アンリエツトは余りの恐怖に気を失つてしまつた。その夜、ゴンザロは久しぶりで、気のすむまで答を鳴らし、柔い肌がずたずたになるまで虐げつづけたのだつた。

こうして、およそサーカスに飼われている獣のほとんどを用いて、アンリエツトをさいなんだ。ソラリーマンドの牡牛の舌は火のように熱く、アイルランドのむく犬は、軟かな腋下に鼻をつけてくすぐつた。

ゴンザロは、このようにアンリエツトを新鮮なオモチヤとして弄んでいたが、これにも段々と飽きてきた。

そのとき、ジユリヤの姿を修道院の庭に見出し、その可憐な容貌と、水々しい肉体に食いつた。それは、まだ座員たちがほとんど眠つている朝だつた。

小屋のまわりにずらりとならんでいる動物の檻には、アフリカ象、インド象、黒犀、きりん、ライオン、縞ハイエナ、かもしか、虎などが、ほとんど音も立てず、あるいは丸くなつてねむりこけ、あるいは檻の中をぐるぐる歩きまわつたり、のつそりと大あくびしたり、鉄格子に鼻すりつけて、そとをながめたりしていた。ジユリヤは、胸がぬけるほど、ぐいぐいと手を引つぱられて歩き乍らも、無心な猛獣たちに朝のあいさつを忘れなかつた。

チンパンジーや狒々やゴリラなどは、手まねきをしたり、投げキッスをして、かの女にあいさつをかえしている。

玉のりのうまいあざらしや、おじぎばかりしている熊の親子も、ジユリヤのあどけない顔をみて、すぐに、うれしそうな様子をした。

火は嫉妬の油をそそがれて歯の根も合わないほど昂奮した。

「さあ、いいものを見せてやるから来い」

その翌日、ゴンザロの手に引かれ、いやいやジユリヤはサーカスのテント村へと入つていつた。それは、まだ座員たちがほとんど眠つている朝だつた。

小屋のまわりにずらりとならんでいる動物の檻には、アフリカ象、インド象、黒犀、きりん、ライオン、縞ハイエナ、かもしか、虎などが、ほとんど音も立てず、あるいは丸くなつてねむりこけ、あるいは檻の中をぐるぐる歩きまわつたり、のつそりと大あくびしたり、鉄格子に鼻すりつけて、そとをながめたりしていた。ジユリヤは、胸がぬけるほど、ぐいぐいと手を引つぱられて歩き乍らも、無心な猛獣たちに朝のあいさつを忘れなかつた。

チンパンジーや狒々やゴリラなどは、手まねきをしたり、投げキッスをして、かの女にあいさつをかえしている。

玉のりのうまいあざらしや、おじぎばかりしている熊の親子も、ジユリヤのあどけない顔をみて、すぐに、うれしそうな様子をした。

×
×
×

ところが、久しぶりで、変つた肌の手ざわりも悪くないと、胸をはずませ、勢い切つて扉を明けたとたん、見てはならぬものを、見てしまつた。

調教見習のシャルルは、アフリカで牛飼いをしていたのを雇い入れてからまだ日の浅い、まつ黒な大男で、筋骨のむくれ立つた頑強な野人だ。

「畜生！」ゴンザロは、かたわらに立てかけてあつた棍棒で、その二人を、めちやめちやに打ちのめした。

×
×
×

ゴンザロの胸はおさまらなかつた。怒りの

獅子も虎も、その鋭い爪のはえた前脚でひようきんな抱擁のまねをしてみせた。

ジュリヤは、動物の愛らしさというものにこの時ほど心を打たれたことはなかつた。ゆくゆくは、南仏一帯に名を馳せた『ジュリヤ・ラ・ドントゥーズ（猛獣使いのジュリヤ）』の天禀の芽生えは成長していたのである。

小屋は広々としていて、円形劇場を模した仕組みで、中央の円い砂場が四方から十分にながめられるように、段々に桟敷がとりまいている。砂場が舞台で、吊綱やブランコやぬけ輪などが造花や飾り紐で美々しくならんでいる。砂場のまん中に二本の太い柱があつて、その根もとにいろいろなアクロバチックの小道具が、うず高くつまれている。

「どうだ、あれを見ろ」ゴンザロにいわれてジュリヤはその指さす方角を見た。

二本の柱に、黒い裸体と白い裸体が、別々にくくりつけられているのだ。まだ、責めは受けていないと見えて、いずれも、肌にはすこしの傷もない。

いずれも、うしろへまわした両手が、柱の手前で十字に交叉して三巻きにされ、髪の毛は五六ケ所はり金で束にまとめて高くつり上げられていた。黒い方は、シャルルにちがいない。怨めしそうな眼で団長をにらみつけている。白い方はアンリエットである。

「こいつらは生かしちやおけねえ奴らだが、興行中だから、思い知らせるだけにしてやるのだ。まあ、ゆつくり見ていろ」

ジュリヤは男女の基督像が、淫虐な八字髭のユダヤ人に拷問される図を頭に描き、早くも不思議な昂奮と感動に心臓の高鳴りを覚えた。

十月特集号

八月下旬・発売定価百円

血腥い本能！

いつの世でも、戦争は性道徳を壊乱する。それは、勝敗の別なく、また前線銃後を問わず、一様に永い禁慾生活を強いられるからだ。

苛烈な戦火の中でも、なお燃え続けた人間の本能！……砲煙弾雨の塹壕で、軍律厳しき兵舎で、或は空襲の屋根の下で、その抑圧された慾望はアブの世界にハケ口を求めて奔流した。それは想像を絶する現象であり、戦争のみが描き出す「性風俗」であつた！

本誌はこゝに、編集の総力を挙げて、今次大戦の蔭に現出した実相を抉り、生々しい体験レポートとして特集、皆様の机辺にお贈りする。何とぞ次号を御期待下さい。!!

恐怖のアブ！

た。

ゴンザロはジュリヤの顔を両手ではさみ、しつこいキッスを貪つて元気をつけると、水桶に浸した太い革ベルトを手にして、二本の柱の真中に立つた。ブルン！ブルン！ 革紐は水をちらしてうなつた。「ヒーッ」と一声たまげる悲鳴。「ウアー！」男の叫びがつづく。ベルトは狂おしく唸りつづける。みる二人の体一面、牡丹のように真赤な斑点が盛上つてきた。二人は悶絶し乍ら眼を虚空にあげた。

「もろい奴らだ。しばらくこうしておけ」

と云いながら、こんどは動物の檻から、とくに悪臭のひどい野猪の糞汁をあつめてきて二人の口を割つておしこみ、頭から、黒黄色の汁をざぶりと浴びせかけた。無抵抗な二人の基督は息が絶えたように、ぐつたりと頭を垂れたまま、もう、声も身動きの気配もない。

×

ジュリヤは、二人が言語に絶する責めをうけているのをじつと見守つているうちに、またもやふしぎな感情がきざしてくるのだつた。それは一種羨望というか嫉妬に似た気もちだつた。二人がされていることを、自分にもしてくれれば……という、実に矛盾した気もちだつた。責めて責めぬかれている被虐者のあられもない姿体に焼きつくように吸いこまれ、ますます荒れてゆくゴンザロの兇暴な横顔、汗で光つた赤銅色の太い逞しい腕……そんなものが、ふしぎと、ジュリヤの心をひきつけるのだつた。

「さあ、今日からそろそろ猛獣のあつかい方を仕込んでやるぞ」

ジュリヤはこうして毎日、開館前の数時間砂場に引き出され、ゴンザロの鞭のまにまに機械的に操作される猛獣の調教を仕込まれた。最初はライオンと熊の『仲よしこよし』という剽軽なギャツグであつた。熊がよちよちと妙な歩き方でライオンに近づく、そしてライオンのたてがみをふしぎがり、ちよつかいの手を出す。ライオンはむつとした様子でいきなり前足で熊の横面にしたたかビンタを食わした、ここで放つておくと、えらい格闘がはじまるのだが、ゴンザロは、頤でジュリヤに合図をした。ジュリヤは渡された鞭でそーツとライオンの横腹を突いて『ラントマン！（ゆつくり）』と言つた。ライオンはくれる美しい女性の声に、おとなしく、一二歩しりぞいた。

「うまいぞ！ ジュリヤ！ 大したものだ」

ゴンザロは大よろこびで、ジュリヤを抱きあげ、めちやめちやに愛撫した。

こうして毎日、未来のサーカスの花形としてジュリヤはゴンザロから厳しい訓練を長時間受けはじめた。

××
×

『絶世の美人、猛獣使いの女王ジュリヤの出現』——でかでかと、極彩色の大看板が町の辻々に張り出された。

ジュリヤにとつては悲しい檜舞台だつた。しかし、アレナに立つたジュリヤの艶麗な姿は割れかえるような拍手と歓呼の叫びに迎えられた。

最初の数日間はごくかんたんな調教振りで終つた。つまり、あざらしの軽業、ひぐまのカード当て、象の玉ころがしなど。

四日目にアレナでの演技は至難中の至難といわれている『大蟻喰のロマンス』というチゴイネル（ジプシー）独特の秘芸であつた。鼻先きから尾の先まで長さ七呎半もある珍獣だ。熱帯地方の動物で、炎熱の大地に

紫色の列をつくる蟻を常食としている。が、このサーカスでは、一日生卵八個と細かく刻んだ肉一ポンド、そのほか飲物としては、温かい牛乳をのませていた。

全身鱗片におおわれ、さきの細つた漏斗の口から蛇のように長い舌をちよろちよろ隠顕させる、まことに気味の悪い怪獣である。

ジュリヤはこの怪獣と親密になるためにあらゆる不自然な方法を強要された。

ゴンザロは彼女の上半身を裸にして、両手両足を大の字にしばりつけた。アラビヤゴムを溶かした粘液を体中にべつとりとなすりつけ、すこしかわき加減を見はからつて、ゴンザロは、おもむろに、大蟻喰をつれてきた。

赤黒い柔軟な、蛇のような舌がチョロチョロとジュリヤのむつちりとした肌をすべつたやがてゴンザロは興奮に顔をゆがめて、ジュリヤを解きおろし、その可愛い全身がすつぽり包まれてしまうほどきつくきつく抱きしめながら、いそいで箱馬車につれていつた。

大蟻喰いを相手の至芸はこうした忌わしい準備が効を奏して、未曾有の成功を博した。

ジュリヤは、その頃から、妙にこの、醜悪な珍獣が愛しいものに思えて来た。

サーカスは大好評のうちに、惜しまれながら次の巡業地へと急がなければならなかつた

ところが、ちようど、出発の前夜、原因不明の火事が出て、動物の大半は焼死し、団長ゴンザロは、何者かに、後頭部を強打され、昏倒のまま、焼死してしまつた。団員たちは、警察の訊問に呼ばれるのをいやがつて、馬車もろとも姿を消してしまつた。

おそらく、団長に怨みを抱いていたシャルルとアンリエットの計画的犯行に違いない。

行くべき家も土地もなく、ジュリヤは、たゞ一人、喪心したように、焼けあとに立ちつくしていた。

かの女にとつては、もう、なにもかもがおしまいだつた。今さら、修道院にはかえれない。なつかしい父母の家……それも、あまりに遠い、縁なき国でしかなくなつた。

× ×
×

南仏オーベルニュの峡谷――秋である。ミデイ時特有の大粒の葡萄が、峡谷の斜面を埋めている。甘やかな果汁の香りが、空気をみたしているそのつぶらな葡萄の房にたわむれている動物の一群があつた。この

異常に関する十二章

仮面の露出症

☆　☆　☆

―ある女の手記―

××様　始めて御手紙を差し上げます。でも、始めにお断り申上げますけれど、これは決してラヴ・レターではございません。同じアパートに住む女の私から、こんな手紙を御受取りなさつて、きつと誤解なさるかもしれませんが、これは世の常の、いわゆる恋文ではないのでございます。

いえ、手紙の主体をなすものは、やはり一種の慕情には違いございませんが、これを聞いて居りますのは、私自身ではなく、私の裡に巣喰つている、手のつけられぬ魔物のせいなのでございます。その魔物の名前でございますか？　エキスヒビシヨニズムと申します。これはエキスヒビシヨン（展覧会）と云う語から転じた学術語だそうでございますね。

「なんだ、露出狂か……」

と、唖然となさるお顔が見えるような気が致します。そして、そんな空想さえ、私にとつては一つの快感なのでございます。

そうです。私はこの気も狂はんばかりの露出願望に、日夜身心を焼かれるような煩悶を重ねている女でございます。アパートの人たちからは、至つて目立たぬ、陰気な老嬢の一人暮し、と思い込まれている私が、実はこんな変態性欲にとり憑かれた、色情狂だと云う事実を、何卒御承知下さいませ。

短刀直入に申しますと、現在の私から離れない願望は、貴方様の視線の前に、私の裸体を晒したいと云うことでございます。お笑いになりますでしょうか？　しかも現実の私は人一倍長いスカートをつけ、殊更人眼を避け、

1　仮面の露出症　　7　女体と泣くせび
2　攻撃の勝利感　　8　男の世界と男
3　くちづけ　　9　暴力による姦淫
4　自己奉仕の姿　　10　ツバメ型というもの
5　被虐の歓喜　　11　性的愛玩の心
6　見るサディズム　　12　戦後の異色

るように、ひつそりと暮しているのでございますから——。

フロイドの精神分析によりますと、内心露出願望の強い女性ほど、必要以上に肉体を包み隠す、と云うことでございますが、私の場合にも、そつくりあてはまるように思われます。

夜遅く貴方の足音が私の部屋の前を通るとやがて私の窓から斜めに見える、貴方の部屋に灯がとぼります。時にはベツトに入ろうとなさる、貴方の黒い影さえ窓に写ることもございます。

そんなときなのでございます。私の身内に突風のように巻きおこる異様な露出欲が……ああ、その狂ほしい衝動がおわかり下さいますでしようか？——私は寝着も下着もかなぐり捨て、「真つ裸になつて貴方のお部屋に飛び込みたい、いえ、そうしなくてはならぬ！」と荒れ狂う願望を押し静めるために、冬でも汗を流しては、しばらくの間、震えているのでございます。

それぱかりではございません。貴方の眼前に現われた裸体の私は、きつとパリでカンカン踊りの踊子たちがするように、リズムに合わせて、誇らかに足を高く高く上げるのでございましよう。ああ、胸を反らして、両足を交互に、高く高く……。

貴方様にこうして御手紙を書いて居りますが、実は私の異様な性癖の対象となつた男性は、貴方ばかりではございません。以前勤めて居りました会社では、ガツチリした体格で非常に快活な係長が、私のエキスヒビシヨニズムの御目あてでございました。

そして或る夜、それは偶然にその係長と二人で、残業をする羽目になつたのでございますが、彼が笑いながら、

「あーあ、今夜も遅くなつて、女房が角を出すだろうな」

と、云つた時、私は発作的に起ち上つて、高々とスカートを捲くり上げていたのでございます。

奇妙なことに、こんな私が、人一倍羞恥心も強いのでございます。その夜限り、会社は辞めて仕舞いました。

前に居りました下宿では、特定の恋人(?)はありませんでしたが、下宿の便所に入つて同宿の異性が便所の戸を明けるまで、長時間うづくまつて居りました。勿論下半身を露出した用便の姿勢のまま……。私は勿論便所の内鍵もかけず、ノツクにさえ答えなかつたのでございます。

追々にはそれも下宿中の評判になつて、私はこの下宿を出ました。こんなことを聞いて居りましては、本当にキリがありません。私はこうして、勤務先や部屋借りの先を、どれほど転々したか分らないのでございますから……。

××様　こんな私の悪癖の始りは、確か女学校の二年の秋だつたと存じます。急性の盲腸炎で、手術を受けることになつたのでございますが、彼が笑いながら、

「あーあ、今夜も遅くなつて、女房が角を出います。真白な手術台に横たわつた私を、中

年の主治医の外に、三人もの異性がとり囲んだではございませんか……。今から思えば、インターン中の若い医者の卵の見学だつたのでございましよう。けれど生れて始めて裸体を、しかも下腹部に四人もの異性の注視を浴びて……。手術の恐怖など、何処かに吹き飛んで居りました　消え入るような羞恥と、不思議な恍惚感の中で、私はまだ生え始めたばかりのものを、ゾリゾリと剃り取られながら気が遠くなつて行くようでございました。

それ以来のことなのでございます。最近では街で婦人科医の看板を見ると、まるで吸いよせられるように、入つて行かずには居られません。「こしけ」とか「月経不順」を口実に、医者の内診を受けるのでございます　親切で丁寧な医者も、ひどくブッキラボーな医者もあります。でも、ここだけが、天下晴れて私の病癖を満足させてくれる場所なのでございますもの。

××様、この露出症の元祖は、天宇受売命（あめのうずめのみこと）だそうでございますね。例の天照大神が天岩戸におかくれになつた時、今のストリップのような、いえ、もつと天真爛漫なエロチシズムを発散なさつて、男神たちの喝采をお浴びになつた。まことに古代はおほらかなものだつたのでございます。

おほらかと云えば、白痴や、老耄性痴呆者ともあれ、男の方の露出欲は案外容易に満足させられるのではないかと存じます。漫画家小野佐世男さんのストリップなど有名でございますし、浴衣から胸毛を見せても、尻はてんかん患者などが、よく露出行為を行つているのでございます。アパートの近所でも、或はズボンの前を止め忘れ元左官だと云うアル中の小父さんが、夕方になると着物の前をまくつては、子供たちを追つかけたりするのを見掛けます。あんな風にした態をよそおつても、男性ならばルーズ、時には男らしい豪放さとさえ、世間は解してくれるのでございますから……。

女なるが故に、そんな真似事も出来ず、他人様に御迷惑を掛けずにと、念じて居るのでございます。でも、これは相手があつて始めて生きてくるものです。相手なしの露出――これは余りにも無意味で、そんなことは少しも考えられません。

××様

奇怪なお手紙がますます混線して。訳のわからぬことになつたようでございます。私は一体、貴方様に何を聞こうとしていたのでございましようか……。

これも又、私の胸の中に秘めているものを、どうしても、他の人に見せようとする露出症のなせるわざでありましようか。

悲しい想い出で御座います。

正気を失つた人たち。人間から理性も虚栄もあらゆる粉飾をのぞいた時に、露出本能が自然に押し出されることを考えますと、私はなんだか人間が、かわいそうな、いたましい存在に思えてくることさえございます。これは、普段謹厳な方でも、御酒を召上ると、宴席などで裸踊りなどなさると云う、あの心理にもつながることなのでございましよう。

ともあれ、老耄性痴呆者

攻撃の勝利感

サディイズム

―快楽をつくる人々―

一

相手（人間あるいは動物）に対してセッカンまたは殘虐を行つて、性的快感を味うという「病気」である。近頃こんな現象が多いといわれている。そして、このような行為は、女よりも男に多い。これは生理的な原因にある。

性交の際、男は終始攻撃的で他動的だが、女はつねに防禦的、受動的である。男にとつてみれば、女を自分のものにし、征服することは非常な刺戟であつて、そのため女の抵抗にうちかつことが男の職分ともなり、攻撃的になつてしまつたのである。

そしてこの攻撃性が病的に発達し、自分の対象物を徹底的に服従させ、痛みや傷を負わせるのみか、死に致らしめるようにさえなるのだ。

サディイズム行為は実に種類が多い。これをザツと分類してみると、次の通りである。

一、鞭打症　臀などを鞭や棒で打つもの
二、緊縛症　俗にいう〝縛〟である
三、刺傷症　女の衣服などをインキ其他で汚すもの
五、架空的加虐症　空想、夢想の形で行れるサディイズム
六、動物加虐症
七、淫楽殺人症　相手を殺すことによつて性的快感を得るもの
八、殺人淫楽症　殺人してまでも淫楽を遂げるもの
九、喰人症
十、屍体加虐症

二

右の中から一例をえらんでみよう。大体サディイズムは、自分の指を切り、あるいは刺して血を流し、あるいは殘虐を行つて、性的快感を味うという「病気」である。近頃こんな現象が多いといわれている。そして、このような行為は、女よりも男に多い。これは生理的な原因にある。

性交の際、男は終始攻撃的で他動的だが、女はつねに防禦的、受動的である。男にとつてみれば、女を自分のものにし、征服することは非常な刺戟であつて、そのため女の抵抗にうちかつことが男の職分ともなり、攻撃的になつてしまつたのである。

そしてこの攻撃性が病的に発達し、自分の対象物を徹底的に服従させ、痛みや傷を負わせるのみか、死に致らしめるようにさえなるのだ。

サディイズム行為は実に種類が多い。これをザツと分類してみると、次の通りである。

一、鞭打症　臀などを鞭や棒で打つもの
二、緊縛症　俗にいう〝縛〟である
三、刺傷症　女の衣服などをインキ其他で汚すもの
五、架空的加虐症　空想、夢想の形で行れるサディイズム
六、動物加虐症
七、淫楽殺人症　相手を殺すことによつて性的快感を得るもの
八、殺人淫楽症　殺人してまでも淫楽を遂げるもの
九、喰人症
十、屍体加虐症

二

右の中から一例をえらんでみよう。大体サディイズムは、自分の指を切り、あるいは刺して血を流し、あるいは殘虐を行つて、性的快感を味うという「病気」である。近頃こんな現象が多いといわれている。そして、このような行為は、女よりも男に多い。これは生理的な原因にある。

性交の際、男は終始攻撃的で他動的だが、女はつねに防禦的、受動的である。男にとつてみれば、女を自分のものにし、征服することは非常な刺戟であつて、そのため女の抵抗にうちかつことが男の職分ともなり、攻撃的になつてしまつたのである。

そしてこの攻撃性が病的に発達し、自分の対象物を徹底的に服従させ、痛みや傷を負わせるのみか、死に致らしめるようにさえなるのだ。

の残虐な空想――たとえば、散弾で国民を射殺しようとする暴君の役を自分にあてはめたり、あるいは、都市を占領した敵兵が、若い女に暴行を加え虐殺するというような空想を思い浮べて、性的感情を満足させた。

彼は平静のときは善良で道徳的だつた。そうしてこのようなサデイズム的想像をすることを恥じていたという。彼のサデイズムは、架空的加虐症が混入している。なぜこのようにただ空想的のみにとどまつているかというと、現実に実行にするチヤンスがないとか、勇気に欠けているとか、良心の制約によるとかなのである。

三

史上高名な人物でサデイストは少くない。関白秀吉などもその典型的な一人といえよう。

彼は〝殺生関白〟といわれるごとく、淫楽殺人の症候があり、肥えた男や妊娠中の女などを見ると、引捕えて、男は斬殺、妊婦はその腹を裂いて、興に入つたと云う。

あるとき秀次は、食事中歯に砂がさわつたところ、料理人を呼びつけて、「これはその方の好む物だろう」と云つて、庭前の砂礫を口中に含ませ、一粒も残さず噛み砕けと命じた。料理人は殺されるよりはマシだろうと、我慢して砂を噛みはじめたが、そのため口内の肉が破れ、歯の根も砕けて、目がくらんでうつぶしに倒れ伏した。秀次は倒れた料理人を引つ立てて、まずその右腕を打落し、しばらくして左の腕を、そして最後に首を刎ねたという。

秀次の残虐な淫楽殺人とくらべると、わゆる弱いもの虐めというやつだ。この眼で見ると、現代などサデイズムだらけと云うことになる。殊に、強者が弱者に対して行うところの、権力的行為は、サデイズムの甚だしきものであろう。

南海はまだ当主であつた時分にも、赤坂門外の上屋敷の一室に、狩野梅笑に命じて天井から襖にいたるまでことごとく、物凄いばかりの妖怪変化の絵を描かせ、若い侍女たちにローソクを持たせてその〝化け物の間〟にやり、女たちが怖がるのを見て悦に入つたというような変りものだから、侍女の肌に刺青させて賞玩したのも、サヂツクな興味から来ていることは明らかである。

かくて、サデイズムは幼少時にすでに発現し、そして誰でも多少はもつている。年下の子供や同じ年ごろの女の児を虐め、そしてそのとき何かしら妙な興奮と快感を覚える。い

サデイズムは夫婦間にも見られる。時にその性生活において顕著に現れる。だが、これは第三者に迷惑かけることなく行われるからよい。

サデイズムの悪用はごめんだ。善用しても らいたい。

くちづけ

フェラチオ

―愛撫本能の爆発！―

「その鬱を、お前は、何故落さなかつたのか？」―

法廷で裁判長に訊ねられると、彼は豪然と答えた。

「女たちが、失望しますよ。私の接吻に、くすぐつたい、くすぐつたいと言いながら嬉しがる女たちのことを考えたら、とても鬱を切る気になれません！」―

この男こそフエラチオで有名な「巴里の青鬱・ランドル」であつた。

彼は第一次大戦後の巴里周辺を舞台にして当時氾濫した戦争未亡人二百八十三人を姦殺した稀代の色魔である。

というとランドルは、よほどの美男子だつたのか、とんでもない。彼は頭の大きな小男であり、その頭はほとんどはげあがり、目はくぼんで、高いとがつた鼻と、耳の大きさだけが変に目に立つ人相だつた。顎を突出し、くぼんだ目の奥から、下目づかいに人を見る癖があり、そして誰と話す時でも、やたらに顎鬱をしごいた。

この貧弱なランドルが、では何故三百人近い未亡人をだましたかと云えば、彼の性技、

しばしば出てくるし、欧米でも古くから用いられた性技術の一種である。人間の器官が不変のように、男女の性交渉の内容は百年前も現在と殆ど変りがなく、しかもフエラチオは、愛撫本能の動物的爆発を思わせる行為であるから、恐らくアダムとイブの時代から一つの方法として発見され、現在までそれが続いて来ているものと断定してもそうおかしくはない。フエラチオは、現代日本の家庭（夫婦）の八十パーセントから九十パーセントに亘つて行われている。

ただしこれはあくまでも一つの統計からであつて、一般的に云つてやや特異な性技術であるフエラチオが夫婦の性交渉の都度愛用されている家庭というものは少いだろう。

フエラチオは男女によつて、相対的に、或いは各々独立的にも用いられるが、ここで先ず男性の、女性に対するフエラチオ心理を分折してみよう。

（1）愛情の高騰から愛玩と性感覚の亢進を

1

フエラチオは江戸時代の草双紙にもしば

併せたもの。

（2）、性技として相手、或いは自己の性感覚の亢進だけを目的とするもの。

（3）単に好色や好奇心のみによるもの。

（4）精力微弱や、不能などをそれによつて補おうとするもの。

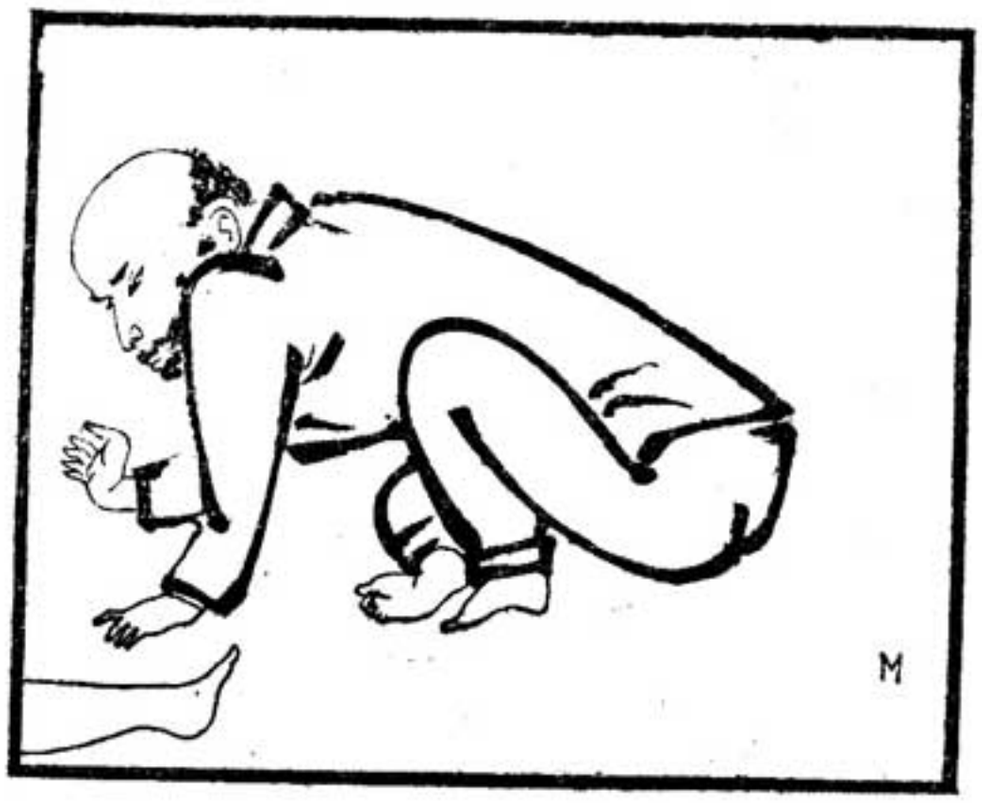
（5）変質的な性器狂癖、排泄物狂癖（スカタロジイ）などによるもの。

大体以上のように大別されると思うが、女性の場合は（3）のような事例はまず比較的に言つて少ないであろうし（4）では月経や妊娠などによる性交渉不能に近い場合に用いられる訳である。

2

愛する者を独占したいという欲望は、人間の本能であつて、フエラチオもこの範囲内で用いられる限りは無難である。すべてを許し合つたという極致がそこに現出するわけだ。（2）の場合の、フエラチオによつて感覚の亢進を期待するには或程度の熟練が必要である。そうした点からみて、初心者には、心理的効果の方が大きな幅を占めるものと言えよう。

性技巧の中でもフエラチオはやや特別なプレイであるから、性経験の少ない新妻などには、差恥や露出的快感などが微妙に作用するし夫の方にも彼女の全身的はじらいは例えようのない魅力となるのである。



もつとも熟練したフエラチオが、男女双方に大きな性的効果のあることは勿論である。

3

花街・魔窟などにはこのフエラチオを得意として繁昌する女もいるし、パリ娼婦のなかにはフエラチオ専門に訓練された見事な技術を持つた女もいる。

性技巧としてのフエラチオは大体以上の如き内容だが、老人や性的薄弱者に用いられる代替的技巧としてのフエラチオも、相当広く行われている、

性愛のプレイの、変態か非変態かを決めることはなかなか容易ではないが、一般的な常識論から言つて、本行為以外の特殊なプレイに習慣的に執着し本行為がなおざりにされ、それによつてオルガズムに達するような場合は、既にアブノーマルと言い得よう。

フエラチオの場合も、それに偏執して、それ以外ではオルガズムを覚えないような状態になれば、明瞭なアブの世界である。

こうなると、人によつては排泄物狂癖（スカタロジイ）、舐糞発情症（フラッグ＝ル）などという尚一層厄介な変質の世界に進行してゆく危険が多分にある。

女性の場合は、フエラチオによつて男性の精気を吸収しようという、サデイズム的心理が働くと云われているが、これも、フエラチオがよりマゾ的か、よりサヂ的かと云うことになると、問題は複雑であつて簡単に断定出来るものではない。

しかし、男性の女性に対するフエラチオの大半が、マゾヒズム心理の行動によるものだとする一般論にしたがえば、フエラチオからマゾの急激な進行が、より悪質なマゾヒズムプレイを要求してくるのは自然であり出発したマゾの治癒しがたい変質の世界が、そこには黒い口を開けて待つている訳である。

自己奉仕の姿

自慰症

1　ザーメンへの驚き

『神田のE町の交叉点の角にね、一寸したビルがあつて、その地下室が食糧品の市場だつた。昼間から電燈が灯つている薄暗い内部は、しよつちゆう揚物や漬物の匂いが充満していて、湿つてじめじめした通路はいかにも不潔だつた。

僕の家はそこの近所にあつたんだが、中学二年の時、使いの帰りに我慢出来なくなつて、その地下室の中の公衆便所に飛び込んだことがある。そんな汚ない市場の中の便所だから、やつぱり相当に汚なくて、それに地下室だからフリの通行人は利用しないし、なんとなく不気味な便所だつた。

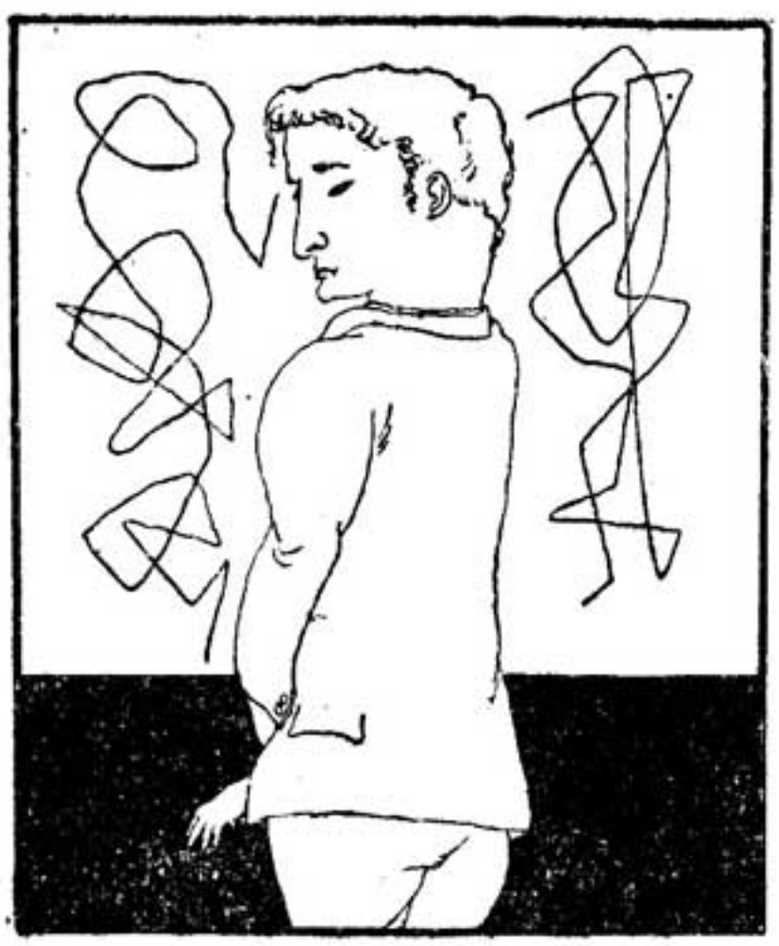
僕は大便所で用を足したんだが、用を済ましながらフトに人気もない前の壁を見ると、凄いワイセツな落書がびつたり書き込んであつた。それまで公衆便所で大便なぞ殆どしたことのない僕には、それが非常にショッキングに感じられた。そこには女体を描いた稚拙な絵もあれば、短い慾望の叫びだけを彫りつけたのもある。とに角かつては白かつた周囲の壁が落書で真つ黒に埋まつていた。

僕はたちまち猟奇心に捉えられて、用を足して終うと、その落書を隅から丹念に読みはじめたんだが、その時からそうした猥セツな文字を読むことに深い秘密な愉楽を覚えて終つたんだ。中学三年生でそろそろ大人の世界に好奇心を持ち出していた頃だし、家で使つている店員達の性的な話などを始終小耳にはさんでいたから、生理的には理解出来なくても、こうした欲望が人間にとつて実に深刻な公衆便所に憑かれて終つた。

毎日一回は必らず行つて、五ツ六ツ並んだ大便所の壁の落書を片つ端から読むことに熱中した。

そうしてこの便所の中で、僕はあの悪癖まで覚えて終つたんだ。無論はじめはその方法さえ知らなかつた。しかし自分一人で、なんとか考えついて終つたんだから、本能の力の強さを今になると少々怖い位に感じるね。

この公衆便所の記憶は、今もつて実になまなましく残つているが、その中でも特に印象が鮮明なのは、はじめてあのことを経験してその結果に、ザーメンを見た時だつた。



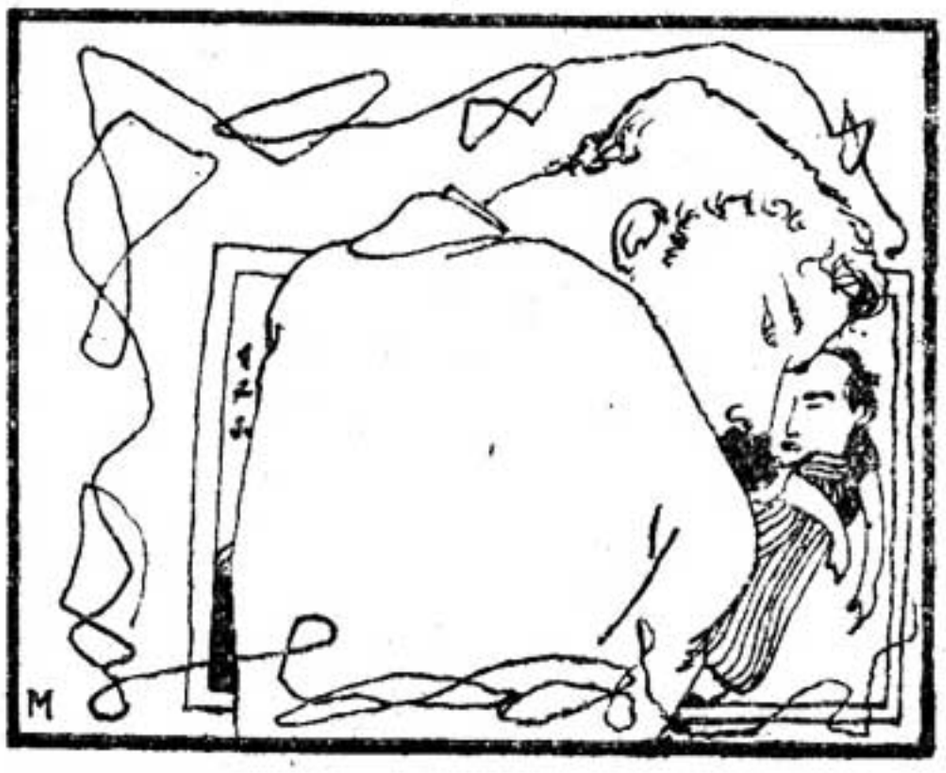
全く馬鹿らしいことだが、ザーメンの存在など、その頃の僕はちつとも知らなかつたんだからそのザーメンを見た時、ギョッとして、気絶でもするんじやないかと暫くの間は不安におびえていたもんだつた。

これは友人Kが、少年時にはじめて経験した時のことを、偽りなく語つてくれたものである。

つまり、オナニー第一期（初期）とも言うべき時代であつて、年上の女性

などに玩弄された場合は別にして、異性えの執着がそれ程具体的に現われずに、どちらかと言うと好奇心と本能的な排泄欲だけに動かされたものと云い得ようう。

この場合、女性を先に知つてから後にオナニーを覚えるものと、K君のような場合とでは、オナニーの意味もだいぶ違つてくるのである。



K君は『性典』なぞも読んだことがなく、殆ど性的には無智だつたから、自身のザーメンを見てその生理の秘密に驚愕したりしたのだろう

このオナニー第一期は、恐らく大半の青年男女が経験することで、過度なオナニズムに陥らぬ限り、自然な、人生の殆ど不可避的な出来事である。

2 第二期の症状

このオナニー第一期は、青年時代の晩期まで続く。

そうして病的な習癖でない限り、〝結婚〟という異性の独占によつて、オナニーから忘れるともなく遠去かる人が多い。

これも自然な現象であつて、性的な欲望は一応妻によつて吸収され、歓楽度の強烈な現実の夫婦生活は、精神の汚れるような秘密のオナニーをそこに必要としないからである。

また〝結婚〟に限らず、激しい〝恋愛〟によつて、オナニーの習癖を捨てる人がある。純粋な〝恋愛〟は否応なくその人間をプラトニックにして、陰微なオナニーの享楽にふけるような、気持の隙を失つてしまうためであろう。

しかし人生は複雑であつて、折角結婚しても、妻が（或いは夫）が病身であつたり、愛情が円満でなかつたり等の、種々な理由によつて、オナニー第二期とも言うべき習癖にふけらざるを得ない人も多い。

この時期になると、オナニーは明瞭な性の対照となり、技巧的になる。

なんらかの性的不満が、意識されているのだから、反射的に享楽心も深刻となるわけである。

もう一つの例である。M君という人の告白を次に記してみよう。

M君は三十四歳の官吏だが、妻君との間に子供が一人いる。彼の家庭は至極円満なのだが……。

『僕の妻は性的に一寸タンパクなところがあるのですよ。僕は、画や、本類を集めましたが。それから気に入つた女優の水着のプロマイドや、女の運動選手の写真なんか、丹念に集めて、枕元の手箱にギツシリ三つ位入つてます。その中から、その日その日の気の向くまゝ、色々取り出して、眺めるという訳です。

妻はそんな僕の習癖を薄々感づいているようですが、知らん顔していますね。

しかし、この絵や写真のコレクションも、暫くすると飽きて来て、はじめのような興奮を起さなくなるんです。近頃はその為に、何か無いか、何か無いかと街を懸命に探して歩く始末で、愈々俺もマニヤになつたかと、実は内心弱つているんです。

僕なんか今では、下手くそな本なんかより、女優さんの水着写真でもみていた方がさつぱ

りした心境になるのですが、その水着の写真だつて、夏以外にはなかなか気に入つたのは見つかりませんからね……なかなか人知れず苦心しています。』

以上M君の告白は明瞭に、オナニズムの第二期症状を示している。このM君の場合は妻君との間が愛情円満であつて、定期的な、交渉はちやんと保たれており、同君が言う程マニヤツクなものではないし、またマニヤツクであつても万が一にも犯罪的病癖などにはならないけれど、とに角、こうした第二期症状は、人によつては相当の危険区域にあるのだと言うことが出来る。

一歩間違うと、もつとも悪化したアブノーマル・オナニズムに亢進して、犯罪にまで形を変えることとなるからだ。

3　アブ・オナニズム

オナニーの第三期症状は、この〝アブ・オナニズム〟である。孤独で秘密な自瀆癖が、は兇暴な女体の殺傷、強姦などに発展してゆく例は非常に多い。一見、それはオナニーと普通に称されるものから姿を変えているが、その欲望の根元はやはりオナニズムの快感追究である場合が殆どである。

また過度なオナニーによつて招かれた、早漏や不能などが、性的嗜好を異常な歪めたのに変えて終う場合も多い。

ではオナニズムを出来るだけ軽微に喰止めるには、いつたいどうしたらよいか、という問題だが、これは結局、自制心を養いつつ趣味の向上を計り、長じては女性による性の発散に頼る以外に方法がなかろう。危険な第二期的症状のうちに、ノーマルな女性との性関係に自分を近づけるように努力することが、やはり平凡ながら一番確実な治療法だと思われる。

主に男性の場合だけを記す結果になつてしまつたが、大局は、女性の場合でもこれとそう変りはなかろう。

被虐の歓喜

マゾヒズム

―最大の苦痛は最大の快感に通ずる―

マゾヒズムは、オーストラリヤの小説家ザッヘル・マゾッホの名から出たもので、彼はその著作の中で倒錯した性欲を謳歌したばかりではなく、実際の生活でもそれを実行したばかりである。

この倒錯病癖は、相手から虐待されることを喜び、相手の暴行に服従することによつて、性的な快感、或は他の満足を得ようとするものである。又はそうした種類の光景を空想することを好み、かつその実現を渇望するのである。彼等のある者は、そうした行為なしには、普通の性生活は不可能であり、又ある者は、そうした被害のみを追求して、性行為そのものには、何等の関心も反応も示さぬ場合もある。

こうなると完全に色情は倒錯しているが、実はこの傾向はサデイズムと共に、常人でありつても、多かれ少かれ、そうした欲求を内蔵しているのである。従つて軽いものは、決してアブとは断じられない。

第三者の眼には滑稽きわまる行為が、その人にとつては切実な願望として、深刻に追求される場合が多い、例えば下女に懇願して、彼女の足指や足裏を犬のようにペロ〳〵舐めることによつて、無上の快感を覚えると云う中年男がいる。しかも、なるべくその女中が労働した跡の、汗や脂の染みた足を喜んだと云うのだから、よそ目には滑稽である。

又、知名な某画家は、若いモデルと二人で画室に閉じこもつてマゾ行為に耽ける。彼は大きな姿見の前に小さくなつてうずくまる。その彼の背に、若い裸体のモデルが腰をおろす。このモデルは、あらかじめ彼一流の好みによつて、人並すぐれて豊満な肉体の持主が選ばれているのである。こうして彼は一時間でも二時間でも、若い女体に押しひしがれた自分の姿を鏡に眺めながら、ニタ〳〵と満悦の笑みを洩らす。モデル女が彼には無関心に、鼻唄をうたつたり、編物をしたりすると、彼の快感は倍加したと云う。彼はこんな行為を繰返したが、それ以上性行為に及ぶことはなく、モデルには多額の謝礼金を支払うと云うのだから、マゾ行為としては、罪のない方であろう。

更に、この女性に押しつぶされたい——と熱望するつまり女性の椅子になりたい——。

マゾヒストの話も珍しいことではない。

元来男性にはサド傾向が強く、女性はマゾ的であると云われるのは2章にも述べたとほりである。

しかし近年文化社会が復雑化するにつれて、男性のマゾヒストが増加する傾向にあることが、注目されている。これは種々説明されているが、結局マゾヒズムは内攻したサデイズムとも云えるのであるから、本来外へ向けられるべきサデイズムが、その性格や環境等に制約されて、自分自身に向けられ、マゾ心理が生れるのであつて、決して奇異な現象ではなかろう。

谷崎潤一郎氏の作品で映画になつた「春琴抄」のお琴は、勝気でサヂックな美女であり、彼女のためには、自ら両眼を針で突いて盲目となる佐吉は、典型的なマゾヒストである。この場合は女主人と奉公人ではあるが、佐吉の隷属的な献身は既にノーマルな限界を越えている。

「富士子の足」は若い女の足に踏みつけられて狂喜する老人の物語である。頻死の床にある隠居が、富士子の足を額に乗せて貰ひ、「そうしてくれゝば、もうこのまゝ死んでも恨みはない」と喜悦するのである。

「痴人の愛」の主人公は、文字通り女性の馬になり、その女が他の男と情痴の限りを尽すのを眺めながら、マゾの血を沸かすのである。このようにアブノーマルな一連の優秀作品が生れ、しかも広く世間にもてはやされたと云う事実は、マゾの普遍性を物語る証左とも云えよう。

ジャン・ジャック・ルソーの「懺悔録」によ

ると、彼が甚だしいマゾヒストであつたことがわかる。八才の時に悪戯をして、美しい女性に臀部を打たれた際に快感を覚えてから、その時の亢奮が忘れられず、仕置きを受ける為に、わざ〳〵悪戯を繰返して、鞭打たれたと云う。

マゾの願望が、このように幼時から現われることは注目すべきで、これと同じく幼時の折檻からマゾ心理が芽生える例は非常に多い。また戦前は、海軍における懲罰に、臀部に対する強打が頻繁に行はれたため、遂にマゾにとりつかれたと述懐する者が少くないのであるが、このように懲罰や苦行の習慣が、マゾヒストに仕立上げる例は枚挙にいとまがない。

昔、カトリック教では煩悩を忘れるために、生身を虐げてひどい苦行を行つた。殊に尼院などでは満座の中で両手を縛つて臀部を露出し、杖や鞭で打擲したのだが、その結果は鬱積した彼女たちの性本能が異常に亢進し、セックスの代償行為としてて、こうした苦行を喜ぶようにさえなつたのである。

彼女たちのある者は、鞭打たれながら、彼女が日頃憧れていた聖像と抱擁する幻覚に襲はれ夢中であつたと云はれる。この結果、こうした「苦行」は禁止されたと云うことだが、この場合のように、性的に満たされぬ女性たちも又、往々にしてマゾに陥入り易い。最もいまわしい筈の、強姦、暴行に、内心憧れる女性が存在することは、こんなところにもその原因があるのであらうか。

これは末亡人とか老嬢に多いようだが、彼女たちの性的不満が、こうしたマゾヒスティクな願望に狩り立てるのである。この欲求が嵩じた結果　ありもしない暴行事件をデッチ上げて、世間を騒がせた良家の子女もある。このようにマゾヒズムと云つても、その個人の種々の条件によつて、実にさまざまな形態となつてあらわれるのである。

見るサディズム

窃視症

―隠せば隠すほど人の秘密を知りたい―

変人で有名な永井荷風氏が、夜になると間借先の夫婦者の寝室を覗きこむので、その若い夫婦は毎夜閉口したと云うことだ。だから彼の作品には「のぞき」の場面が非常に多い、一再ならず濃厚な窃視の描写が繰返えされる。これは荷風ばかりではない。西鶴の「好色一代男」にもあるし、最近では舟橋聖一の作品でもチョイ〳〵見掛ける。僕は、なにもこんな大家の名前を持出して、自分の異常性癖を弁護しようとしているのではない。

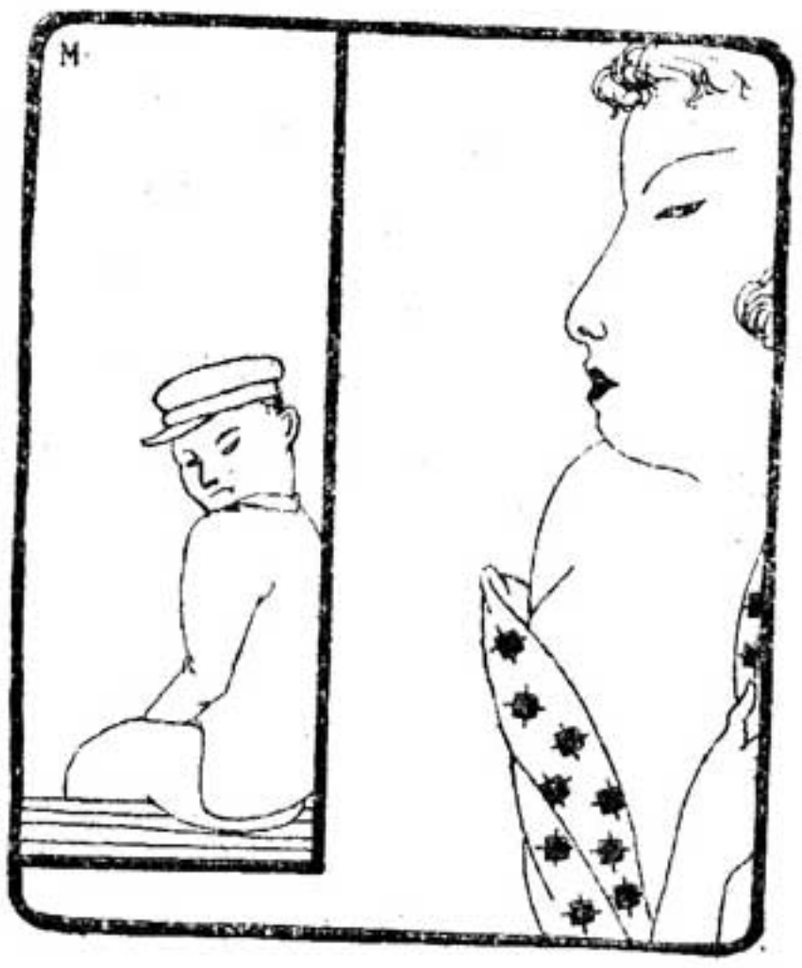
「正当な理由がなくて、人の住居、浴場、更衣場、便所その他、人が通常衣服をつけないでいるような場所をひそかにのぞき見た者」に拘留又は科料に処する――。と、軽犯罪法に指摘されるまでもなく、僕だつて自分の窃視癖を、決して品のいゝ上等の趣味だとは思つていない。

否、人一倍恥じてさえいるのだ。なんとかしてこの悪癖から抜け出したいと、血がにじむような苦悶を繰返えしている。これは僕たちの仲間に共通の心理ではないか……。恥じながら、反省しながら、しかも尚その破廉恥な行為を犯さずには居られない、この僕自身の内部から溢き上つてくる欲求の強烈さに、僕は時に呆然とすることさえあるのだ……。

思い余つて、精神科の医者に洗いざらい打明けて相談したこともある。しかし結果は一層みじめだつた。医者は僕の症状に対して、何の理解もなかつた。奇妙な薄笑いを浮かべて、

「まあ、隠せば隠くすほど、人の秘密を知りたいと云う心理が起るのは、有りがちのことですがね。しかし、「出歯亀」のような無教養な人間は止むを得ぬとしても、貴方のように最高学府を出たインテリが、こうした衝動を抑制出来ないと云うのはどうも……」

それでも彼は僕の現在の性癖が、幼時からの余りに厳格な家庭に育つて、性的にまつたく禁圧されていた反動であろうと、指摘してくれた。まつたく自然な性的欲望は、頭から強圧的に押えつけようとしたつて、それで消えてしまうのではないのだ。それは必ず鬱積して、歪んだ不自然な形で現われる。



僕の両親はカトリックの信者で、殊に母親は狂熱に近いピウリタンだつた。姉妹もない一人つ子の僕は、司法家の父と、一年中喪服のような地味な装いをしている、神経質な母との家庭に育つた。華やかな、なまめいた色彩など、皆無だつたのだ。小学校のうちは無事で、級友の姉さんが着替えをしていたらしいのだが、生れて始めて異性の身体を見た僕にとつては、それは到底この世のものとは思えぬほど、美しくも又、神秘的だつたのだ。それが、僕の病歴の第一頁になろうとは！

それから暫くの間、僕はあの瞬間の印象を追つては、恍惚と我を忘れた。そうして想い出すだけでも、身体中がうづくような、不思議な空気につつまれたのだ。

この予測もしなかつた、瞬時の出来事で、僕の心の一部が侵されていくとは、人間とは余りにもモロイものである。

それから間もなく、僕の家に若い女中が来てからは、僕の関心はすつかり彼女にひきつけられてしまつた。あの白い腹部の印象が頭に浮かぶと、もう勉強どころではないのだ。憑かれたようにウロ〳〵と、眼を光らせるのである。彼女が入浴中だと思うと、それはまるで火がついたような、いたゝまれない気持になるのだ。

女中は田舎育ちで馴れているのか、又は僕が年少だつたからか、半裸の格好を見られても一向に平気だつた。着物の裾をまだ下さぬうちに、便所の戸をあけて出てくることもあつてしまうのではないのだ。

事だつた。中学に入つて間もなく、僕は級友の家に遊びに行つて、意外な光景をかい間見た。便所に行こうとして廊下を歩いていると傍の部屋の障子が僅かばかり開いていて、華美な模様の長襦袢がヒラリとひろがり、その中の真白な身体が、まるで真珠のように光り輝いて僕の眼を射たのだ。

つた。

その内に、僕のこんな行動が両親に知れたから大変だつた。母はヒステリックに泣くし、父からは手ひどい折檻を受けた。それでも窃視癖が癒らぬと知ると、両親は罪もない女中に暇を出し、僕の一挙一動に厳重な監視を始めた。

あの時期の、朝から晩まで頭を押えつけられたような、重苦しくみじめな気持を、僕は忘れることが出来ない。僕は遂に衝動を押えきれず、頭がくらくなつてしまつた。美しい女性の薄着姿や、又は入浴中の姿態などを空想しながら……。空想中の女性は、或る時は隣家の若夫人だつたり、バスの車掌だつたりした。雑誌などで結婚式の写真を見たりすると、その生活を隣室から覗いてでもいるような錯覚にさえ溺れたのだ。

大学時代には、もう僕の窃視癖は発展していた。電車の窓から、或は公園、旅館、娼家、この病癖を満たす為にはあらゆる場所に出掛けた。そして、共通の異常性癖を持つ幾人かの同志にも出逢つた。

「窃視と云うと、まるで淫猥きわまる悪事のように罵倒するが、人間から「見る興味」をとり去ることが出来ぬとすれば、見せてならぬものは断じて不用意であつてはならぬ訳だ。

るが、そんな奴等が清浄な生活をしているかと思うと大間違いなんだ。そんな奴等は窃視慾を無意識に抑圧しているから、心理的には一層卑猥になる。奴等こそ不潔な偽善者なんだ」

と、悲憤慷慨する青年もいる。みんな僕の痛ましい同志なのだ。

僕は原始時代のように、明るい太陽の下で、全裸の男女が嬉々として遊び戯れる場面を空想する。そんな社会なら僕のように哀れな「覗き男」は存在しないのだろうに。

そんな愉快な想像をするかと思えば逆に全くやりきれない淋しさにせめつけられてくる時もある。

しかし、現実の僕は、日夜窃視の対象を求めては、街を彷徨せずには居られないのだ。気取つた奥様や、若い令嬢たちが、自分の部屋ではどんなに憶面もない赤裸々な姿態を見せることか……。誰はばかることなく繰返えされる情痴図のかげに、暗く光る窃視者の瞳があることを、世間の人は知らないのであろうか。

人間から「見る興味」をとり去ることが出来ぬとすれば、見せてならぬものは断じて不用意であつてはならぬ訳だ。

むせび泣く女体

レスボス

―十八歳の女子高校生と助教授である叔父との会話―

叔父　やあ、暫く会はない間に凄く綺麗になつたな。しかし少し痩せたんじやない？

S子　そうか知ら……。この頃、夜眠れないことがあるのよ。

叔父　ふーん。さてはいよ〳〵恋人でも出現したのかな？

S子　恋人？　そうかもしれない。フ、。

叔父　コラ、笑つてゴマ化しちやいけない。最近君は外出が多い。落着かない。女名前だが手紙が頻繁に来るつて云うじやないか。恋愛事件らしいつて、親爺がひどく心配しているぞ。

S子　あゝわかつた。叔父様つたら、父に頬まれて、私を打診するつもりなのね？　だけど、私のことなら、ちつとも心配なくつてよ。恋愛ツたつて、私たち、そんないやらしい、醜悪なんじやないわ！

叔父　ふむ、そりや結構だが、相手は一体どんな男だい？

S子　まあ！　男だなんて！

叔父　ふーむ、これは驚いたな、じやあ君が熱をあげてる相手は同性かい？　つまりレスボスつてわけだね？

S子　そう。だから御心配いりません。

叔父　いやいや、レスボスと聞いて一層心配になつたよ。異性とのことなら、君も満十八歳だし、当り前だがね。同性愛となるとこれは不自然でアブだからな。

S子　まあ、アブですつて？

叔父　そうさ。生理学から云つたつて、不条理だろう？　男女の結合は自然だが、ことさら相合う箸のない同性を対象に選ぶ心理は不可解だね。

S子　なんでもよくつてよ。私は幸福なんだから……

叔父　なるほどね。S子はその女史の眼鏡に叶つて、熱愛されているわけだな。ところで、その女史の人相を叔父さんが当て見ようか……。まず、痩せて身長は高い方だな。筋骨質で乳房も小さく、腰も細つそりしている。声が太くて、どちらかと云えば毛深い質じやないか？

S子　まあ叔父さま、そつくりよ！　見てつてそうだよ。工場の寄宿舎や女囚刑務所とは云つたように……。

S子　まあ、きたならしいわ。

叔父　そこなんだよ。これは正常なものではないんだ。露骨に云えば、もともと同性間で肉体的に満足出来る筈がないのだからね。

S子　そんな極端な……。しかしお姉様は素晴しいわ。叔父様にはわかんないのよ。

叔父　うーむ。君たちの関係は相当進行しているらしいな。その人はクラスメート？

S子　いゝえ、高校の時の音楽の先生。二十七よ。若い時に無理にお嫁に行かされたのだけれど、その晩逃げて帰つたのですつて。男性なんて醜悪だから、一生独身で暮すつてよ。同性愛に陥口癖のように云つてらつしやるわ。私のために、わざわざ私の家の近くの下宿に移つていらつしやつたの……

叔父　いや、それで分つたよ。同性愛に入るには、やはりいろ〳〵な動機があるが、第一はさつき説明した、異性に飢えた揚句、手近の同性を対象にする、いわば単純なレスボスだが、これは原因がのぞかれゝば、つまり環境が変れば自然に解消する。ところが、世の中には、生れながらに、レスボスに耽けらざるを得ないような女性がいるんだね。君はサツフオを知つてるかい？

S子　いえゝ

叔父　頼りない同性愛讃美者だな、サツフ

オはギリシヤ時代の女詩人だが、彼女の周囲には女友達が群り集つた。そも〳〵レスボスの名称だつて、サツフオが当時レスボス島に住んでいたからで生れたのさ。サツフイズムと云う学術語だつてある。ところで、このサツフオは女性には違いないんだが、ひどく男性的な女性だつたらしい。つまり人間は誰しも、何十%かの男性性と何十%かの女性性をもつて生れるんだが、彼女には普通の女性より男性の要素が多かつたのだね。いわゆる中性さ。こうなると体格も性質もひどく男性に近くなつて、性愛の対象にも自然に同性を選ぶようになる。

S子　まあひどい。お姉様を中性だなんて……。

叔父　まあ聞きなさい。サツフオばかりじやない。ハンガリーのサロルタ伯爵夫人は、いつも男装しているので有名だつたが、娘をあさつては同棲する。それもレスボス用の器具を使つてまつたくの亭主気取だつたらしい。もちろんレスボスにはこうした器具類が盛んに使用される。江戸時代には「張型」とか「御用のもの」と称した。今はそれが、随分精巧なものが出来ていて、まあ あんなものを使つていれば男性なんか不用になるだろうね。

S子　いやな叔父さまは社会学者でなく生物学者なのね。

叔父　おいおい、泣くことはないよ。いやわ、叔父さまは婦人科医だからね、ところで君たち、大部親密らしいけど、つまり、因体的にも愛し合つてるのだね？

S子　そんなこと知らないわ……。私、ほんとに御姉様を愛してるんですもの。お姉様とは離れられないわ（涙ぐむ）

叔父　おいおい、泣くことはないよ。いやS子のようなデリカでおとなしいお嬢さんには、ゴツゴツした男性との交際は一寸無理だろうね。男性がなんとなく粗野で不潔なものに見える、S子のような精神的時期が、大低の女性にあるんだから、そんなに、深刻に悩んだり泣いたりすることはないんだ。ところでレスボスの行為は主に相互の抱擁による愛撫や、口唇によるプレイ、それからさつき云つた器具類の使用などだが、君たちはどうなの？

S子　しらないツ！

叔父　ハハハ、しかしね。また脅かして悪いようだけど、レスボスもいゝが、それを繰返えしていると、将来、不感症になる怖れがあるんだよ。

S子……？

叔父　つまりね。快感はあつても、レスボスの場合は何としても方法的に不健康なんだ。それで、ノーマルなことに必要なポルチオ性感が失われて、将来結婚して正常な性生活に入つても、満足出来なくなつてしまう。こんな風になると悲劇だね。そんなにびくびくと一緒にいるんだが、こうした生理の知く悩むことはないんだが、こうした生理の知識だけはよく頭に入れておいた方がいゝよ。

S子　いやねえ……、私もだん〳〵中性みたいになるのかしら——。

叔父　いや、S子の同性愛の原因は違う。さつきも言つたように処女には、異性愛に入る前の段階に、同性に対して興味を持つ時期があるんだ。殊に君はママが早く亡くなつたから、人一倍年長の同性に対する憧憬が強かつたんだ。これは母親定着つて云うんだが、そんな時に女史が現われて、強引に口説かれたから、完全にレスボス患者になつたつて云うわけさ。

S子　でも叔父様、私、もう駄目なのね。ノーマルな結婚なんて出来つこないわね……。

叔父　ハハ、ハハ、そんなことはないさ。体質的にまつたく中性に近い人は別として、普通は若い時にレスボスに熱をあげた連中でも、時期がくると自然に解消して、正常な結婚に落着くことになる。「風知草」であんなに夫婦愛を描いた宮本百合子だつて、若い時にはレスボスの女友達と二人で、欧洲まで行つて熱をあげている。最も同じ女流作家の吉屋信子なんぞは、今だに独身暮しだが、こんな女性はまづ少いようだ。

今日は一寸君を脅かしたけど、そう心配することもないんだ。女史とのお熱がさめたら、今度は男性のいゝ所を発見するようせいぜい努めてみるんだね。ハハ、、、。

男と男の世界

ソドミー

「女性は男が命をかけて愛するには餘りにも愚かしいもの」（石川達三）——近頃の学問では、男色は、われわれの何人もがもつているところの自然な愛情であるということになつている。つまり、われわれは根本的に両性的であり、生れながらに雌雄両体なのだ。何人といえども自己と同じ性に一〇〇パーセント属していない。そこで各自の体内の他の異性分が、他の同性に向つて恋情をもつようになるのは、きわめて当然であつて、これが同性愛と呼ばれるものだ。

しかし、同性愛の力にも異常と目せられるものもある。ここでは男子の場合についていうと、体内のメスの性分が、自分と同じ雄性つまりオスの性分よりも、断然すぐれて豊かなものであつて、ウールニング、エツフエミナチオ（女性的男子）アンドロギニー（女化）等がそれである。又、後天的なものとしてはエヴイラチオ（男性脱化）がある。

ウールニングとは、男性でありながら同性に対して女性的情念をもつグループ、エツフエミナチオとは、ウールニングの進んだものと思えばよい。アンドロギニーは、更に一段階進んだもので、精神的のみならず身体的にも女性に近似している。だから同性とは全く異つたものになつているのだ。又、エヴイラチオとは、精神的人格の変化が起つて、永久に転換するに至つたものである。

ウールニングは、異常といつても、その異常は単に性愛生活の上だけにとどまり、性格や全人格はそれほど犯されていず、ノーマル

なものが多い。

で、その愛の生活について云うと、ウールニングは、自らが女性的情念となつているのだから、同性との恋愛が、女性が男性に対するのとすこしも変りはない。その生活的対象となる男性は、大半が、いわゆる逞しい体格、あるいは肥満した体軀を具えたものである。だから、スポーツマン、筋肉労働者、兵隊などが、しばしばかれらの好みの対象となる。ヤサオトコ型、チゴサン型は、その好むところでない。

この傾向の彼等は女に対しては、どんな美人にでも何の感興も有しないのである。中には、むしろ嫌うものもある。あるウールニングのごときは、「女とはベタベタ白粉を塗つた。××の臭い動物」とまで話して、はなはだしくこれを嫌忘している。

特に女性の裸体は、ウールニングの最も嫌悪するものだ。豊大な臀部、盛り上つた乳房細い顔、脂肪ぎつた柔らかな肌等々と、かれらは脅毛を振うのである。だからストリップの観客や女湯覗きには、ウールニングはいないわけだ。この道では人格者に価するであろう。

エツフエミナチオ（女性的男子）は、幼少時にすでにその特徴が現れることが多い。例えば、コドモのときから女の児の着物をつけることを好み、女の児と遊び、人形を弄ぶ等々、遊戯にしてもママゴト、マリツキ、唱歌などを好んで、男の児の遊戯はかえりみようとしないのである。やや高じては、進んで着物の着方、言葉、動作等々すべて女性的になろうとしているものが少くない。

したがつて、それらにとつて女装は最も好むところだ。

自らが「女」になつているのだから、その愛の対象は、いわゆる男らしい男である。これに多大の愛情を傾ける。ここで興味のあることは、エツフエミナチオは、その愛する同性との恋愛を、単にプラトニツクにとどめているものが少くない。

次にアンドロギユー（女化）は、同性愛の最も高度なもの、医学上からいえば最も重症なものといえよう。女化の男性には、性格や体格や体質まで女性的になつていることが多い。乳膨らみ、臀大きく、成人してもヒゲ生えず、ノドチンコが突出してない等々々。婚羞（はにかみ）は同性に対してのみ起り、異性に対して起らない。

エヴイラチオ（男性脱化）は後天性同性愛の著しいものであつて、これには、インポテンツが伴う。けれども性感は存在するのだから、この満足を同性に向つて求めるようになるのである。

江戸末期から昭和初期にかけての名優沢村田之助が女装して上野東叡山の高僧とかずか

ずの同性愛のタネをまいたことは有名である。彼は女装に対しても狂崇的で、明治五、六年のころ、米医ヘボンの治療を受けて、両脚を切断した後でさえも、なお常時女姿をつづけていたということである。

大正期の中堅作家であつた綿貫六助の同性愛なども、異常性をおびているといえばいえる。彼は昔の陸軍大尉とか中尉という出の人であるだけ、かなり高度のウールニングで、しかもその対象は体軀頑丈な老人――それも労働者風の老爺を好んだ。

彼が好める老爺に対する熱情というものは、糟糠の奥さんと離別して、その老爺と同棲するにいたるほどであつた。そうして自己の狂信的の同性愛を、彼は作品の上に包むことなく披瀝している。

現代にとんでは、歌舞伎界の名女形中村歌右衛門が、ウールニングとしてよく人の知るところだ。彼が福助を名乗つていた二十歳ころ、阪東好太郎だつたかに失恋して、家出騒ぎを起したことは、当時の新聞にビッグ・ニュースとしてとりあげられたものである。歌右衛門の私生活は殆ど〝女性〟だという。そこまで徹してこそ、舞台におけるあの名演伎となつて現われるのだろう。

識者によれば、ソドミアの数は日本だけでも百万もしくは百五十万に上るとか。そしてますます殖えるであろうと予想されている。

これは何故であろうか？　私は思うに、一つには女性に対する失望感、そして女性からの逃避感がそうさせるのではないだろうか。

「女性は男が命をかけて愛するには余りにも愚かしいもの」というのが一般の男性における女性観らしい。しかも戦後の女性の〝男女同権ぶり〟〝アプレぶり〟なるや、男性にとつては目に余るものがある。こんな女と恋愛するよりは男の方がというわけで男色流行の風潮を来さしめたのであろうと思われる。

男同志ならば気も合うし、互いに何もかもよく知りつくしている。ツーといえばカーで女との恋愛のようにまどろこしくない。サツパリしている。人目にも立たない。其他等々の美点長所が同性愛に挙げられるわけである。

暴力による姦淫

☆　☆

―小平義雄の精神鑑定―

暴力による姦淫を、文字はともあれ、強姦症と呼んでみよう。強姦症とは、女性との性行為に、暴行を以て満足しようという、異常性欲である。この患者は、暴力を用いなくてもすむ場合でも、暴行によろうとする。

このような心理は、夫婦間にさえ見られるもので、この場合は完全に性愛と云へる。異常性欲としての強姦症は、相手に対する攻撃欲、破壊欲が、その心因をなしている。

強姦症の男が女を犯す場合は、性的飢餓からというよりも、未知の女（既知の場合もあるが）をわがものにしてやろうとの好奇心、征服欲と、暴力行為によつて、自らの喜悦を昂めようとの心理らしい。このことは、内村裕之博士の「小平義雄の精神鑑定記録」にも窺われる。

まず第一に、彼が精神病学でいう異常性格であることだ。それはどんな種類のものかというと、情緒が不安定で、容易に機嫌と注意が転換し、またひとたび不機嫌なり欲望が生じると、これを抑制できないで、爆発的に激しい言動となつて発散される。そして発散された自分の非行に対して反省と悔悟がない。および性欲衝動の異常抗進がある等々。

彼の性欲は、決して早熟だとはいえない。

女を知つたのは十八歳以後である。しかし青春期以後になると、軍隊生活の影響、殊に戦争という特殊環境が手伝つて、彼の性生活は躍進的発展をした。この時期以来、小平は、沢山の女と交つたのである。すさんだ戦闘、永い航海——これは若い男を性的放縦に導く無二の条件だつたのだ。

除隊後も、彼の女関係は繁かつた。その後殺人罪を犯して刑務所に送られたが、六年半の仮出獄後は、生来の好色性に、受刑中の禁欲をとりかえそうとの意志が伴つて小平の性的放縦は本格的のものとなり、妻以外の女ともしばしば情を交えて、そのありあまる性欲を補つたという。しかも彼の場合は同じ女と二度三度と馴染まないことである。

有名な強姦狂としてアメリカのアール・ネルソンという男が知られている。彼の犯罪が行われたのは、一九二六年の二月から翌年の七月までで、その一年半の間に、二十一人の女を暴行殺害したのである。

彼女のやりかたは、多くは貸間札を出した家へ、部屋を借りに来たもののような風を装つて、女一人と見ると、突然相手に襲いかかるのである。白昼であろうと何であろうとおかまいなしだ。彼の病的は即座に遂行され、あまつさえかならず絞殺されるのだ。

彼の犯罪の足跡は、アメリカ太平洋沿岸の都市を出発点として、数千マイルに亘つているという。アメリカ大陸を股にかけての強姦症患者である。

ネルソンは年令三十歳、巨大な手掌と黒人型の容貌をもつた碧眼の男。一度結婚したことがあるが、妻はネルソンの惨虐性にオソレをなして逃げだしたということだ。

彼の犯行が、あまりに惨忍至極だつたのでは或は精神に異常があるのではないかとて、精神鑑定したが、常人とすこしも異うことなく、精神病者でないことが明かとなつた。ネルソンは〝人間ゴリラ〟と異名された。

田村博士の「小平義雄の精神鑑定記録」によると、彼は自らの犯行の手段について、こんなことを述べている。

「此方から接近します時は、これを物にしようという気持で一杯になります。それで女の歓心を買うために出たらめなうまいことを言うのです。話しかけて失敗したことはありません。朝家を出る時は買出しのつもりで出かけるのです。また、女を見て直ぐ劣情を起すわけでもありません。話して親しくなり、あれは俺の言う事を聞くなと思うと……。女が慣れ慣れしくすると劣情が起つて来るのです。女と二人で歩きながら冗談を言い合つていると、女は水戸光子のようなあの〝男泣かせ〟の表情をするんですよ」

云々と。つまり、被害者の女の方から据膳をすえているのだ。これでは小平たらずとも、男なら〝劣情〟を覚えるだろう。

突然襲われた場合にしても、ビックリし、恐怖はするだろうが、その中にも手はあると思う。

バタバタとうるさく騒ぐと、そのうろたえた姿が、強姦狂の男には、かえつて欲情が煽りたてられるものだ。ある旅館の女中は、痴漢に襲われたときは、悠々と身を任せるようなふりをしながら、最後のドタン場で、突如男の急所を握りしめて、逆に痴漢をノックアウトしたという。

或人は、こんな場合、死を賭しても抵抗しようというが、強姦狂には、女の抵抗にあくまで反撃して征服しようという気持が強いから、ヘタな抵抗するよりも、むしろこの女中のようなテクニックで相手をごまかし、イザという最後の場で、突風的に反撃に出る方が奏効的だと思うのである。

ツバメ型というもの

☆　☆　☆

—うらやましいかも知れぬお話—

「若いツバメ」と云う呼称の由来は、青踏社を興して新女性運動を行つた、平塚らいてう女史が、その年少の愛人奥村氏を指した愛称に始まるらしい。それ以来この「若いツバメ」なる流行語は、またたく間に一世を風びするの感があつた。この言葉の持つ新時代的な、甘いエロチシズムが、世人の性感を微妙にくすぐつたからでもあろう。

如何にも世間一般はこの「ツバメ」なる呼称を、年長の女性から、母性愛に近い愛護を受ける、独立心のない若い青年の生態と解して、多少の軽蔑と羨望をこめていたらしい。

ところで、女流文壇に特異な足跡を残した故長谷川時雨女史の夫が、女史よりはるかに年少の大衆作家三上於菟吉氏であつたことは、人の知るところ。しかしこの「若いツバメ」は、決して生優しい甘つちよろいツバメではない。連日連夜家を明け、美人を擁して酒びたりになることなど平気の平左。それが嵩ずると遂に十日も二十日も雲かくれして、行方不明になつてしまう。さすがの時雨女史もしびれを切らして、

「三上於菟吉、居所知らせ」

と、新聞にしばしば広告を出したことは有名な話である。

こうなると年少の夫だつて、ひどく手古ずるタイラントでもある。もう一つこの範疇に入る夫に、直木三十五がいる。夫人寿満子は彼が早稲田の二年の時の、学友の叔母さんに当る女性で、彼女の方から強制されての同棲と云うからには、先ず典型的なツバメと云えるが、事実は彼の方が型破りの暴君だつたことは周知の事実である。

最初にこうした、ツバメらしからぬ男性ばかり並べ立てたが、どうも、夫の方が年少であるからと云つて、それが直ちにアブと解してよいか、これは大いに疑問がある。

ツバメと云う呼称こそ当世語だか、年長の妻と云うのは大昔から存在した。殊に戦国時代の武将など、殆どが政略結婚だから、妻の方が五ツ六ツ年長の場合などザラである。最近でも韓国の田舎などでは夫が小学生で、妻が十七八歳。まるで子守が乳母さんのようにバメではない。

夫を育てていることも珍しくない。こんな夫婦は、まるつきり当人たちの意志にかかわりなく、家と家との便宜上の結合だから、性欲的にアブ味は全然介入していない。少く共当人同志をアブと見なすことはない。

又、たまたま年長の女性と、年少の男性の間に、純粋な愛情が成立して結ばれる場合がある。これも我々の周囲に珍しいことではなく、これも決してアブとは感じられない。

問題は生活力もなく、或は自分より知性も低く、しかも年少の男性を、愛さずには居られない女性の場合である。又同時に、年下の女性には何の関心もなく、ただ年上の女性に愛されたい、甘えたいと云う男の心理である。こうなると確かに色情倒錯と云つてよい。男性と女性の本来の特質が、ここでは明らかに顚倒しているからである。

名前を出せば、銀座名物として知られる、「バー・」のマダム。もう四十を二ツ三ツも越した姥桜だが、ますます妖艶な脂が乗つて、お盛んなことだ。このマダムは実際にてのツバメ喰い、十五六の白服のボーイから、売出しの映画俳優、バーテン、学生。とにかくいづれも二十五、四歳ばかり。次から次にアパートに引きずり込むのだから凄じい。しかも店の売上を惜気もなくこのツバメたちに入れ揚げて、ねだられるままに

「あいよ、あいよ」

と、眼尻を下げて喜んでいる。

どんなに金持の上客に口説かれても、ひどく素つ気なくて見向きもしなくなつてしまう。最近では男前のいい一つには、男性に対する優越感の作用もあろにひつかかつていると云う噂が、若い歌舞伎役者を寵愛した心理に通じるらヤユすると、艶然として、

「だつてさ、ホルモンの補給や、ホルモン異状の関係かもしれない。が、んかじや意味ないもの」

と、うそぶいている。このホルモン注射のつもりだかどのではないが、異常性欲にはとする無意識な劣等感、羨望が、逆に自分がはばかれるが、某財閥の令夫人。この夫人の夫は養子だと云うが、我儘のはアルバイト学生救済と称して、身近に若い大学生ばかりを集めての御乱行である。この夫人はもう五十歳だと云うが厚化粧で、学生をお供に、シャナリ〳〵と銀ブラなどの姿をよく見掛ける。これなど、更年期女性の焦燥

この種の女性には、また無意識な去勢コムプレクスが働いていると、見えることも出来る。つまり、男性を自己より優位なものとする無意識な劣等感、羨望が、逆に自分が男性よりも優位にとつて代ろうとする欲求となつて現はれるのである。

その結果として、年少の愛人を、自分の意のままに操縦することに、満足、快感を覚える。

ある女性は家庭が貧しかつたため、十三四

現在は十三をこえた年増だが、十代や二十二三迄の若い青年を見ると、誘惑せずに居られないと云う。これも復讐心理を伴った去勢コムプレクスの一つであろう。

娼妓たちが童貞を珍重する心理も又、これに通じる。

前記の長谷川時雨女史もそうだが、いわゆる「姉様女房」と呼ばれるタイプの女性に働いているのは、母息子コムプレクスである。元来、女性には母性的な愛情の作用があつて、子供のない場合など、その心理が夫や愛人に対して働きかける。異性に対して、逆にまるで子供の面倒でも見るように、愛情をそそぐのである。これも度を越すと、色情倒錯と見なさざるを得ない。

以上は年長の女性の心理解剖だが、反対にツバメの男性はと云えば、それが純然たる利害による隷属であれば、決してアブではない。「若いツバメ」と呼ばれる男性には、こうした経済的な取引による結合が、大多数であろうと思はれる。しかし、これ又年少の異性には全然性欲を感せず、ひたすら年長の女性にのみ魅されると云うのではない。こうした男性の場合にも、あきらかに、母息子コンプレクスが働いているのである。

これは早く実母に別れたり、姉妹のない男性に有りがちと云はれている。軽度の母息子コンプレクスは、割合に例が多く、無意識の裡に母親似の恋人を選ぶ青年も少くない。

性的愛玩の心

フエチシズム

―集める趣味は誰れにでもある―

これは前二者とは全く関係のない、単純な物質に対するフエチシズムで、その物質の多くは毛皮、ビロード、絹布などが対象となるようだ。

四　動物に対するフエチシズム。

これは動物そのものというよりも、対象は動物の毛皮であつて、つまり触覚的なフエチシズムである。

歳の頃から色街に売られ、しかも多く五十六十の老人相手に強いられて暮した。

れと、病的のそれとがある。そしてその間にはたえず流動状態があつて、どこから病的になるのか、どこまでが正常なのかその境界を定めることができない。

フエチシズムは、大体次の四つの型に大別される。

一　女性の肉体の一部がフエチツシュ（魅惑の対象物）となるもの。

たとえば女の髪、手、乳房、脚（足）臀などに対する狂崇である。

二　女性の衣服の一片、あるいはその持物がフエチツシュとなるもの。

これは女の着けている下着とか下穿、靴下、あるいは履物、ハンカチーフなどに対する狂愛。

三　一定の物質がフエチツシュとなるもの。

第一のグループ――この病的なものでは、蠱惑の対象である女の肉体の一部に対する狂崇で、驚くほど集中的であり強度であり、その女性の他のすべての部分を消滅し、女性のあらゆる色情的価値をゼロにしてしまい、フエチツシユ部だけが大きくクローズ・アップされる。女性との肉体的交りなどは、そのフエチシストにとつては、全然問題の外にあるのだ。

外国で多いのは、手フエチシズム、髪フエチシズムなどで、足フエチシズムは比較的少ない。中には鼻フエチシズムなんてのもある。

日本には足フエチシズムがなかなか多いことは、あぶな絵などによつて見ても明かだ。正常なフエチシズムとしては、何ンといつても臀部フエチシズム、乳房フエチシズムなどが首位であろう。

興味あるものは、ビツコの足に対するフエチシズムというのがある。普通の女には少しも昂奮を覚えないが、ビツコやガニ足の女にはトテツもなくエキサイトされるというのだ。ホオゼ狂愛などでも勿論そうであるし、腹物フエチシズムなどでも、その対象物は、なるべく汚れて、足の臭いの浸みた下駄や靴が択ばれる。

次に第二のグループである。

又、フエチシズムは、他の異常性欲、たとえばサデイズムとかマゾヒズムの要素を伴うことが多い。こういう少年があつた。

それは理髪店の小僧なのだが、十七歳のとき兄弟子に恋人を奪われたことから端を発して女に対する復讐の念に燃えた。しかし気の弱いタチなので、直接女性に危害を加えることなどできない。そこで女の着物にその的が向けられ、以来諸所の奉公先で、女の綺麗な着物さえ見ると、掻払つて来てはそれにシヤア〳〵と放尿した。そして、いつかそのことに、快を感ずるようになつたというのである。これなど、サザイズムの混入したフエチシズムである。

最後の第三グループおよび第四グループが、普通の場合でも女性の衣服や装身具は、男の性欲を刺戟することがよくある。女性の衣服は、女性の皮膚のようにさえ感じられることがある。それほど女性の衣服と女性とは身近なのだ。女性の衣服に対するフエチシズムが少くないことは無理もないと云えよう。

このグループで、日本で最も多いのは、女性のホオゼ（腰巻）に対する狂愛である。昔からこのフエチシストは、会面を賑わしている。かれらホオゼ・フエチシストの焦点は、いうまでもなく、〝女の大事な所を蔽う物〟というところにある。この心理は女性にも共通のものとみえ、六代目菊五郎の在世当時、彼のフンドシを欲しがる女性が少くなかつたということを何かで読んだことがある。

は、触覚の伴つたフエチシズムとだけ言つておこう。

フエチシストの有名人は、あまりその例を聞かない。そこで、史上高名な人物におけるフエチシズム的な場面を列挙しておこう。

西洋史を繙くと、ハインリヒ三世陛下が、ナヴアルラ王の結婚式に臨席した際、コンデの皇太子妃マリア殿下の汗に湿つたハンカチーフを借りて、顔を拭つた瞬間に、マリア殿下の汗の香の衝動が、強烈な思慕の念を誘発せしめて、マリア殿下を非常な不幸に導いたといわれる。

これは、ハンケチ・フエチシズムというよりも、汗フエチシズムともいうべき情景であろう。

次に日本では、「今昔物語」に、よく人に知られている左の一節がある。

「今は昔、大和国吉野郡に、竜門寺という寺あり。この寺に五人籠り居て仙人の法を行いけり。その仙人の一人をば安曇、他の一人をば久米という。（中略）吉野川の辺に若き女、衣を洗ぎ立てり。衣を洗ふとて、女、脛まで衣を掻き上げたるに、脚の白かりけるを見てその女の前に落ちぬ。その後、久米、心穢れてその女を妻としてけり」

足フエチシスト久米仙の話である。

フエチシスト久米仙の話でもいる。

ノーマルと自称する男性でも、第一グルーブの臀部フエチシストであることは否めまい。

駅のホームの階段を上る女性の臀部を、又脚を、陶酔的な表情で見上げている男のいかに多いことよ！

久米の仙人の話を、架空の作り話だと考えるのは、現代人の疑い深い悪癖なのだ。

これは決して架空ではない。現実の話なのである。

そしてまた、久米仙は、あなた自身でもある。

戦後の異色

☆　☆　☆

―暗い谷間に咲く色情―

先頃、お茶の水の小学校の便所で、世の親たちを震憾させた、少女強姦殺人事件が起つた。いわゆる「鏡子ちやん事件」である。

犯人坂巻は二十を越したばかりの、ヒロポン患者だが、

「便所に入ろうと思つた時、二ツ三ツ先の便所の戸があいていて、その間から、小さな白い尻が見えた。それを見ると、ついムラムラとなつて……」

と、自白している。

童姦症の異常性欲者にとつては、まことに宿命的な「小さな白い尻」なのであつた。

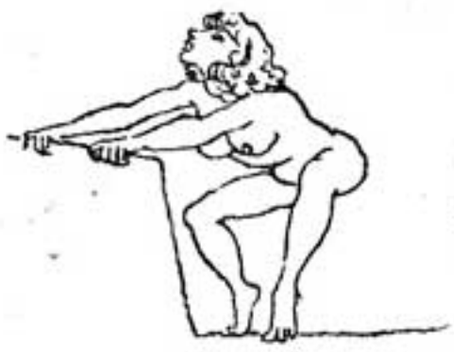
こうした幼女姦は、何も戦後に限つたことではない。戦前でもこの種の事件で世を騒がせたいまわしい異常者は枚挙にいとまがない。例えば東北の某村では、人格者として村中の信望を集めていた村長が実はこの怖しい異常者で、池で水浴中の幼女を見掛けると自

制心を失い、再度に亘つて暴行しては可憐な犠牲者を死に至らしめている。

戦後の世相が日本とよく似ているベルリンにおいても「鏡子ちやん事件」が続出し六月七月の二ヶ月たらずで、五歳の幼女が五人、七歳の少女が四人、十歳から十六歳の少女が十六人も襲われている。

どう云うものか、この種の事件には頻発性があつて、各地で暴行事件が発生するようである。これは、この種の病癖者の心理を刺戟し、羨望させるのであろうが、このような流行は脅威と云はざるを得ない。

まず、戦後耳目を集めたのは、例の住友令嬢誘拐事件の樋口芳雄である。この令嬢は見ず知らずの樋口に連れられて、二十日余りも各地を転々と旅して廻つた。その間夜はピッタリと抱き合つて寝たが、暴行の事実はなかつた、と云うことになつている。が、果してどうであろうか？……少くとも疑猥行為はあつたものと思われる。その後一しきり、樋口の心理解剖が行われたが、やはり「父娘コムプレクスと現実の破端から来る犯行」と説明された。



この童姦の常習者は、中老の男が意外なほど多い。或は青年でも、何等かの意味で性的劣等感を抱いている者に限るようである。サヂックな童姦も元よりあり得るが、しかし、血気盛んな性的強者がその対象として、童幼女を選ぶ場合は少いのである。

普通の成熟した女性に対しては圧迫を感じ、或は既に性的に不能である年輩の男が、往々にそのハケ口を少女に転じ易いことになる。これが重症になると、成人の女子にはまつたく性衝動を感ぜず、愛らしい少女さえ見れば、淫欲に自制心を忘れるのである。

倒錯性欲の中でも、このような童姦は、相手が無心の少女だけに、最も忌むべき行為だが、この抜きさしならぬ病癖の虜となつた異常色欲者も又、哀れな人生落伍者と云うべきであろう。

戦後の犯罪によく現われる用語に、「偏執者」と云う表現がある。

例えば、大井の映画館の便所で起つた娘殺し事件も「犯人某は偏執者で云々」と説明されている。又練馬の洋裁生殺しの犯人も「偏執者」の犯罪であろうと推定されている。アベックを襲う暴漢や、暗がりの乳房切り、臀部切りなども、犯人が検挙されると「偏執病」だと云う。勿論戦前になかつた表現ではないが、どうもこれ又最近無暗にお目にかかる呼称である。

そこで偏執者とは、一体どんな人間かと云えば、これが色情に大いに関係がある。つまりハケ口のない性欲の異常現象が、偏執病について、童幼女にその歪んだ性欲が発散される仕立上げる。色欲禁断からオナニーに耽溺し

て、それが嵩じて遂に手淫性偏執病と名づけられる。又普通以上に過剰な色情的昂奮状態にあるうちに、精神的変質者と見なされる場合もある。

勿論こうした色情性の偏執病の外に、宗教性のものもあるし、又芸術家などに多い偏執癖もあるのだが、ここでのべるのは、色情による精神的変質者である。

とにかく過剰な性欲が、何等かの理由で発散されることなく蓄積されると、その病的に亢進した色情の作用で、本来の性格までが左右され、大部分は陰鬱な変屈者となる。そして、突発的に性犯罪を犯したり、又は残酷な犯行を企てたりする。或はまつたく精神に異常を来たす場合さえある。

偏執の原因が生殖器の薄弱によることも珍しくない。要するに有形無形の色情の不満足がこうした異常者を育て上げる。小心で恋人も出来ず、さりとて商売女の許に通う余裕もない青年とか、或は愛人や妻に裏切られた律義者と云つたように、社交性に乏しい男性にあり勝ちである。

このように原因には同情されるが、その性犯罪はしばしばひどく狂暴性をおびて発揮される。一昨年、昨年にわたつて話題になつた数多くのアベック暴行事件は、この種の偏執者の嫉妬、羨望から、発作的、或は計画的に行われた犯行であろう。

同様に、若い娘や人妻に対する刺傷事件も、蓄積された性欲の攻撃が、性器に近い臀部や、第二の性器と呼ばれる乳房に対して向けられるわけである。

又、近来の特徴としてはヒロポンによる変質者の異常増加である青少年を蝕ばむヒロポン禍は後を断たないが、性犯罪の面でも破廉恥な事件が繰返えされヒロポン患者の集団暴行事件等が頻発している。

この中毒者は大多数が青少年だけに、ヒロポンによる異常性欲の跳梁は寒心に耐えないものがある。

☆むすびのことば☆

現代人の性生活——性の部分——は翳の世界に閉されているが、その翳の世界で日常の自己に反逆し屈折する性意識が、アブチズムであると言えると思う。

結局、アブチックな性の嗜好は、「自己に対する性意識の反逆」であつて、軽微な状態では殆どの人が、そうしたものを持つているのである。一概に、それを批難出来るものでない。

だが残念ながら、こうしたアブは、最初の軽度な状態から次第に進行して、マニヤックな習慣性を持ちはじめ、やがて収拾の出来ない程な中毒症状に陥入る場合が多い。そうして時として、惨鼻な犯罪などをひき起す結果となるのである。

しかしアブ意識そのものは、前記のように人間性の哀しき所産であつて、その現実に眼を蔽うわけには行かない。マニヤと称される人々えの深い理解、または何らかの方法でその欲望を昇華させることは是非共必要である。戦後未だこうした方面の良書も現われないようだが、この点にも、今後大いに期待したいと思う。

秘蔵版 風俗草紙

豪華口絵

八色折込傑作（中川彩子画）
現代一流畫家責め絵畫集
清水三重三・神保明世・伊藤晴雨
野崎耕作・中尾進・三谷一馬・喜
多玲子・其他本誌お馴染画家多数
悦虐寫眞全集・蛇淫百景集・娘地獄
絵巻・男性ヌード緊縛寫眞全集
寫眞物語　雪肌地獄曼陀羅
変態美術館　本社特選名畫集

変態奇書物語……齊藤昌三

「裸体」異常愛！……高橋鐵

レスボス双刃の剣に血ぬる……龍膽寺雄

嗜虐女性伝 千姫行状記……藤澤衛彦

変態風俗座談会 式場隆三郎 矢野目源一 原比露志 豊吉

國周あがく女の責場……伊藤晴雨

嗜虐淫の手法いろいろ……坂上言夫

長篇ダイナマイトとJEバタイユ原作
読切マドレーヌ　松戸　淳訳

私刑と拷問と……正岡　容
鞭打ちの歴史……平野威馬雄
マゾ女性四つのタイプ……日夏由起夫
性技巧としてのサジ四法……武野藤介
レスボス・テクニック……園村恵子
ソドミア交情の生態……かびやかずひこ
川柳変態性欲志……原比露志
実らざる逸楽……柴田　敏
屍姦今昔譚……広瀬晃一
監獄の変態性欲……山本作馬
鞭打ち実験記……高野利夫
悦虐の女百態……吉田参伍
色情犯罪に現れたサジ……三谷祥介
沙具沙允の血……稲田誠
現代春本に登場する変態……山崎和夫
横行する露出症……喜多玲子
邪淫教秘話……中野栄三
映画に現れたグロテスク……高橋晋
女子同性愛の断層……堀内得郎
大悪残虐記……岩堀　光
嗜虐マニヤ手記（二篇）
窃視症の心理……秋山悠介
恋に灼かれて……松井簫子
★その他、サジ・マゾ・アブの読物記録、
記事、寫真を多数収録……

大型判 360頁
アート口繪 100頁
変態寫眞集 100葉

定価 500円
（送料50円の処特別に本社負担）

東京都千代田区神田猿楽町1の3
日本特集出版社
振替 東京101517

時代秘史

男色・織田信長

蘭丸、今宵はゆっくり楽しもうぞ……十九の乙女にまがう蘭丸の白い肌に、無骨な信長の腕が伸びる——悲劇の武将、信長の半面を挟る変態秘話！

川上矢太郎
古庄英生画

九才の織田吉法師が隣国の斎藤家（山城守道三）に婿入りしたのは、天文十二年六月十二日朝であつた。行列は尾張の清洲城を出て美濃のくに稲葉城に向つた。

随従の騎馬武者何十騎かを前後に置き、中央の上総介の乗る輿につき添つて御伝役平手（五郎左衛門）政秀の乗馬がある。

（どう見ても、これは損な取引だが）

父信秀は本丸の檜の一つから見送つて呟やいた。（——まつたく、実質的には人質にとられるも同然の婿人りだが、あれら（吉法師と平手政秀）は必ずこれを覆えして呉れよう）

応仁の乱以後、今日までの天下は麻の如くに乱れて、諸国に梟雄は割拠していた。駿河の今川家、越後の上杉、甲斐の武田家、三河の松平、近江の浅井家。——

とりわけ尾張の一小国信秀にとつて絶えざる脅威は隣国美濃の斎藤家だ。そこで先ずは会盟の誼（よし）みを通じておくに如かずとあ

つて、一子吉法師の婿入りを選んだという訳であるが、その吉法師がこともあろうに、行列が木曾川をわたつていよいよ美濃路に入ると、興のなかで大変なことを仕出でかした。いままで着てきた美々しい礼服を脱ぎすてると、ひそかに用意してきた広袖の湯帷子を着込んだことである。その湯帷子の背中いつぱいには、女の子ならずともハツと息を止めるほどの絵が——すばらしく大きな男根の絵がニヨキツと染め付けてあつた。

そして吉法師は、稲葉城が近づくと、興を出て馬に乗り移つた。

「あれつ？」

と美濃の人びとは仰天したのである。

「いやはや、これは？」

出迎えの斎藤家の家臣たちも、どうにも照れ臭くつて、まともには顔が上げられないというもので、「——それがし、生れてこの方、あのような染模様は始めて拝見つかまつる」

「織田家のご長子どのが」

と、横の一人が云う。「――生来の利かん坊の腕白若さまだという噂はかねがねに聞き及んでもいたが、はてさて、人に隠すべき陰形を、あのように得々とあらわに示される人物とは、ちとさて暗愚に類する迷君でござるな」

「いかにも」

「ご同感」

「まつたく」

一同は共鳴したが、主君山城守道三だけは流石であつた。（と、「合扇雑話」は書いているのである）

「嗚呼、美濃全土はやがてこの婿の引手物に仕えん！…」

こう胸中ひそかに慨嘆したというのである。

戦国の武将の見るところはどこかちがつているのであろう。

★

この戦国の武将に比べると、江戸時代に入つてからの武士の気ツ魄はずいぶんと下落した。延享三年越後の上杉家で八代宗房公が卒して、新らたに部屋住の弟重定が九代十五万石を襲封する時、近習の士であつた森平右衛門という男は、にわかにわが家の系図がほしくなつて、その作製に腐心し始めた。天下が太平におちつき、武士おのおのが系図づくりに憂き身をやつしたのは、恰度この時世の流行病でもある。

そこで平右衛門は、今までは別段気にもとめなかつた家重代の古つづらをひつぱり出して、がさごさと探したところ、底の方から、しみの透つた一冊の古書が出てきた。

大いに欣喜雀躍したことは云うまでもないが、表紙の「男色雑話」とあるのには、再びがつかりさせられた。いずれ古い先代の何者かのいたずら書きにちがいあるまいと、試みに一読したところ、これが何んと森家由緒をつたえる貴重な古書である。今日まで森家の古きに溯つての先祖の名は判然しなかつたが、これによると平右衛門の血筋は越後蒲原から出ている。蒲原在の鹿峠の山麓において越路という女が一子を生んだ、これが平右衛門の初代でここに逃れてきた森蘭丸の妻（といつても正式の妻ではない）でもある。――そういうことがことごとく判明した。

平右衛門は茫然とした。彼は森蘭丸の子孫であつた。

「あなた、お食事でございます」

妻の呼ぶ声に答えるのも忘れて、平右衛門はなお暗い物置小屋のなかで、その「男色雑話」を耽読した。

さて冒章に述べた「信長公湯帷子男根之図」も同書にあるものだが、つづいては次のような奇行変怪のことも大胆に書きのこされてあつた。――

★

織田上総介（信長）はいつも、気に入りの家臣の名を連書したものをもつて、戦場に臨んだが、その優れた人の名には小六正勝、伊藤与三衛門尉、明智十兵衛光秀、詫間川伝兵の四人だけがあつたといわれる。

このうち明智（十兵衛）光秀との関係は、上総介が婿入りの美濃国稲葉城からふたたび生国の尾張に帰つて来て、元服し、吉法師あらため上総介信長を名乗り、桶狭間の一戦に一躍勇名を海内に響かせたのちに、広く智謀の人材を求めていた際に識り合つた——といつても信長の方から客分として光秀を加賀の山中温泉から呼び迎えたのでもあるが。

「四千二百貫でどうぢや？」

ざつと五千石の禄高である。有難き幸せ、と光秀は一礼してお受けした。その翌年に上総介信長の奥方には未娘の徳姫が生れた。（このへんの経緯は非常に微妙であり、大切なことであるから、読者にはしかとご記憶置き願う）

元亀二年九月十二日、上総介信長はとかく眼の上の瘤におもつていた京の比叡山を包囲し、八方から閧（かちどき）をつくつて根本中堂、三王女一社、霊仏霊社ことごとくを火にかけて焼き払い、逃れる僧兵をあまさずひつ捕えた。

「さて、この処置を如何する？」

「いかさま、見せしめのこともござりますれば」

光秀はこう云つてうすく笑つた。

「——それがし一存におまかせ願いとう存じます」

僧兵、男女を交えて六千人、美女、童子、嬰児、上人、いずれの儀も釈放叶わずで、八十間四方の大壙穴（アナ）を掘り、鹿垣を結い廻わし、さてすつぱすつぱとこいつらの首をさながら大根でもはねるように斬り落しては壙穴にほうり込む。

中に風変りな軍兵がいて（多分、野武士上りでもあつたのだろう）妙齢の美女をひきずり出してくると、うしろから押伏せに抱きすくめ、大地に首をおし当てて背中に乗つかり、首のまわりの肉を脇差でゴシゴシと切り出した。

美女は全身の力をこめてもがき苦しむだけで、か弱い力ではどうにもならぬ。この苦痛に全身の筋肉が張るので、軍兵にはかえつて切りよいらしい。まるで料理でもしているような静けさで、血なまぐさは少しもなかつた。

こうして骨だけ残してまわりの肉を切りはなすと、両手で美女の髪をつかんで片膝に背をあてて仰向かせ、ぽさりと首を折つて穴に投げすてる。

「うむ、あれは何者の配下の男だ？」

「十兵衛さまのご配下、羽衣郷（うもん）エ門の小者にございます」

「凄い男だな、さつそく余の前に呼び寄せい」

お声掛りのこの男が託間（タクマ）川伝兵。

伝兵の娘が越路といつて、このことからやがて上総介信長の侍女にとり立てられ、森蘭丸とは恋の経緯を演んじる絶世の美人である。

★

もとより越路は覚悟していた。侍女にとり立てられるということは、つまりはご主君のお手がつくであろうことを。

「そうなれば光栄これに過ぎるものはない」

父託間川伝兵は言い、彼女もそう思つたが、一向にそんな気配も信長にみえなかつた。

のみならず幾夜かつづいて変怪な出来事を目撃した。明智十兵衛光秀が毎夜のようにご主君信長の寝所におとずれるのである。そのまゝ出て行くこともあれば、朝になつて退出することもある。

「お屋形さまには、ごしゆうどうをお好みあそばされますからね」

朋輩はこう彼女に教えたが、え？と彼女は小首をかしげる。ごしゆうどうの意味がさいしよのころには、かく解らないのであつた。しかし信長公にはふるい以前からの、それがご趣味であつたということだけはわかつた。そして、そういうご趣味があるので、嘗（かつ）てひとりの侍女にも手をつけたことがないらしい、という事実もだんだんわかりかけてきた。

だがある時、越路にそう教えてくれた朋輩の小蓮という侍女が、泉水のほとりで、信長からいきなり髪をつかまれて、其の場に捻ぢ伏せられ、脇差でぷつんと根元から切られた。

「小蓮を裸形にいたして、ひつくゝれ！」

はゝゝと家臣たちがよつてたかつて彼女の衣裳を丸裸

にして庭の木につないだ。

「なにとぞお赦しなされて下さりませ！」

何度血を吐くような絶句をあげたか知れないが、信長はその裸体の艶めかしさが更に憎悪をかき立てたかの如く怒りに唇をぶるぶると震わすだけである。

夜になると信長は鞭を執つて、ふたゝび庭に降りてきた。小蓮の悲鳴はあがつた。館の内で声を立てる者は一人もなかつた。

「小蓮さまも、あんまりなことをおしやべりなさつたからいけないのだわ」

と侍女の部屋で一人が低い声でいつた。「――あゝいうことは、殿方としては死にもまさる恥ですもの」

「もつともですよ」別の朋輩がこたえる。「――殿方のお道具のことを、あれこれ品さだめするということからして、あたしたちおなごにとつては、したないことはないと思わ

れるのに、まして、おやかたさまのお道具のことをあゝまで云つてお了いではねえ」

道具？……殿方のお道具？……

これも越路にわかるまでには、少しばかりあいだが必要であつた。

二日ばかりも暗い庭の木に縛りつけられた丸裸の彼女は水一滴も与へられず、夏のことで、群がり集る蚊のために、かえつてぶくぶくにむくんだ揚句が、三日目の夕方、信長の最期、は世に惨烈を極めたもので自身の手によつて、生命を絶つた。その方法が、越路の父あつた。

それにしても、その時の小蓮の悲鳴はあがつた。館の内で声を立てる者は一人もなかつた。

「小蓮さまも、あんまりなことをおしやべりなさつたからいけないのだわ」

と侍女の部屋で一人が低い声でいつた。「――あゝいうことは、殿方としては死にもまさる恥ですもの」

「もつともですよ」別の朋輩がこたえる。「――殿方のお道具のことを、あれこれ品さだめするということからして、あたしたちおなごにとつては、したないことはないと思わ

二日ばかりも暗い庭の木に縛りつけられた丸裸の彼女は水一滴も与へられず、夏のことで、群がり集る蚊のために、かえつてぶくぶくにむくんだ揚句が、三日目の夕方、信長の最期、は世に惨烈を極めたもので自身の手によつて、生命を絶つた。その方法が、越路の父託間川伝兵と同じやり方で、まず小蓮を大地に押えつけ、小刀で首のまわりの肉をゴシゴシと斬り落し、まつたく斬り落してから片膝たてたその上に、仰向けに首をのせてポキンと骨を折つて了う。……

「面白い」

信長は立上ると酒然として呟やいた。「――人間の首がこんなに雑作なく切り取れるものとは、少しも知らなんだぞ、なるほど」

並居る家臣は無感覚にちかい主君の酷毒むざんな行為に惘然と平伏し沈黙した。

★

明智十兵衛（光秀）が信長の寵愛を一身にあつめ得たのは、その頃までの話であつて、その頃から、ぼつぼつ下り坂になつていつた。新らしい寵愛の相手は若い家臣森蘭丸（長定）の上に移つた。

その頃というのは、三河の松平家と手を合わせて、しきりに甲斐の武田家を攻めたてゝいたじぶんのことである。信玄はすでに亡く、その子勝頼は暗弱であつた。

諏訪郡まで出陣した折のことである。信長は或る云葉の端しをとらえて激しく明智十兵衛を面罵した。

「しかしながら、殿」

「まだ云うか」

立腹し、信長は彼を懸作り欄干のところまで引きずつていつて、それに頭を押付けて、彼を打擲したらしい。

――という模様を、越路は尾張の清須城にいて聞いたのである。

「まつたく以て、ご主君ご立腹の仔細もなにも、それがしども一同にも理由のわからぬこと故、ただもう固唾をのんで傍観しているだけのことでござつた」

出陣先の諏訪郡から本城安否と報告をかねて、早馬をとばして来た使者の侍はこう物語つた。「――いや、ちと、それがしどもにのみこめる節はござる、それは他でもない、森どの（蘭丸）が十兵衛どのに代つて、ちかごろは殿のご寵愛もとりわけ深い、ということでござるかの、あつはつはつ」

この出来事からして、その夜の侍女たちの議論は二派に割れて紛糾した。

「私ははじめから明智さまが嫌いでござりました。なぜと申しまするなら、明智さまがお殿さまお傍に召出されるようになりましてからと申しますものは、小蓮さまのことといゝ、京の叡山のむごたらしいお処刑の遊ばされかたといゝ、まるで以前のお殿さまとはお人のちがつたようなお殿さまにお変り遊ばされ――」

「それはなにも十兵衛さまが、お悪いのではございますまい」

と年かさの一人が答えた。

「――貴女もお殿さまのおからだが、普通の殿方とはちが

つてお出でだということはご存じの筈」

「それと、これとは」

「ちがいませぬ、私は古くから、このお城にお仕え致しておるのですから、貴女よりよく存じ上げておりますが、九才のみぎり、お殿さまが隣国の美濃の斎藤さまにお婿入りなされた時、殿方のお道具の絵をいちめんに染め付けて着ていかれた湯惟子をお着なされたというのも、つまりはお殿さまは、子供ごころにも、殿方としてのおからだの一部分のみじめな点がひどくお気に障わり、それからして、かえつて誇張したふうにあゝした湯惟子を」

あゝと越路は息をのんだ。殿方のお道具、ごしゆうどうの意味がはじめて判然としたようである。彼女は思わず顔を伏せそして火のふき出るようなほてりで耳のつけ根まで真つ赤にした。

★

三河の松平家（家康）と信長の挟撃に遭つた武田勢（勝頼）は、総崩れに大敗を喫し、三月十一日、勝頼は天目山（テンモクザン）に自尽を遂げた。廿九日信長は家康を諏訪郡の本陣に招いて戦勝の宴を張つた。

信長はのみ乾した大盃を十兵衛に廻して、

「さあ呑むがよい」

「それがしには」

酒は不調法であつた。

「武士の嗜（たしな）みに相叶うと思うか、さあ呑め」

信長の眼に、その時、末座に控えている森（蘭丸）長定の眉目秀麗な横顔がうつつた。むらむらと天邪鬼な衝動がきた。「——いかさま、酒の肴が所望とあるのだな、よし」

信長は家臣に命じて武田方の捕虜を数人しよつぴいて来させ、それぞれ本陣の築山に一列に並べさせると、上半身を裸にして鉄砲方に狙いをつけさせた。

鉄砲方の半分は越後鉄砲（ポルトガル銃）とし、あとの半分は西班牙銃とした。火力はるかに西班牙銃のほうが強烈で、これに狙いをつけられた捕虜たちは瞬時に絶命したが、越後鉄砲のほうは、まだヒクヒク生きていた。

「さあ呑め」と信長はこんどは大盃を蘭丸長定につきつけた。「——これしきのもの十兵衛は呑めぬとある。わらつてやれ、あいつは場所柄もわきまえぬ不所存者だ」

「頂きます」蘭丸は両手にうけて飲み乾した。

「——それにしても、あれなるは結構なる酒の肴かと存じます」

「愛（う）いことを吐（ぬ）かしおる、そちには何んなりとも与えてとらすぞ、申せ、十兵衛は目障りだ、退りおれ」

十兵衛は白い眼をむいたまゝ部屋を出て行つた。

「彼奴はもはや当家には用もない侍だ、いずれ永の暇を遣わして呉れる存念だよ」

信長は傍らの三河殿（家康）をかえりみて、顎をつき出すようにして云いすてた。

岐阜に帰つてからの蘭丸と信長との仲は、もう誰の眼にもはゞからぬものがあつた。そしてこれも明智十兵衛光秀のやつれたさまも人眼についた。

「し、ゆ、う、どうの恨みと申すやつは」と家臣のあいだには陰口が流れた。「――男女の間より酷毒なものと聞き及んでおるから、これが一大事を惹起せなばよいがのう」

その頃、三河の松平家（家康）の長子信康の許嫁にがせた末姫の徳姫からしきりに飛報がもたらされた。こともあろうに信康が母君（つまり家康の奥方）と結託して武田家残党に内通して信長の天下を覆さんと企んでおるというのである。

信長は速刻に打つべき手を打つた。否応なく家康に命じて母君（築山殿）と信康を自害せしめ、三河に入りこんだ武田方間者の根を断ち切ることである。そして徳姫は夫信康をうしない、実家である尾張の城に戻つてくることになつた。彼女は舞表情にちかい冷たい顔であつた。

戻つてきた彼女は終日を浮かぬ気持で送つていたが、やがて半旬のちには、森蘭丸長定に眼をつけた。夫を喪い虚無と自棄にちかくなつている徳姫は、また人妻でもあつた大胆さで彼に接近し、城内の池に彼を誘つた。汀にはたくさんのあやめが咲き乱れていた。二人は小舟に入つた。

「わらわはもうこういう暮しにはあきあきした、朝も夜も昼も、何者かに侍づかれ何者かに監視されているような」

彼女はうつとりとなつて男の手を握りしめた。血汐が脈をうつているのが判る。

彼女はふいに仰向けに舟底に寝て、そして両足を左右に開いた。「――蘭丸よ」

その時どこからともなく、一振りの短剣が光を切つて飛んできた。蘭丸の鬢をかすめた。

「何者だッ？」

舟をとび降りた彼は、池をのぞむ小高い樹立に向つて走つていつた。そこに人影を認めたからである。

★

捕つたのは明智十兵衛に仕える侍女の於崎という者であつたが、彼女は頑として犯行の事由を白状しなかつた。信長は自殺されぬよう、彼女の舌を半分切りとらせてから、一糸もつけぬ裸形にして戸板に手足を四角（よつ）にくくりつけ、一方、大急ぎで一丈四方もある大凧をつくらせると、これに戸板を打ちつけて折柄の青空に向つて、城内の大広場か

ら飛揚させた。

「なんだと、あの凧は？」

城下の町人たちは眼をそばだたせた。「人間が――しかも若い女の素ッ裸だぜ、ひえつ、こいつアたまげた！」

万人の下賤の眼にさらされるという苛酷な私刑は、それから三日つづいた。四日目にとうとう彼女は耐えきれなくなつて自白した。

「おやかたさま（十兵衛のこと）がお気の毒故に、憎い蘭丸どの、お命を頂戴つかまつるべくと存じまして」

「十兵衛の命令によつたものと申すのだな」

「いいえ、私一存の覚悟でござりまする」
「云うな！」
信長は大凧を揚げさせると、広場に鉄砲方を散列させ、いつせいに銃口を切らせた。
魂げる悲鳴はきこえなかつたが、血は雨のようにこまかく落ちてきた。
それから信長は凧の綱を切らした。凧は、張りきつた綱の末端をさつと引きあげたかとみる間に、東南の青空の彼方にぐんぐん吸いこまれていつた。——
このお処刑について越路の耳に入つてきたべつの消息では、徳姫こそ十兵衛光秀の胤をひいている実子だということである。
ご主君（信長）は男性として重大な肉体的欠陥をもつていた。ごしゅうどうに耽けられたのもその故からである。ご主君には生殖能力が欠如していられた！
「於崎どのが蘭丸さまを狙われたのも」
と朋輩の一人は声を落していつた。「——ひとつには、かねてから蘭丸さまのご出現以来に、おやかたさま（光秀）のご寵愛がご主君よりはなれたのを憤り、ふたつには、その蘭丸さまがおやかたさまのお胤でもある徳姫さまに云い寄られたことに対する、はげしい立腹からだと思います」
「まつたくそれに相違ございませんとも」
と他の侍女も賛成した。「——おやかたさまを憂悶の目に合わせ、いままた、そのご実子の徳姫さまにも色目を使うなんて、本当に蘭丸なんて男はイヤなやつですね」
越路は思わず身をふるわせて、そつと辺りの様子に気を配つた。が、だれも彼女の変つた顔色には気づいた者はひとりもなかつた。

★

於崎の私刑が終つた直後のその日——天正十年五月十一日——信長は尾張を発して備中に向つた。いま備中の高松城に攻めているのは木下藤吉郎秀吉である。彼からの急報によると安芸の毛利家が高松城主清水家に味方して腹背から動き出したとある。すわ大変であるというので信長は救援に赴くのであつたが、廿九日、京都着、六条油小路の本能寺に宿した。ここで諸国からの大将どもの集るのを待つ予定であり、すでに三河の松平家（家康）は妙覚寺に来て居るし、大和の筒井家も和泉の堺まで駈けつけて来ていた。
「もはや高松城の命運は決つたも同然ぢや、蘭丸、今夜はゆつくりと楽しもうぞ」
「如何がいたしたものでございましょう、こんなにも胸の動悸がさわぎまする」
と蘭丸は寝着をはだけて胸もとをあらわにした。十九才

は女にもまがう白い肌である。

「来い、来い、余が静めてくれる、こうかな、腕をもつとそろえて、のばして」

別動隊として高松街道を疾駆している筈の明智十兵衛の軍勢は京街道に入つてきていた。桂川まで来ると、いつせいに馬の沓を切捨てさせ、軍卒にも新しい草履に履き代えさせ、鉄砲には口火をわたさせた。

機は熟した。満々たる殺気は全軍にみちみちた。

馬標の桔梗の紋は暁明の風になりきしんだ。

「敵は高松城ならず、本能寺に在り、それつ」

一万五千の軍卒、かねて信長とおやかたさま（光秀）との不和の間を知つていたから、ひるむところなく、本能寺の森、皀莢（さいかち）の梢、竹籔を越えてつぶてのように飛んで鯨声をつくつて乱入した。六月三日七ツ刻。

「火を放てつ！」十兵衛光秀は叱咤した。さすがにご主君を矢弾にかけるは忍び難い。「――したが蘭丸兄弟は逃がすな、ひつくゝつて余の面前に引つ立ていつ！」

十兵衛光秀の馬側をとび離れた安田作兵衛は槍をかいこんで欄干に躍り上つた。「――森蘭丸長定、出会え〳〵！」

火焔は納戸のところまできていた。作兵衛は納戸を蹴破つて乱入した。寝具が眼に入つた。信長が下に、蘭丸が上になつて相抱く恰好で死んでいる。

いや死んでいたのではない、二人とも陶然とくつゝけた細い眼をよぎらせて作兵衛を見上げている。

「こらつ！」作兵衛は床を鳴らして絶句した。

「――こらつ！犬畜生にもおとるその醜態は何んだつ！えゝい、ころして呉れるつ！」

それでも離れない。作兵衛は槍をふるつて上から二人を田楽刺しに刺し貫いた。

一代の梟雄信長のかゝる最期の場面は、おほかたの史書には出ていない。しかし越路しるす「男色雑話」には明確に顕末をつたえている。

――作兵衛ぬし、かゝる事とは思不寄（よらず）ちからがなくなりてや、をもきにや（？）と云ける。その場にしりもちをつきけるとぞ。虚妄罰。二世不得なりけむ。いづれの子にも構へて構へて、いかなる理由によるとも固く戒むべく候。

こうしてみると、越路が越後蒲原に逃れてきたのも、ひとつには十兵衛光秀派があまりにも多く、蘭丸に味方するもののいかにも尠なかつた事情を物語るようである。

ところで蘭丸の子孫、森平右衛門はこの古書の「男色」の二文字を抹殺して「合扇」と書き代えた。世の好事家にのみ伝わつている「合扇雑話」がこれである。（了）

乳房刺青の妖女

女体計測者の手帖から

はしがき

私の友人に、難波謙介という男がある。終戦当時、大阪府警察本部で警部だつたが、戦後間もなく、依願免職のかたちで警察をやめた。警察をやめて何になつたかと云うと、私立探偵になつた。探偵屋よりほかに能のない男である。その替り、探偵としては古今独歩で、懸値なしの天才だ。

その彼が、絶対秘密にして余人に見せない一冊の手帖がある。これが問題だ。

表紙に——**女体計測表**——と書いてあつてその裏に、ずらりと百人あまりの女の名前が並んでいる。

「何だい、これや？」

その手帖を、何気なく彼の書棚から手にしたとき、私は眼を丸くしてそう叫んだ。

「うッふふふ」

彼は笑つて、しかし説明は拒んだ。好奇心の鬼になつた私は、それから二時間の余も追求を続けた。ついに彼も屁口垂れて、渋々説明を始める。

……つまり彼は、一種の変態性慾者で、これはと思う女に出会うと、裸に剝いで、その女体の隅々まで、腕といわず首といわず、胴廻りから乳房の大きさ、胸、腰廻り、足、大腿、果ては女の神祕な個所まで、こと細かく計測したいという衝動に駈られて、気も狂いそうになると云う。

そんな訳で、警部時代、つい衝動に負けて万引被疑者の或る美しい令嬢を裸に剝いでしまい、その敏腕を惜しまれつつも、警察界から名を消さねばならなかつたのだ。

「しかし、結果から云うと、警察をやめて却つてよかつたよ。論より証拠、この通り俺の蒐集は百人を突破しているんだ」

と、彼は例の手帳をひらひらさせながら云う。私はいささか呆然たる顔であつた。

「俺がどうして、百人もの女の裸体を、事こまかに計測することが出来たのか、どうだ、そいつが聞きたいだろう」

「うん、是非！」

私は思わず、ひと膝乗り出す。

彼は笑いながら語つてくれた。

「警察をやめさせられると、俺はすぐ、私立の探偵屋を開業した。幸い警察時代に名を売つておいたので、仕事には困らなかつた。仕事は、結婚の身許調査、お妾の行状調査、不良女の素行調べ、そのほか色々。凡そくだらんものばかりだつたが、それでも仕事の副産物として、俺は多くの女性の、のつぴきならぬ色んな祕密を握つた。問題はこれだ。俺はその祕密の永久沈黙を餌に、心ゆくまで女の裸を計り尽す事が出来たと云う訳さ。だから君、此処に記録してある女の一人一人について、それぞれ凄い因縁話があるんだぜ」

「そいつを、是非聞かせて貰いたいもんだね」

それは駄目だ、絶対祕密だ、と突つぱねるのを、私は奥の手を用いて、とうとうしやべらせる事に成功した。

膿々と立籠める湯気、逆さに吊されたヌメ肌の裸女……男の眼はギロ〳〵と憑かれたように凝固する！ムツチリと大きな乳房の、男女の極彩彫りがユサ〳〵と揺れるのだ！

1　美貌の人妻

まず、第一話は、難波の女体計測表の第一にその名を記録している——伊藤絢子——の物語りである。

伊藤絢子　昭和廿五年九月、計測。

満二十六年三ヶ月の非処女。未産婦。

性歴　満十二年五月初潮。満十七年十月破瓜、相手は二十三の大学生。自慰経験無し。

計測　身長、一米六〇糎。肩↓肩、三〇糎六粍。乳頭門幅、二七糎四粍。乳頭↓股、三〇糎四粍。股↓膝、三九糎。膝↓踵、九一糎八粍。臍↓陰阜、一八糎七粍。肩↓指、六八糎。肩↓肱

香山風太郎
浜田稔画

二三糎八粍。

難波謙介の手帳には、ざつとまあ、こんな風に記録されてある。無論、このほかに女体の神秘な個処の細かい計測値や、乳と臍の関係、股とデルタ地の関係なども記録されてあるのだが、そこまで書きしるすと衛生上面白くないので割愛し、早速本文に移る。

……その日難波謙介は、珍らしく退屈していた。朝から煙草を一箱吸い尽し、あくびを十五回やり、小用に四回立ち、黒田節を七回唸つて、とうとう退屈をもて余してしまつた恰好で、事務所の表にふらりと立つた。

彼の探偵事務所は、京都第一の繁華街四条河原町の角の、スミレ美容院の地下にある。

退屈の果てに表へ立つて、道行く女性の品定めかなんかをやつていると、その眼の前にすーつと一台の高級車が停つた。自家用車である。降りたのは女性で、背のすらりとした和服のよく似合う、二十六七の、すこぶる美貌の人妻である。人妻だということは、難波の長年の勘でわかつた。

ところでこの女性、自動車を帰すと、ほんの数秒、何やら躊躇する風に顔をしかめ、それから大股に、すたすたと難波の事務所へ通ずる階段をおり始めたのである。

驚いたのは難波謙介だ。

――ありや、これア俺のお客だつたのか！

慌てて後を追う。女はもう失張り依頼者だつた。

ありふれた良人の素行調査である。

「……成程、要するに、御主人がこゝ一ケ月余りというもの、ろくろくお帰りにならぬ。そして、たまに夜ご在宅になつても、貴女からの夫婦関係の要求に、お応えにならない。こう云う事ですな」

「ええ。結婚しましてから、まだ一年とちよつとですし、ひと月前までは、殆んど毎晩のように、良人の方から要求がありましたのに……それが……」

美貌の人妻、野村君恵は、さすがに頬を染め口ごもる。しかし、相当に勝気な女だ。

「……で、結局私に何をしろと仰有るのです？」

「原因は、良人に愛人が出来たのだと思いますが？」

君恵夫人は言下に答えた。

「良人は、サジストでもマゾヒストでもありませんわ。それで、相手の女がどんな女か、それを確めて欲しいんですの。相手の女が、素人娘からいきなりの結婚ではないらしいし。男を悦ばせる技術には相当自信がある様だし、相手の女を確かめて、その女の何が良人を魅惑しているのか、それを識つた上で対策を立てようと云うんだ。とすると、俺のやらにやならん仕事も、いささか微妙になつて来る……。

さすがに難波謙介だ。女の裸体を計りたがる奇人だけあつて呑みこみも早い。

「判りました。御満足の行くように働きましよう。時に、参考までに伺つて置きたいのですが、御主人に、アレの傾向はありませんか？　つまり、マゾ・サジの問題です

病的でないと云う意味でよ。正常人だつて誰でも夜の床では少しはね……」

はつきりした女だ。謙介は又腹の中で唸つた。この女の裸体を、隅々まで曝して計測して見たくなつた。いけねえ！　と彼は、そんな妄念を払い捨てるように首をふり、慌てて事務的な報酬の問題にとりかかつた。——それから、ざつと二十分余りして、君恵夫人は、謙介の事務所から姿を消した。

2　乳房に憑かれた男

難波謙介は早速行動を開始した。問題の人物、野村信太郎の一般的情報は、さした労もなく、すぐ蒐集出来た。

野村信太郎。三十三歳、京都D大出身。現在野村精工有限会社社長。金廻り良し。酒好きだが、学生時代から現在まで女関係の噂をする者無し。但し、現夫人と結婚する以前は市内の五番町、島原及び祇園乙部の三遊廓にて、簡単に本能を満足させていた。

五番町娼妓宮子の話。

——ええ、信さんなら、よく知つてます。金使いが綺麗で、しつつこくは無いし、岡惚れしたくなる程よ。え、変つた事？　そうねえ。あの人、少しお乳気狂みたいなとこ、なくもなかつたわ。あたしの事、お前はオツパイが大きいから好きだつていでもなかつたわ。あたしの事、お前はオツパイが大きいから好きだつてサ。お乳を可愛がるのが、とつても好きなんよ。

島原娼妓ゆり子の話。

——あたしも商売で、色んな人知つてるけど、あんなにお乳の好きな人始めて。そうそう、こんな事があつたわよ。ある時、あたし疲れて眠つてると、お乳が変にくすぐつたいの。それで眼がさめたら、あの人、あたしのお乳の上に変な絵を描いてさ、ひとりで物凄く興奮してるのよ。

野村信太郎は、母親（マザー・コンプレックス）無意識錯想の強烈な男と思考す。

行動を開始してから、僅か一日半で、難波の探偵手帖には、以上のような収穫が記入された。

更に二日の後には、彼の手帖に次のような記事が加えられた。

——君恵夫人の入浴姿を、ひそかに覗見するに、彼女も又豊満にして形良き乳房の持主なり。他日機会を得る事あらば、彼女の乳頭門幅及び乳基底周並に乳高を是非計測したきものなり。

——信太郎氏の日記を、夫人の許可を得て調査するに、愛妻君恵夫人の乳房を讃仰する字句甚だ多し。

さて、こうなつて来ると、野村信太郎を愛妻の手から奪つている女性は、余程特異な乳房の持主のように思われる。それで、難波探偵の調査は、愈々第二の段階、つまり問題のその女性を突きとめる線へと進んだ。

野村信太郎氏の日記を、夫人の許可を得て調査するに、愛妻君恵夫人の乳房を讃仰する字句甚だ多し。

さて、こうなつて来ると、野村信太郎を愛妻の手から奪つている女性は、余程特異な乳房の持主のように思われる。それで、難波探偵の調査は、愈々第二の段階、つまり問題のその女性を突きとめる線へと進んだ。

野村信太郎は、多分新しい愛人を拵え、妻をかえり見なくなつたとは云つても、仕事も何も打棄らかして遊び呆けているのではなかつた。

難波の調査によると、彼は毎日会社には出ている。り会社の前で網を張り、野村が退社後どこへ行くのか、それを尾行すればいいのだ。

こんな仕事は、新参の刑事にだつて、朝飯前の仕事であろう。技術を要するのは、それから先の問題である。何しろ他人の閨房に関する事なのだ。

昭和廿五年九月三日、午后四時三十分。

有限会社野村精工社長、野村信太郎氏は、西大路五条の会社の門外に姿を現した。難波は特約してある京都タクシーに乗つて、門外の木蔭で尾行待機の態勢にある。

野村氏は往来へ出て、タクシーを拾つた。尾行開始である。

前方の車は、市内を十五分疾走して、やがて止つた所が、紫野大徳寺裏の、小ぢんまりとした洋館の前である。洋館といつても、相当の時代もので、煉瓦造りの、何やら寒々とした建物である。

古びて、くすんで、蔦葛が生え繁つて、所どころ壁に罅が入り、剝がれている。どこから眺めても、怪談にはお誂え向きに出来ている幽霊屋敷だ。舟板塀に見越の松は昔の話としても、とても二号嬢の住居とは思えない。

難波は、いささか意表を突かれた恰好で、この洋館を眺める。野村氏は既に邸内深く姿を消していて、明るい往来には人影もない。

気を取り直して、難波は先ずこの家の門標を確めた。——伊藤寓。古びた門標には達筆でそう書いてある。

さて、と難波は思案する。これから彼は夜盗の真似をしなくてはならぬのである。塀の外で、百年立つていても、邸内での野村信太郎の行動は判らない。しかし、行動を起すのには、まだ時間が早やすぎた。それで難波は近所の聞込みを始める。その収穫は早速彼の手帖に記される。

近所の食糧配給所の親爺の話。

——あの家は貴方、随分妙な家ですよ。半歳程前までは、父娘二人住いでしてね、父親の方は六十五六の、まるで骸骨みたいな男。娘の方は二十五六の大柄な女で、容色はまあ十人なみ以下つてとこですが、肌の色が雪女郎みたいに白くて綺麗なんです。所で何が妙かといいますと、近所付合いというものを全然しない上に、娘が一人では絶対に外出しないのである。

難波はまず、庭をひと廻りする。小ぢんまりとした洋館で、二階は無いから、部屋数は六畳位なのが六つか七つ程度であろう。邸内の灯は、一個所を除いて全部消えている。

灯の洩れぐあいから見て、むろんそこは硝子窓であり、それも磨硝子ではないのであろう。

3　逆さ裸女

その夜、難波謙介は、ひそかに伊藤邸へ忍び込んだ。不法侵入は勿論承知の上だ。法律を遵守していたら、私立探偵たちまち飯の食いあげである。

問題の野村信太郎は、まだこの邸内に滞留している事は間違いない。臨時に雇つた張り込みの男の報告によると、あれから、この伊藤邸には、一人の訪問者も外出者も無いと云うのである。

難波はまず、庭をひと廻りする。小ぢんまりとした洋館で、二階は無いから、部屋数は六畳位なのが六つか七つ程度であろう。邸内の灯は、一個所を除いて全部消えている。

灯の洩れぐあいから見て、むろんそこは硝子窓であり、それも磨硝子ではないのであろう。

難波は、この灯にひかれて、窓の下へ歩み寄る。靴はラバ底だし、湿つた柔かい庭土である。足音の心配はまずなかつた。

さて難波は、この窓の外で、いつたい何を見たのであろうか。……

「ウフフフ……」

はじめに彼は、心臓をくすぐられるような変になまめいた女の含み笑いを耳にした。これは、閨房における、男女のある種の姿態を想像させるものであり、しかし現実には、ここは浴室であつて、彼が眼にした光景はそんな色つぽいものではなかつた。

見る者の神経のかげんによつては、それは卒倒にあたいする無惨な怪奇絵巻であり、しかし難波謙介にとつては、われ知らず恍惚となる不思議な見世物であつた。

浴室の中には男と女がいた。男は野村信太郎である。女は、はじめて見る顔で、この屋敷の女あるじ伊藤絢子であることは難波の鋭いカンで想像された。

「フフフフ、ウッフフ……」

女が笑う。その顔は、しかし笑つている顔ではない。少くとも、真正面に見たところでは、それは般若（はんにゃ）の顔であつた。……

般若は、梵語のパンジャという言葉を、漢字にあてはめたものであり、その語義は〝知〟であり、特に性慾の智慧をさす。仏典上でいう般若は、性慾本能を満足させてくれる女性をさすので、情を解する婦人、の意味がある。そうして般若の面は、つまり般若の顔は般若波羅蜜多（情を解する婦人によつて、その満足を得るという意味で、その婦人は観音菩薩の化身、女菩薩である）において、観音菩薩の顔であつた。

何故だろう……。

が喜悦中に、強烈な快美感のため美しい眉毛にしわをよせ、顔をゆがめて歯をむき出し、恍惚となつている、その相貌を現したものである。頭上に角を生やしているのは、心中すでに獣慾にひたむきになつている事を現している……。

さて、つまり、ウフフフと笑つているはずの女の顔が、この般若の顔であつた。

女は、浴室の天井から、逆さに吊りさがっているのである。

さかさの顔というものは、いくら美人であつても、およそ不気味、怪奇以外のなにものでもない。

女は、むろん素裸であり、顔に血が下り、真つ赤になり、眼をむき、そうしてウフフ、ウフフと、軀全体をくねらせて笑つている。

いまや難波の全身に熱湯のような脂汗が、ふつふつと湧き出ている。彼の眼は、血走り、ギラギラ光り、あゝ一点を凝視して離れない。彼の視線は、女の乳房にすいついている。

それは美しく、豊満な乳房だつた。しかし成人して驚嘆し、呆然となり、そして今は、難波を驚嘆させ、熱汗淋漓の興奮に追いこんでいるのは、そのことだけではないのである。

白く、異常に大きくて、はち切れそうなその乳房の上に、世にも稀れな奇怪なものがあつた。それは入墨である。乳房刺青であつた。

難波は、伊藤絢子の乳房の上に、天保の昔に亡びたと信じられている、極彩色の、眼もくらむばかりの神秘を見た。

奇矯の天才刺青師、湯島の彫阿彌が独創の極彩色湯気彫り。湯気にふれると、真つ白な汚れのない生肌から、朦朧……嫣然と現れる神祕怪絶の湯気彫り。……

それは、専門家、好事家の間で、名人彫阿彌の死んだ天保十二年（一八二七年）を境として、永遠に亡びたものと信じられている。

彫物師の子と生れ、しかし成人して警察畑の人となつた難波謙介は、刺青が好きであり、理解もし、そうして、入墨については、二、三の著書すら発表している伊藤絢子の乳房入墨……それは、満長も歌麿も春章も祐信も国芳も、遠く及ばぬ生きた絵、男女喜悦のすさまじい活画であつた。

「ウフフ……」

と、また女がわらう。白い裸身を、天井から逆吊りにされ、身をくねらせて、ウフフと笑うと、両の乳房の上の極彩彫りの男女が、乳房の動きにつれて、ゆつさ、ゆつさと揺れ、または小きざみに、ピリリ、ピリリと顫動する。その奇怪さ、その妖艶さ！　それは、とうていこの世の眺めではない。

難波は汗でびつしよりになり、しかし、さすがに探偵としての自分を忘れはしなかつた。

野村信太郎は、いつたい何をしているのだろう。彼は湯舟の中で、身動き一つせず、たらたらと汗をたらし、ギラギラと眼を光らせて、絢子の奇怪な嬌態に、まるでもう魅入られているのであつた。

4　悪魔の日記

「奥さん、御主人を、あの女から取りかえすのは、容易なことじやないですぞ」

難波の、例の地下事務所で、ひととおりの説明を済ませてから、彼は重苦しい声で言つた。

野村君恵は、話の途中で頬を血の色に染め呼吸に熱をもち、眼を閉じて、難波謙介の話が終つても、しばらくはもとに戻らなかつた。しばらくして、

「その湯気彫りというのは、ほんとうに今はもう無いのでしようか」

「さあ、それですよ問題は。私の知識では、天保の昔に、彫阿彌の死と共に、彼一

代で湯気彫り極彩色の神秘な刺青術は亡びたはずなのです」

「でも……」

「そう、でもあの女、伊藤絢子の乳房入墨は、たしかに湯気彫りだつた。あの女は、天保の昔から現在まで百二十余年を、少しも齢をとらぬ魔女であろうか。しかし、そんな！私は信じない。と、すると、解釈は一つしかないい」

難波は急に言葉を切つた。君恵夫人は、ほつと溜息をつく。

「とにかく奥さん。御主人は、明らかに偏執狂ですね。世間に対しては、何の害も危険もない、しかし明らかに乳房偏執狂です。これはまず生涯癒りますまい」

「あたくし、夫を失いたくありません。どんな犠牲を払つても……」

何を考えているのか、夫人は眼をギラギラ光らせていう。

難波は静かに頷いた。

「私で出来る最善をやつて見ましよう」

難波の胸中に、この時一つの成算が、むつくりと頭もちあげている。……

しかし、昼間のうちは会社へ出勤している。だから、昼のうち、伊藤絢子は独りであつた。難波はその時を狙つた。

いきなり押し込んで、寝室のベッドの上で昨夜の疲れにウツラウツラとまどろんでいるこの乳房の魔女を、クロロホルムの御馳走で軽く眠らせ、目的の金庫に向う。

かねての偵察で、この金庫の中に、伊藤絢子の日記があつた。

難波はベッドの端に腰を掛けて、チラリと女のほうに一瞥をくれて、さておもむろに草色の日記帖のページを繰る。

——伊藤絢子の日記の抜萃。

◇俺が死んだら、あの男の所に身を寄せろ。伊藤仙造は俺の親友だ。決して悪いようにはせんだろう。お父様はそうおつしやつた。けれども仙造は悪魔だつわ。

◇仙造の家へ来てから、あいつは、あたしを外へ出してくれない。出るときは、いるじの姿がどこにも見あたらない。

半年前から全然人の眼にふれていないのだ

野村信太郎は、自宅には全然寄りつかず、

屋敷の、あ

この

つも、あいつが傍にくつついている。逃げると、あたしを殺すという。

◇この頃、朝になると妙に乳房が痛む。乳肌の上に赤いみみず脹れが出来ている。

◇絢子死にたい！　仙造のやつ、あたしの乳肌の上に入墨をしていたの。今日お風呂の湯気に当ったら、とても羞しい、とても、とても、ここへ書けないような刺青が、ぽーつと浮いて出たの。あたし知らなかった。仙造のやつ、あたしが毎晩寝る前に呑む牛乳の中に、睡眠剤を入れていたのだわ。そうして、こんな刺青を……悪魔！

◇不思議。あたしの乳房刺青は、お風呂の湯気にあたらないと出ない。

◇今日はひどい目にあった。仙造のやつ、いきなりお風呂へはいって来て、あたしを天井から逆さ吊りにして、ぶったり叩いたり、くすぐったり。あたしが痛くて苦しくて、無茶苦茶に暴れるのを、あいつ、ニタリニタリ笑って見ていた。そうして揚句の果に、仙造のやつ、おぢいちゃんの癖に、あたしの躰を自由にした。悪魔！　悪魔！

◇変ね。この頃あたし、仙造にいじめられるの、そんなにイヤでなくなったわ。お風呂での逆さ吊り、あたし楽しいの、変ね。

◇あたし、仙造を殺してしまった。だつて仙造はもう、老ぼれて、男としての役に立たなくなったのだもの。殺して、庭の大松の横へ埋めたわ。あたし、新しい人、見つけるつもりよ。

「そして、新しい愛人を見付けたつてわけか」

つぶやいて、難波はまた女の方を見た。魔性の女伊藤絢子は、何も知らず、こんこんと眠つている。

むすび

「おい、結末のない話つてそんなのあるかい」

「フフフ、これ以上何を聞きたいというんだい……？」

「何をつて、色々あるさ。先ず第一に、その後の野村氏だ」

「君恵夫人との仲は、至極円満だね。とにかく、あの女は驚くべき女性だぜ。俺はね。頼まれて君恵夫人の乳房に入墨をしてやつたよ。湯気彫りでね」

「ふーん、その仙造つて奴は、不思議と彫阿弥の秘法を伝承していたんだね」

「そうだ。それにも彫れると云うものじやないのさ。湯気彫りは、或る特種な皮膚を持つた女、百万人に一人か千万人に一人しきやいない、ある独特の肌の持主でないと効果がないのだと言い伝えられている。」

「そうそう、肝心の伊藤絢子氏は、いつたいどうなつたんだい。殺人罪で警察行きかい」

「生きているよ」「エッ？」

「フフフ。警察へ突き出すなんて、とんでもない。仙造つて奴は殺されてもいいような奴さ。そうして、彼女は千万人に一人という、特別の肌の持主だぜ。イヤ、極彩色の湯気彫りを持つ現在では、地球上ただ一人の貴重な女だ」

「じれつたいねえ。だからいつたい、彼女はどうなつたのかと聞いているんだよ」

「オーイ、絢子。何をぐずぐずしてるんだい。早いとこビールを持つてこいよ」

「えエッ？　絢子？　君の奥さんは、たしか雪子さんじやあ……」

「そう、今はね。しかし、もとの名は伊藤絢子なのさ。フフフ……」

（終）

『風俗草紙』最近号主要目次

東京都千代田區神田猿樂町一ノ三
株式会社 日本特集出版社
振替東京一〇一五一七

★七月号★（〒共一〇〇円）
責められる女三態　喜多玲子画
男色喫茶店　かびやかずひこ
鞭の家　須川夏枝
嗜虐放浪記　天野鐵治
悦虐の部屋　喜多玲子

★八月号★（〒共一〇〇円）
妖蟲図　喜多玲子画
いけにえ二題　北原環画
ぐろてすく芸談　正岡容
男色営倉　松尾亮
責められる女の表情　伊藤晴雨
木馬責め滑車責め　上田青柿郎
私が責めた六人の女　林譲介
まにや地獄　日夏由紀夫

★九月号★（〒共一〇〇円）
ジャック・ナイフ　北原環画
縛り絵・六景　喜多玲子画
女体の縛り方十五種　伊藤晴雨
歪んだ閨房　武野藤介
凌辱開花　日夏由紀夫
男色アパート　志摩雪夫
悦虐の泥沼　喜多玲子
擽り責め臀部打ち　大槻久良二

★十月号★（〒共一〇〇円）
あなぐら　喜多玲子画
悶える女三態　中川彩子画
責められる肌　特写々真
奴隷祭　三宅一郎訳
新らしいスタイルの責め　喜多玲子
馬をみる夫人　日夏由紀夫
歪んだ女　鳥羽瑛子
臀部狂崇症　油井啓二

★十一月号★（〒共一〇〇円）
美しい獲物　北原環画
嬲ぶられるやわ肌　本誌特写々真
女裝男　日夏由紀夫
夢寛　松井籟子
秘密な淫蕩　赤沢澄子
執念日記　草葉容子
力盡きた女　中川彩子画
犠牲六態　喜多玲子画
凌辱の構図　本誌特写々真
縛る快感・縛られる快感　高橋鉄
汚物狂崇症の性慾　坂ノ上言夫
どんな男がマゾヒストか　西島実
そどみあ大座談会　鹿火屋一彦
木馬責め研究記　島崎哲

★一月号★（〒共一二〇円）
雪責め（五色刷）　喜多玲子画
屈伏の涙　中川彩子画
蛇　北原環画
變態臀打ち大画集　編集部編
華麗な無慘絵　本誌特写々真
まにや地獄・視姦の部屋　日夏由紀夫
マゾ使徒行伝　坂ノ上言夫
吊り責めさまざま　伊藤晴雨
淫雨熄まず（アブ官能小説）　松井籟子
不具の妖精　香山滋
處女をいたぶる　鬼頭浩一郎

その他華麗悦虐読物満載！
御入手洩れの方は直接本社へ！

小説　鞭泣き叫ぶ青春

―鞭に歓喜する乙女たち―

高月大三

武岡一夫画

「もつと強く。もつと強く打つて……ああ……」――やがて最後に一鞭強く当てると……鞭を投げ出し、赤く腫れ上つたお臀に向つて……痛みと快感が潮のように……

鞭撻ち小説は外国物に多いようで、こゝにあげたような内容の鞭撻ち（特に叩きであるが）を主題にしたものは我が国の賞め文芸のうちにはあまり見ないように思う。尤もこれは私の浅見の故かも知れないけど、元来が、日本で行われる鞭打ちに類するものは、割竹や、弓の折れなどが出て来るものゝ、その打つ場所は特に臀部に限られていると云うことはないようである。之に反して外国の鞭撻ちと云うと、殆んどと云つていゝ程、その撻つ部位は臀部が主になつている。余談になるけれども、旧日本海軍の非公式の刑罰の中に此の臀叩きがあつたのを御存知の方があるかも知れない。直心棒

な臓器を内臓している訳でもないし、人体の機能に害を与えないで苦痛を与えるには最も適した部分かも知れない。ましてこれが女性となると、苦痛の点は勿論であるが、恥と云うものがつきまとう。また、鞭を振る側から云えば、それが美しい女性であればあるほど、征服慾を満足させセックスアッピールを感じるかもしれない。〝泣き叫ぶ青春〟の女主人公は、アメリカの南部テキサス州のガルベルトン附近に住む、金髪の美しいブルジョア娘である。此の本の中に盛られているものは、題名から感じられるような悲惨さや暗さは少しもなくて、鞭打たれる少女たちも案外明るく生々としているし、その対象になる人物たちも、それほど悪人のように思われないのは、その舞台が、少女たちの学園内での出来事だと云うばかりではなく、文中にもしばしば出てくるように、臀叩きそのものを或る場合には、心理の底で喜んでいるような面もある故でもあろうか。

時代は、南北戦争の少し前で、マーガレット・ミッチエル女史の「風と共に去りぬ」より少し以前となつている。

これは全篇を通じて、鞭撻たれる女達にあるような、快感を感じるどころか、その振り下ろされる一鞭毎に叫び、悲鳴をあげ、

又は軍人精神注入棒、又は単に精神棒とも云つて居たようであるが、此の握り太の樫の棒で可愛相な新兵さん達が叩かれる部位は臀部に限られていたものであつた。

臀部の肉が厚く脂肪も豊かで、其の上胸部や腹部のように大切

もだえるのである。出て来る男達も好色漢で、残酷で、選り抜きのサジストばかりなのだ。

この〝泣き叫ぶ青春〟に対批したものであるが、これは南北戦争がその背景になつていて、奴隷救済運動に起ち上つた北部の慈善家たちの中の一貴婦人を女主人公にしてストオリイが構成されている。この運動に関係した婦人が、捕えられた場合、その婦人は裸にされた上、鞭打たれるのである。綺麗で且つ優美に教養された婦人が、南部の白熱の太陽の下、赤裸にされた姿を見る。われわれは彼女等の着物やペチコートが引き裂かれ、或はたぐり上げられるたびに、われわれの耳は、彼女等の悲鳴と慈悲を乞う叫喚を聞く……

〝泣き叫ぶ青春〟は大和出版社刊のWHIPS AND TEARS ブラックスミス著大谷進氏訳を参考に引用させて戴いたことをお断りしておく。

伯父と女教師

南部テキサス洲ガルベルトンの近く、海岸から少し離れた街道に沿つて美しい荘園があり、此処にメリイと呼ばれる美しい少女が住んでいる。此の荘園の主はメリイの伯父で、ダン・ドーバアと云う拳闘家のような大きな身体つきの、精力的で横柄で狡滑な男であつた。彼は十年も前に、その頃まだ子供だつたメリイを連れて此の土地に来たのであつたが、自分の過去を人々に知れることをさけているのである。

メリイは、此のダン・ドーバアの、妹の子で、ダンの妹はお産のときに亡くなつたのだと云うことになつている。

ダンは乱暴で、官能的で、理窟つぽい男だつたので、メリイにペラ・クルスから来た女家庭教師のハンナを宛てがう。此所から此の物語りは始まるのである。

この伯父と家庭教師のハンナとは、メリイを美しく、感じ易く、誇らしい少女に成人させて置いて、やがてその彼等の変態的な快楽の犠牲にしようとするのだつたと云つて、成ハンナは母親代りの役目だからと云つて、毎日検査し何熟した少女の身体を無理矢理に毎日検査し何か間違いがあつたと云つてはお仕置をするのである。そしてそのような少女の姿を惚れ惚れとながめて心のうちで楽しんでいる。

家庭教師のハンナは、此の家の主人であるダンと或る種の関係がある。細君を持たないメリイの伯父が、美しいハンナ女史とそのような関係にすることも不思議ではないのだが、面白いのは、此のダンに対してはハンナ女史はマゾヒズムの立場にあり、メリイに対してはその反対にサジになる。

或る時は、女中がダンとハンナの狂態を見てしまう。次は其の一文である。

――女中は、カーテンの陰にそつとかくれて此の様子を見ていましたが、余りの昂奮に身体中が熱くなり遂にその場にしやがみ込んでしまいました。ダンは息をはずませて、機械的にハンナの着物を脱がせました。

彼は、その真珠のような乳房を飽くことなく眺め入つていましたが、やにわにつかみかかると情熱にまかせてもてあそび始めました。そしてハンナはすつかり裸にされてしまいました。淫獣は、ごくりと唾を呑んで、尚もせめの手をゆるめませんでし

た。が、不思議にも、あんなに狂おしく憧れて来たほどの大きな悦楽ではなかつたのでした。なぜなのであろうか。

「うん、そうか、こう云うことはお互の呼吸がぴつたりあつて始めて成功するものなのだ。女の昂奮が伴わなければ、一方的な動作だけでは快感は得られないのだ……」

ベッドに横になつたハンナの顔は、ユリの花の様に可憐でした。ふつくらとした胸、二の腕まですんなりと曲線を描いて伸びている大理石のような白い腕、ちよつぴり紅をさした可愛いゝ手の爪、……唇は油をぬつたように艶やかで、香りのよい呼吸が品のよいギリシヤ的な鼻を心もちぴくぴく動かしていました。

やがて、ダンは立上るとハンナに向つて「さあ、これから可愛いお前のお臀に愛のキッスをしてやろう」

と云うと、室の隅から一本の鞭を取り出してきました。これを見るとハンナの顔は見るみる青ざめていきました。

「どうぞ、それだけは許して、お願い」

こう云つて必死に抵抗する彼女を押えてベッドに俯伏せにさせると、先ず両手を、次に両足をベッドに縛りつけてしまいました。

ダンの両眼は獣のように、ランランと輝いて、身体は昂奮してブルブル震えていました。こんもりとふくれ上つた二つの丘、真中を通るくぼんだ谷、……ダンはたまりかねて一鞭その小山めがけて振り下しました。

途端に、ハンナは悲鳴を上げて、

「ダンさま。お助け！、アレ……お願いよ、お助け！　神さま……」

一鞭当てる度に呻り、もだえました。その度に雪の様な二つの小山に赤い筋がふえていきました。或は高く、或は低く、呻り声と同じようにその小山は上下に、或は左右に揺れ動きました。

ダンはますます昂奮して尚も手に力を加えていきました。ハンナのお臀は真赤になり顔は充血して眼はだんだんつり上つてきました。その頃になると不思議な現象が現われてきました。ハンナの叫び声が妙に変化して来たのです。

「もつと強く。もつと、もつと強く打つて頂戴！　ああ……」

ダンは一層手に力を加えていきました。

「あれッ……助けて……神様……」

ハンナの悶える声を聞いて、ダンはますます昂奮で身体が震えていましたが、やがて最後に一鞭強く当てると、鞭を投げ出し赤く腫れ上つたお臀に向つて……。

ハンナは痛みと快感で、いやが上にも悦楽にひたつていきました。

こうして、伯父と家庭教師の狂態が続いていることを知らないメリイは、いずれは伯父ダン・ドーバアの慾望の犠牲になることも気がつかず、美しく成人していくのである。

ダンは、お臀打ちに情熱を燃やす男で、今までもあらゆることを、あらゆる階級の女にして来たのであるけれど、結局彼の年来の理想は、奴隷の女とも、女乞食でも、娼婦でもない、自分と同じ白人種で同じ階級の娘を服従させ、鞭打ちたいと思つていたのである。いたましい犠牲者が、知的なるので、恥ずかしがるのを無理に虐げるのでなければ興味がないのだつた。

その為に両親に捨てられたメリイを引きとり世間体は姪と云うことにして、自分の

理想の通りの上品で貞淑な娘に育て上げ、ゆつくり楽しもうとしているのである。

ハンナ女史は、此のダンの心を呑み込んでメリイを教育する。灌腸責めなどが用いられてメリイは気の狂うような羞恥をかき立てられることもあつて、だんだん彼女は伯父の考え通り、しとやかな恥しがり屋の美しいお嬢さんになつてゆく。

どと云う言葉を聞いただけで、もう顔を真赤にし、からだを細かく震わせるのであつた。

ダンは、メリイの他にも、隣りの家に居るドロレスと云う娘を狙つている。メリイとドロレスは友達で、此のドロレスの両親の農園では、ニグロ女の奴隷や混血娘の女中がしよつちゆう「九つの尻尾を持つた猫」と呼ばれている女性用の鞭でお臀を打たれていると云うことも、ダンは知つていた。

「……私が姪を鞭打つことになつて来た。彼女はもう鞭打ちしていゝ時になつた。今やつている灌腸の儀式をやるために、下穿きを脱がせるのを手伝つてやるよりも、これは面白い光景だろう。しかし、

特にその効果を高めなければ面白くない。この小娘は野獣的な成年式のためには余りに感受性がある。私の見ている前で、いきなり懲罰することは彼女を気狂いのようにさせるだろう。先ず最初はハンナに鞭打たせてやる。次にドロレスの前でハンナにやらせよう。最後に私が自身でやろう。それを見付けたハンナは直ぐさま叱りつけ、

「さあ、元のように直しなさい。今日こそ伯父様のお許しを願つてお鞭打ちをしてあげよう」

と眼を細くする。

やがて、それが実行されて、そのことが人々の噂の種になる。この海岸地方のお洒落な社交婦人たちの間にダンの変態的な行為が拡まつて、一寸でも人の集まるところでは、ダン氏が家庭教師に云いつけて、姪をまるはだかにして、臀打ちをを与えたと云う話で持ち切りだつた。

混血娘の女中に臀打ちを行い、髪洗い用の大型洗滌器を無理に突つ込んで灌腸をして、その悶える姿を見て喜ん

でいた、と云う話までお喋りなダン家の召使たちが話し廻ったので、ダンに対する噂はますます悪くなつていき、家庭教師との怪しからぬ狂態までが女中の口から明るみに出るのである。

そこで噂に困つたダンは、メリイを一時学校の寄宿舎に入れることにする。

鞭への好奇心

メリイはお臀打ちの賞めから逃れられるので学校に行くことを喜ぶものゝ、此処でも学校の規則として罰の中にお臀打ちが行われていた。十六から二十までの此の学校の生徒たちは新らしく入つて来たメリイに対して歓迎の習慣として其の夜臀打ちを行つたりする。

或る時、メリイは部屋の中で臀を打たれている学友の姿を鍵穴から覗いてしまう。

……これが此の学校で臀打ちと名付けられている忌わしいことにメリイが接した最初でありました。自分自身でまだそれを学校に入つてから経験したことはないのです

が、それにも拘らずこの問題が関係していること〻懲罰用の腰掛けが何に使われるかと云うことに気ずいたのでした。懲罰を喰う娘はその腰掛けに革のバンドで縛り付けられるのです。彼女も何時かは、自分の身体の裏側の膨れた部分を何の覆いもなしに人に示さなければならないのだと覚りました。何と云う恥辱！　哀れなメリイはこんなに困つたと感じたことは、今迄に一度もありませんでした。

故郷では家庭教師といやらしい伯父とからかし、もちろん他の生徒たちが罰を受けるのを、何度も見ない訳にはいかなかつた。

こんな訳でメリイは非常にそのことについて悩み、そして出来る限り注意深くおとなしくして全力を尽して懲罰を受けないようにする。しれそれをすつぽり脱がされて、むきだしになつた大きな高慢ぶつた裸のお臀を、白樺の鞭か、例の「九つの尻尾のあるお猫さん」でヒリヒリするくらい叩かれて、泣き声をあげるのであつた。そんな場面を見ていると罪を犯した生徒より、メリイの方が悧巧でないと鞭で打つと云って脅かされ、学校に避難所を見出そうと望んだのでしたが、来て見ると此処にも鞭打ちが待ちうけていました。……

もつと真赤になり、又もつと恥かしがつて

あたかも自分が裸にされて打たれている様に股を縮めたりすることもあるのである。

それほどお臀打ちをおそれているメリイは夜な夜なこのことを夢にまで見るようになる。夢の中に出てくる地面にうつ伏せになつた成熟した女のふくれた臀や、それがピクピク動く媚態とか、はじめは百合のように白かつたのが、次第に赤いバラのようになつて行く肥つたむちむちしたお臀のことなどを見ると、

「私は決して鞭打たれたくない」

と悪夢からさめた時は思うのであつた。

しかしメリイは、この二つの大きな肉の丘が暗い谷を生ぬるく濕いかくそうとしている部分の風景を眺めることが、どんなに甘美で天国をさまよう様な気持がするか、と云う思いを禁じ得なかつた。

メリイが寄宿舎で仲よしになつたヘレンの臀打ちを期待する気持に対してメリイに鞭打ちに対してメリイに

「メイちやん。貴女だつて美しいものを持つてる若い娘に対して鞭を与えるのを見るのは少しも不愉快ぢやないつてことが判るわ。もう少したてば貴女だつて自分のあそこに鞭を受けるに違いないわ。それは最初は呻るでしよ。それがだんだんそんなに悪い気持ぢやないつて、思うようになるのよ。おしまいには好きになるにきまつてるわ」

「いやよ。そんなことないわ」

「駄目よ。みんな最初は顔をしかめるけどおしまいには好になるのよ。今はみんなそのお儀式を待つているのよ。十五日目に一度だけ先生にお願いして、スカートを捲つて上品な撫する道具だ、と云うことを話して聞かせる。メリイは真赤に上気して震えながらそれを聞き入つているのである。紙数がないので詳しくは書けなかつたけれど、今までにも此の女主人公は、そういつた場面を幾度となく見て来ているのでその残虐な美しさはよく知つていたし、若しどうかするといつかそのような残酷な愛撫が自分のうしろの丘に加えられないものでもないと云う気が狂いそうな戦慄に、もう心も上の空なのであつた。

（つまり臀を受ける少女はキロットの分れ目を、開かなければならないのである）時として非常に重大な過失に対しては若い娘を全裸にしてしまうのだとか……。そしてこのような場合の鞭打ちは大抵公開されるのだと云うことや、「九つの尻尾のある猫」と名付けられる鞭が、彼女たちの可愛い〻白いくりくりと肥つた〝下の方の顔〟を愛

此の本の中ではメリイが遂に罰を受けるに致るまでの間にも、好色的な女教師がこれぞと狙つた可愛い〻生徒に対して、その変態的なお臀打ちを何度も実行するくだりもあるけれど、ヘレンなどはケルプと云う

先生の為に灌腸責めにあつたりする。

また、生徒同志の間でも、お互に此の臀打ちが行われ、それが女ばかりの学園内でのむせかえるようなはけ口になつているのである。

木馬の責め

「さア、次はお前さんの見てやるから覚悟しなさい」

ファンニイは、形式的にだけ少し抵抗する娘の頸の上にもたれかゝり、スカートを捲つて、太い腕で頸を押えました。

「さア、たつぷり打つてやろう」とファンニイはクララ・ケルプ先生の口ぶりを真似して、「この臀を見よ。正に鞭打たれんとするこの太つた臀を見よ、蓮葉な女よ。如何なる恥を、お前は感じなければいけないか。さあ、スカートを上にあげ、キロットをずり下げ……おやこの娘は一昨日受けた鞭のあとがまだ残つている」

ドリイのふつくらした小さなお臀は、全く美しい果物のように白く見えました。それはずり下げられたパンタロンと上にたぐられたシュミイズにかこまれて、バラ色の美しい筋の入つた果物のようでした。その果物の上に身をかがめたファンニイは、昂ぶる胸をハアハアと弾せながら、左の手で平たく腹ばいになつているドリイの軽い身体を支え、臀の上まで袖を捲り上げた右手を振り上げ、この変つた小娘のお臀の上をメクラ打ちに叩きました。娘はうめき声を立てました。

「痛い、痛い。いゝえ、もつと強く……もうたくさん。……ひどいわ」

ドリイはもう骨の髄までしみ通つた変態的な肉慾の虜となつていたので、涙を浮べながらも妖しい陶酔の中にひたりつづけ、お臀の上に霰のように降つてくる打撃の下で、足をバタバタさせながら、身を震わせはじめました。

これは上級生と可愛い〻下級生の遊びなのだが、こうした日々の間に遂に女主人公のメリイはますます困らせます。

二人のお仕置のために新しい鞭を買つたの、皆の見ている前で、まるはだかにさせられるんだよ、だの、そんなことを云つて可愛そうな小羊を悶えさせ、あるときなどは、

「お嬢さん、さあ鶏のスウプを召上れ。明

食事を運んでくる頑丈なアイルランド女の女中がその度ごとに余計なことを云つてメリイをますます困らせます。

学校のやり方を知つているメリイは自分がどのような恥しい目にあうかよく知つていたのだが、初めてお臀打ちの刑に逢う身の恥しさは、あれやこれやとあられもない姿になる自分を想像するだけで、気が狂うばかりの煩悶なのである。

……皆が見ているところで、やられるのでしようか。ズロースを脱がされるのだろうか。無理に脱がされれば、おゝ恥しいことですわ。ヘレンに取りすがつて思うさま慰めて貰いたいのですが、この部屋は厚い布張りで防音装置がよく出来ているので何うすることも出来ません。

日の仕置のためよ。ケルプ先生が明日の朝八時に灌腸器を二つ用意するようにつて仰言つたから。灌腸器はね、醜打つとね、苦しまぎれに無作法な音をさせる人があるのよ、それだからその前に灌腸してあげるのよ」

などと云つてゲラゲラ大声で笑いました。

メリイは身もだえしてベッドに身を投げ出して枕を噛みました。灌腸はガルペストンの家で度々された厭な思い出があります。やがて時間が来てメリイとヘレンは召使に護衛されて刑場であるので恥かしさで気も狂いそうになり、一言も口がきけずにいますと、図に乗つた女中は怪しい慾望が急に湧き起つて来たのか、もう一人の女中に目で合図して、

「なあに、大したことはない、お臀を出すだけじやないの。一度出してしまえば何処だつて同じよ」

と云いながら矢庭にメリイをベッドの上に押さえつけ、もう一人の女中に両手を押さえさせておいて、スカアトを捲り、ズロオスをおし下げるのでした。

こんな調子で、メリイは刑を受ける前夜に防音装置の部屋でたいへんなことに逢つてしまい、やがてその当日がやつて来るのである。

まだ入校以来一度も臀打ちをされたことがないメリイなので、その評判は全校中の話題になつているのだつた。やがて時間が来てメリイとヘレンは召使に護衛されて刑場である講堂につれて来られる。後がだんだんと高くなつている講堂を埋めた美しい生徒たちは、選ばれた二人の犠牲者によつてこれから演じられる興味のある見世物が早く始まればいゝと、胸を躍らせているのだ。

……メリイとヘレンは中央に引き出されて先生の間に立たされています。何度も此の刑罰にあつて慣れている筈のヘレンも自信を失つたように見えます。可哀そうに、メリイは涙で眼を赤くしていました。

召使たちは、恐しい儀式の前触れの沈黙のうちに行つていきました。数分たつかたゝないうちに、二人の娘の悲鳴がきこえました。いやらしいスカアトの捲り上げが始まつたのでした。召使たちは罪人を捉えて、まるで小さい赤児を扱うように手を押えたり脚を拡げたりしました。

規定の場所に腰掛が持ち出されました。それは高い脚のついた腰掛で、イギリスの学校で懲罰用に使うポニイと呼ぶ木馬に似ています。前脚は後脚より低く出来ているので跨がらされた罪人がうつ伏せになると手を前脚に、くるぶしを後脚に作り付けてある革の輪で固く縛りつけられるので、当然頭は低く臀は高く空中に向けて変な姿になるのです。……

このように変な型の木馬の上に、灌腸を済まされた二人の少女のうち先ずヘレンが乗せられることになる。園長は刑の執行を宣言し生徒たちは此の刑の執行に立会う義

務があると云うことを発表する。そしてルイザとフアンニイの二人の生徒がその手伝いを命じられることになる。

……たちまちストリップが始まりました。ルイザは素早く蒼白い顔をしてうなだれている若い娘のスカアトの下に手を滑り込ませて、胴の周囲を手探りすると、ズロウスが白い絹層のように小さい短靴の上に下つて来ました。

「お跨り……」とルイザが命令しました。ヘレンは二人の女中のたくましい手で持ち上げられて腰掛に跨らせられました。女中が直ぐさまヘレンの頸すじを押しつけ頭を下にさせると、ルイザが両手を腰掛の前脚に伸ばさせて、手首を革の輪の中に入れ、フアンニイが両足を持つて足首を後脚の輪に入れ、しつかりと締め上げたので、もう刑が終るまでいくらもがいても、この妙な姿勢から脱れることは絶対に出来なくなりました。

「それを捲くれ」と、園長の命令です。

講堂内のすべての視線が、全裸にされかかつている一点に集中したのでした。召使はヘレンのスカアトを引き上げ、大きく捲り上げて、次にシュミイズを引つ張りました。召使たちが、スカアトとシュミイズが下つて来ないようにピンで止めている間に、見物人達はこの若い娘の美しい「頬」を見つめたのでした。……

やがて、鞭打ちが開始される。これを傍で見ていなければならない、メリイの気持は、どんなものであろうか。

見ている人も昂奮

……召使は園長先生の合図で、一番太い鞭をしつかり握りましたが、ヘレンが気付かない筈がありません。人々は身動きも出来ない彼女の美しいうしろの「頬」がケイレン的に縮むのを見ました。

ピシリーッ。

最初の一打が落ちるや、さつと赤く曲つ

た長い条が美しい肌にいたいたしく残りました。押えつけた呻きが漏れ、そして鞭は再び打ちおろされ、熟し切つた美しい肌を嚙みました。そして三つ四つと加える度に、熱情にあふれた美少年の愛撫を受けるにふさわしい柔肌が、やがてメツタ打ちにされたのでした。

その度毎に此の柔らかなお月様は、或る時は花のように笑い、或る時は真中の筋目まで縮み上るように見えました。まるでダンスをしているように、或いは飛び、或いは縮み、或いはふくれ上り、そしてだんだん火傷したように赤くなりました。……

鞭は五十回受けるのである。その間ヘレンは叫ばずに目を閉じて、痛みのうちにも恍惚とした表情をしている。たゞ一度ヘレンが鋭い叫び声を上げたのは、意地の悪い召使が、三十一回目の鞭を縦に振り下して谷間を深く打ちこんだ時だつた。こうして人々の昂奮のうちにヘレンのお仕置は終り、やがて可愛いメリイの番になる。彼女の美しいお臀は、全校のあこがれの的なので、いよいよとなつた時、講堂に集まつたみんなは、かたずを呑んで見守つている。

……いよいよ用意のために召使が近ずいた時、可哀そうな子は膝まずき、

「先生、許して下さい。もう決してしません」

と一生懸命に悲鳴をあげて嘆願しました。そしてルイザが彼女のスカアトの下に手を入れたとき「ああッ！もう、もうたくさん、神様！もうしません——。」

容赦なく鞭が続きました。

羞恥と絶望、そして苦痛に、可愛いゝ女主人公は顔を美しく歪め、一撃ち毎にバラ色になつてゆく裏側の丘を衆人の眼にさらしながら悲鳴をあげるのであつた。泣いても騒いでもキメはなかつた。彼女は雨と降る鞭のために、もつと大切な部分を隠すことも忘れてしまつて、身もだえする度に柔い可愛らしいそのふくらみもチラッと見せてしまつたりする。こうして昂奮のうちにこの見物は終了するのであるが、さてその後、メリイとヘレンの二人が寄宿舎を脱走し、いろいろな目に逢いながら、結局また好色な伯父のダン・ドーバアのところに帰つて来る、そして此のダンの為、花を散らされることになるのである。

（完）

うで、さわれば桃のように柔らかでした。

鞭は呻つて赤く縞をつけました。メリイはお臀を弾ませては呻りました。

「ああッ！もう、もうたくさん、神様！もうしません——。」

容赦なく鞭が続きました。

羞恥と絶望、そして苦痛に、可愛いゝ女主人公は顔を美しく歪め、一撃ち毎にバラ色になつてゆく裏側の丘を衆人の眼にさらしながら悲鳴をあげるのであつた。泣いても騒いでもキメはなかつた。彼女は雨と降る鞭のために、もつと大切な部分を隠すことも忘れてしまつて、身もだえする度に柔い可愛らしいそのふくらみもチラッと見せてしまつたりする。こうして昂奮のうちにこの見物は終了するのであるが、さてその後、メリイとヘレンの二人が寄宿舎を脱走し、いろいろな目に逢いながら、結局また好色な伯父のダン・ドーバアのところに帰つて来る、そして此のダンの為、花を散らされることになるのである。

（完）

風・俗・ル・ポ

競輪場の女たち

勝負の果てに散る女

何の彼のと眼の敵にされながらも、近頃の競輪の猖獗ぶりは凄じい。閑人が調べたところによると、全国では平均して一ケ月に三百六十六日も開催されている。つまり、来る日も来る日も、十二、三ケ所で号砲やジヤンが鳴り、札束が空に飛んでいるわけだ。

東京周辺でも、後楽園、川崎、鶴見、村山大宮、千葉、松戸と、必ず二、三ケ所はダブつて開催され、ものの気に憑かれたような競輪人種が、何処からともなく集つてくる。ウイークデイだと云つても、熱心なファンが会場にひしめいて、其処から離婚、倒産、横領強盗、一家心中が発生する。

昔から賭博に悪徳、悲劇はつきものだが、競輪の場合、それは確実に、そして実に足早やにやつてくる。そして、そいつは哀れな犠牲者の、骨の髄まで、むしやぶらずにはおかないのだ。

眼を世紀のギヤンブル市、競輪場のスタンドに転じよう。諸君はその粗末な（其処

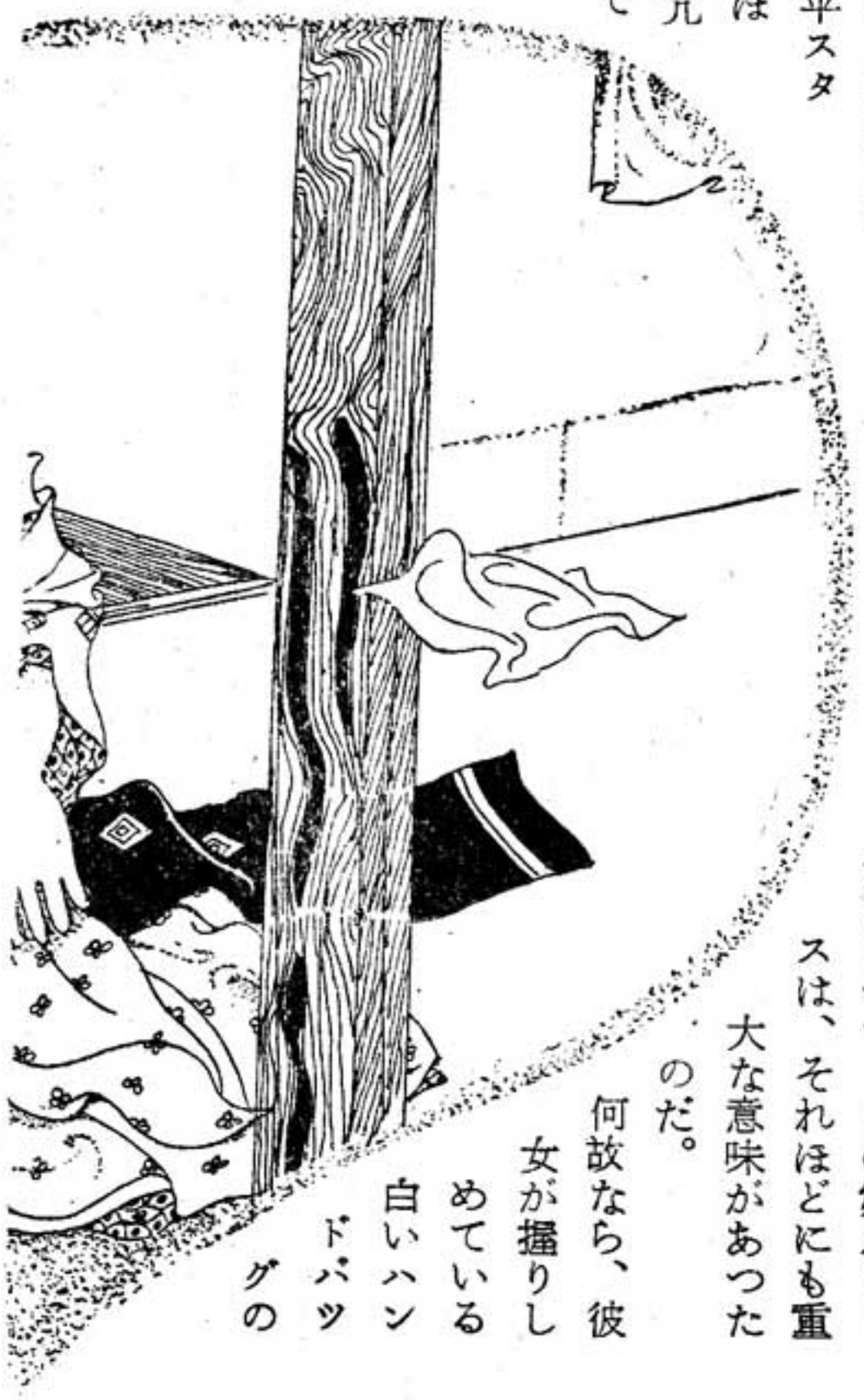
緒方逸馬
水沢深雪画

で一日に集散する莫大な金高に比べて、競輪場の施設と来たら、何とお粗末なことだろう！）スタンドのあちこちに、意外に多い女性の姿を見掛けること。だろう。

女競輪マニア。男女同権などと、そんな言葉を持出す必要はない。割烹前掛に買物籠の内儀さんが、今夜のお菜代を賭けた必死の形相から、平気で千円券を幾枚もハンドバッグに押しこむバーのマダムもいる。男も女も、同じように競輪の魅惑にとりつかれた、亡者達なのだ。

沢田泰子は何時か膝の上のハンドバッグを必死に握りしめていた。二階になつた特別席だから、平スタンドのような、埃つぽく雑然と殺気立つた亢奮状態ではないにしても、充分上づつた熱つぽい空気が、満員のこの席にも、渦を巻いて底流している。

何しろ朝から大荒れに荒れつづけて、大穴中穴の続出。その上今度は、クセの



ある選手ぞろいの第八レースだから、ファンがエキサイトするのも無理がないと云える。

烈日の照り返しで、ユラユラと陽炎が立つような走路に、ユニホームに包まれた九人の選手が並んだ。そして号砲。莫大な札束の行方を賭けて、選手たちはまるで水すましのように、スイスイと眼の下を流れてゆく。

泰子はまるで眼に見えぬ何者かの手で、双の乳房をグイとつかまれてでもいるような胸苦しさに、殆ど喘えいでいた。観衆の口汚い罵次も声援も奇妙に遠くに聞えて、何かシーンと、頭の辺りが空白にさえ感じられた。彼女にとつて、この第八レースは、それほどにも重大な意味があつたのだ。

何故なら、彼女が握りしめている白いハンドバッグの中には、数枚の薄つぺラな車券が入つている代りに、現金と云つたら、殆ど帰りの電車賃さえ危いような態たらくだつた。今朝方、丸の内の商事会社で、課長心得を勤めている夫を送り出してから、大急ぎでとつて置きの駒縒お召と、指輪を質に入れて作つて来た六、七千円ばかりの金も、すつかり消えてしまつていたのだ。

朝から荒れれば荒れるだけアツくなつて、気がついた時には、これが最後の勝負になつていた。是が非でも、勝たなければ、家にも帰れない羽目に来ている。

紫紺の明石に、朱に白抜きの単衣帯をしめた泰子の上品な若奥様姿は、他目にはそんなセツパつまつた勝負に憂身をやつしているとは見えなかつたかもしれない。しかし、次第に盛上つてくる場内の亢奮に包まれて、バンクに釘づけになつている彼女の顔は、次第に蒼白になつてゆくのだ。

この早春、遊び好きの従兄に連れられて、始めて競輪見学に来たのが、病みつきになつた。

「いやだわねえ。こんな殺伐なレースに夢中になるなんて……」

そんなことを云いながら、半分お義

理で見ているうちにすすめられて、つい車券も買つてみる気になつた。魔が射したのだ。

「そうねえ、あの黒の人、ちよつとスマートじやない？それから黄帽の人、肩のあたりがジョセフ・コツトンに似てるわ。黒と黄でそれじやあ、2—5を三枚も買つて見ようかしら？」

そんな気まぐれな車券買いに、穴がぶつかつたのだ。2—5で四千七百円。三枚で一万五千円近くの配当を受取つて、泰子は正直、呆然となつた。

なに不自由のない奥様暮し、と云つても、律気なサラリーマンの夫が持つて帰る、たかだか三万円ばかりの月給で、夫婦二人小じんまりと暮している彼女には、この配当金はまるで魔法の杖で叩き出されたような、驚きだつたのだ。それだけに溺れ方も激しかつた。

家計をやり繰りして通つているうちはまだよかつたが、負目が重なると、夫と二人、コツコツ楽しみに積立てた預金帳に手がついた。その穴埋めにアツくなつて通つているうちに、自分の衣類は元よりのこと、何も知らぬ夫のカメラから冬物洋服まで質入れして算筒の中はガラガラになつていた。お定りのコースだつた。

だが、それでは済まなかつた。いずれは夫に知られて仕舞う。その前に何とか少しでも挽回して……。そうして焦つた揚句が、今日それは今迄数千円、或は数万円の札束に換算される可能性のあつた車券が、単なる薄つぺらな紙つきれに過ぎない、と云う通告なのである。

泰子は血走つた顔を上げた。もうこの競輪場に用はない。

「どうしました、奥さん。どうも今日はいやに荒れますねえ」

泰子はギョツとして声の主を見た。

三十五、六でもあろうか、リュウとした高級品づくめの紳士が、何の屈托もなさそうな柔和な笑顔を見せているのだ。

「外れましたか？　どうも、むつかしいレースばかりですからねえ」

「わたくし、今日はもう駄目ですわ」

泰子はヒステリツクにひきつつた微笑を浮かべながら、嘲けるように云つた。

「そりやあいけませんなあ。しかし、今度のレースも面白いですからね。すぐ挽回出来ますよ」

「でも、すつかりお手あげなんですもの…」

吐き出すようにそう云つて、起ち上つた泰子の袂を押えるようにして、その紳士は早口になつた。

「いけませんよ。スツたまま帰えるのは不愉快なものですからね。僕は今日は奇妙に芽が出ましてね。不用の金が大部あるんです。よかつたらこれをお使いになつて、もう一勝負なさつたら如何です？」

泰子は驚いて男の顔を見た。冗談ではなさそうな、真面目な表情だつた。しかし、見ず知らずの男である。

「でも、そんなこと……」

「いや、当つた時に返えして下されば結構です。どうせアブク銭ですからねえ。それに、こうして当つた金を借りて勝負すると、縁起がよくて、必ずツクつて云いますよ」

その言葉のもつ蠱惑にひかされて、泰子はついそのつもりになつた。何しろ、指輪を質受けする金だけでもいいから何とかして摑みたかつたのだ。今夜帰宅した夫は、彼女の手から結婚指輪が失くなつたことに、すぐ気がつくに違いないのだから……！男が無雑作に差出した三枚の千円札は、再び彼女をズルズルと、ギヤンブルの泥沼に押しやつた。

それからは、又無我夢中の時間が過ぎた。芽が出たり取戻したりしながら最終レースが終つた時、泰子は又、元の木阿弥に戻つていた。

「残念でしたね。いやいやあんな金のことなんぞ、御心配御無用です。いずれ又お目にかかる折もあるでしようから、その時で結構です」

その男は、如何にも淡白に、もの分りよく都合が悪けりや、御主人に御相談してもいいそう云つた。泰子にとつては、まつたく地獄に仏の思いだつた。

しかし、さすがに泰子は、それ以来プツツリと競輪場通いを止めてしまつた。数分間のレースに命を刻まれるような、スリルの残酷さが身にしみた。つかい込みの後始末はつかなかつたが、夫の手前は何彼と云いつくろつて、以前のように、ひつそりと家にこもるようになつた。

そんな或る日だつた。あの紳士が彼女の家を訪れて来たのは……。

「やあ結構なお住いですなあ。実に閑静だ」

眼を疑うように棒立ちになつた泰子を無視して、彼は悠々と座敷に上りこんでいた。

「時に奥さん、何時か御用立てした金ね。いや、利子を入れても倍ぐらいのもんでしようが、御都合がよかつたら、返済して頂きたいと思いましてね」

泰子は平然と喋る男を凝視してから、やつと、乾いた声で、呟くように云つた。

「あなたは、あの日、私のあとを尾けていらつしたのね……」

「それやあ貸付先の住所ぐらい調べるのは当り前ですよ。――しかし奥さん、あなたの御んですから、御無理にとは云いませんよ」

悪夢は、完全に蘇えつたのだ。仮面を脱いだ競輪場ゴロの凄腕にかゝつては、泰子などひとたまりもなかつた。

「仕様がねえや、金がねえなら、人の女房じや有難くもねえが、まあお前さんと、昼寝でもして行こうか――。しかしなんだぜ。二、三日うちにやあ又来るから、その時きやあ、

小遣銭ぐらい用意しといてくんな」

罪の発覚におびえながら、泰子は二度、三度と、男の云いなりに眼を閉じなければならなかつた。金も躰も、図に乗つた競輪ゴロに絞られるだけ、絞り上げられた。

そして、破滅は確実にやつて来た。白昼の寝乱れた現場を、彼女の夫に発見されたのだ。

泣いても、佗びても、もう取返えしがつかなかつた。一度自殺を企てて失敗した泰子は今は静岡県の片田舎の実家に戻つて、うつろな毎日を送つている。

競輪と云う言葉が眼にふれ耳につく限り、彼女の傷心は癒すべくもないのであろう。

地獄におとされる女

埃つぽい騒音に包まれながら、ハッエは先刻からぼんやりと、バンクに眼を放つていてるハッエには、この飲屋づとめはあつけないほど躰は楽だつた。しかし、いくら喰うや喰わずの水呑百姓にしても、ノビノビと村中を駈けづり廻つて育つた彼女には、三坪に足りないチヤチな店の朝夕が、如何にもせせこましく、息がつまるようだつた。何も彼も鼻につかえるようで、それに同じ店の

バンクの中央には、ほんの申訳ばかり、花壇らしいものがしつらえてある。水は出ないが噴水の仕掛けもある。

四百米のバンクは、競輪場としては大きい方ではないのだが、ハッエには広々として気持がよかつた。スタンドにはギッシリ熱狂したファンが詰めかけていたが、空つぽと云つてよいほど、あつけらかんと広いバンクを見ていると、久振りに故郷の野原が思出されてくるのだ。

無理もなかつた。東北の村から夜行で朝上野に着くと、いきなり池袋駅近くの、ゴタゴタした飲屋街の一軒で、働く羽目になつたのだ。

小さい時から力仕事で育つているハッエには、この飲屋づとめはあつけないほど躰は楽だつた。しかし、いくら喰うや喰わずの水呑百姓にしても、ノビノビと村中を駈けづり廻つて育つた彼女には、三坪に足りないチヤチな店の朝夕が、如何にもせせこましく、息がつまるようだつた。何も彼も鼻につかえるようで、それに同じ店の

朋輩からは、東北ナマリのズウズウ弁を笑われて、口を利くのさえ臆病になり勝ちなのだ。

思えば村を離れて、始めてこんなに広々とした場所に来たと、彼女は思つた。それに此処では別段口も利かず、黙つて座つていればいいのだ。ハツエを連れて来た筈の客の山崎は、さつきからもうレースにとりのぼせて、スタンドと穴場との間を、夢中で往復している。だから殺気立つた観衆の中に包まれていながら、ハツエは唯一人、レースには無関心にぼんやり坐つていた。競輪の仕組みも面白みも判らなかつたし、知ろうとも思わなかつたのだ。

しかし、一レース終つて、次のレースの試走が始まつた時、眼つていたようなハツエが、ふと躰を乗り出していた。眼の前のバンクを色とりどりのユニホームに身を固めた選手が次々に流れてゆく、その青色の選手に吸いよせられたのだ。

「達治さあじやねえだか……」

ほんの一瞬で、もう後姿になつていたが、その肩の辺りも背格好も、幼馴染みの、隣家の達治にそつくりだつた。ハツエは思わず息をはずませながら、その青色帽の行方を眼で追つた。

二周目、再び選手の一かたまりがハツエの前に流れて来た時、彼女は早鐘をつくような動悸さえ覚えた。やはり達治にそつくりだつた。濃い眉も、利かん気らしい口元のあたりも、彼に生写しと云つてもよかつた。

しかし、達治が競輪選手をしている筈はなかつた。つい二三日前、ハツエは村の妹から、隣家の達治が、川向うの部落から、近日に嫁を迎えると云う手紙を受取つたばかりだつたのだから……。

単なる空似なのだ。ハツエはまだ夢を見ているように、ぼんやり見上げた。

ハツエの店にちよいちよい顔を見せる山崎は、景気のいい時もあるし、ひどくシケ込んでいる時もある。一定の職と云うものもなく、競輪場で暮している、いわば競輪やくざの一人だつた。

「おうハツちやん。この間はお前のおかげでえらくデカい芽が出たぜ。どうだい、又一緒に行かねえか？」

「そうだね。あの桐野つて選手、又出るのかしらね？」

「桐野かい。あいつは地元の選手だから、チヨクチヨク出らあ。ヨシ、又ハツちやんと行をはずませながら、その青色帽の行方を眼で

レース開始。ファンの熱狂の中で、ハツエの視線は青帽を追いつづけた。この春、半ば売られるようにして村を出る前の日、林の中で抱きすくめられた時の、彼の熱い体温を思い出していた。

達治さあ、達治さあ……。それが声になりそうになつた時、ワアツと、高いどよめきがあがつた。

「オイ、ハツエ、とつたぞ、とつたぞ！　穴だ。こいつはデカくつくぞ！」

亢奮しきつた山崎の脂でりする顔を、ハツエはまだ夢を見ているように、ぼんやり見上げた。

ハツエの店にちよいちよい顔を見せる山崎は、景気のいい時もあるし、ひどくシケ込んでいる時もある。一定の職と云うものもなく、競輪場で暮している、いわば競輪やくざの一人だつた。

「おうハツちやん。この間はお前のおかげでえらくデカい芽が出たぜ。どうだい、又一緒に行かねえか？」

「そうだね。あの桐野つて選手、又出るのかしらね？」

「桐野かい。あいつは地元の選手だから、チヨクチヨク出らあ。ヨシ、又ハツちやんと行

ほどねえ。桐野も一クセあるからな。今度は一番桐野で勝負をするかな、これで素人のカンも案外アタルことがあるからな」

とを喋つていた。

「え、青帽？　ウーン、桐野正一かい。なる

つて、桐野にドカンと賭けて見るか！」

せせこましい東京は、何処にも行く気がしなかつたが、競輪場なら、又行つてもいいと、ハツエは思つた。

「馬鹿だよ、ハツエは……。あんな競輪ゴロの山崎なんぞその尻にくつついて歩いてたら、今にロクなことはありやしないよ！」

女主人のそんな口汚い言葉を浴びながら、それでも山崎に誘われると、ハツエは黙つて、安物のワンピース姿でついて行つた。

相変らず、レースには何の興味もなかつた。唯、あの桐野と云う、かつての恋人に生写しの選手が出場する時だけ、ハツエの鈍い瞳が、生きがえつたように輝くのだ。見れば見るほど、瓜二つだつた。烈日のバンクに、しばし達治と、彼につながる、なつかしい村の思出が甦えるのだ。

「畜生！　桐野の奴、今日はなんてだらしがねえんだ。ザマねえや！　ハツエ、お前桐野つて云やがつて、俺あ大損しちまつたじやねえか、お前、一体、どうしてくれるんだ。俺の金じやあねえんだぞ！」

ハツエは眼をショボショボさせて、ガンガン喚いている山崎の顔を見上げた。悲しかつた。

最終レースが終つた時、山崎は五十近い、ニツカーズボンの、ひどく色の黒い男を連れて来て、早口で云つた。

「この人にな、俺あ金を借りてたんだ。お前が悪いんだ。桐野、桐野つて云やがつて――」

セカセカと逃げるように立去る山崎を、ハツエはじつと見送つた。それから、

「オイ姐ちやん、行こうぜ！」

と顎をしやくつた男の後から、彼女は黙つて歩いた。利害はよく判らなかつたが、達治に似た選手が負けたことは、たしかに自分の責任のような気がしていた。

その夜ハツエは、ジメジメと暗い宿の一室で、名も知らぬその五十男と寝た。抱かれながら「達治さあのところにも、今時分、川向うから、嫁コが来てるべエなあ」と思つた。

それから、ハツエの姿は、何時も方々の競輪場で見られた。安物の洋服を着てスタンドに腰を下し、放心したようにバンクに眼を投げている。

「なにね、あいつはちよつとノータリンでね。競輪さえ見せときや、おとなしいものさ」

競輪ゴロたちの間では、そんな言葉で彼女は売買される。幾枚かの車券に換算されて、荒み切つた男たちの間を、転々と渡されてゆくのだ。

鼻がつかえるような池袋の店で、酔客の相手をするより、広い競輪場の方が、彼女の性に合うのだろうか……。

しかしハツエが生きているのは、月に幾回か、バンクの上の選手に、恋人の面影を見出す瞬間だけなのかも知れない。

愛読者通信

小生二十四歳の男子、無職、「そどみあ通信」に特に関心を持つているものです。特に相手が四十五歳以上の筋骨隆々とした方、乃至肥満型の口髭を有する毛深い方を希望するのですが、悲しい哉一度もさような人にはめぐり合う機会もなく、実際の経験は一度もありませんが、何となく女には好意はもてず、たくましい男性に心引かれております。

高知のR様もつと近くでしたら御拝顔の栄に浴したいと思つています。

小生神戸に在住しております。同好者の集る劇場又は喫茶店を同志の方は誌上でお知らせ下さい。次号での発表を待つております。

（神戸市　S生）

銀座女族の露出症

三田陽子

「もし〳〵キャップがおなかへずり落ちてますよ」

なんて慌てる様では、お世辞にも近代人とは言えません。その内の二つは正真正銘の女性のシンボルだけど、その他のものはスポンジのブラ・キャップなのだから、うつかり下着の着付けが悪いと忽ちずり下つてしまうシロモノなので、見て見ぬふりをするのが武士のナサケ、いや、紳士のたしなみとなつている。

だから、淑女の方も、中味はともかく、パツトで肩巾を拡げられるだけ拡げたテイラードに何となく頼母しい男性美を感じてあげるという、おつき合いの良さを発揮せざるを得ないのだ——だから何ごとも、なまなましい真実を探求したい御仁には、やはり結婚式より先に温泉マーク旅行でも老婆心ながらおすゝめするよりテがないのだが。

しかし、何しろ朝から晩まで銀座というところは独りで歩くのも悪くはない。

われこそはと着飾つて美男美女がのし歩くのだから、わが家へ戻れば、梅干婆や百貫豚のような御亭主が待つている身にとつては、人生のオアシスである。たまに気に入つたタイプの人にでも出会おうものなら、恋人でも見つけたようにすつかり満足して、たつたひと目会つただけの人のおかげで、その日一日が楽しいのだから有りがたいというものだ。

まして夏ともなれば、あちらも、こちらも大流行のナイロン・ブラウス。それはまだしも透きとおるナイロン・パンテイなるものは、どういうお方が召されるのか。これを流行だとて皆がつけ出したら、野球などへ下手にスタンドに行けなくなること受合い。——久米の仙人の故事ではないが、スポーツマンがパンテイ故にエラーを続出させたらことだからである。

ともあれ銀座マンは煽情的なイミテと露出がお好き。肉体美のイミテに寛大なエチケットさえ心得ていれば、たゞもう、ぶらつと銀座八丁裏おもてを眺めただけで九十%は悩ましさを満喫出来る

風俗戯評

銀座を歩く人種はどういうことでセックスを満足させているのだろうか。

眼に触れる範囲から拾い上げてみると、先ずアヴェックはみな申し合わせたように腕を組んで歩く。

昔のアヴェックはたゞ何となくより添つてそゞろ歩いたのだが、戦後は行動派が巾をもつぱら実質本位で直接的。ざつと見渡してみても、ぴつたり寄り添つた情熱型から小指をからみ合わせる程度の小粋型まで、さまざまだが、そのいずれもが腕と腕、指と指に一種の興奮状態でものをいわせているのだから見ものである。

新婚旅行をとつくの昔に済ませてから涼しい顔で挙式を——といつたテ

夏の女・二題

風俗コント

釘に寝る女

ツマミ食いをする変態お妾さんの夏の夜話……

青柳敬三

月田浩画

——(1)——

七つも年下の、若い長髪の画家の、緩んだネクタイを、きゆッと締めてやりながら鳥子は、

「ねえーエ、こんな蒸し暑い晩に、あたし独りじや寝苦しいのよ。今夜泊まつていつて下さらない？」

と、ねつとりした口調で云つた。

鳥子の世話になつている旦那は、ある会社の社長である。

いつも忙しがつていて、この妾宅へ来ても殆ど泊るということがなかつた。

それに彼は今、二、三日の予定で大阪へ出かけているのである。

夏の女・二題

鳥子にとつては、「鬼の居ない間の洗濯」というわけで、少し前からワケのある若い画家を引つぱりこんでいた。

浴衣を小粋に着こなして、しきりに団扇を動かしている鳥子は、思い切り若やいだ化粧をしていた。

「奥さんは本当に若い。僕より年下に見える位だ」

と頬の赤い童顔の画家に云われると、そんなお世辞が、お知つていて嬉しがつた。

この青二才に求めているものは、禿の旦那にはない若さであり、弾力のある青春の肢体である。

未熟な果実に、がつぷりと歯を立てたい欲情に似ていた。

その逞しい胸幅や太い手に、そして妙なエネルギーを想像させる童顔の艶々しさに、鳥子は淫らな想いを秘めて、

「ねえーエ」

と甘えてみせる。

「泊つてらつしやいよ。泊まつていかなきやいや」

風のない夜である。

女の化粧した顔にも、ねつとりと汗が浮いている。

こんな蒸し暑い晩に、一人では寝苦しいから泊つていけとは妙な理窟である。

二人だつたら余計蒸し暑いに決まつている。

「さア、ぐつとお空けなさいな」

と、女はビールを青年に注いでやる。

と、その時来客があつた。旦那の会社の者だというが、始めて見る顔である。

四十五六の浅黒い苦味走つた痩せた男で、

「社長から、これを奥さんにと、言伝つて参りました」

と差出したのは旦那からの手紙で、次のような意味の文面だつた。

「――私は社用でもう三、四日ばかり帰京が遅れる。留守中、あの若い絵かきが定めし遊びに来ていることだろうが、……私はお前を信じていたい。さて此の手紙を持参願うのは今度当地へ同行した小谷君で、同君が一足先きに帰京することになつたので、お頼みしたわけだ。尚、同君には日頃何かと世話にもなつている。是非待遇をしてお帰しするように」

鳥子は小谷を客間に案内して、サントリーを出し、世間話をよろしく振りまいていたが、小谷は酒好きらしく最初のグラスを、ぐツとやつてから妙に落着いてしまつて、女の気持を自在に操縦する話術で、また実に能弁に喋り捲つていた。

この分では直ぐ帰るまい。――

夏の女・二題

と思うと、彼女は隣りの座敷にいる若い画家のことが気がかりになるが、旦那の手紙の様子では、此の小谷をいい加減に扱うわけにもいかず、早く帰ってくれればいいのにと思いながら、

「何もお構い出来ませんが、ごゆつくりなすつて下さいまし」

と云うと、小谷は、

「いや、若気の至り、というやつですかな。何しろ、もう二十数年も前のことです。恥をお話しなきやならないが、聴いて下さいますか？」

「ひどく蒸りだつたんでございましよう？」

二十前から女遊びを覚えた私は、もう一ぱしの放蕩児のつもりで、親不孝しながら不見転や魔窟の女たちばかりを相手にしていたのですが、私の念願は素人の女を、それもありふれた生娘ではなく、ちやんとした人の持ちものを自分のものにしたい、という非人情な希いでした。

何としても、それにも冒険が伴うし、人妻や妾の娼婦性ということに想像を逞しくして夜となく昼となく、そのような妄想に悩みつづけていました。

情欲と共にスリルを満喫するには、商売女や生娘ではもう興味もなくなり、ひたすら人妻か二号を狙つていたわけなのですが、到頭、その機会がやつてきました。

そして、私の相手になつたのは、丁度奥さん位な年配で、――（と小谷は鳥子をジロリと鋭く一瞥した）やはり奥さんのように妖艶という感じの当て嵌る人で、或る教授の二号でした。

仮りにその人を、A子と呼んでおきましよう。

私がA子と知りあつた経緯などは委しくお話してもつまらないことですから省略しますが、その年の夏、避暑地の海岸で、ふと知りぬ学生でした。

――（2）――

その頃、私はまだ二十三で怠け者の学生でした。人生にこわいものなしと思い上つているくせに、口に出せば倦怠と虚無を云い、恋愛を軽蔑して情痴に憬れるといつた鼻持ちなら

夏の女・二題

あつたという極く有りふれた「避暑地の恋」にすぎませんでした。

ことわつておきますが、教授は私の学校の先生ではなく、只私という放蕩学生が偶然A子と避暑地で知り合つたというに過ぎません。

ところが教授は東京に夏期大学の講座を持つているので、屢々東京の本宅へ帰つてゆかれるので、その間、A子は妾宅にたつた一人きりでおりました。

私はというと、その海岸町に伯父が別荘を持つていたので、そこに居候をしていたわけです。そして夜になると、こつそり抜け出してA子のところへ忍んでゆくようになつたのです。

はじめは、そういう単なる密会のスリルに酔つたりしていたのですが、段々大胆になり、良心も魔痺してゆくにつれ、私は八つも齢上のA子と不倫な関係に堕ちこんでしまう様になりました。

三十女の官能的なゼスチュア。爛熟した肉体の暴風。男の慾情を引きずり廻すに足る恋の技巧。ことごとく私を満足させてくれました。

私はまだ学生の分際で、四十男の官能を卒業したとさえ自己陶酔していたようです。

ところで、どうしても不思議に思えたのは彼女が、いつどんな場合でも、決して背中を見せないことでした。

いや、暗闇の中でさえ、私が彼女の背へ手を廻そうとすると、その皮膚へ触れさせないように避けてしまうことでした。

背中の肌を見せないのは、或いは何かの刺青でもしているのではないかと思いましたが、そんなら触つただけでは知れない筈です。

それを、どうしても触らせないとするのは何故だろう？

A子の背中に何かの秘密があるということを知ると、何とかして知りたいと思うのは人情です。

或る夜、私は、彼女との抱擁のとき、いきなり手を廻して彼女の背を探ろうとしますと、彼女は身を悶えて、

「いや、いや！　それだけはいやや！」

と必死に抵抗するのです。

しかし私は、この期を逃したら、もう彼女の秘密を知る機会はないと思い、むりやりに腕力をふるつて彼女を俯伏せにしてしまい、その背中を撫でさすつてしまいました。

「あッ！」

思わず私は叫び声を出して飛び退きました。

暗い中なので何も見えはしなかつたのですが、とにかく彼女の背中は一面に小さい凸凹が出来ていて、ゴム靴の裏でも擦つたような感触でした。

何だろう？　皮膚病にしては余りにひどすぎる。私が茫然としていますと、A子は、

「あたしが、こんな背中をしていると知つて、あなたはもう、あたしを嫌つておしまいになるわね」

それは、哀れみを乞う声ではなく、却て私を強迫するような鋭いひびきを持つた怖ろしい調子でした。

私は、ゾッとして逃げるように立去りましたが、しかし一夜明ければ、あの不思議な手ざわりに嫌悪どころか、却つてもう一度撫でて擦つてみたいという欲望を抑えることが出来なくなつてしまいました。これは我乍ら実に不思議な気持でした。

夏の女・二題

——(3)——

そして或る夜のことでした。

今夜のように、——やつぱりひどく蒸し暑い夜でした。

火の情慾を掻き立てるような海鳴りも聴こえてきます。何か焦燥に苛立ち、酒の酔いも手伝つて、私は数日ぶりでA子の家へ忍んで行きました。

あのこと以来、A子は私のことを怒つているに違いないので、——それにあの奇怪な肌の感触に対する怖ろしさもあつて、しばらく彼女から離れようとしていたのでしたが、やつぱり我慢出来なくなつて私はA子を訪ねました。

もしや、彼女の旦那である教授が来ているといけないと思つて、私は、いつものように庭内へ忍び込んで、植込みの蔭から、そつと彼女の居間の方を覗きました。

縁側には蚊いぶしの煙りがユラ〳〵と白く立ちのぼつています。そして、その少し下の方に彼女の

らしい頭が見えました。

それは広縁に寝ているような位置なので、私は植込みから少し乗り出して、よく見える方へ廻つてみますと、

「あッ！」

と思わず息を呑みました。

広縁に真白な女体が仰向けに寝ているのです。

座敷の灯りは消えていますが、月明りで彼女の全裸がくつきりと白く浮き出て見えるのでした。何という美しさ！

しかし、その次に私の見たものは、実に奇妙なものでした。

彼女は何かの敷物の上に寝ているのですが、その黒い一面のボツボツが何であるかはよくわからず、——ただ、彼女は、かすかに呻きながら身悶えているのです。

私は思わず植込みから飛び出して、

「奥さん！」

と声をかけました。

するとA子は、はツとしたように起き上りました。私は駈け寄つて、今迄、彼女の寝ていた敷物を見ました。

あゝ、それは等身大の板に、一面に釘を打ちつけたものでした。

「とうとう見られてしまつたわね」

彼女は悪びれずに薄笑いさえ浮べながら云うのでした。

「あたしも、はじめは、こんなことはしたくなかつたのよ。……こんなことを無理にやらせたのはウチのコレなのよ」

と拇指を立ててみせました。

「あの人は変態なのね。そして、あたしの肌がボツボツに荒れるのを見たり撫でたりするのが好きなのよ。……始めはあたし、こんなこと怖しくていやだつたのに、やつているうちに段々不思議な昂奮を覚えるようになつたの。この痛さに素晴しい刺激を感じるようになつてしまつたのよ」

私はそれを聞くと、何だかこちらまで異常な昂奮にかり立てられ、私は、いきなり彼女に飛びかかつて、そのボツボツな背中を撫でさするのでした。

そして私はわけのわからぬことを喚きながら、A子にまつわりついて、執拗に唇を求めていました。

そして私が、ようやく不倫な抱擁からA子を離して、何気なくドアーのところへ視線を移したとき、「あッ」と私は声を出して長椅子から立ち上りました。

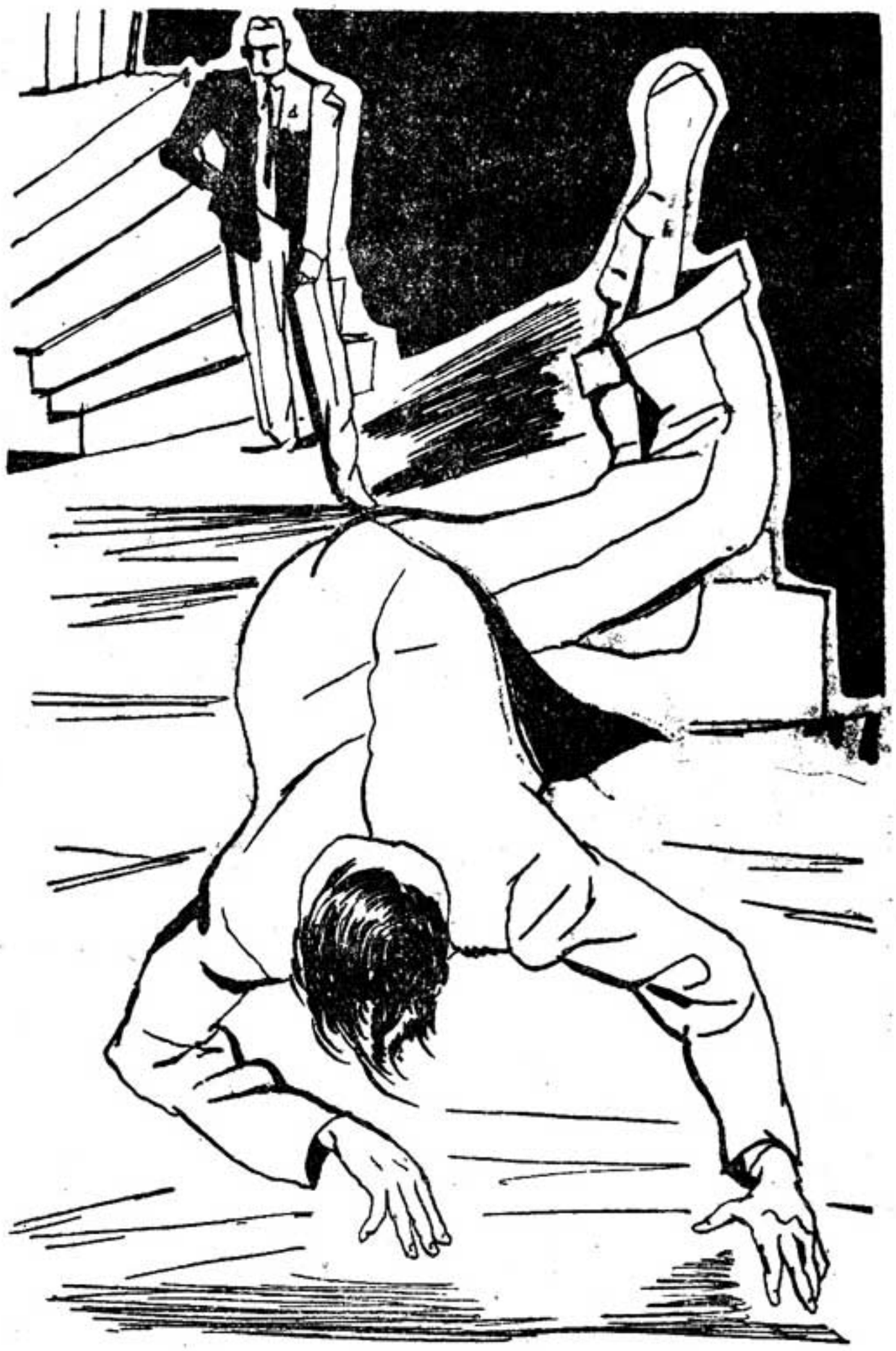
夏の女・二題

心臓が凍りつくような驚きという形容は、あんな場合を云うのでしようか。一瞬の間に咽喉はパサ〳〵に渇き唇の血は退いて頭の芯がシーンと空虚になつてゆくような感じがしました。私が見たのは予期しなかつた教授の姿だつたのです。

接吻の現場を見られてしまつた以上、弁明の余地はありません。私はこうなるとまるで意気地がなく、逃げるにも逃げられぬと観念したとき、幸か不幸か眼の前が、ぐら〳〵と揺れて、あゝ倒れるな？　と思つた時には、もう何も解らなくなつてしまいました。

ふと意識を取戻すと、私の直ぐ傍に教授が蹲んでいて、私の脈を診ていました。私は床に倒れたまゝですが、——私が意識不明だつたのは、ほんの二分間位のものだつたらしいのです。脳貧血でした。

しかし私は、わざと眼を瞑つてそのまゝ凝つとしていました。この場を取繕うには仮病を装うより法がないと思つたからです。



すると教授は、長椅子に茫然としているA子に向かつて、

「小谷君は死んでるよ。心臓痲痺だろう」

と、静かに云いました。

「これア、まずいことになつた。ここで死人が出来たとなると警察沙汰にもなりかねないし、第一、世間へ醜聞（スキャンダル）が拡まるのは困る。わしも大学を退かなければならなくなろう。お前も世間へ向ける顔がなくなるわけだ」

低い声で、落着き払つて云う教授の言葉にA子は只々すゝり上げて泣くばかりです。

女というものは、涙で大抵のことは解決してしまうものだと私は感心しました。

泣くという一手で、男の意志も怒りも圧倒

夏の女・二題

してしまう、有力な武器ともなるものです。

「とにかく、此奴を此処へ置いとくわけにはいかない、外へ運び出そう。そこらの道に倒れていれば一応我々の関係圏外になる」

大男の教授は、そう云つてからA子を客間に残して、私を抱き上げ、裏木戸へ出てゆきました。

教授は勿論、私が死んでいないことを知つているのですから、裏木戸に出た以上、私をその腕から下ろして、

「さア、貴様は帰れ！　二度とこへ現れるな！」

とでも云つて私を追い出すに違いないと思つていました。

裏木戸からは階段がついていて直ぐ海岸へ降りられますが、ちよつとした石崖の上に建てられているので、崖下まで五メートル近くもあるのです。

教授は抱えている私を、いきなり崖下の闇に投げ落としてしまいました。

——(4)——

小谷は、そう云つて一寸息つくと、ゆつくり煙草に火をつけながら、鳥子を上眼でちらと見て、

「幸いに私は脚一本、片輪になつただけで済みましたが、……いやどうも、情痴の果ての浅間しい姿になりました」

鳥子は真蒼な顔をして俯向いていたが、ふと隣りの部屋にいる若い画家が、こつそり座敷を出て、やがて裏口から出ていつたらしい気配を感じとつた。

小谷は意味有り気な微笑を見せて、

「それにしても奥さん……、男の嫉妬というやつも恐ろしいもんですな。その教授の考えでは、事を荒立ててスキャンダルを世間へ曝すより、私一人を料理して、家庭の平和を保とうとしたのでしよう。私は脚一本で済んだが、あの場合、打ち処がわるくて死んだとしても文句は云えない。……いや全く『町内で知らぬは亭主ばかりなり』ということを云いますが、亭主というものは案外、何でも、ちやんと知つてるものらしいですな」

小谷は煙草を灰皿に捨てて、

「永いことお邪魔してしまいました」

と殷懃な挨拶をしてから立ち上り、跛をひきながら玄関迄いつた。

そして、玄関を出た彼は門を出ると、急に跛をひいていた脚を、しやんと正して、しつかりした足取りで歩いていつた。

（終）

原稿募集

★体験記・告白・手記

（四百字、十五枚以内）

誰でも自分だけの奇妙な秘密の経験を一つや二つ持つているものです。どんなお話でも結構です。御申込の秘密は厳守しますから安心して御投稿下さい。

★アブ・ストーリー小説

（四百字十五枚から二十五枚以内）

アブ・ストーリーとは前記の異常な体験談などを、やゝ小説風・物語風にまとめたものです。

★掲載分には相応の稿料を呈します。但し原稿の返却はお断り致します。

送り先　東京都千代田区神田猿楽町一の三

日本特集出版社編集部

夏の女・二題

風俗コント

未亡人の夏

赤、黄、白……パツとひらく女体の花々。この海水浴場に、これは珍妙な「臨時診療所」を設けて、サテ未亡人の女医は何を考える？

高野牧迪夫画

三郎

《海に来た女》

紺碧の空から陽が、頭のてつぺんをめがけて、夏のひかりを照りつけている。

野中康雄は、痛いほど焼きついた砂浜にころがつた。

海からあがつて、からだじゆうからポタリポタリと海水のたれる半裸の肉体を、乾し魚みたいに陽に干すことにしたのだ。

ふと、今まで海に泳ぐ女にばかり気をとられていて、全く気ずかなかつたが、背後のスロープになつた小高い砂原の上に、数本の枝つぷりのいい松の木があつて、その下に、

「……臨時診療所」

という木札がぶらさがつているのを、彼は海辺から見あげた。

そのテントばりの臨時診療所の木イスに、

夏の女・二題

すらりと海水着の若い坪見星子が、腰かけている。

こつちから、あーんとみている と、生きのいいヌード写真を眺めるような、素晴らしさである。くねりとふくらんだ腰の線、海水をあびて紅潮した脚部……。

なにやら彼女は訴えながら、テントのなかの女医に胸の脈搏を診てもらつていた。

「ふふ……案外、お弱いんだな！」

と呟きながら、むきあつた女医の素晴らしい立ち姿に、ふと視線をうつした。野中は、ドキンと半裸の胸が鳴つた。

彼と同年ていどの三十五、六であろうか。カスミ・シャンタンのツーピースを着けて、胸のもりあがつたところを締めあげるように幅広のベルトが腰のうえにピシリとしまつていた。

助手もいないただ一人で、診察着もつけず馴々しく坪見星子に話しこみながら、ワイシャッのように丸く切れた袖口を、二の腕までまくりあげている。なんともいえぬほど、美しい。女医は、ポンと指先で星子のおでこを笑いながらはじいた。

その拍子に、星子はおじぎもしないで、プリツとイスから立ちあがつた。

ぷりぷりとしたように、こつちへやつてきて、野中に気がつくと、

「なあんだ？　あんた見てはりましたのン」

「きみ、いつのまに上つたんや」

「泳いでるうちにな、胸なンやむかついてきて、いま女医さんに診てもらつたんやろ」

と、野中は、かえりの道々きいた。

「このへんやけど、そんなこと、どうでもええ！」

「きみのママは、綺麗やろな」

「それも……どうでもええ！」

つんと取り澄して、ニユールツクの純白な半袖スタイルで、肩をならべてくる。

五尺四寸の彼女は、野中の身長と一寸しかちがわない。ちかちかと、肩と肩とが触れあうとき、プーンと処女らしい清潔な体臭が、ほんのりとしたフランス製香料にまじつて、それに海にすくすくとした半裸の女体をひたしたあとの潮つぽい香ともつれながら、野中の鼻をたのしく刺戟していた。

《夏の女と男ごころ》

こんなに強く、星子が赤いキバのような爪で、太股をひねりあげるのは、いつたいどうしてか？　野中康雄はその時には、わからなかつたのである。

だが、ひよんなことで、野中のジョウ談は処女のシンケンな神経にさわつたことが、後日ハンメイした。そして、これが全くひよんな一篇のテーマとなつたしだいであつた。

夕方になつて、野中は星子とぶらぶら浜芦屋を離れた。

「星子ちやん、きみンちのおウチは、たしかこの近くやつたんやろ」

と、野中は、かえりの道々きいた。

「きみのママは、綺麗やろな」

「それも……どうでもええ！」

つんと取り澄して、ニユールツクの純白な半袖スタイルで、肩をならべてくる。

五尺四寸の彼女は、野中の身長と一寸しかちがわない。ちかちかと、肩と肩とが触れあうとき、プーンと処女らしい清潔な体臭が、ほんのりとしたフランス製香料にまじつて、それに海にすくすくとした半裸の女体をひたしたあとの潮つぽい香ともつれながら、野中の鼻をたのしく刺戟していた。

夏の女・二題

つまみたいと思いながら、彼はまだ危いかけ橋をわたる勇気も、胆力もなかつた。

こうして時々、二十才の星子が、妻ある彼の家へやつてきて、巧みに誘い出してくれることで満足していた。

青春をうしないかけた心に、涼風をさし込んでくれる感じである。しかし星子は、極端に身上を語ることが嫌いらしい。芦屋に生まれたブルジョア臭い娘だということは、なんとなく感じられる。パパに死なれていて、母と女中とすんでいる、という噂だつた。

芦屋駅へゆくまでに、夏の日は、とつぷりと暮れおちていた。

背後に、軽やかな靴音がひびいた。と、思つたとき、ついと彼の肩とならんで歩く女がいる。

傍らに星子をつれているのに、女連れの男に肩をならべるなんて、おかしな見あげた女だな、といぶかしく思いながら、ふと薄やみの路上で、女の顔を見て、野中はドキツとした。

先刻の臨時診療所にいた女医である。右手に診療用具をいれた鞄をさげていた。

おかしな女医だな、と思うと、こつちもおかしな興味と好奇心というものが湧いてきて

「ほゝゝゝ」

と女医は、笑い出した。

「今、お帰りでつか」

と訊くと、

「はあ！」

ニコツと、白い顔に笑みがうかんでいた。

ふと、なんとなく右側の星子の横顔を偸見すると、すでに彼女は女医の存在をさつしたように、白々しい表情にかわつていた。

真ん中に挟まれたかつこうになつてしまつた野中は、両手に花の譬のとおり、このうえもなき冥利につきるわけだ。

だが、若い女友だちの星子がプリツとしてしまつたので、新しく肩を並べてくる女医にあんまり卒直なうれしい笑顔はみせられない。

といつて、星子とは年齢のひらきがある友だちの関係である。早い話、男女間というのは、そのていどの友情では、どうも不均衡である。

えいつ、と野中は血をわかして軒を並べた店屋にさしかかると、

「僕はさつき、あんまりお美しいヒトやので、うつとりと拝顔していました」

「ほゝゝゝ」

と女医は、笑い出した。

《女医は知つている》

「――先生、お呑みなさいよツ！」

「え？　センシエイ？」

「うふツうふツ……知つてまスわ。……おかくしになつたつて、お職業を……」

いざ、かるい食事を勧めんと、目についた横丁。あまり粋でない小料理屋へ二人の女を誘つた。

四畳半の上り端を、つい立てで仕切つた小座敷に坐りこむと、くだんの女医はちよつと頬をほてらしてこういう。

センシエイ、といきなり打ち返されて、野中はどきまぎした。まず、ビールをなみなみと注いで勧めたのがいけなかつたのかと、思つた。女は、アルコール分が入ると、由来、若きもバアちやんも饒舌になる。

女医は、フザケたように、えたいの知れない甘つたるい声になつている。

イケる口の星子は、今夜は面白くないとい

夏の女・二題

うふうに、つんとすまして、独酌で飲みつづけている。その可愛いヴァージンの眼は、ちやぶ台を挟んで、むきあつた女医をぐッと睨んでいる顔つきだつた。

お里をしられたら、もう上品ぶつている手はない、と野中は思つた。というのは野中康雄は、道頓堀のKストリップ劇場の脚本を書いていた。で、彼は、北梅田の喫茶店をねじろに、ちよッとした文名を慕つてくる訪問者とあつていた。

星子は、誰の紹介ともなく、北梅田の喫茶店へたずねてきた一人だつた。彼女はきまつた勤めも持つていない。また自分は、ストリップの台本を書くマネをするのでもない。

いちンち、誰かれなく、知名の文士や脚本家の男たちを訪問して、親しく口をきかれるようなつきあいをされるのを、彼女の人生としている変つた娘だつた。

彼は、星子と女医とが、満更しらない仲じやあないと睨んでいた。しかし、こうしてビールを傾けても、二人の女は妙によそよそしいのである。というのも、星子のほうが妙に冷たく、ジッと女医の顔を睨みつけながら、話のキッカケを極度に峻拒しているようにみえるのだ。

だから、年長者の女医のほうが、しぜんにおしやべりになるのかもしれなかつた。

「どうしたんだね。星ちやん、ちつともしやべらんやないか……。きみ、秘したつてあかんよ！　この女、知つてるんやろ。……正式に引合せろよ！」

「もうおふたり、ええ機嫌やないか。紹介なんかいらンわ！」

と、星子はますます感情を硬化して、グイグイと腹立ちそうに、清らかな紅唇にビールのコップをあける。

「先生、よろしまンのよ。……無粋な娘はほつといて、お二人で飲みましようよッ」

ビールの酔いがさせるのか、なんだか女医は平然と、星子を無視した態度に出て来るのだつた。

夏の女・二題

それに、直線的なスカートにつつまれた彼女の下半身がこつてりとした三十女の積極性をあらわすようになまめかしくユラユラゆれていそうに思われる…。

——その夜は、からだも心もほてりながら二人の気圧の度のちがう女を挟んでいるために、冷たい夏のような不調和なものをおぼえて、うやむやに野中は別れてしまつた。

《女医の正体》

翌る日、床のなかで目をさますと、野中の頭には、あの女医の酔態がちらちらと浮んだり、消えたりしてならなかつた。

色気がたつぷりありそうな物の言いかた、自信ありげに肩をならべてきた様子といい、星子をしつていながら、洒々としている三十女の心理は、複雑で、怪奇である。

が、とうとう名も住所もしらず、別れてしまつたことが野中には残念であつた。

だいいち、人妻なのか未亡人なのかもわからない。三十女だと思つたが、もう四十才になつているようにも思われてきた。

昼すぎ、道頓堀のK劇場の楽屋へ顔を出してから、野中は阪急神戸線に乗つた。

「まあ、野中先生！」

彼女は、テントのなかの診療所を、奥のカーテンの蔭から出てきた。

美貌の丸い顔に、わざとびつくりしたような表情をつくつてみせた。しかし、どうやら野中が訪ねてくることを予期しているような満足した顔つきだつた。

「あのね、いま奥に……海に溺れかかつた女……？」

「何も、死なんかでえええのンよ。こうしてこの人が、寝てンのよ、あんがいニンシンしたかで出張つてると、ちがいニンシンしたからだに困りぬいて、海へつかつて、流産しようという考えの女が、くるのンよ」

「あのウ……何か、方法おませんやろか」

「女は困るわネ！　……いいのンよ。手術してあげるから、夜分なつたら、この名刺の家へ来なさい」

話しながら、少し眠りなさいと薬をのました。

そういい捨てると、診療イスのうえの薬品棚からカルモチンの壜を取り出した。幾つぶか、くすり紙につつむと、奥のカーテンへ消えていつた。

島臺しているから、神経をしずませようとするのだろう、そうかるく考えてそつと、ザラザラぬれた足もとの砂地を靴でふみしめてカーテンの中をのぞいた。

一坪余りのせまい籐の臨時診療寝イスに、紅い海水着を、ふつくらとしたからだにしめつけた若い娘が、仰向けに寝込んでいる。

「それで……男はんに、すてられたというンだスか」

「ええ！」

「ニンシンしたと知つてはンの？」

「あれが止りましたんでえええのンよ。こうしてこで出張つてると、あんがいニンシンしたからだに困りぬいて、海へつかつて、流産しようという考えの女が、くるのンよ」

「あのウ……何か、方法おませんやろか」

「女は困るわネ！　……いいのンよ。手術してあげるから、夜分なつたら、この名刺の家へ来なさい」

話しながら、少し眠りなさいと薬をのました。

そつと身を傾わして聴きながら、ナルホド成程なと野中は考えた。夏むきな、素晴らしい女体救護所をつくつたものだ、と思つたのだ。

夏の女・二題

そういう女だと思うと、彼は急に気持がらくになつた。海水着の娘が眠るのを待つて、のこのことカーテンから首を出した。

「もし、女医さん！　僕も救つて下さいよ」「あら？　先生は何のご病気？」

スヤスヤ眠つた若い娘の半裸体の上に、毛布をかぶせて、彼女はニヤリと彼を見て笑つた。

「女体ばかり救わないで、男も…。つまり男タイも救つて下さいよ」

「わてこそ、救つてほしいわ」

夏の海浜にただよう汐ツ風が砂地をはらつて、彼女のスカートをふくれあがらせた。そのスカートのなかの白い足が、ふらふらとゆれて、野中のほうへもたれかかつてくる。

「先生！　口直しに今夜も、呑まへン」

「昂奮するばかりですわ」

「わてもよ」

「どうしたら、ええのやろか」

「わても分りまへンわ」

ここぞと、野中は勇気と胆力をふるつて、彼女を抱きよせた。紅く彼の顔の下に、満開のらん熟した花のようにひらいた唇が待つているようだ。すると、突然、そのとき、

「先生、ストリップガールを連れてきてよ」

「え？　どうしてなんだ？」

「ニンシンしている人、沢山おまスやろ！」

「ああ、ギョーサンいるよオ」

「海へ連れてゆくといつて、誘つてきておくなはれ！　そしたら……」

「そうしたら、なんや？」

「おダチンに……キス！」

とろんと、胸をふくらましてほおえんだ女医の顔は、妖しく艶！

「きみは、一人もんか？」

「ええ、わては未亡人だスねん」

と、女医の顔がこつてりと燃えて、野中はふらふらとしたその瞬間、突然！

「ママのバツカ！」

はツと二人が飛び離れたとき、柳眉を逆だてたような星子が突つ立つていた。

星子が怨めしそうに母を睨んで、ポロポロと涙をはふり落している。

「この人、星ちやんの母上かね？」

「そのうえに、ウチは私生児なんよ。ママ、まだその上に、私生児を生むつもりやの？」

「そうかて、お前！　お前のためにわては、お金儲けしてるつもりやよ」

野中は茫然としてしまつた。夏の女、というより、セチ辛い世相が生んだ女の姿かもしれないが……。

喜多玲子筆コロタイプ　八枚一組　三百円
玲子悦虐姿態素描集
凄艶の姿態を描く玲子の傑作豪華秘帖

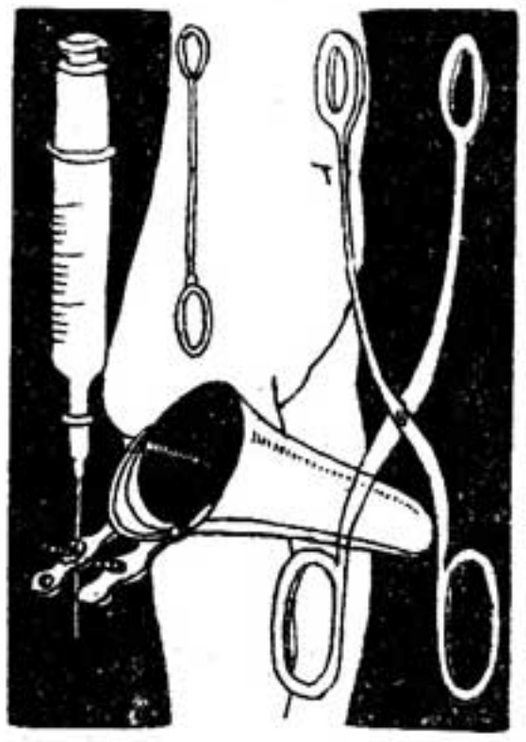
伊藤晴雨著
凄艶女体拷問私刑秘画集　価五百円〒共
手梳和紙台紙付豪華艶麗彩色特型帙入限定
会員頒布版　**第一集**　（五枚一組）

キドロド・シュトック著　B六判二二六頁
被虐の家　定価三二〇円　〒三二円

鹿火屋一彦著
同性愛技法について　定価二〇〇円　〒二〇円

日本特集出版社
東京都千代田区神田猿楽町一ノ三
振替東京一〇一、五一七番

若い婦人科醫の手紙



どんなに性器を診ても、女体を
意識しなくなりました。これは
聖なる仕事でありますから。

南　田　次　郎

(婦人の診位)

お尋ねの「羞恥」というのは、どんな、アバズレにもあるようだ。パンパン嬢にしても、彼女等が、検診の際、とらなければならないポーズは、どんなに凄い不貞腐れた姐御さんでも、それは、性交の時のポーズなのだから、全く元気がなくなつてしまうのです。だが一度、台に上つてしまえば、もう、俎上の魚であつて、光線も、温度も、空気も、辺りのもの総べて、白々しくなり、自分自身がなんとなく、浅間しくなつてしまつて、アプレ度胸のパン嬢ほど、極度の羞恥反応を示すようです。

妙なことですが、それも一時で、観念してしまうと、不思議に、また、どんな、はにかみやの女性でも、全く〝性〟を離れて、体を投げ出してくるわけで、どうにも羞恥が強くて、堅くなつているクランゲ（患者）は、気分を柔らげるために、尋常の手段では駄目だから、私の方で淫猥な言葉を、わざと投げつけて、茶化します。こう胆力が出来る迄には、相当年期が、かゝり、大変ですが、すると、却つて、クランゲの方は、それを怒り、むき出しになつて、争い、すつかり羞恥を忘れ去つて、私の思う儘になつていくなど、聖なる仕事に、たづさわる反面、後味の悪い、悲劇です。

だが、これはなか〳〵面白いクランゲの心理ではありませんか。

クランゲと云つても、老若、様々ですが、最初に（大学時代の臨床で）どうしても、ぶつかるのは、玄人で、他には年増婦人か、芸妓で、めつたに処女には、ぶつかりません。

これは、学内の実習では、特に多くの学生が、ぞろ〳〵見ているので、教授も、処女は人情として、使いたがらないからなのです。

開業医院に見学に行つたとしても（実習で）最初に手掛けるのは、既婚婦人か、玄人で、それも、大抵は、酌婦か芸娼妓の類になつて

しまいます。

そんな、わけですから、医者の卵が、待望の女体の性器に触れる場合、よく、小説などでは名文章で、美しく書かれた感覚の名器（？）がありますが、そんなものには全然、お目にかゝれず、見当らないといつた状態です。

それに、甚だ、新米なので、たゞ、好奇を抑えることが出来ず、わく〳〵動悸うつばかりで、本当のところ、夢中で、実習（？）している始末です。私も、当時は、指導の儘に、たゞ、チラリ〳〵覗いているのが、関の山でした。だから、最初の検診では、誰でもこれといつたものを、摑めないのではないかと思います。

そして、その多くは、たいがい失望です。と、いうのは、以上の様な理由の他に、悪い時には、秘黴（ヒバイ）でなければ、性病患者であるため、まあ、俗に、汚ない性器に、初めに、お眼にかゝつて終うからなのです。

初めて、内診をやらせられるとき、（大抵は、学生、三、四人で、クランゲ一人に対し、順々に手をかけるのですが）たゞ、夢中で、やつてます。これでいゝのかと、情ない位、自信を失う程の上りようです。

医学生も人間には変りなく、たゞ、もう、女体のヌードや、神秘化された部分が現れると、神々しいばかり、悩ましく、眩惑されぬよう、つとめることで精一杯なのでした。

まして、玄人の婦人を訪れると、実に大胆に振舞えるものです。は、男を男と思つていない、凄まじいクランゲですから、私達の方が、赤面させられるような始末です。

それには、私も愕いております。

そんな女に恐る〳〵手をかけさせたのんで、手をかけさせて貰うわけですから全く、もつて、神秘的なヌードなどはありません。

次に御質問の、女性の順応性については、ギネ（婦人科）に於ても、変りありません。

全然、人前で、肌を見せたことのない、上流婦人でも、必要あつて、一度、ギネの医院を訪れると、実に大胆に振舞えるものです。

それには、私も愕いております。

女体のヌードや、神秘化された部分が現れると、神々しいばかり、悩ましく、眩惑されぬよう、つとめることで精一杯なのでした。

まして、玄人の婦人は、男を男と思つていない、凄まじいクランゲですから、私達の方が、赤面させられるような始末です。

そんな女に恐る〳〵手をかけさせたのんで、手をかけさせて貰うわけですから全く、もつて、神秘的なヌードなどはありません。

女性は肉体的にも、マゾ的傾向だと、いえましょうが、総べてを委せ切つた女性の姿は実に美しいものです。諦めの表情とでもいゝますか、無心のポーズは天使のようです。

ギネの診察室は、構造が大変明るく出来ておるものですが、医師や術者は、明り窓の光線を背にして、位置をとります。

これは、クランゲの性器を、よく見極めるのに便利ですし、また、クランゲから、医師の顔が、よく判らないので、無意味な羞恥がはぶけて、好都合なのです。

また、現在では、大部分、クランゲに横臥位をとらせず、仰臥位にしますので、前記のようにクランゲの腹部のあたりに、白い厚地のカーテンを下して、上半身が見えない様にします。

欧米では、まだ、クランゲに、横臥位を、とらせるようですが、この診位は、クランゲの上半身を、台上に俯せしめ、下半身の衣服を、すつかり飜転して、両大腿は、股関節で下肢は、膝関節で、各々、直角に屈曲させ、腹部は、横に捻つて、突出させ、後方から臀部がよく見えるように致します。

大腿と下肢が互に密着していても、殆んど直角に、横に、大腿部をあげると、性器は、勿論、会陰部はすつかり露呈して、丸出しになります。

これで、検診可能な状態に、おかれたわけです。

この際、もう、カーテンの必要は、なくなりますか。

私の検診した、クランゲですが、やはり、多少に拘わらず、羞恥心を示し、その殆んどが、カーテンを下しても、ハンケチや、タモトなどで顔を蔽い、恥部を隠すようにしていました。

(姙娠中絶の手術)

生活苦から、どうしても中絶手術をと、依頼して来た、二十三才になる家庭婦人の掻把を受持つたが、何時もながら、子宮内膜掻把術は後味が悪い。

看護婦が、クランゲの恥毛を、必要なだけ処理している間に、私は、すつかり、手指の消毒を終えた。

手術台上に、仰臥している、クランゲは、瘦せた、細い両脚を、力なく、左右に大の字に開いている。

剃毛の済んだ、局部を、助手のAが、カリ石鹸や、昇汞水で、念入りに消毒し始めた。

カーテル（導尿管）を、尿道に、挿入すると、サツと黄色の尿が、容器の中に飛沫をあげて、ほどばしつた。

Aは、更に、イルガートルのゴム管を、のばして、注意深く、膣内消毒を始める。

羞恥の余り、えてして、こういつた体位にせざるを得ないのですから、女性の大胆さ、と羞恥心とは、表裏の関係にないものと、いえ

〝性〟に関しては、割と恬淡な欧米婦人が、

次は、最後の、『マーキロ消毒』である。
彼は、ピンセットに、赤い薬をつけた棉棒を、膣内から、外陰部へ、さらに、大腿内側まで、真赤になるまで消毒する。
次に看護婦が、必要な部分を覗かせた純白の『掛布』で、下半身を被う。
私は、消毒済みの両手を、高く掲げて、手術台に近づいた。
Aが、クスコを、剔り上つた局部に当てゝぐつと、その辺りを、強引に開く。
瞬間、クランゲの呼吸が、荒くなる。
私は、左手で、机上の双鉤鉗子を、握つた。
そして、用心深く、眼前に開いている所へしずかに鉗子を近づけ、子宮口をはさんで引出す。
強い、抵抗を示し乍らも、それは、容易に膣外に引出された。
私は、それを挟んだまゝ、蠢動を続けているクランゲの大腿附近で、しつかりと、固定した。
右手に握つた、ゾンデ（子宮測定器）を今度は注意深く、再び、挿入し始める。
じつと、瞶ていると、なんと、汚ないものなのだろう。
内診の際、チラリと眼を伏せたクランゲの美貌が、ふと、瞼に浮んで、瞬間消えた。
細おもての、日本的な、マツ毛の長い、潤んだ表情が、憂いを含んでいて、伏目勝だつた。
これが、あの女の芯なの、それを想う。
ふと、昨年、失つた、妻の、
筋肉が、ピクリと動揺した。
雑念が、はしるので、測定の手元が、狂つたのだ。
ヘガール（拡張器）を握つて、深く、挿入していた。
看護婦が、次々に、子宮頸管拡張器を手渡し始めた。
私は、愼重に、しかも、順序に従つて、器械を挿入し始めた。
急に、クランゲが、身を捻り、手脚を、わななかせて、声のない悲鳴を、あげ始めた。何時にない、悲しげな、肉体の呻声である。じつと、苦痛を、嚙みこらしている女体の表情が、悩ましい。
看護婦が、クランゲを叱責する。
弱音は、この際、禁物なのである。
両脚が、開かれた儘、伸縮し、下腹部が、波のように、こきざみに起伏していた。
まるで、醜怪な、動物の口のように、大きく咆哮し、喘ぎを、やめない。
抑えているAの、額に、ねつとりと、冷汗が滲む。
私は、何時か、手馴れた順序に従つて、流産鉗子を握つて、深く、挿入していた。
ぐつと手ごたえがあつた。
力を加えた。内容物が、ずる〳〵と静かに、然も、均等な力を、保つて、引出され始めた。
どろつと、赤い血汁と一緒に、赤裸の、子ネズミのような、肉塊が、ボロリと看護婦の差出した膿盆の上に、落ちた。
またしても、一つの生命が、日の眼を見ずして、天国に、散つていつたのだ。
私の背筋を、寒々とした、熱汗が、ひたひたと流れる。
マスクの中で、私は、思わず瞑目する。
これが、たまらなくいやなんだ。淋しい気持だよ。

（終）

秘そかな交歓

そどみあ通信

藤井晃

か。ソドミアが、インテリタイプよりはむしろ、たとえ労働者であつても、より逞しい者への愛着をもつているのも、如実にこの事を物語つていると思います。

第二に考えられることは、清潔感です。小麦色に焼けた均斉のとれた体躯に、ピツタリした白い清潔なパンツ——これこそソドミアの憧れであり夢ではないでしようか。私自身そのことを骨身にしみて感じた経験があります。

それは、私がいつも乗る電車で、きまつて出逢う商人風の人でした。年のころは五十がらみで、乾物屋か何かとみえ、いつも重そうな荷を肩にぶらさげているのですが、赭く陽やけしたガツシリした恰幅のよい体付で、白い清潔なランニングの下に、分厚い胸の隆起や筋肉の盛上つた腕が覗いているのです。

私は思わず胸が熱くなつて、まともに見ていられないのでした。私は黙々として、重い荷にたえているその人の姿を、この上なく美しく思い、K駅で降りる彼の広い肩幅の後姿を、驚異と羨望と愛慕のいりまじつた思いで見送つたものであります。

その人が真に男性的な人かどうかは、ソドミアに誘われたことがあるか否かで判断できる。——私はいつかこういう文章を読んだことがあります。

ソドミアは男性に対し特殊な敏感な感覚をもち、男性の真の美しさを知る最上のものであるとすれば、この言葉は肯定できると思います。

では一般のソドミアは、どのような男性に真の美しさを感じるであろうか——第一に考えられることは、大部分の者が秀れた体躯の人に魅力をもつように思われます、すくなくとも、自分より秀れた体躯の人を求めているように思われます。それは多分、自分のもたないものを持つている人への羨望の念が、愛慕の情へと移行してゆくのではないでしようか。ソドミアが、インテリタイプよりはむしろ、たとえ労働者であつても、より逞しい者への愛着をもつているのも、如実にこの事を物語つていると思います。

第二に考えられることは、清潔感です。小麦色に焼けた均斉のとれた体躯に、ピツタリした白い清潔なパンツ——これこそソドミアの憧れであり夢ではないでしようか。私自身そのことを骨身にしみて感じた経験があります。

それは、私がいつも乗る電車で、きまつて出逢う商人風の人でした。年のころは五十がらみで、乾物屋か何かとみえ、いつも重そうな荷を肩にぶらさげているのですが、赭く陽やけしたガツシリした恰幅のよい体付で、白い清潔なランニングの下に、分厚い胸の隆起や筋肉の盛上つた腕が覗いているのです。

私は思わず胸が熱くなつて、まともに見ていられないのでした。私は黙々として、重い荷にたえているその人の姿を、この上なく美しく思い、K駅で降りる彼の広い肩幅の後姿を、驚異と羨望と愛慕のいりまじつた思いで見送つたものであります。

私が、このような逞しい体躯の四五十台の年配者で、且つ清潔感を感じられる人以外には、全く魅力を感じないのは、考えてみれば、私を目の中に入れても痛くないほど可愛がつてくれた、五尺八寸、二十一貫という体躯の亡父への愛慕と郷愁がそうさせているのかも知れません。

そのような男性が、もしも私の目の前に現れたならば、私は心から自分の誠実をささげ、信頼しあい、助けあい、理解しあつて、索莫たる世の中に、せめてもの生甲斐を感じられると思つています。

私は三十台の事務員、五尺五寸、十六貫七百という体格で、性格も女性的ではありません。

（川崎市　Y・S生）

答　ソドミアがもとめる同性の魅力についてのあなたの意見は、一般的の傾向として的は外れていないように思います。すくなくとも、それらはウールニング傾向のソドミアがもとめている、魅力の焦点であるといえましょう。

といつても、あなたは、性格が女性的ではないと云われているところを見ると、典型的なウールニングではないらしい。そのようなあなたが、逞しい体格の初老の同性に心を惹かれるのは、あなたの言のごとく、エデイプス・コンプレックスに基因しているものでもありましょう。

あなたは、父なる男性を永遠に探しもとめてゆく人です。最近この傾向の人が多いように見受けられますが、これは、サクバクな、そしてサツバツな近時の世相に関連するものと私は見ております。

先週の土曜の事でした。国語の時間に、「今は昔、ひえの山（今の比叡山のこと）に児ありけり」という文章で始まる古文をやりました。この時先生が〝この児のことを、昔、女と交わることを禁じられていた僧等が同性愛として可愛がつたところの僧になる前の少年（茶坊主）だ〟と説明したのを面白く聴きました。

勿論僕は、この児（稚児）のことを初めて知つたのではありません。ただ、この先生が、どのような説明をするかとひそかに心待ちにしていたのです。おそらく〝僧になる前の小坊主〟と簡単にかたづけてしまうだろうと思つていたのですが、先生はチヤンと一番大切なことを説明したのです。それどころか、稚児の現代までの歴史を実に面白く巧みに話してくれたのでした。皆は非常に興味深く聴いておりました。

このとき色々な質問が出ましたが、その中から拾つてみますと、

〝美少年を見ると誰でも可愛いいと思うが、それも同性愛か？〟

〝友情も同性愛か？〟

〝特に親しい友達は同性愛か？〟

〝そういう人は異性と同性を同時に愛するのか、それとも同性だけか？〟

〝どうしてそうなるのか？〟

〝ただ同性を可愛がるというだけでは理解できない。

もつと具体的に話せ〟

等でした。勿論先生は委しいことは分らないと云いましたが、〝しかし誰にでも同性愛的傾向はある。無ければかえつておかしなことだ。美しいものはそれが異性であろうと同性であろうと愛しいと思う。それは性的なものである。いわゆる同性愛は、それが最も強烈にあらわれたものをいうので、ある意味では異性愛よりも清く逞しく美しいものであるかも知れない〟と云つたとき、僕はハツとして、その先生の顔を今更のように見直したものでした。

浅黒い顔、ガツシリした軀、彼は学生間では〝実力のある先生〟の定評があり、源氏物語などの多くの男女関係のある古典を実に面白く講義することは有名で、彼の時間は〝ベストセラーズ〟の別名で呼ばれている位生徒間に人気があるのです。

しかし、あの不良少年的主人公源氏や、その偽われる子、薫中将の色々な生活の長たらしい物語は、同性を愛する僕には少なからず退屈するので、あの美しい光の君がホモであつたなら……などとそんなことばかり想像します。

さて僕は、そのとき、この先生の話をきいた瞬間、初めて彼をホモとしての眼でながめたのでした。僕は年配の方は好みません、そのとき、この精力的な彼に、なんとなく胸の高鳴を感じの中年の彼に、なんとなく胸の高鳴るのを覚え、その日一日、いろいろな空想をして楽しみました。

（東京　KK生）

答　いままでの通信とは型のちがつた、このような随想めいたものを新しい試みとして載せてみました。他の読者諸君も、ホモについての、このような随感、意見、構想なども、お寄せ下さい。そして、それらに対する駁論なども出れば、諸君のためのこの欄が、一層賑やかになるだろうと思います。

＊

通信したいという気持と、はずかしいと思う気持で、何度かためらつた末ペンをとりました。

日本の大学を出てから外国に勉強に行き、今年やつと帰つて来た廿九才の青年です。また来年欧洲へ留学することになつています。誰にもはずかしくて云えない自分の性癖、何度か結婚をすすめられ、それを逃げたさの一心で外国留学を志している位です。

あとにも先きにもただ一度、アメリカで劇場からの帰途、ある男性に自動車の中へさらわれて味つた経験、それが私の

たつた一つの実際行動です。その後一年、日夜悶々の情を抑えきれず、研究に没頭しています。目茶目茶に体をいためつけておかないと、体中を駆けめぐる情欲の激しさに、眼がくらみそうになつてしまうことがあります。

それに何といつても部屋ズミの悲しさで、内緒で遊びにゆく余裕など全然ないために、息がつまるほど苦しくなりまです。家では十人並以上に贅沢させてくれるし、外国まで勉強に出してくれる位だのに、私の秘めた悩みには全然同情がないのです。また、私は自分のこの性向を知られることは死ぬほどはずかしく、ヒタ隠しに隠しています。

そのデイレンマに頭の血を狂わせている昨今です。誰かしつかりと抱きしめてくれる人が欲しい、息の根がとまるほどに……。でも私は、そんなときどうしてよいのか分らないほど無経験です。

今漸く社会人として踏みだしかけた自分をかえりみて、誰でもいいからと無責任な事をし得ず、お互いに自分たちの身分とか地位というものを十分に理解しあい、無理のないおつきあいができたらと思いますが、他人からは女性的過ぎる由です。

（京都　K・S）

答　いままで何度も言つて来たことですが、あなたも自身の同性愛傾向をあまりに卑下しすぎております。

虫のいいことを考えています。

私は身長五尺七寸五分、体重十五貫八百、少し日本語がヘンな以外変つたところはありません。容貌は自分ではそうは

同性愛は万人に共通する性現象です。その傾向が人より多少強烈であつたとしても、なんでそのようにはずかしがることがありましょう。何も進んで自己の性癖を他人の前に発表することもありませんが、ヒタ隠しに隠すことなど更々ありません。

自己のホモ性向に拘泥わることが一番いけません。そんなことはすこしも気にかけず、あるがままに、虚心坦懐に、好きな同性があればズバリ両親にことわれば堂々と交際することがよいのです。

結婚が厭ならば、ハツキリ両親にことわり、独身を標ぼうするがよいでしょう。無理な結婚は勿論いけないが、結婚を殊更に逃げたり避けたりすることも、疑われる因です。

とにかく自身のホモ傾向に拘泥わらぬこと、あるがままに行動すること、さすればからならず道がひらけて来るでしょう。

「光と影」欄　新設について

御愛読を賜りました「そどみあ通信」と「れすぼす通信」欄を一時中止いたしまして、次号から、この両者を統合して「光と影」欄を新しくつくりました。皆様の御利用をお待ちいたしております。

（編集部　光と影係）

奴隷女中

どう、いいことでしょ……やつぱり、こういうことが好きなのね、……可愛いゝわ、私、好きよ、あなた、もう私のものになつたのよ……犬のように仕える女中哀史。

手記　高松朝子

一

私が、その新聞広告を見なかつたなら、まだ、その工場に、居たかも分りません。

私は、住込の製綿工でした。

でも、あの新聞や雑誌に出ている白い服をきた小ギレイな女工さんではなく、まア現代的な奴隷と云つてもよかつたと思います。

四畳半一間に、四人もおし込められて、食事と云つたら、おすましみたいなお味噌汁とタクアン。——そして、朝くらいうちから夜おそくまで、工場で、古綿のうちかえしにはたらかせられ、その上、仕事がおわつて、やれやれと思つて、夕食をすますと、

「朝子さん、御主人がお呼びよ」

と、呼び出しがかかるのです。

私のつとめていたところは、工場と云つても、女工が十人位しか居ない、ちいさな町工場ですから、労働法もなにもあつたものでなく、女工と云えば、女中と一緒で、工場の主人の公私の仕事に奉仕されるのです。

私が行くと、主人は大抵、工場の奥の母家で酒をのんでいました。

「朝子か。肩をもめ」

主人は、脂ぎつた顔を、電燈に光らせながら、いつもこう云うのです。

つかれていますから、という言葉がのどもとまで出かかるのを、押さえて、私は、酒をのんでいる主人のうしろにまわり、その分厚い肩に、手をかけます。

もし、それを、ことわりでもしたら、ど

んなおそろしい折檻が待つているか分りすぎる位、分るのですもの。

「また着物の上からもむ！　いくら云つたら分るのだ」

「でも――」

「でもぢやない。じかにもむんだ。」

私は仕方がなく、主人の着物の肩を落すと、あぶらで、ねとねとして気味の悪い主人の肉をじかにもみはじめるのでした。

主人にお酌しているのは、奥さんではありません。女工の一人でした。

主人は、結局、その方が気がかわるし、便利なので、奥さんは、いないのです。

そして、その代り、十人の女工を毎日、当番で一人づつ、奥へ呼んで、台所のことも一切から、主人の世話、それから、申しあげるのもいまわしい事ですが、――夜の奥さんの役まで、させるのでした。

「女房とは、性生活をともなつた女中である」

と、云う言葉があるそうですが、主人に云わせれば、

「女工とは、性生活をともなつた女中である」

というところでしたろう。

そんなひどいところなら、みんなやめちまえば、良いと云うかもしれませんが、主人は、身よりのないものとか、家のないものとか、そういう娘しかつかわないので、だれも、ここを出たら行くところも、働く口もないような有様なので、泣くなく、そういう主人の虐待に耐えているのでした。

ここでは主人が、暴君で、あとの女工は、その暴君につかえる女奴隷と云つていいのでした。

――それでも、主人が、一奉仕が私を待つていたのです。

十九のとしまで、それこそ、風にもあてないようにして、大事にしていた、私の処女は、一晩、酒をのんだ五十男の主人によつて、みじめにも、やぶられてしまいました。

ああ、こんなことなら、知らない、どこかの若い男にでもささげてしまつた方が良かつた、とそう思つて泣きあかした一晩。

主人は、太つた太鼓腹をゆすつて笑うと「ええ、なかなか、可愛いいじやないか。やつぱり、いい所で育つた娘つてやつは、軀の味までちがうもんだ。お前は、味のいい娘になるぞ。」

そんな卑猥な言葉で、私の耳を汚すのでした。

それからの毎夜のようなアンマ。主人は酔うと私を呼び、肩をもませるのです。

いいえ、肩だけならいいのです。肩がおわると、こんどは、お腹から両ももにかけて、軀を横にして、私に、もませるのでした。

家をうられ、行きどころのなくなつた私は債権者の一人であるここの主人に引とられました。

「もつときつく！　そんなこわごわしたつかみかたじや、どうなるんだ。もつとぎゆ

つと、力をいれてもめ」

もむ事はおろか、男の肌にさわつたことのない私の手でした。その手が、ぶよぶよにあぶら切つてたるんでいる、そして毛だらけの主人のお腹から、もも、お尻へかけての肉をつかみ、そのつかれをとろうと一生懸命になつて動きまわるのです。その懸命なもみ方が心よいのか、主人は、目を細めていますが、私は、額から汗が、だらだらと出て、その恥かしさと、苦しさに、卒倒しそうになるのでした。

「待て、待て。どうせ、もむなら、娘がもみ良いようにしてやろう。ええ、楽しみながら、もめるように――」

主人は、そう卑しく笑うと、立ちあがつて下帯をとりました。

ああ、何という恥かしさでしょう。そんなところの肌を、あらわに見せられるばかりでなく、そこを。――

私の目からは、涙が、ボタボタと頬をつたいました。

当番の女工が、顔をふせたままお給仕している、――その目の前で、私は、そんな恥かしいマッサージをさせられるのでした。

二

だから、

「求む、女中さん。待遇良し。二十歳前後、美しきひと。当方。女主人。住込望」

という新聞広告を見たときは、胸をおどらして、どんな、辛いつとめであつてもかまわない。女主人というから、こんな汚辱を受けないだけでも、ここよりはどんなましかも知れない、――そう決心して、風呂敷一つもつと、（もつと荷物はあつたのですが、主人の眼をかすめて逃げ出すために、それは、残して）――工場の裏門からぬけ出して、その市ケ谷の住所へ急ぎました。

――その家は、思つたより小さな家でした。こみ入つた露路の奥にあつて、妾宅のようなつくりでしたが、手入れがよく行きとどいて、いかにも、女世帯の家と思わせました。

「ごめん下さい。……」

門を入つて、玄関の格子戸へかけた私の手は、ふるえていました。

玄関のわきには、くちなしの花が、夢のような匂いを、つつましく、あたりにこぼしていました。

「ハイ――」

と、出てきたのは、三十位の地味な着物をきたひとでした。

「あの、新聞広告を見てきたのですけど――」

「あゝ、女中さん。――私、主人ですけどもう、きまりましたよ。お気の毒ですけど――」

「あゝ――」

私は、一瞬、呆然と立つておりましたけど、次の瞬間には、そこへ泣きくずれてしまいました。

「あら、どうしたの。あなた。」

そのかたは、玄関のタタキの上に、たおれている私の上にかがむと、私の胴をかかえて助けおこしてくださいました。

「ごめんなさい。私――」

と、それだけ云つて、また声をつまらした。こみ入つた露路の奥にあつて、妾宅のようなつくりでしたが、手入れがよく行きとどいて、いかにも、女世帯の家と思わせました。

「ごめん下さい。……」

門を入つて、玄関の格子戸へかけた私の手は、ふるえていました。

玄関のわきには、くちなしの花が、夢のような匂いを、つつましく、あたりにこぼしていました。

「十九ですの」

「可愛いい子ネ。気品がある顔している わ。女中志願なんかには、もつたいない位。」

「いいえ、奥様、私、廊下のすみにでもおいて下さいましたら、どんな事でも、いたしますわ」

そのかたは、私の目尻にたまつた涙をそつと、ぬぐつて下さりながら、

「あなた、本当にどんなことでもする？」

意味ありげにそうおききになりました。

「ええ、奥様。どんな事でも！　どうか、お願いします。私、行くところ無いんです。今まで、とてもいやらしい、ひどい所にいたんです」

私は、ひざまづかんばかりにして、そう必死に哀願しました。

「そう、あなたが、その気なら、使つてあげてもいいわ。でも、――本当に辛抱出来るかしら」

なぞめいた云いかたでしたが、私は、勿論そんなことに気がつく余猶はありませんでした。

「ええ、どんな辛抱でもいたします」

「そう、――お待ちや、いて頂くわ。今の言葉忘れちやだめよ。――あなたから、たのまれたから、おいてあげるのよ」

このかたは、道子さんとおつしやつて、まだ未婚の女性でした。

三十にもなつて、未婚というのは、おかしいみたいですが、いまの日本の社会では、こういう女のひとがいつぱいいて、俗に、「三十娘」という呼び名さえあるのだそうですが、そう云えば、この家の二階を借りて、丸ノ内のある会社へおつとめになつているお友達の春代さんも、三十娘でした。

この家は、この二人だけが住んでいました。

そこへ新らしく女中の私が、加わつて女だけの三人暮しとなりました。

もっとも春代さんは、朝早く出て、夜はおそくでないとおかえりにならないので、ひる間は、御主人の道子さまと、私だけでした。

道子さまは、御両親をなくされてから、遺産を相続して、なまじ、つとめに出なくても生活して行かれる余猶があるだけに、昔風のお嬢さんの引つ込み思案も手つだつて、こうして家のなかで、ひつそりと毎日

三

くらしていたのです。また、そんな風だから、異性の友達も出来ず、益々縁遠くなるわけでした。

「なまじ、こうして、家なんかもつているし、遺産も少しあるでしょう？　だから、これ幸いと近づいてくる男のひとが、みんな、そういう下心があるように疑われて、いけないの。——それに、私の方だつて、だれでもいいという訳ではなし」

そんなことをしみじみと、女中の私にまで打あける寂しい道子さんでした。

そうです。道子さんには、たしかに、ういう純情な、優しいところもありました。でも、それは、道子さんの半面にしかすぎなかつたのです。

道子さんのおそろしい別の半面。それを、私は、この家に入つたその日から知らなくてはならなかつたのです。

四

道子さんは私をつれて、茶の間に入ると、座敷の真ン中に私をすわらせ、御自分もその前にぴたりと正座し、

「あなた、名前は何て云うの。」

「朝子と申します」

「そう、ちや朝子さん、あなたは、今日から私の女中よ。いいえ、この二階にいる春代さんと二人の女中なの。いいこと？　何でも云うことをきくわね」

「ええ。云うことをききますわ」

「そう、少し無理を云うかも知れないけど、辛抱して頂戴。そしたら、私達もあなたを可愛いがるわ。私達、あなたみたいな可愛いい子が欲しかつたの。三人で仲良く暮しましようね。この家は、三人の秘密の花園になるのよ」

そう熟つぽい口調で云うと、私の手をとつて、御自分の掌のなかで、おもちやになさいました。その手は、汗でねとねとしていて、ちよつと気味が悪かつたのですが、それでも、だまつて、するがままにまかせておりますと、

「ちや、お約束ね——」

そう囁くように云うと、いきなり、私の手をぎゆつと引きました。

「あツ」

と私は口のなかで云つたまま思わず、前によろめいて、手を、道代さんのひざの上についてしまいました。

「ごめん下さい」

「いいのよ。ね、お約束」

道子さんは、私の手をひざではさんだまま、私の肩へ手をまわして、私の軀をぎゆつとかかえると、いきなり、そのルージュをぬつた唇で、私の唇を求めてくるのでした。

「ああ……」

私は、おどろいて声をあげました。前に工場の主人から、そう云うことをされた覚えはありましたが、同性から、そんな事をされるのははじめてで、夢にもみたことがありませんでした。

それが、会つて一時間もしない人だと思うと、私は、思わず、ぶるぶるとふるえました。

でも、実を云うと、それは、工場の主人のあの酒くさい、いやらしい味わいと違つて、甘く、柔らかく、それに、ルージュのかほりがまじつて、なにか上等のお菓子でも味わうような感触でした。

「さア、これで、女中と主人との宣誓がすんだわね」

道子さんは、ちよつと上づつた声で云うと、声もなく笑いました。眼がうるんで、

唇がつばきに濡れていました。

「丁度いいわ。お風呂がわいているから、お風呂に入りなさい」

「でも、私は、あとで結構です」

「ううん。今入りなさい。よそでつけてきた、あかを落して欲しいの。——あんたみたいなキレイな子、どうせ、よそで色々なよごれを洗いおとして、ほんとに、私の女中らしい清らしい軀になつてほしいの」

私は、唇を噛みました。そうです。昨夜も汚辱にまみれたのでした。

私のような若さで、五十男の情欲の道具になつたのでした。

私はだまつて、立ちあがりました。

「こつちよ。いらつしやい」

道子さんは、お風呂場の戸をあけると、私をなかに導きました。そして、風呂おけのふたをとつて、熱さを見てました。

「早く裸になりなさい。遠慮なんてしてたらダメよ。どうせ、これから一緒に暮すんだから」

私も、さき程の奇妙な宣誓以来、なんだか、道子さんに対して、他人とは思えないような親しみを感じていましたので、恥かしいと思いながら、脱衣所で、服をぬいで、下着もそつととり、前へタオルを当てて、洗しへ入つていきました。

「なかなか、きれいな軀してるじやないの、やつぱり若さねえ」

道子さんは、私の裸を、男のような眼付でながめ廻すと、

「ね、一つだけ、朝子さん辛抱しなくちやいけないのよ。ね、今、私がしつと唇をかみながら、出来るだけ軀をちぢめるようにして、その浴槽のなかへ、そのきれいな、十九の肉体をしづめました。

私は、そのとき、汚れたのです。前に工場の主人によつて汚されたのと、また別な意味で汚されたのでした。

道子さんは、そういう私を、残忍そうに、眼を細めてじつと見ておりましたが、

「どう、いいことでしよ。なかなか素直じやないの。やつぱり、本当は、こういうことが好きなのね。——可愛いいわ。私、好きよ、あなた。もう、私のものになつたのだから」

ゆらゆらと湯の気立つ、お風呂おけのなかに、甘ずつぱい匂いをもつた液が、まじつて流れていきました。

それは、お風呂一杯のお湯にくらべようのないほどの量でしたから、くらべれば、くらべようのないほどの量でしたから、ただ気にすれば、そういう香りがかすかについたという位のものでした。

でも精神的には、やつぱり、それは勇気の要ることでした。

私は、じつと唇をかみながら、出来るだけ軀をちぢめるようにして、その浴槽のなかへ、そのきれいな、十九の肉体をしづめました。

道子さんは、私の耳へ口を当てると、何かささやきました。

私は、顔を赤くして、

「そんなこと！」

と叫びました。

「いやなの？　そう、じやいいわ。行つて頂戴！」

道子さんは、こわい顔をして、玄関の方を指さしました。

「……」

私は、だまつて、こつくりしました。眼に涙を一杯ためて、……

「じや、いいのね。ガマンするのね」

「ええ……」

道子さんは、御自分の着物のすそをからげました。

そう、はしやいで云うと、眼をつぶつて居る私の首をぎゆつと抱いて、狂つたよう

に唇をつけてきました。

私は、こうしたいまわしい洗礼によつてこの日から、道子さんの女中——いいえ、奴隷になつたのでした。奴隷から奴隷に——これが私の運命だつたのです。

五

それから、不思議な毎日がはじまりました。

道子さんも、春代さんも、素直な私が気に入つたらしく、私を大事にしてくれて、毎日、着る服から下着まで、与えて下さいました。

もつとも、それも、恥かしい、奇妙な服でしたけど。

「そんな子供みたいな下着して いちや、いけないわ。娘は、らしくしなくちや」

二人でお夕食のとき、笑い合いながら私にそう云うと、道子さんは、立つて、御自分の衣装棚から、下着をもつてきました。

「これ、私がつけていたのだけど、あなたのそんなのより、いいわ」

そう云うと、私のブルマーのかわりに、それを、私の前に投げて穿けと云うのです。

見ると、それは、せみのはねのような、うすいナイロン製のパンテイ、しかも前当てのところさえ、二重になつていないのです。

そして、その上いまわしいことには、そんな古い品ではないのに、前が、ひどく汚れてしめつているのでした。

「あの……これは——」

私は、それを見て、なんだか美味しい お菓子みたいな気がしました。

「いやなの？ とても、引きつわ。」

「そうね、なんだか美味しいい」

「マシマロと云つたところよ」

二人は、私の前を指さして、声をそろえて笑いました。その上、

「ちよつと片足を上げてごらん」

とか、

「そのまま、あぐらをかくようにして座つてごらん」

とか命じて、色々な曲線の変化をたのしむのでした。

他の下着もみんなナイロンでした。

ですから、私は、下着をつけていても つけてないと同じでした。いや、それよりも悪いことでした。

だからしやがむときや、スカートが、風にあほられるときなぞは、余ほど気をつけないといけないのでした。そのまま、お使いにもやらされるし、買物のおともなんかもさせられるのでしたから、階段を上るときなぞ一番苦労をしました。

もつと、ひどいものも着せられました。それは、黒のワンピースですけど、軀全体をつつむワンピースなのに、両のわきの下それから、両のお乳、それにお腹のあたり、——そこだけ、まるで、のぞき穴のように、くりぬいて、あけてあるのです。

私は、泣いて抵抗しましたが、結局、その服を、着なければなりませんでした。

「私のデザインよ。仲々よく似合うじやないの。——あんた。そういう所だけ出したいんでしよ。だから、そうしてあげたのよ。」

道子さんは意地悪そうにこう云うと、二人で、また、笑いました。

その服をきるときでも、勿論下着はいただいたナイロンですから、肌が、全部外へすけてしまうのでした。一番かくしたい、ほど恥かしい娘の肌が。——

さすがに、その服は、室内着で、外へは着ていかなくてもいいと云われましたが、それでも、ちよつと玄関に人がきたときなぞ、その服のまま出なくてはなりませんでした。少しでも、ためらつていると、

「なに、ぐずぐずしているの、だれかきたわよ！」

と云われてしまうのです。一度押売りのひげ男が、私のその姿を見て、

「わア、こいつは、ねえちやん、すげえや。露出狂だね……」

とにやにや云いながら、私に接吻しようとした事さえあります。

六

私に対する汚辱は、だんだんはげしくなつて行きました。

「警官を呼びますわよ」

そう叱つてかえしましたが、そういう時でも、道子さんは、奥で、そつと様子を見ているだけで、助けようともしてくれないのでした。

きつと、あれは、道子さん達の心ののぞみだつたのではないでしようか。そういう恥かしいところを丸出しにして、男の気をそそり、男のなぐさみものになる。——それが、道子さんたちの心の底にある願望だつたのではないでしようか。自分たちは、はずかしくて、それが出来ないので、私にそれをかわつてさせたのではないでしようか。

私が、その服のまま、押売りの男なんかに手ごめに会つている所をのぞいていた道子さんの、ギラギラ輝く、あやしい眼をみていると、そんなことが思われました。

道子さんや、春代さんは、色々な遊びを思いつきました。

「今日は猫の日よ。さア、今日は一日猫になるのよ」

そう云われると、私は、猫にならなくてはいけないのです。その日は、御飯も牛乳をかけて、手をつかわないで、ぺちやぺちやと舌だけで、それをたべなくてはなりません。

顔ぢゆう牛乳だらけにして、喰べおわります。

そうすると、次は、道子さんが、はだかになつて、寝床の上に横になります。私は、ニヤーゴと、猫の声を真似しながら、そばへすりよつていつて、道子さんの、かたぶとりの、肌を、甘ずつぱい汗の匂いにまみれながら、なめまわして、その、よごれをざらざらした舌一つの動きで、とらなくてはなりませんでした。

しまいには舌が、こわばつて口も利けないほど、つかれる。それでもきめられた仕事がすむまでは許していただけないのです。

馬の日、というのもあります。

その日は、乗馬服をきた。二人を、四つんばいになつたまま、背中にのせて、座敷中をぐるぐる廻るのが役目でした。

その日は、二人は、自分では少しも動かず、ちよつと御不浄へ行くのでも、

「ポニー」

と、私を呼んで、私の背中にまたがつて、御不浄の戸のところまで行くのです。

その日によつて、犬の日だの、牛の日だのと色々な名目をつけて、ありとあらゆるはずかしい遊びをさせるのでした。

お二人が一番興味をもつものは「お話」でした。

これは、夜になつて、三人がお布団のなかに入ると、必ず強制させられるものでした。「ねえ、朝子、お話しなさい」

すると、私は仕方がなく、前にいた、工場のお話をはじめるのでした。

私が、その主人に、処女をやぶられたことは、はじめは、かたくかくしていたのですが、まるで刑事が、誘導訊問するみたいに二人に問いつめられて、とうとう白状してしまいました。

すると、二人は、異常に興奮して、

「軀をしらべる」

と云うのです。このときは、私も必死になつて、抵抗したのですが、二人がかりでおさえられて、とうとう、しらべられてしまいました。

それから、二人で、くり返しくり返し、そのときの話を私からきき出そうとしました。

「その男に接吻されたときは、どんな気持がした？　夢のようだつたの？……」

「分らなかつたわ」

「分らないほど、うつとりしちやつたのかい？」

二人は、こう云うと卑猥な高笑いをするのでした。

あの、いまわしいマッサージの話や、当番制の夜のおつとめの話なども、根ほり葉ほりきき出して、そのときの細かい気持の動きまで、知ろうとしました。

はけ口のない、うつせきした情欲が、二人をこんな風にさせたのでしょう。

七

春代さんは、丸ノ内の会社へなんか行つてるだけあつて、さすがに、もう何人か男を知つていましたが、道子さんは、まだ、処女でした。

それで、こんな風に異常な嗜好がこうじたのでしょう。それでいて、いざ、男の前へ出ると、赤くなつて、口をきけなくなる道子さんでした。

しかし、私をいじめる遊戯も一しきりすると、二人共あきてきました。

そして、何かもつと、刺戟の強い遊びはないか、と二人で、ひそひそ話をしていましたが、どう話がまとまつたのか、——ある晩のことです。

春代さんが、めずらしく、酔つて、かえつてきました。

私が、むかえに出てみますと、春代さんのうしろにだれか立つています。

この家へきて、はじめ見てた男のお客さまでした。

「酔つたから、送つてきてもらつのた。まア、お上りなさい。……道子さんいいでしよう？」

「ええ、どうぞ」

道子さんは、頬を赤くしながら、そう云いました。

その晩、春代さんは、二階には寝ないで、私たちがならんでねている茶の間のとなりの六畳に、二人の床を引かせました。

間じきりは唐紙一つ。その唐紙も半分はどあけたままで。

私は、お床のなかで、恥かしさと、苦しさに身もだえし、逃げだしたかつた。でも、それは出来なかつたのです。

私は、道子さんに、お床に入る前に、しつかり手と足をゆわえられていたからでした。

そして、その夜こそ、私が今までにうけた一番はずかしい、汚辱の夜となつたのです。

（了）

アブノーマル官能小説　(第4回)

蠱妖の虹

龍膽寺雄

象徴の処女

「千鳥さん」

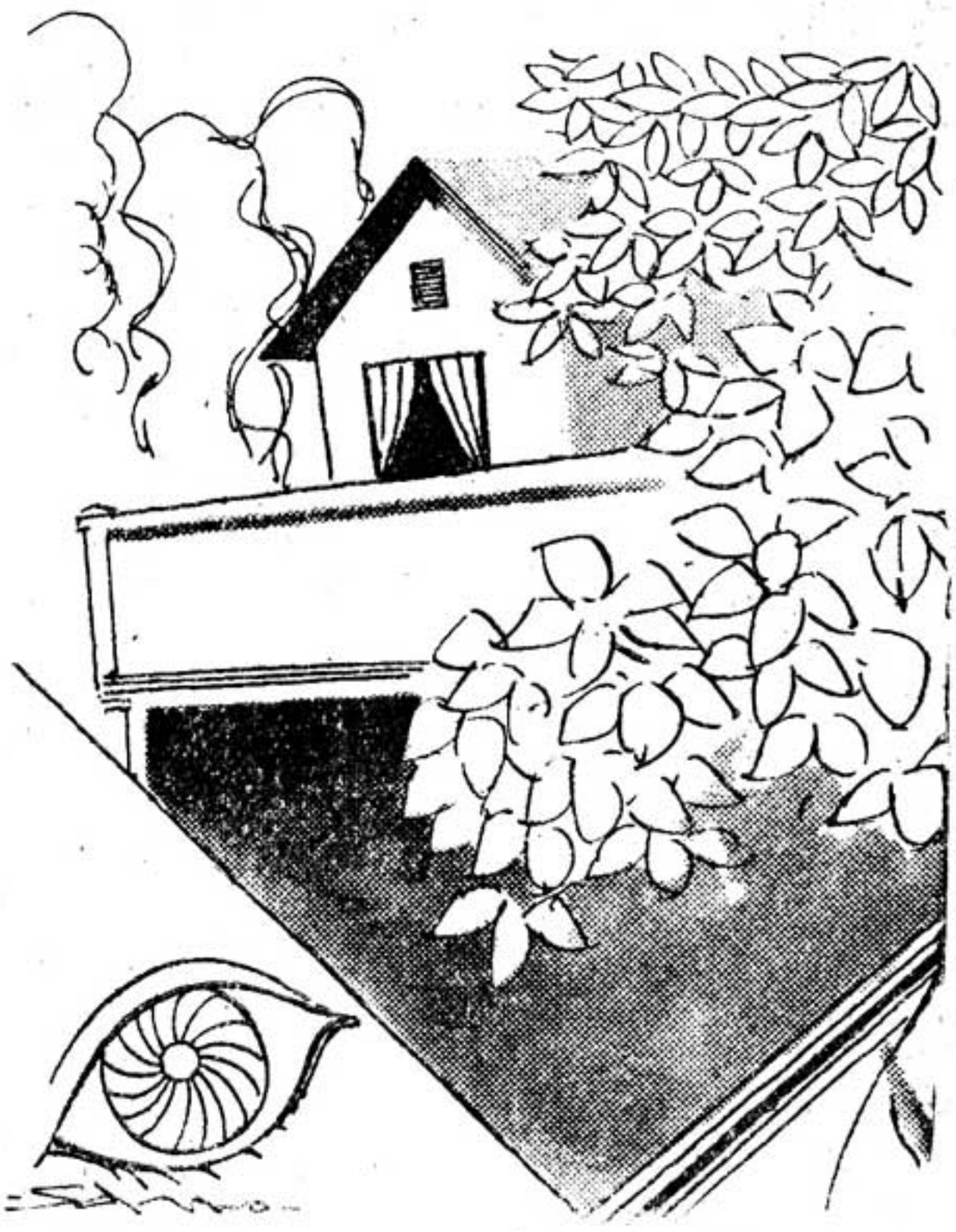
と蔦未亡人が千鳥左右吉にいつた。

「あなたはこの頃じゆう『ガラスの動物園』だの『ガラス細工のことを題名城』だの『ガラス細工のことを題名なんてガラス細工のことを題名にした外国映画が色々来たのをごらんになつて？」

「見ましたヨ。」

千鳥左右吉はところどころに絵具がシミついた白い仕事著の膝で、畫板に鋲でとめた木炭紙に、水彩畫のスケッチをしながらその仕事に氣をとられていると答えた。

「映画としては、わりと評判のいゝ映画なんですが、私にはヨク



わかりませんでしたネ。もつとも、私は映画そのものより も、題名のガラス細工というのにつられて見に行つたんです から、画面のそのガラス細工にしか注意しなかつたのでネ。……失望しました。」

蔦未亡人は退屈そうにアクビを噛み殺して、

「アラ、そうお。……あたくしはどちらも見はぐつちやつたけれど、じや、ガラス細工のことが映画に出ているんじやないのネ。」

「そうなんです。ガラス細工というものを、何か象徴的なイミで、扱つているんだけれど、こつちは頭がわるいもんだから、象徴なんていうことは一切わからない。……」

千鳥左右吉は、木炭紙いつぱいに、大きく瞳の絵をかいていた。

長い睫毛に縁取られた二重瞼、青く冴えた白眼の真中に、大きく濡れている黒眼、明るい琥珀色の輪に金線を放射しているその黒眼の中心に、山の上の湖が雲影を映しているように、何か、無心なものをたゝえて黒く澄んでいる瞳。——

千鳥左右吉の前には、古い籐の腕椅子にかけて、暁子が背のよりかゝりに仰向に顔をもたらせ、両手をすんなりと椅子の腕にのせていた。

蔦未亡人の一人娘である暁子は、十六歳という年のわりには、からだの発育はよくてどこか肩のあたりや手脚が骨繊で、華奢で肉付きがいくらかもの足りないのと、顔の表情にまだ童女の面影をのこしているのをのぞくと、血色の燃えている美しい唇も、ほのぼのと蒼い蔭をもつて曇つている頤から首すじへかけてのむつちりした肉付きなども、すでに早熟な肉感をたゝえ、ほとんど妖麗といつていゝくらいだつた。

それが、ところどころ小さくバラの花を刺繍した眞紅の支那繻子の寛衣をふかぶかと着て、肩をかぶせて房々と一せい

赤い円柱、屍体人形の羅列……この不気味な、廃墟の画廊に繰りひろげられるアブの狂宴……老人形師は、今や秘密の扉をひらかんとする！

に波打つている髪の、耳の後ろの辺にも、造花のバラをつけ、ミルク色のすき透るような肌の素脚の先にチョコンとはいているやはり真紅の支那繻子の上靴の華奢な爪先にも、造花のバラをつけ、蔦のからんだ石の露台の匂欄の内がわに、全身陽光をあびて耀いているところは、彼女自身が華麗な一輪のバラの花だつた。

もつとも千鳥左右吉は彼女をモデルにして、そのバラの花のように華麗な姿を、画面に描いているのではない。

モデルはもつぱら、夜のトルコ玉のように濡れて光つている彼女の瞳だけで、ガラス工芸美術家の千鳥左右吉は、老人形師五太衛門か、暁子をモデルにしてつくつている蠟石の人形にちりばめるために、ガラス細工の眼球の製作を引受けて、今その模型をとつているワケだつた。

一体、五太衛門老人は、暁子をモデルにして、人形を幾体つくる気なのか、少なくも、千鳥左右吉がその製作を引受けてつくつてやつた眼球の数だけでも、すでに七対半に及んでいる。

半というのはヘンな数だが、これは、浮彫にした半面像に入れたのだ。

もつとも、千鳥左右吉が引受ける細工は、必ずしも眼球ばかりではない。ごくまれには桃色の透明な歯齦にキラキラと美しく生えている真珠のような歯ならびの一部（これは人形の口の中へ嵌める）とか、もつと不思議なのは——生ぶ毛がポーツと桃色に霞んでいる熟れどき前の水密を、ザクリと裂いて、汁のしたたるような柔らかい甘い果肉を中からムキだし、紅く濡れた核の一部を恥ずかしそうにチョツピリとその奥に覗かせた、妙な静物の模型。——

五太衛門老人の口をかりると、これを『象徴の処女』というのだが、こんなものを、彼は、暁子をモデルにした人形の裸かのからだの『女の座』に嵌め込んだりする。——

こういつた製作も、五太衛門老人は、実際の暁子のからだをモデルにして、その中から肉体の本当の美の秘密をさぐり出せといつて千鳥左右吉に命じるので、こういう場合彼は、上大崎の五太衛門老人の人形工房に五太衛門老人と閉じこもり、ぐるりの窓に深くカーテンを垂らした奥の老人の居間の豪華な長椅子の上に、裸かにした暁子をころがして、あられもない姿態をさせては、それをモデルにさらすのだつた。

多治見雅彦と同性愛に耽溺するくらいで、女に対してはほとんど不感症の千鳥左右吉ですら、眼のやり場にこまるようなポーズを、平気で五太衛門老人は暁子にとらせるのだつたが、もつと奇怪なのは、その暁子自身で、この、ひらきかけたバラのツボミのように美しい十六歳の少女は、羞恥心というものを、本来ぜんぜん持つていないかのように、いかなる場合にも、五太衛門老人からどういうことをからだにされても、ソレに羞恥心とか、それに類する心理的な反応というものを、微塵も示さない。

ぜんぜん、されるままになつている意志のない人形で、このぶんだと、おとなしくしていろ、といわれて、ふくよかな腹へ、ズブリとナイフをつきさされても、そのままもがきもせず、呻き声もたてずにナイフをつき刺されたままでいそうな感じだつた。

それを見ていると、千鳥左右吉は何ともいいあらわし難いヘンな気持になつた。——

その千鳥左右吉は、今、てつぺんに紅いタマのついた真つ紅なベレー帽を、横にかぶり、長い柔らかい髪を、耳の後ろから襟

の辺まで長くのばしてたれていた。色の白い端麗な横顔が、女性的なところへもつて来て白い仕事着を着ているからだつき全体が、すんなりした撫で肩といい繊つすらと華奢にのびた手脚といい、胴から腰の辺へかけてのクネクネした柔らかい線といい、妙に艶めかしく女性的で、そばへ寄ると、体臭まで女の匂いがしそうだつた。

それが、女のようにつつましく膝を重ねて籐椅子にかけ、時々首をかしげながら、色の白いキメのこまかい華奢な指先で、膝の上に斜めにささえた画板に筆を動かしているところは、ちよつと見たら、若い美しい女の画かきさんと間違えそうだつた。

ここは上大崎の高台の、五太衛門老人のれいの人形工房をとりまく椎の森の一角に、新しく工事をはじめて、まだ外装も中途はんぱなまま、工事を中止している画廊の二階で、厚い石の勾欄をもつた露台の下には、ひとかかえほどの太さの、赤い蠟石の短い円柱がならび、色のちがう大理石のモザイツクの床をもつた廻廊だの、そこから芝生の庭へ張り出している大理石だたみの半円型の大きな睡蓮の池だの、そこへ扇なりに霧を噴く仕掛けになつている、巧妙に女陰をかたどつた巨大なシヤコ貝の模型だのが、おおかた出来あがつたまま、それも中途で工事をやめて、——一体何年になるのか、苔が生え、蔦がからみ、出来あがらないうちにどこか愴然として、廃虚じみた感じになつている。

その、蔦のからんだ露台の勾欄の中に、今、椎の森をかすめて横に射す陽が、ひつそりと白く照つていた。

蔦未亡人は、かれこれ四十に手のとどく年配の婦人だが、美貌なのと、若ずくりなので、せいぜい三十歳ぐらいにしか見えない。ごく最近、アメリカ軍の士官のクラブに勤めるようになつて、アチラ風の派手な身ずくろいをしているので、いよいよ年齢を錯覚して、とても、十六歳の暁子の母親とは見えない若さだつた。

白いレースの襟のついたブラウスに、明るい派手な空色の上衣とスカートをつけ、指の爪先を血のように真つ紅に染めて、プカプカとアメリカ・タバコをふかしていた。

露台へおりる大理石の階段に、紫と白の碁盤縞のハンカチを敷いて腰かけ、膝を重ねて組んだ足先を、ぶさほうに千鳥左右吉の鼻先へつき出してブラブラさせ

☆前号までのあらすじ☆

変態好事家の多治見雅彦は、美貌の妻・美彌子を忘れて、ガラス工芸家の千鳥左右吉と同性愛に耽溺し、美彌子に対しては、殆んどインポのように冷淡で次第に陰虐的な傾向を示すようになつてきた。

左右吉は、人形師五太衛門老の依頼で、彼の画廊の絵ガラスのデザインを制作していた。そうした関係から雅彦は、左右吉に連れられて五太衛門の画廊を訪れ、そこで、思いがけなくも、屍体人形や鳥獣の怪像を見て異様なショックをうけ、ますく変態的な性向に拍車をかけていつた。

やがて雅彦は、五太衛門の家へ出入りする赤星二郎という元ダンス教師と知り合つた。彼は噂によるとフランス人との混血児で、その母は街娼だつたという。雅彦は、この赤星を自家の家へ呼ぶようになつたが、妻の美彌子は次第に赤星に心惹かれていくようになつた。

そうした或る夜、雅彦は赤星と美彌子を同衾させ、二人の間に燃え上る炎を見て愉しむのだつた。

ていた。ナイロンのストッキングか無色透明なので、脂色ののつた色の白い臑のキメが、キリツとそれに締めつけられて、むつちりした肉付きの量感をかんじさせ、むせるような色気をただよわせていた。

「ちよいと、千鳥さん。」

仕事に熱中している千鳥左右吉を、すぐ斜め横から見おろすようにしながら、惑心したように彼女はいうのだつた。

「あなたのお仕事振りをここから見ていると、あなた御自身がまるでモデルになつているみたいョ。」

「……？」

千鳥左右吉は筆をやめて顔をあげると、

「なんですつて？」

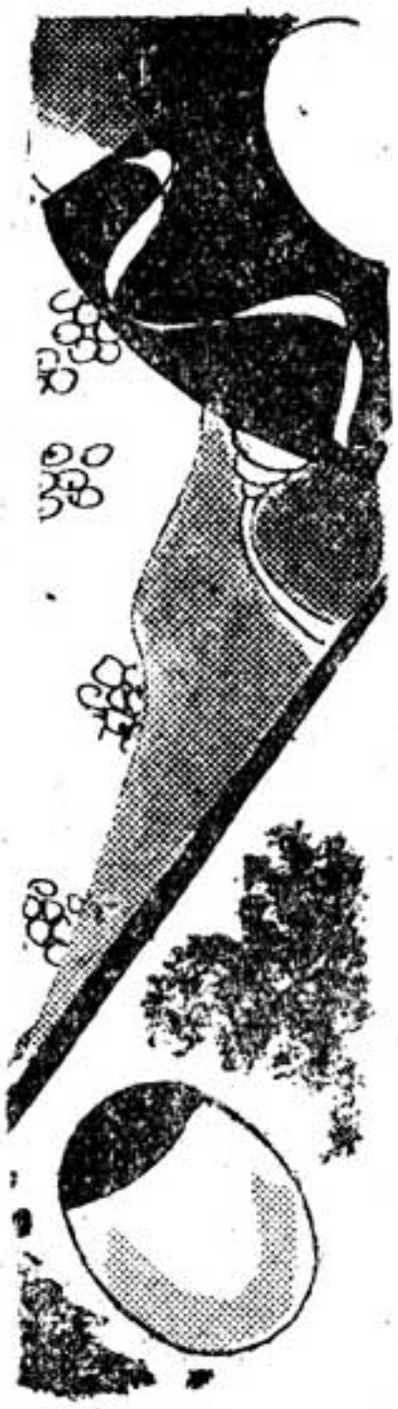
「何ていつたらいいかなア。」

蔦未亡人は運つぱな口のききかたをして、

「つまり、何かに魅せられちやつて、それは、すつかり魂を奪われて、何というか、生きた人間としてこちらへ響いて来るものか、何もない感じ。……ツマんない！　あんたのからだに、今、あたたかく血が通つているのかしらと思えるくらいだワ。」

「さわつてごらんなさい、血が通つているかどうか。」

千鳥左右吉は『女』に不感症な顔で白々と笑つて、



「私はこれで、ひとよりも少し体温が高いんですヨ。」

「アラ、そおオ？　何度ぐらい高いの？」

「何度つていうほどは高くありませんけどネ。けど、たしかに少しは高いらしい。」

その時、籐の腕椅子からスーツと腰を立てた暁子が、だまつて手をのばして、しんなりした繊い指先で、画板を膝の上でささえている千鳥左右吉の手首をとつた。

ヘンに吸いつくような、湿つぽい柔らかい指先の感触が、千鳥左右吉の体温をはかると、

「ほんとう！……熱い。」

と、暁子がさけんでいつた。

その彼女の華奢な手を、絵筆を持つた片手で軽くおさえて、千鳥左右吉がいつた。相変らず『女』に不感症な眼で、

「あなたの手は、また、冷めたい。」

「そうかしら。」

「だつて。」

と、蔦未亡人がタバコの煙りといつしよに口を挟んだ。

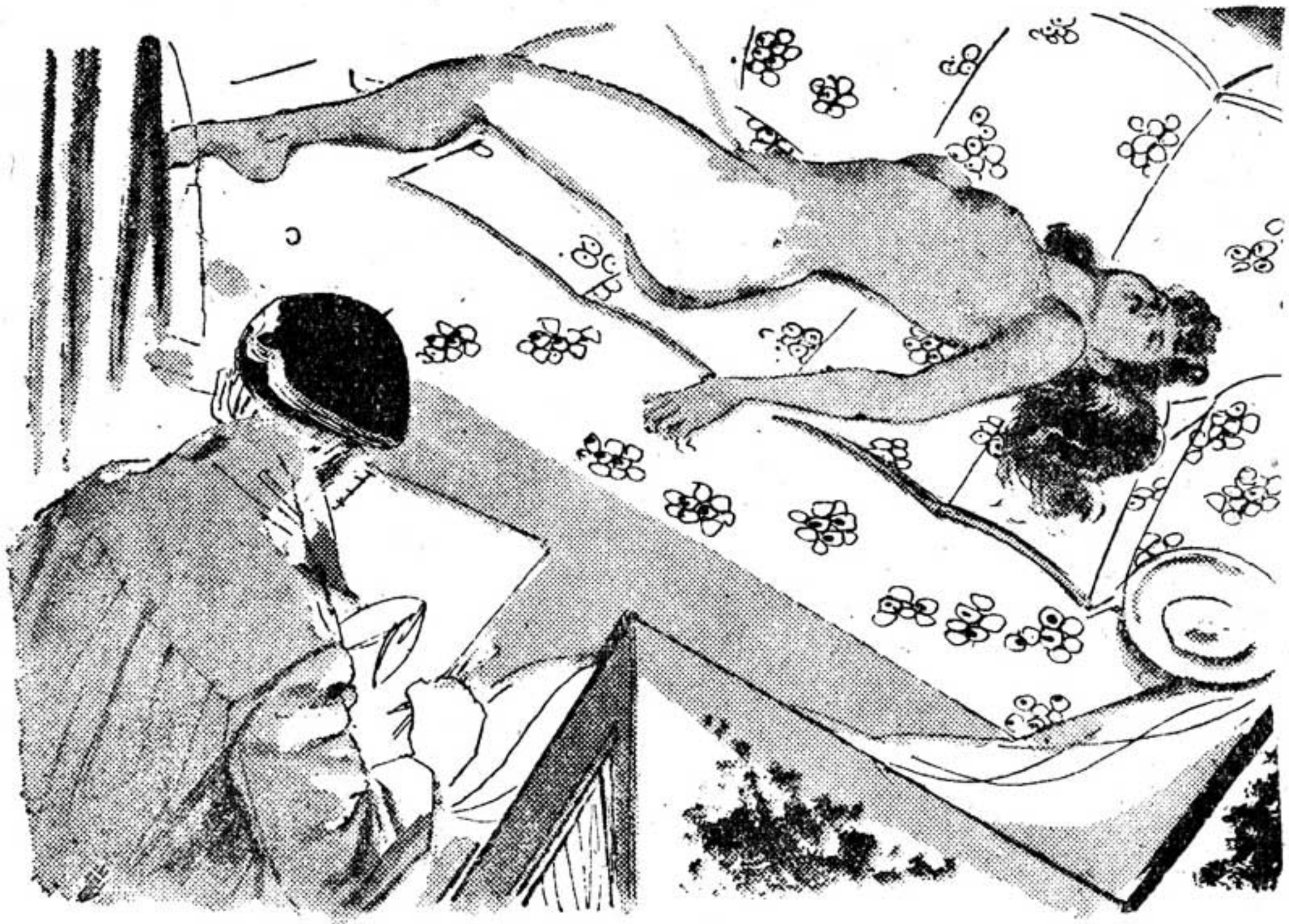
「千鳥さんは日向にいらつしやるんですもの。」

「アラ、あたしだつて日向ヨ。」

ちようどその時、ちよつとした話し声が、椎の森の方から響いて来て、間もなく、濃い陽蔭の中から、眩しい明るい陽ざしの芝生へ二人の人影が現れて立つた。

多治見雅彦と五太衛門老人だつた。

露台の上にいる千鳥左右吉や蔦未亡人や暁子には、気がつかないらしく、半円型に大理石を畳んだ泉水の縁まで来て、そこの芝生に



濃い影をシミつかせて立つと、そこから、露台をささえて並んで立つている赤い蠟石の円柱や、その奥の方の、二階までつつ抜けて大きな絵硝子の円天井をもつた画廊の方を眺めているようすだつた。

「いつまでたつても出来あがらない建物でしてナ。」

と、五太衛門老人がいつた。

「だから、税金もかからない。」

「しかし、惜しいですナ。」

多治見雅彦がいうと、

「イヤ、これでいいんでナ。」

五太衛門老人は笑つて、

「これで、最初の設計通りで、はじめッから、出来あがらないようになつている設計でナ。」

「なるほど、そいつはいい！」

多治見雅彦もつい笑つて、

「すると、内部の、人形陳列の画廊は、出来あがつている。もつとですナ。」

「イヤ、それも出来あがらないまま、出来あがつている。もつとも、この建物は、人形陳列の画廊にばかり使つているのではなくつて、半分ほど仕切つて、ひとの住まいに利用しているもんだからナ。」

そういうと、不意に、露台の上の方へ顔を向けて、大声でさけんだ。

「蔦さァん、おいでかナ？」

ところが、露台の上では、不思議なことが起きていた。

多治見雅彦をつれた五太衛門老人の姿が、椎の森の暗い蔭りを抜け出て、陽ざしの明るい芝生の一端に姿を現したトタン。

それをみとめた暁子は、何かワケのわからない合図をお母さんの蔦未亡人にすると、あわてたように、不意に椅子から立ちあがり、モデルになつていたのも何もうつちやらかして、露合の石の匂欄の蔭に身をかゞめるようにして、石の階段をのぼつて、二階の奥へ身をひるがえして姿を消してしまつた。

あとには、何のことかワケがわからず、膝の上の画板と絵筆とを、手もちぶさたに持つたまゝ、アツケラカンとしてしまつている千鳥左右吉と、タバコの煙りの中でニヤニヤ笑いしながらそれを見ている蔦未亡人とが、残つただけだつた。

屍体人形陳列の画廊

石の露合の匂欄の内がわに並んで立つて、千鳥左右吉と蔦未亡人は、多治見雅彦と、それを案内して来た五太衛門老人とを迎えた。

「蔦夫人です、御存知かもしれんが、」

と、五太衛門老人は蔦未亡人を多治見雅彦に紹介した。

「もとの蔦伯爵、……流行の斜陽族かネ、亡つた蔦伯爵は有名な美術蒐集家で、昔はワシも、ずいぶんお世話になつたもんじや。実はこの画廊の設計は、蔦伯爵が昔全盛時代に巣鴨の御自分のお邸に建てられるつもりで、わざわざフランスの有名なある美術建築家に依嘱して設計させたものを、利用させていたゞいたものです。そつくりそのまゝではなくつて、ワシ流儀に勝手につくりかえてはあるけれど、まア大体の意匠（アイデア）は生かしたつもりだがネ。そういう理由もあつて現在蔦さんにお住まい願つている。……」

は、ゝア。

と、多治見雅彦は肚で、ツブやくのだつた。

赤星二郎がいつていたれいの蔦夫人か。

とすると、いつぞやの夜千鳥左右吉につれられて、人形工房の方へ訪ねた時、蠟石細工のもの凄い美女の人形が出来かけていた——あの人形のモデルだという娘の、お母さんにあたるワケだナ。

その多治見雅彦のことを、五太衛門老人はこういつて蔦未亡人に紹介した。

「多治見さんは千鳥君の仕事に協力されている、こちらは画かきさんでナ。画廊の天井の絵硝子の意匠をして下さつたかたです。」

これは嘘だつた。

千鳥左右吉がはじめて五太衛門老人の人形工房へ、多治見雅彦をつれて行つた時、ウマい思いつきの口実がなかつたので、そういつてコジつけて彼を紹介したのを、そのまゝ五太衛門老人は信用しているのだ。

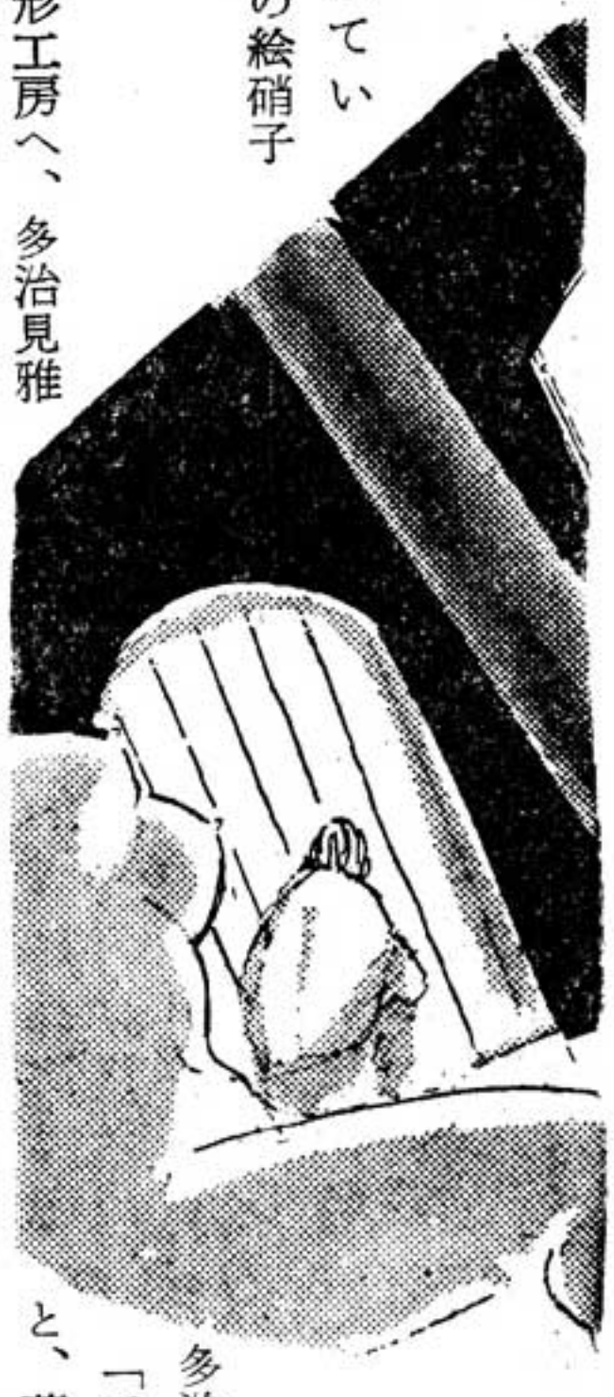
ちよつと気になることではあるが、そんなことは、まア、どうでもいゝし、第一、多治見雅彦のような人間は、一言で、納得ゆくようにその身分や身許や職業を、ひとに説明出来ないので、画かきで通つているのなら、それで結構だつた。それ以上複雑な説明を加えて、相手を戸惑わせる必要もないのだ。

「多治見さんが画廊を御覧になりたいといわれるもんだから、御案内しようと思つてナ。」

と、五太衛門老人は千鳥左右吉にいつた。

「ワシ一人の道楽だから、ひとから共感していただける筋合いのものでもないけれど、強つてとおつしやられると、おことわりする理由もないでナ。」

そばできいていた蔦未亡人は、わざとらしい眉をシカめ、眼をツブリ、首を横に振つて、私はそんな画廊なんか見るのは、真ツ平ごめんというような意志表示をしてから、濃艶な、媚態をこめた眼で多治見雅彦を横眼に見ていつた。



建物へ一歩はいりかけて見た感じでは、この石造の画廊はぜいたくな構造ながら、わりにちんまりしているので、それほど飛び抜けて豪壮なものとも見えない。まして、赤い艶々した蠟石の円柱の並んでいる廻廊の奥のやはり赤い蠟石の壁にかこまれて、高い絵硝子の円天井をもつた画廊の中が、異様に不気味な人形の羅列で埋められて、オヨソこの世ならぬ凄惨な空気をたたえ、気の弱い人なら一と眼見ただけで卒倒してしまうような風景を秘めているなどとは、ちよつと外から想像出来なかつた。

「光線で、まア、かなり調節出来ますからネ。」

と、つれだつて、円柱のならんでいる内がわの廻廊を歩きながら、千鳥左右吉がいつた。

「不思議なもので、血の色も、ナマの光線だとちよつと我慢出来なくつても、青いスクリーンでこした光の中では、それほどでもないもんでしてネ。」

そして、多治見雅彦をかえりみていつた。

「ここの画廊は、α、β、γ、の三種類に光線を区別して、それぞれ色調のちがう光線を室へみたして、中を見る仕掛けになつている

「多治見さんも、やつぱり千鳥さんのお仲間で、あんなのお好き？」

「あんなの、といいますと？」

多治見雅彦が反問すると、

「アノ気味のわるい画廊。……」

と、蔦未亡人はつぶやきかけて、ま

んですョ。そのうち、αは自然光線で、実はこの自然光線では誰にも画廊を見せないことにして、まア、厳重な禁忌（タブー）になつているんですネ。血や肉の色が、あんまりナマナマしくほんものに見えて、それから受ける刺戟が直接的で強すぎるため、その感じが、芸術の領域から逸脱するからというのが、五太衛門さんのお説なんですけどネ。これは、芸術論として、ちよつと面白いんですけど、事実、このα光線で画廊を見せられたら、たいてい気の強い人でも、もう芸術的な感激どころじやない、あんまり酷たらしくつて、凄惨で、しかも、ナマナマしいものだから、その現実感に圧倒されてしまうんでしようネ、気分をわるくするとか、卒倒するとかしないで、無事に最後まで見終える人は、まアないらしいんですネ。β光線は水色γ光線はもつと濃い藍色、という風になつているんですけど、まア、せいぜいγ光線の程度でごらんになるのが無難でしようネ。ヘンな強がりをいつて、卒倒でもしたら、恥じをかきますから。……」

そして足をとめて、

「ここです。」

といつた。

赤い艶々した蝋石の壁に、細い金で縁取つた真つ紅な扉が、堅く閉ざされていて、シヤレコウベの型に焼いた白い瀬戸の握柄（ノッブ）がついており、その下に金の鍵穴があいていた。

焦げ茶色のダブダブしたコールテンのジヤンパーの、チヤックのついた胸ポケツトから、鍵を出して、それをむぞうさに鍵穴へ入れながら、五太衛門老人が振返つていつた。

「それでは、中へはいつてごらんになるのは、多治見さんと、それから、……千鳥君かね？」

「そうですね。」

そういわれると、不意に千鳥左右吉は何となく尻込みするように、

「あたしは、べつに、……どうです多治見さん、あなたはお一人でごらんになるのは、イヤですか。」

「いや、イヤじやないよ、君が見るのイヤなら、私は一人で見せてもらいます。」

多治見雅彦は別に強がりでもなく、淡々とした口振りでいつた。

「じや、あたしは蔦さんと露台で待つています。」

千鳥左右吉はいつた。

「では、多治見さん、どうぞ。」

五太衛門老人は鍵穴へ入れた鍵を、太いぶこつな指でカチリと廻すと、シヤレコウベを型どつた握柄（ノッブ）をつかんで、紅い扉を音もなく中へ押した。

蔦未亡人は二メートルも離れたところに立つて怯えたような眼をして、ドアの中へはいる二人を見送つていた。——（以下次号）

天然色悦虐責　写真
第3集キャビネ判500円〒10
第4集キャビネ判500円〒10
〔第3集・第4集 8月15日出来〕

会員風俗文庫
第1集〔既刊〕300〒30

天然色悦虐責　写真
第1集キャビネ判　500〒10
第2集キャビネ判　500〒10
〔第1集 第2集共 頒布中〕

御申込みは職業・年令明記のこと、御送金は為替・現金書留・書留送付御希望の方は書留料加算の上**必ず下記住所宛に御願いたします。**
東京都荒川区尾久町5の1218
風俗文化社